流れ落ちた二つの新星

刀剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れ落ちた二つの新星

【Ｎコード】
Ｎ４９９４Ｓ

【作者名】
刀剣士

【あらすじ】
テイルズが好きな二人の高校生。いつもの帰り道、異世界の扉に吸い込まれ、神様と出会う…。そして、マイソロ３の世界へと訪れる。そんなとこから始まる物語です。

日常の終わり（前書き）

超駄文です。文才もありませんが、温かい目で見てほしいです。他の方の小説と酷似しないようにも、注意します。

日常の終わり

勇
「んじゃ、お先に失礼」
と音田（オンダ）　勇（ユウ）は部活を終わり、そそくさと帰ろうとした。

部長
「また、遊びか？そろそろ大学受験の事考えないと、痛い目見るぞ？」
部長にそう脅された。

勇
「わかった、わかった…。じゃあ明日からな！」

部長
「お前いっつもそれじゃねぇか！待て、こら！」
そんな部長の言葉も聞かず、勇は逃げるように武道館から退散した。

勇
「説教癖が玉に傷だな、あいつは…。」
自転車をこぎながら、独り言を呟いていると、

天由
「勇ちゃん、どうした？独り言なんて言って？」

と友達の遠野（トオノ）　天由（アマユキ）が追いついてきた。

勇
「あ、天由か。いや、くだらない事だから大丈夫」
と返しておいた。

勇
「それよりさ、マイソロ3、帰ってからやるだろ？」

天由
「当たり前じゃん！今、二周目の途中だからな！」

勇
「じゃあ、早く帰ってやりますか！」

剣道部の勇と弓道部の天由、クラスも違うが、テイルズがきっかけで仲良くなり、はまっているマイソロ3の話に花咲かせた。
いつもの道を帰り、いつものように遊び、そして寝る。そんな毎日だった。
しかし、この二人の日常はこの日で幕を閉じ、全く新しい人生を歩まされる事となる…。

勇
「なあ、天由…。今日この道おかしくないか？」

天由
「やっぱ勇ちゃんもそう思う…？」

二人は異変を感じ取った。

勇
「いつも、うるさいくらいに車が走ってるのに…。それに人の気配もない…」

天由
「何か変だ。早く帰ろう」

気味が悪くなり、二人はさっさと自転車をこぎだした。その時！目の前の地面に、ぽっかりと大きな穴、奈落の底まで続いているような、黒い穴ができていたのだ。

勇
「うわわわわ！何だこの穴はぁ！？」

天由
「だめだ！落ちるぞ！」

勇・天由
「うわぁぁぁぁぁ！」

余りに突然のできごとに、なす術もなく、二人は穴に吸い込まれていった。

日常の終わり（後書き）

次でプロローグ的なものは終わりかな？

神様との出会い。そして旅立ち…。（前書き）

こんな文でいいんだろうか？
すごく不安…。

神様との出会い。そして旅立ち…。

勇
「うっ、ううう…」

気絶から目を覚ました勇は、回りを見渡し、思考が一瞬止まった。

勇
「…何処だ、ここ?」

３６０°、地面も空でさえ、真っ白な世界に勇と天由は倒れていた。
とりあえず勇は、隣にいる天由を揺さぶり起こした。

勇
「おい、天由…、おい!起きろ!」

天由
「うーん…。勇ちゃん?何だよここ?」

天由も勇と同じ反応を示した。

天由
「俺達、変な穴に落ちて…、ここに?」

勇
「…とにかく、出口を探そう」

???

「悪いけど、二人共、すぐには戻れないよ」

そんな声が聞こえたかと思うと、１０ｍほど先に人影が現れ、徐々に二人に近づいてきた。

？？？

「初めまして、音田　勇　君、遠野　天由　君。あはは、驚いた？名乗ってもいないのにって。…すぐには信じてもらえないかもしれないけどさ…、俺は神様なんだ」

……。

勇・天由
「…はぁぁぁ？」

二人は不審の目をその男に向けた。流れるようなストレートで金髪の長髪。細めの体で、黒を基調とした、紳士のような服装。そして「俺は神様」。信じろというのは、無理な話である。

神様
「まあ、ゆっくり理解してくれたらいいよ」

そう言って、神様と名乗る男はクスクス笑った。

神様
「君達は、異世界のねじれによって、ごく稀にできる扉に落ちたんだ。ほら、たまにあるだろ、［神隠し］って。それはこれが原因なんだ。［神隠し］って、俺のせいみたいに聞こえるけど、こんなカラクリがあるんだよ。」

と淡々と説明しだした。二人は黙っていたが、沈黙を破って勇が口

を開いた。

勇
「そんな夢みたいな話…、あるんだな…」

天由
「すぐには帰れないっていうのは、どういう事なんですか？」

天由が疑問をぶつけた。

神様
「言ったろ、稀にできる扉だって。異世界も動くんだ。君達が来た扉はもうないし、次にまた元の世界への扉が開く時もわからない。この扉は突然開くんだ」

真面目な顔には嘘のかけらも見えない。本当の事だと二人は悟った。

勇
「じゃあずっとこんな世界にいるのかよ～！」

神様
「いや？別の世界に飛ばすことはできるよ？例えば、二人が遊んでいた、ＴＯＷＲＭ３の世界とか…」

天由
「…それ、マジですか？」

神様
「マジだよ。ああ、それと、お願いも５つほど叶えてあげようかな？」

勇・天由
「だったら、その世界に行きます！」

ほぼ即答で答えた。

神様
「わかった…」

神様がパチンと指を鳴らすと、目の前に紙と万年筆が現れた。

神様
「それに願いを書いて。名前だけは、こっちで考えるよ」

それを聞き、二人はさらさらと願いを書いて、それを手渡した。

神様
「なるほど…。じゃあ願いを叶えるよ」
神様はまた指を鳴らした。すると、二人の容姿は大きく変わり、体つきもそれ相応に良くなった。

神様
「では、これからの名前を授けてあげるよ。音田　勇　改め、ブレイヴ・テンダー。遠野　天由　改め、ジェウス・フレードと名乗ること。覚えた？」

二人は身の変化に驚きつつ、ただ首を縦に振った。

神様
「…じゃ、準備はいいね？」

二人はまた、首を縦に振った

神様
「じゃあ…行ってらっしゃい！元の世界への扉が、もしも見つかったら、また連絡するよ！」

神様が再びパチンと指を鳴らすと、二人は新しく生きる世界へ飛ばされた。

神様との出会い。そして旅立ち…。（後書き）

一応、プロローグ終了です。

最初の試練…なのか？（前書き）

いいタイトルがなかなか浮かばないなぁ…。

最初の試練…なのか？

名を改めたブレイヴとジェウスは、神様の力でマイソロ３の世界（ルミナシア）へとやってきた。しかしその神様が二人を飛ばした場所とは…。

ジェウス
「あぁぁぁぁ！死ぬ、死ぬ～！」

…上空である。

ジェウス
「こっちの世界に来てすぐにお陀仏は嫌だぁぁ～！」

さっきから黙っているブレイヴは、高所恐怖症のおかげでとっくに気を失っていた。
ジェウスはかろうじてブレイヴの手首をつかんでおり、おかげで離れることはないが、その先の行動を起こせずにいた。

ジェウス
（このままじゃ海にたたき付けられるだけじゃん…！くそっ！どうする…、どうするよ…。…んっ！？）

冷静に考えようとしていたジェウスの視界に、あるものが見えた。

ジェウス
「あれは…、バンエルティア号！？」

視界に写ったもの、それはギルド、アドリビトムの拠点、バンエルティア号だった。真っ直ぐこちらへと向かって来ている。このまま

だと、バンエルティア号に墜落すると察知したジェウスは、気を失っているブレイヴの頭を抱え、自らも衝撃に備えた。

ジェウス
「なんで、最初っからこんなハードなことやらせんだよ!!あのバカ神!!」

意を決して目を閉じた十数秒後…。

バキィッ!!

舟の天井に盛大に穴を空け、二人は無事（？）、展望室へと墜落した。

ジェウス
「生きてる…。よかったぁ…。てか俺達、墜落に縁ありすぎ…」

生きている安堵からか、ジェウスの意識も急速に遠退き、気を失った。

最初の試練…なのか？（後書き）

ふぅ。小説って難しい！

カノンノ達の目線（前書き）

お、お気に入り登録が3件も…。
めちゃくちゃうれしい（泣）

カノンノ達の目線

カノンノ
「今日は、世界樹がよく見えるいい天気だなぁ…」

甲板に出ていたカノンノは世界樹を見て、そう呟いた。いつもは操舵室にいるのだが、気分転換のため、風に当たりにきていたのだ。

ロックス
「お嬢様～、ここにおられましたか。操舵室に姿がないもので…」

カノンノ
「うん。ちょっと気分転換に…。それより見てロックス！今日は天気がいいから世界樹がよく見えるね！」

ロックス
「あぁ…、本当ですね。世界樹が更に壮大に見えます。ならば、今日は何かいいことがあると期待しましょうか」

二人はフフフッと笑いながら話した。

ロックス
「それより、お嬢様。昼食を食べないと…。午後からも依頼があるのでしょう？食べないと、身体が持ちませんよ？」

カノンノ
「あっ、そうだね。じゃあ食堂に行こう、ロックス！」

話しを切り上げ、船内に入ろうとしたその時、

バキィッ！

という音が聞こえ、足を止めた。

カノンノ
「なんだろう、今の音？展望室から？」

ロックス
「様子を見にいってみましょう。」

二人は、展望室へと恐る恐る入ってみた。すると、部屋の真ん中に二人の男が倒れていた。

カノンノ
「！！、ロックス！人が倒れてる！二人も！」

ロックス
「人、ですか？一体どこから？」

カノンノ
「どこからって…」
言い終わると同時に、カノンノは上を見た。つられてロックスが上を見ると、天井に大きな穴が空いていた。

ロックス
「空から降ってきた、ということですか？」

カノンノ
「わからない…。でも…、悪い人ではなさそうだよ。とりあえず、

医務室に運んで、アニーに診てもらおう！」

ロックス
「そうですね。では僕は他に誰か呼んできます」

カノンノ
「うん、お願い。」

ロックスが去った後、カノンノはまじまじと二人を見た。

カノンノ
（確か悪い人ではなさそう…。でも、空から来た…、この二人は一体何者なんだろう？）

そんなことを考えてる内に、ロックスがクレスとセネルを呼んできたので、空からきた二人…、ブレイヴとジェウスを医務室へと運び、回復を待つことにした。

カノンノ達の目線（後書き）

一話の文章、短いかなぁ？
感想お願いします。

ギルドへのお誘い（前書き）

うーん、話伝わるかな？
訳分からん、って思ってもそっと心にしまっておいてくださいｍ（＿＿）ｍ
あ、それから感想お待ちしています。

ギルドへのお誘い

墜落したジェウスは、ぼんやりと意識を取り戻した。

ジェウス
（痛い…。そっか、俺ブレイヴをかばって、モロに激突したけど生きてて安心して気絶したんだっけ…。てか、ふかふかしてる。ここ何処だろう？）

虚ろな目で回りを見渡すと、一人の女性がブレイヴの額の汗を拭いていた。見間違えるはずもなく、それはアニーだった。黙っているのも悪いと思ったので、話し掛けてみた。

ジェウス
「あの…」

と言うと、目が覚めたことに気が付いてくれた。

アニー
「あ、目は覚めましたか？大きな怪我はありませんが、本調子になるまで安静にお願いしますね」

ジェウス
「あっ…、はい。それより、助けてくれて、ありがとう」

アニー
「お礼なら、お二人をここまで運んでくれた皆さんに言ってください。展望室からここまで運ぶのは大変だったでしょうから…」

アニーはブレイヴの額を拭いていたタオルを水で濡らし、笑いながら話してくれた。

アニー
「では私は、あなたが目を覚ましたことを知らせてきます。こちらの方も、もうじき起きるでしょうから」

と言って、アニーは部屋を後にした。しばらくボーッとしていると、ブレイヴの方も目を覚ました。

ブレイヴ
「落ちるーーーっ!!……あれ?」

今まで、空から落ちる悪夢をみていたのか、そんな声を上げ飛び起きた。

ジェウス
「もう墜落しちゃったよ…、お前が気ぃ失うせいでこっちは大変だったんだからな…」

ブレイヴ
「だって高い所ダメなんだもん…。今度大変な目にあったら、次は俺が助けるからさ…、えーっと……」

なぜかブレイヴは言葉に詰まった。

ジェウス
「?、どうした?」

ブレイヴ

「いや…、つい癖で前の名前呼ぼうとしたんだけど…、前の名前なんだったっけ？」

ジェウス
「……あれ？俺も思い出せない…」

そこまで話し、気が付いた。二人は前の名前が全くわからなくなってた。しかし、それ以外のことはなぜか覚えていた。
ブレイヴ
「どうなってんだ？」

ジェウス
「…多分、こっちの世界で名前が統一できるようにしたしたのかな？まぁ、元の世界に戻れば自然に思い出すと思うよ」

そうこう話している内に、部屋に数人が入ってきた。部屋に入ってきたのは、アンジュ、カノンノ、アニー、ロックスだった。

アンジュ
「あら、もう一人も目が覚めたのね。じゃあ、とりあえず自己紹介から始めようかしら。私はアンジュ・セレーナ。ギルドのリーダーを勤めてるわ」

カノンノ
「私はカノンノ・グラスバレー。よろしくね！」

アニー
「私は医務室でお手伝いさせていただいています、アニー・バースと申します。」

ロックス
「僕はこの船でコンシェルジュで、ロックスプリングスと申します。ロックスとお呼び下さい」

ブレイヴ
「俺はブレイヴ・テンダー。よろしく！」

ジェウス
「ジェウス・フレードっていいます。よろしくお願いします。」

皆は、簡単に自己紹介を済ませた。

アンジュ
「じゃあ、二人が行きたい所に送ってあげたいんだけど、どこで降ろしてほしいかな？行きたい所あるんでしょう？」

ブレイヴ
「あ……」

これから重要な話をしなければならないが、全てを話して全てを信じてもらうのは難しいと思ったブレイヴは、上手い言い回しを考えれず口ごもった。

ロックス
「どうかされましたか？」

ブレイヴ
「あー…、えーっと…ですね…」

返答に困っていると、ジェウスが話を切り出した。

ジェウス
「…俺達違う世界の人間なんです」

ジェウスがズバリと言った

全員
「!!??」

ジェウス
「俺達は前の世界にいたとき、変な穴に吸い込まれました。気が付いたら空から落ちていて、ちょうどこの船に落ちたんです。空から地形をチラッと確認したんですけど、明らかに俺達の世界とは別物です。…だから、行く当てはありません」

と一気にまくしたてた。あまりに流暢な言い訳にブレイヴは唖然としてしまった。

カノンノ
「それは…、本当なの?」

ブレイヴ
「えっと、まぁ一応本当のことかな?」

所々嘘は混じっているが、大分ストレートに言ったので、言い換える気力も失くなった。

アンジュ
「そう…なの。うーん…、だったら、このギルドでお手伝いしてみない?」

ブレイヴ・ジェウス
（えっ！）

割とあっさり言われたことに、内心二人は驚いた。

アンジュ
「無理強いはしないから。やってみたいと思ったら、私に声かけてね」

そう言い、アニーを残し皆は帰っていった。二人は少し話し合った。

ブレイヴ
「お前よく話したな…。しかもあんなに…」

ジェウス
「俺だって必死だったよ…。でも、原作じゃあカイル達が他の世界の人間だ、って言ってもそんなに大騒ぎにはならなかったから大丈夫だって思ったし、全部話してみた」

ブレイヴ
「判断力すごいな…。それより、ギルドの話…、あっさりいわれて、びびった…」

ジェウス
「…でもまぁ受けよう。というか、それが目的でこの世界に来た様なもんだし…」

ブレイヴ
「…よし、じゃあ決まり！話、聞きに行こう！」

ジェウスも、おう！と返事をし、二人はアンジュに話を聞きに向かった。

ギルドへのお誘い（後書き）

次話からギルドでお仕事する予定です。

初の戦闘！（前書き）

戦闘シーンを初めて書いたが…なんか短い！（「○」；）
でも今のクオリティーじゃ限界だ…

初の戦闘！

二人は、（もちろんブレイヴとジェウス）コンフェイト大森林に来ていた。ギルドに入るためのテストみたいなものをこなしに来ており、森林に住むプチプリを十体倒せ、とのことだった。ギルド《アドリビトム》のことをアンジュから説明を受け、入隊試験の事を聞かされ、今にいたるというわけである。（正直全部知っていたが）

ブレイヴ
「とりあえず、今のところの力を試してみないとな」

左腰に剣を帯刀し、鎧で身を包んだブレイヴが言うと、ジェウスも

ジェウス
「ああ、今どれくらいの実力があるか見極めないと」

と言った。ジェウスの方は両拳にアームを付け、更に左手の甲には小型のボウガンも付けていた。身には、戦闘用の服を着ている。

ブレイヴ
「つか、戦闘スタイル、ティトレイと一緒か？」

ジェウス
「悪いか？弓拳闘士だ。結構気に入ってたから、神様にお願いしたんだけど…。そっちは、かなりシンプルだな。剣士か？」

ブレイヴ
「魔術も使えるよう、願った。だから、魔法剣士だな」

と、お互いの武器や戦闘スタイルのことを話していると、木の陰から植物の様な魔物、プチプリが飛び出してきた。相手は当然、敵意剥き出しでこちらに向かってきた。数は二体。

ブレイヴ
「出たな…。まずは剣から！」

ジェウス
「じゃあ俺は弓を使って援護する！」

ブレイヴ
「よろしくっ！」

と言い、ブレイヴは剣を下段に構えプチプリに向かい走っていった。

ブレイヴ
「ふっ！はっ！てぇい！」

掛け声とともに、袈裟切りを流れるように左右から三度繰り返し

ブレイヴ
「虎牙破斬！」

と言い、切り上げで空中に飛び、一気に切り下ろした。その後バックステップで距離を空け

ブレイヴ
「魔神剣！」

…剣を振り抜き、衝撃波をぶつけた。

ブレイヴ
（まだ息がある…！）
とどめを指そうと、剣を構えると
ジェウス
「紅蓮！」
一本の矢がプチプリに刺さると、真っ赤に燃え上がりプチプリは消え去った。
ジェウス
「援護するって言っただろ？一人で頑張るなよー」
ブレイヴ
「悪い悪い、つい熱くなっちゃって…。後一体！次は俺が魔法で援護する！」
ブレイヴはそう言い、詠唱を始めた。
ジェウス
「頼んだ！」
次は代わって、ジェウスが前衛に立った。
ジェウス
「魔神拳！」
ジェウスは牽制で、衝撃波を放ち、それを追うようにプチプリに駆

け寄った。

ジェウス
「そらそらそらぁ！」

素早く拳と蹴りの三連打を繰り出した。

ジェウス
「幻龍拳！」

最後に、突進の様に拳をぶつけ、プチプリから離れた。そして

ブレイヴ
「ライトニング！」

詠唱の完了したブレイヴの魔法が雷となり、プチプリに直撃しようやく二体目を倒した。

ブレイヴ・ジェウス
「ふぅー…、終わった」

ブレイヴ
「やっぱり、実際にやるとなると大変だな…」

ジェウス
「頑張れ、後八体だぞ」

ブレイヴ
「言うな…、気が遠くなる」

ジェウス
「ははっ。まあ、初めての戦闘にしてはよかったんじゃないか、俺達」

ブレイヴ
「だな…。でも日々鍛練だ。ギルドに正式に入ったら、いろんな人に戦いかた教えてもらわないとな」

ジェウス
「ああ…。…よし、じゃあ頑張ってかたずけよう、後八体！」

ブレイヴ
「だから、言うなって…」

この後、プチプリに何度か不意を打たれ死にかけたが、ともに助け合いなんとか目標の十体を倒すことができた。二人は不意を打たれすぎたのが余程ショックだったのか

ブレイヴ
「もっと相手の気配をよめるようにならないとな…」

ジェウス
「今後の課題だ…」

と二人で話していた…。

初の戦闘！（後書き）

ひどい出来ですね（｀∀´；）
でも、頑張ってます。大目に見てくださいね（汗）
感想引き続き待ってます。

二人の能力、性格など…（前書き）

設定的なもの。

二人の能力、性格など…

名前：ブレイヴ・テンダー（勇敢なる者の意、ブレイヴ［勇敢な］テンダー［～な者］）　性格：何でも前向き。理屈とかは分かってないが、なぜか機械を直せる。高い所が苦手。頭の方は…。普段は、誰にでも呼び捨て。　容姿：髪の長さは短髪。銀髪。瞳の色は黒　歳：１８　職業：魔法剣士。風系の術で援護、手数の多い剣技で前衛も務める　現在使える技：魔神剣、虎牙破斬、ウインドカッター、ライトニング。（これから増えます）

名前：ジェウス・フレード（自由な神の意、ジェウス［天の神］フレード［Ｆｒｅｅｄｏｍより抜粋、｛Ｆｒｅｅｄ｝ｏｍ］）　性格　律儀。慎重。料理が得意。ゴキブリがかなり苦手。頭の回転が速い。普段は、目上の人には“さん”付け　容姿：髪の長さは肩までで、くせ毛。黒髪。瞳の色は茶色　歳：１８　職業：格闘弓士。術は使えず、矢で遠距離、拳で近距離と、状況に応じて使い分ける。　現在使える技：魔神拳、幻龍拳、紅蓮、凍牙。（こちらもこれから増えます）

共通して言える事は［負けず嫌い］って事です。

二人とも、神様に頼んだ願いは一緒です。

一．身体能力の向上（最強ではない。とりあえずメンバーと互角に戦えるくらい。）
二．テイルズに相応しい見た目
三．覚えたい技（最初から全て使えるわけではない。徐々に覚える予定。）
四．戦闘スタイル

五．年齢はいまのまま

ディセンダーの設定は出来てますが、登場してから載せたいと思います。

この先ちょいちょい変わってくかもです。

二人の能力、性格など…（後書き）

早くディセンダー登場させないと…

最終試験！（前書き）

戦闘シーン2回目…。
ほんの少し長めにかいたつもりですけど、あいも変わらず駄文だ…。

最終試験！

採掘試験も首尾よく終わらせた二人は、最終試験を受けるため準備をしていた。

ジェウス
「グミは買ったかー」

ブレイヴ
「おー」

ジェウス
「装備は大丈夫かー」

ブレイヴ
「おー」

最終試験前とは思えない、気の抜けた質問や応答だが、それなりに緊張をしていたり、それをほぐそうとしている結果である。

ブレイヴ
「なぁ、最終試験って原作とおんなじかな？」

ジェウス
「さぁ…、そればっかりはわかんないな…。でも退治試験も採掘試験も原作と一緒だったし、最後もガルーダ退治だと思うけど？」

ブレイヴ
「…心構えだけはしとこ」

準備も終わったので、試験の内容をアンジュに聞きに行った。

ブレイヴ
「アンジュ～。最後の試験って、何すんの？」

アンジュ
「準備は終わったようね。じゃあ最終試験の内容を教えます。…最終試験は、《ルバーブ連山》でガルーダを倒してきてもらいます」

ブレイヴ・ジェウス
（原作と一緒…。よかった…）

アンジュ
「あら、やけに安心した顔してるわね。だったらもっと難しくしてもいいかなぁ…」

安心感が顔に出たのか、アンジュにそう言われた。

ブレイヴ・ジェウス
「いえっ！結構です！」
ジェウス
（くそ～、ホントに腹黒いな～！）

虚をつかれ、ジェウスだけはそう思っていた。

――――――――――――――――

ルバーブ連山に来た二人は敵を片付けながら、いつものように雑談をしていた。

ジェウス
「アンジュって本当に腹黒かったな～」

ブレイヴ
「んー、だな。でもあれはあれでいいと思うぞ。いや、むしろ俺は好きだな」

ジェウス
「え〝っ！？」

ブレイヴ
「何だよ、変な声出して？」

ジェウス
「…いやまさか、こんな所でそんなカミングアウトされるとは思わなかったから…」

ブレイヴ
「まー、俺もお前の事わかんない時あるから、そんなもんだ」

…雑談もそこそこに、歩くこと数十分、遂に目標のガルーダを発見した。

ブレイヴ
「見つけた…」

ジェウス
「作戦は？」

ブレイヴ

「その時しだい…だな！」

ガルーダの方もこちらに気が付いたようで、威嚇の鳴き声をあげ向かってきた。

ブレイヴ
「遅ぇ！ウインドカッター！」

ジェウス
「凍牙！」

真空の刃が切り裂き、氷の力が宿った矢が突き刺さる。ガルーダは少し怯んだが、致命傷までには至らないらしい。

ブレイヴ
「やっぱり、簡単にはいかないな」

ジェウス
「もっと簡単だと思ってた…」

ぼやいていると、ガルーダは目標をジェウスに定め滑空してきた。

ジェウス
「げぇ、こっちきた！」

ブレイヴ
「しっかり防御しろよ！」

ガルーダは強靭な爪をジェウスに振り下ろしてきた…が、手に付けたナックルでなんとか受けた。

ブレイヴ
「虎牙破斬！」

走ってきたブレイヴが技を繰り出すが、その前に飛び立たれ剣は空を切った。

ブレイヴ
「うーん、飛ぶなぁ…」

ジェウス
「実際はかなり強いな」

その後もガルーダは、攻撃を加え空に逃げるヒット&アウェイの方法を繰り返してきた。
ジェウス
「これじゃ、防戦一方だ…。なにかいい手がないか？」

ブレイヴ
「…馬鹿なりに考えた作戦なら、あるにはある」

ブレイヴが考えた作戦とは…

ブレイヴ
「二人同時に突っ込む！」

ジェウス
「…期待した俺が馬鹿だったっ！」

こんなやり取りをしていても、ガルーダは一向に攻撃の手を緩めな

い。もう、防御も限界だった。

ブレイヴ
「も一個、作戦！今度はまともだ！」

ジェウス
「どんな作戦だ！」

ブレイヴ
「俺が囮になる！その隙に、でかい一発叩き込め！」

ジェウス
「失敗したらやられるぞ…いいのか？」

ブレイヴ
「そりゃ、お前次第だ。頼りにしてるよ、ジェウス君♪」

そういってブレイヴはジェウスから離れ敵を挑発しだした。

ブレイヴ
「このぉ！攻撃して逃げるしか脳がねぇのか、この鳥野郎！」

ジェウス
「…やり過ぎ」

ジェウスは苦笑したが、急降下してきたガルーダに狙いを定めた。

ブレイヴ
「きたきた！ジェウス頼んだぞ！」

ジェウス
「任せろって！…捕らえた！迫撃掌！」

ガルーダを捕らえたジェウスの拳は凄まじい衝撃で、さすがのガルーダも地面へ落ちた。更にジェウスはガルーダを掴み、遠心力に任せ振り回し始め、そして投げた。ガルーダはまだ起き上がったが、その時にはブレイヴは詠唱に入り、ジェウスは左手のボウガンを構え終わっていた。

ジェウス
「百点満点だろ？」

ブレイヴ
「ま、そうゆう事にしといてあげよ」

息を合わせるように会話を交わし、最大限の力を込め、

ジェウス
「轟天！」

矢を放ち、

ブレイヴ
「ライトニング！」

魔法を放った。ガルーダは力尽き、消え去った。

ブレイヴ
「はぁ、はぁ…これで…アドリビトムに正式加入だー！」

ジェウス
「長かったー！やっとだ…」

しばらく余韻に浸っていた二人だが、そろそろ帰ることにした。帰って待っていたのは、皆からの歓迎の言葉だった。単純に照れ臭かったが、素直に嬉しかった二人は、ありがとう、と皆に言ってまわった。こうして二人はなにかと大変だったが、遂にアドリビトムに正式加入に至った。

最終試験！（後書き）

…内容に関しては、ひどい！とかはやめて下さいねm（＿＿）m
頑張った結果なんで…。
自信のある文章書くには、まだまだかかりそうです（－・－；）

スキット　その1（前書き）

ちょっと書き直し。
次話は今書いてます。今日、明日に出せると思います。

スキット　その1

・高いところは苦手！

ブレイヴ
「……うっ…」

ルカ
「どうしたの、ブレイヴ？甲板掃除始めてから様子が変だよ？」

ブレイヴ
「なんでもないよ…。いや…ルカだから言うけどさ…」

ルカ
「…何？」

ブレイヴ
「俺は高いところが駄目なんだー！」

ルカ
「そ、そうだったの？」

ブレイヴ
「絶対に言うなよ～…。特にイリアとかイリアとかイリアとか～！
何されるかわかったもんじゃない…」

ルカ
「わ、わかった…」

ブレイヴ
「早く終わらせよう、ルカ。足の震えが出てきた…」

・ジェウスの苦手

ジェウス
「ぎゃぁぁーー！」

シング
「どうした!?」

ジェウス
「それっ！そこにいるっ！」
シング
「それって…ゴキブリ?」バシッ！

シング
「なーんだ、ジェウスってゴキブリが苦手なんだ!」

ジェウス
「こっち、持ってくんなぁー！」

・天然?

アンジュ
「うーん…お腹周りがぁ…」

ブレイヴ
「まーたダイエットでもすんのか?そんな気にしなくてもいいのに

…」

アンジュ
「そう言われても気になるの！はあ、頑張んなきゃ…」

ブレイヴ
「無理はすんなよ。嫁の貰い手がなかったら、俺が貰ってやるから！」

アンジュ
「あら、嬉しい！じゃあ予約しとこうかしら♪」

ブレイヴ
「あはは！よろしく頼むよ！」

ジェウス
（おい…どこまで本気だ？）

ブレイヴ
（半分くらい）

ジェウス
（半分くらいって…）

・今のギルドの感想

ロックス
「お二人共どうですか？このギルドにも慣れましたか？」

ブレイヴ

「俺は慣れたな！皆、美男美女なのに面白いしな！」

ジェウス
「俺も慣れたけど、一個驚いた事があってなぁ…」

ブレイヴ
「…？」

ロックス
「なにかあったのでしょうか？」

ジェウス
「いや、アニーが１５歳って事にびびった…」（筆者はマジで驚きました）

ブレイヴ・ロックス
「……」

ジェウス
「な、なんだよその目は！？びびったんだから仕方ないだろ！」

スキット　その1（後書き）

読んでおられる方。もしもいらっしゃったら、「読んでますよ！」的な事でもいいので、書いてくださると、嬉しいです。

二人の日常。そして…（前書き）

初感想！嬉しいです（感涙）
それで会話文が多いとご指摘を受けました。確かに…ｏｒｚ
でも、この文は感想読ませていただく前に書きましたので、改善されてません。しかも作文ぽくなってしまったかも…

二人の日常。そして…

ブレイヴ
「今日の依頼は、これで終わりか？」

依頼のターゲット、最後の一匹にとどめを刺しつつブレイヴは聞いた。

ジェウス
「アンジュさんとかルーティから無茶なお願いが無い限り、な」

ブレイヴ
「じゃ早いとこ帰って、ロックスにでも茶でも入れてもらうか」

…バンエルティア号に帰ってきた二人は、まず依頼終了報告をした。

ブレイヴ
「依頼終了っと！」

ジェウス
「《コンフェイト大森林》の魔物、二十体の退治のやつです」

アンジュ
「お疲れ様。今日の仕事はこれで終了ね」

報告も済ませたので、話していた通り二人は食堂に行き、ロックスにお茶をもらうことにした。

ブレイヴ

「ロックス！クレア！お茶ちょーだい！お茶！」

ジェウス
「俺にも下さーい！」

食堂に入りそう言うと、クレアが二人分のお茶を運んできてくれた。

ブレイヴ・ジェウス
「ありがとう！」

クレア
「ふふっ、どういたしまして！」

ロックス
「ご苦労様でした、お二人とも」

ブレイヴ
「あー、その言葉がご褒美だわ」

ジェウス
「働かしてもらってる分、こっちの方がありがたいしな」

ロックス
「いえいえ。お二人が働いてもらうぶん、ギルドが成り立っているんですから…」

そうやって雑談を小一時間話していた。

ジェウス
「お、結構長話になったな。じゃそろそろ…」

ジェウスが席を立つと、ブレイヴも続けて席を立った。

ブレイヴ
「じゃあ、夕飯までちょっと訓練しようか。な、ジェウス！」

ジェウス
「俺もかよ！」

ブレイヴ
「お二人さん。夕飯になったらよろしく！お茶、ごちそうさま！」

ジェウスの言い分は聞かず、ブレイヴは早々とさっていった。

ジェウス
「くらぁ！俺の話を聞けぇ！ロックス、クレア。お茶ごちそうさま！」

と言い、ジェウスもブレイヴの後を追った。

クレア
「仲がいいですね」

ロックス
「ええ、とてもいいですね」

ロックスとクレアはそんな二人の姿を見て、笑いながら話していた。

ブレイヴ
「いいじゃん、訓練くらい…」

ジェウス
「疲れたんじゃないのかよ…」

ブレイヴ
「一時間程休憩したし、それに自分のペースでやればいいだろ?」

ジェウス
「俺を巻き込むなよ!…まぁ腕が鈍るからやるけど…」

ギャーギャー話していると、ショップからカノンノが出てきた。

カノンノ
「あれ?ブレイヴ、ジェウス。もう依頼は全部終わったの?」

カノンノが聞いてきたので、さすがに二人は言い合いをやめた。

ジェウス
「今日は全部終わったよ!」

ブレイヴ
「これから、コイツと訓練~。カノンノはこれから依頼受けんの?」

カノンノ
「うん!《ルバーブ連山》で村の人達の護衛だよ!」

ジェウス
「村の護衛?《ルバーブ連山》?」

ジェウスはそれを聞き、思わず言葉を繰り返した。ブレイヴも同じ

ことを思ったらしく、カノンノに質問していた。

ブレイヴ
「なあ、一応その村の名前聞いていいか？」

カノンノ
「？。ペカン村だよ？」

ブレイヴ・ジェウス
（やっぱり…）

カノンノのペカン村護衛といえば、かのディセンダーと出会うイベントだ。

ブレイヴ
「カノンノ、その…俺達もその仕事手伝っていいか？」

ディセンダーと出会う。その場面にいたいと思ったブレイヴはそう提案した。横槍が無いとこをみると、ジェウスもそう思っているらしい。

カノンノ
「本当！？人手が足りなくて困ってたんだ！それだったら、アンジュさんにも許可もらわなくちゃ！」
そう言われたので、二人はアンジュにカノンノの同行の許可をもらいに行った。

ジェウス
「アンジュさん、仕事追加していい？カノンノの同行したいんだけど…。俺とブレイヴ」

アンジュ
「ペカン村の護衛のこと？いいわよ。カノンノ一人じゃ大変でしょうから」

結構簡単に許可をもらえた。とりあえず、依頼をこなし、減ってしまったグミなどを買い足し、ブレイヴ、ジェウス、カノンノの三人で《ルバーブ連山》に向かい、村の護衛をした。三人なので魔物も対処が利き、退治も早く済んだ分、村の移住もすぐに終わった。

ジェウス
「二人と三人じゃ大違いだな」

ブレイヴ
「効率いい～」

カノンノ
「今日は手伝ってくれてありがとう！二人とも強いから、すぐに魔物が退治できたね…さて、と。今回の仕事もこれで終わり！船に戻ろ！」

そう言い、船に戻るため歩みを進めていると、

シュン…

突然空を光が駆け抜けていった。

カノンノ
「何だろう…」

カノンノはやはりあの光に興味を持った。

ブレイヴ
「時間はあるし見に行ってみるか？」

ブレイヴが促すと、

カノンノ
「うん、行ってみよう」

と言い、先に走って行ってしまった。

ブレイヴ
「遂に…だな」

ジェウス
「ディセンダーとの対面式だ」

この二人もディセンダーとの対面にわくわくとしていた。

二人の日常。そして…（後書き）

ついに原作に入ります。オリジナル要素入れるのが大変になってきます（汗）

ディセンダーとの出会い（前書き）

とっても書くのが苦しかった…。さぁ、欠点は克服されたか！？頑張って素の文増やしたつもりだけど…。

ディセンダーとの出会い

空を駆ける光を追ってきた三人は、《ルバーブ連山》の峠の一番端まで着いた。光もその上空に止まり、だんだんと高度が下がってきている。目を凝らすと人の姿も確認できた。

カノンノ
「人…、だ!?空から人が降りて…」

カノンノは驚いていたが、

ジェウス
「落ち着けって、カノンノ。俺達だって空から落ちてきたろ?」

と、ジェウスがなだめると、

カノンノ
「そ、そうだったね…」

そう言い、少し落ち着いたようだ。しばらくすると、空から降りてきた人…男性のようだ…が目を覚まし、辺りをキョトキョトと見回した。どうやら怪我もなく、カノンノが安心したように話し出した。

カノンノ
「気が付いて良かった。空から光と一緒に降りて来たんだもん。すっごく驚いたよ!あれは、何かの魔術なの?」

カノンノはその男性に興味津々で質問を切り出していた。

？？？
「魔…術…？」

男性は何があったか分からない、といったように首を傾げた。

カノンノ
「覚えてないの？あなた、空から降りて来たのよ？」

そう聞くと、

？？？
「空…から？本当？」

と、やはり覚えが無いらしい。

ジェウス
「そ。光と一緒に降りて来たんだ」

ブレイヴ
「まあ、気が付いて良かったじゃん！全然動かないし、心配したけど」

わかっていることだが、二人は話を合わせた。

カノンノ
「そうだね…あ、私はカノンノ。カノンノ・グラスバレー。でこっちの二人が…」

ブレイヴ
「ブレイヴ・テンダー。気軽にブレイヴって呼んでくれ！」

ジェウス
「俺は、ジェウス・フレード。俺も気軽に呼んでくれよな！」

三人は自己紹介をした。

カノンノ
「あなたは？」

カノンノが名前を聞いた。

アレス
「アレス…。アレス・カレイジャス！」

自信を持ってそう答えた。

カノンノ
「アレス…。いい名前ね」

全員の紹介が済み、ブレイヴが、

ブレイヴ
「とりあえず、山降りないか？」

と言うと、

ジェウス
「そうだな、魔物もいて危険だし…」

ジェウスもそれに賛同した。

カノンノ
「そうだね。そろそろ船が到着する時間だし…。急いで山を降りないと！船に乗ったらあなたの希望する場所に送ってもらえる様に伝えるから」

カノンノなりの気遣いだが、アレスは困っていた。

アレス
「希望する場所って言われても…」

カノンノ
「どこかに行こうとしていたんでしょう？で、ここに…じゃないの？」

アレス
「いや…実は…、名前だけしか思い出せないんだ…」

カノンノはアレスの言った言葉に心底驚きを見せ、これからどうすればいいか考えた。

ジェウス
「とりあえず、船まで招待すれば」

ブレイヴ
「そうそう！その後、考えればいいんだし」

二人がそう提案すると、カノンノも納得したようで、「行こっ！」と言って、アレスの手を引いていった。

ブレイヴ
「微笑ましいな」

ジェウス
「ああ、やっぱりお似合いだな」

二人も笑いながら後についていった。そのうち、待ち合わせ場所の渓谷下流・岩場に着いたが…。

ジェウス
「まだ、到着してないみたいだな…」

カノンノ
「私達の方が、先だったかな?」

船が到着しておらず、待つことになった。その間、カノンノはアレスに話の続きを始めた。

カノンノ
「ねえ、アレス。ひょっとしたら、あなたは記憶喪失なのかもしれないね。何か原因があって…。そういう状態になっているんじゃないかなぁ」

その言葉にアレスは深く考えだし、黙りこくってしまった。

ジェウス
「カノンノ…。無理には…。」

ジェウスはアレスを気遣った。

アレス
「いや、気にかけてくれて嬉しかったよ。ありがとう、カノンノ」

アレスは笑ってカノンノに言った。

ブレイヴ
「アレスのこれからはまた考えよう。…お、船が来たな！」

アレスはやってきたバンエルティア号に圧倒されていた。船に入るのにも恐る恐るで、アレス以外の三人は笑ってしまった。

ブレイヴ
「とりあえず、アンジュに紹介だな」

ということで、ホールのアンジュにアレスを紹介することにした。

アンジュ
「お疲れ様、三人とも」

その後、ペカン村の移民が無事に済んだことも報告された。

アンジュ
「ところで、そちらの男性は？」

やはり気になったのか、アレスのことを尋ねてきた。カノンノが《ルバーブ連山》で出会ったこと、空から来たことを話した。アンジュは名を名乗り、アレスの話を聞くことにしたようだ。

アレス
「えっと、僕は空から降りてきたみたいで、自分の名前以外何も分

からないです…」

アレスはありのままを話した。

アンジュ
「そう…。記憶が無いなら、どこに行っていいかもわからないよね」

アンジュもさすがにこまったようだった。

ブレイヴ
「なあ、ここで働いてもらわないか？下山の途中で魔物と戦ったけど、すげー魔法だったぞ」

そう、《ルバーブ連山》で、アレスは魔物の相手をしたが、魔法で敵を一掃したのだ。

アンジュ
「そうなの？じゃあ、働いてもらってもいいかな？」

話を聞き、アンジュがアレスを勧誘すると、

アレス
「いやいや、むしろこちらからお願いします！」

と嬉しそうに快く返答してくれた。

アンジュ
「それじゃあ、今からあなたをギルド《アドリビトム》の一員として迎えるね」

アレス
「はい！」

この後アレスは質問で《アドリビトム》という言葉の意味、ギルドの働きを教わった。皆への挨拶は、カノンノが付き合うそうで、ブレイヴとジェウスは部屋に帰ることにした。

ブレイヴ
「じゃーな、アレス！皆優しいからすぐ慣れるしな！」

ジェウス
「困ったことがあったら、俺達でも誰でもいいから聞けよ！ちゃんと教えてくれるから！」

アレス
「うん、ありがとう！ブレイヴ、ジェウス！」

最後に軽い挨拶を交わし、二人はアレスと別れた。部屋に帰った二人はベッドに身を投げ、アレスのことを話しはじめた。

ブレイヴ
「ディセンダー…いや、アレス。すげー親しみやすいな！…ディセンダーだってことは、やっぱ言わない方がいいよな…」

ジェウス
「当たり前だろ…。そもそも、なんでそれ知ってんだ、ってことになるだろ。時が来たら皆分かるんだから、それまで待つべきだ」

ブレイヴ
「そうだな…。まあ、アレスとはいい友達になれそうだ！それで充

分だよな！」

ジェウス
「ああ…、ふわぁ…」

と返事をし、ジェウスは盛大なあくびをした。

ブレイヴ
「今日は仕事が多かったからな…。お休み、ジェウス…」

ジェウス
「お休み…」

身体に溜まった疲労は、二人を心地好い眠りに誘っていった。

ディセンダーとの出会い（後書き）

多少、セリフはいじってます。じゃないと、主役二人が空気なんで…。（充分空気に近いが）

アレス（ディセンダー）の能力、性格。二人の追加事項（前書き）

アレスの設定と二人の追加事項です。設定書いてから何日も立ってないのに追加はまずいかなぁ…と思いましたけど、やってしまいます。

アレス（ディセンダー）の能力、性格。二人の追加事項

名前：アレス・カレイジャス（勇敢なる戦の神の意、アレス［戦の神］カレイジャス［勇敢、勇気］）　性格：淋しがり屋？皆といるほうが好き。頼まれると断れない。他人の事には鋭い反面、自分自身の事には疎い、鈍い。　容姿：髪は耳が隠れる程度の長さ。蒼髪。瞳の色は薄青色　歳：？　職業：基本はビショップ。対人訓練のように、一人で戦う時は戦士になり相手をする。

追加
ブレイヴ：滅多なことでは怒りません。冗談で怒ったりします。

ジェウス：切れると人が変わります。エミルに似てますが、自我は有り。

アレス（ディセンダー）の能力、性格。二人の追加事項（後書き）

てゆうか、ようやくディセンダー登場ですね。

今日は非番…（前書き）

グダグダだぜ☆
猛反省してますんで、許してください…

今日は非番…

ブレイヴ
「ん…んーん…！…」

深い眠りからブレイヴはうつろながら目覚めた。隣を見るとジェウスはまだ寝ていた。

ブレイヴ
「今日の依頼、聞かないと…」

ブレイヴは眠い目を擦りながら今日の依頼を聞きに行った。

ブレイヴ
「アンジュ、おはよー…。今日の依頼…」

アンジュ
「おはよう。今日は二人はゆっくりしといていいわよ」

てっきり、たくさんの依頼を頼まれると思っていたので、アンジュが笑いながら言ってくれたことが意外で、

ブレイヴ
「へ？なんで？」

と聞いてしまった。びっくりしすぎて、眠気が多少飛んだようだった。

アンジュ

「昨日は自主的とはいえ、仕事が多かったし、夕食になるからってロックスが呼びに行ったら、二人とも死んだように眠ってるって言うから」

ブレイヴ
「そっか…」

そんなに寝てたのか、と考え思わず苦笑してしまった。

アンジュ
「だから、下手に疲れを残したままじゃなくて、ゆっくり休んで万全の状態で明日からまた働いてもらうから」

そう言って、話をくくった。

ブレイヴ
「んじゃ、そういうことならゆっくりしとく。ロックスとクレアに茶貰お」

残った淡い眠気を覚まそうと、お茶を貰うことにした。

ブレイヴ
「ロックス、クレア、おはよー。眠気覚ましにお茶ちょーだい」

クレア
「おはようございます」

ロックス
「おはようございます。はい、お茶です」

ブレイヴは朝の挨拶を交わし、お茶をいただいた。

ブレイヴ
「ありがとう」

クレア
「よく頼みますよね、お茶。好きなんですか？」

ブレイヴ
「ん？好きだし、飲みやすいしな」

ロックス
「今日は休暇なんですよね？しっかり身体を休めてください。あ、朝食はどうされます？昨日は夕食も食べずに眠ってましたので…」

ロックスがいろいろ気をきかせて聞いてくれたので、

ブレイヴ
「しっかり休ませていただきます」

と冗談混じりで話を返し、

ブレイヴ
「朝食は二人分。ジェウスも同じだから」

朝食の注文もした。作ってくれてる間に、ジェウスを起こすため寝室に戻った。

ブレイヴ
「ジェウ…なんだ起きてたのか」

扉を開けると、ジェウスはベッドに腰掛けていた。

ジェウス
「んあ…おはよう、ブレイヴ…」

あまり、目覚めていないらしい。

ブレイヴ
「ほら、朝食作ってもらってるから、食堂行くぞ！」

元気よく言うと、ジェウスは首を縦にカクカク動かし行く意志を示した。食堂に付き、ジェウスは朝の挨拶をする。

ジェウス
「おはようございます…ふぁ…」

まだ眠いらしい…

ロックス
「食事の前に顔を洗ってきてはどうでしょうか？」

見かねたロックスに言われたので「そうする…」と言って、ジェウスは顔を洗いに行った。

クレア
「いつもあんなに寝起きが悪いの？」

クレアがブレイヴに尋ねた。

ブレイヴ
「いや、疲れが溜まってるんだろ」

ブレイヴは笑って答えた。いつものジェウスなら目覚めはいいほうなのだが、さすがに疲れてたらしい。ジェウスが戻ってきて、ようやく朝食に取り掛かった。

ブレイヴ
「んー、突然休暇もらったけど、何すればいいだろ？」

ジェウス
「そうだな、せっかくの休みだしな…。」

何もない日だからこそ、逆になにをすればいいか悩んだ。

ブレイヴ
「とりあえず、午後過ぎまで羽をのばすか！」

とゆうことで、午後までゆっくりすることにした。朝食も食べ終わり、ホールに戻ると、昨日護衛したペカン村の人、女性が二人訪ねてきていた。

ブレイヴ・ジェウス
「うげ…」

アンジュ
「あ、ブレイヴ君、ジェウス君。あなたたちが助けたペカン村の二人だよ。今日からここで働いてもらうことになったからよろしくね」

ナナリー

「あたしはナナリー・フレッチ。今度から世話になるけど、よろしく頼むよ」

ナナリーは問題ない。問題は…。

ハロルド
「あら、よく見れば護衛してくれた内の二人じゃない。私はハロルド・ベルセリオスよ。あんたたち戦闘能力高かったわね～。グフフ、解剖してみたいわ～☆」

こっちの解剖偏執狂だ…。

ブレイヴ
「よろしく～、二人とも～…」

ジェウス
「よろしくお願いしま～す…」

今日からおちおちゆっくり眠れないな…と思った二人だった。
…午後になり、疲れもすっかりとれたので、明日からのために体を動かそうと考えた。いつものようにブレイヴとジェウスで訓練をすることにした。が、今日は試合もしてみることにした。
…とりあえず、訓練を終わると日も暮れてきた。

ブレイヴ
「お、日が暮れてきたな」

ジェウス
「そろそろ夕飯だな。昨日食えなかった分、食わなきゃな」

急いで食堂に向かうと、どうやら一番乗りだったようで、誰もいなかった　。

ブレイヴ
「一番乗り～！」
ジェウス
「リッドのせいで食いっぱぐれは嫌だからな」

食事を食べていると、アレスとカノンノがやって来た。

アレス
「あ、ブレイヴ、ジェウス！」

ブレイヴ
「よお、アレス！カノンノ！」

ジェウス
「今日は会うのは初めてだな。何やってたんだ？」

カノンノ
「今日はアレスに退治と採掘の仕方を教えてたの。明日は入隊試験だよ！」

心なしかカノンノは嬉しそうだった。

ブレイヴ
「そっかぁ！頑張れよ、アレス！」

アレス
「うん！」

ジェウス
「なんだ、カノンノ嬉しそうだなぁ。そんなにアレスがお気に入りか？」

ジェウスがニヤニヤしながら、からかった。

アレス
「お気に入り？」

カノンノ
「そ、そ、そんなのじゃないよ！もう！」

目に見えてカノンノが赤くなるのが、二人は面白かった。

ブレイヴ
「アレスはそんなに分かってないみたいだから、しっかり確保しとけよ～」

ブレイヴも乗ってくると、カノンノの顔からは火がでそうだった。

カノンノ
「二人ともっ！」

ブレイヴ・ジェウス
「ごちそうさまでした！」

被害が来る前に、二人はさっさと退散してしまった。

アレス

「ねぇ、お気に入りってどうゆう意味？」

カノンノ
「っ～～～！」

次の日、カノンノがアレスの顔を直視できないのは、また別のお話
…。

今日は非番…（後書き）

もう、難産…。
こんな文章ですいません…。

見守る目（前書き）

グダグダっぷりがすごいです…。
読んでる方、見捨てないでくださいね。

見守る目

この日は、アレスの最終試験日。

ブレイヴ
「…で、なんで俺達までついてこなきゃいけないんだ?」

ブレイヴとジェウスは最終試験に同行していた。

アレス
「二人には、見届けて欲しかったから!」

アレスはニッコリと笑いそう教えてくれた。

ブレイヴ
「はぁ…そんなことか…」

ジェウス
「いいじゃん、そんなことでも。でも、見るだけだからな。手助けはしないぞ」

ジェウスがそういっても、「わかってる!」と言って笑顔のままだった。

ジェウス
「緊張とかしないのか?」

アレス
「緊張…してるけど、これでようやく《アドリビトム》に入れると

思うと、ワクワクする方が勝ってるかな？」

アレスはいい緊張感を持っているようで、ジェウスは安心した。

アレス
「それよりさ、ジェウス…」

突然、小声になったので何事かと思った。

ジェウス
「どうした？」

アレス
「あのさ…、昨日二人に会ってからそのあと、カノンノがまともに顔見てくれないんだけど、なにか悪いことしたかなぁ？」

なんだ、そんなことかと思ってしまった。

ジェウス
「ははっ！違う、違う。逆だよ、ぎゃ～く！好きだからこそまともに見れないんだよ」

ジェウスの説明を聞いても、アレスはなにかしっくりこなかったようだ。

アレス
「でも僕、カノンノもジェウスもブレイヴだって好きだけど、別に普通に顔見れるよ？」

ジェウス

（鈍感だなぁ…）

ジェウスは苦笑してしまったが、説明を続けた。

ジェウス
「アレスの［好き］とカノンノの［好き］は、また別の物。ま、そのうちわかるようになるから！」

アレス
「？」

ジェウスの説明はそうくくられた。一方は、ブレイヴとカノンノが話をしていた。

ブレイヴ
「なんだよ、まだまともに話せないのか？」

カノンノ
「誰のせいだと思ってるの…。うぅ…」

先程ジェウスとアレスが話していたように、まともに顔が見れないらしい。

ブレイヴ
「気にしなくてもいいだろ？」

カノンノ
「でも…やっぱり気にするよ…」

ブレイヴは「はぁ…」と溜息をついてしまった。

ブレイヴ
「からかったのは、ゴメン…。でもさ、いつまでもそんな態度だとアレスに嫌われちまうぞ。アレスは皆のことが好きなんだから、普通にしてりゃいいんだよ」

素直に謝罪をし、ニカッと笑ってカノンノにそういった。カノンノも黙ってはいたが、言っていることは理解してくれたようだ。そのあと、そっとジェウスが話しかけてきた。

ジェウス
「カノンノはどうだった？」

ブレイヴ
「ん？ああ、言ったことは理解してくれたみたいだから、大丈夫だろ…。アレスは？」

ジェウス
「ありゃ、鈍感だ。ほっといても大丈夫だな」

ブレイヴ
「じゃあ、二人とも大丈夫ってわけだな。よかったよかった」

二人の気持ちを知り、ブレイヴとジェウスは安堵した。その後も山道を登っていき、散策を続けていくと、今回のターゲットを発見した。

カノンノ
「いた！ガルーダだよ！」

カノンノの指差す先には、ガルーダが待ち構えていた。（アレスの入隊試験もブレイヴ、ジェウスと同じ）

ブレイヴ
「…じゃあ、頑張れよ」

ジェウス
「…ちゃんと、見といてやるから」

激励の言葉を送ると、二人は物陰に身を潜めた。

アレス
「うん…。行ってくるよ！」

アレスもその言葉をしっかりと受け止め、ガルーダへ向かっていった。

…

……

……

結果、きっちりと勝利を収め帰ってきた。戦闘内容については文句のつけようもなかった。カノンノが主に前衛を勤め、アレスが後衛からの魔法で攻めるいたってシンプルな戦法だったが、心が繋がっているかのような、息の合った戦闘だった。危なくなったら助けようかと思っていたブレイヴとジェウスだったが、杞憂だった。

アレス

「ただいま…。二人とも…」

ブレイヴ
「お帰り！いい戦いっぷりだったぞ！」

ジェウス
「お疲れ様…アレス。カノンノもお疲れ様…」

カノンノ
「うん、ありがとう！」
二人に労いの言葉をかけ、笑顔で迎えた。

ブレイヴ
「さあ！早く船に帰って、アレスの入隊を祝おう！」

アレス
「ありがとう！僕もお腹減ったし、帰ろう！ね、カノンノ！」

急にアレスに話を振られ最初は驚いていたが、最後にはしっかりとアレスの目を見て、

カノンノ
「うん、帰ろっ！」

と言って、二人で仲良く前を歩いていた。

ブレイヴ
「元に戻って良かったな～。ある意味、どの依頼よりも疲れたな」

ジェウス

「まあ、自分で蒔いた種だから、ちゃんと摘まないとな」

二人の幸せそうな顔を見ながら、ブレイヴとジェウスは笑いながら話した。それはまるで、弟や妹を見るような、優しい目だった。

見守る目（後書き）

男女の気持ちってよく解らんので、なんか想像でアレスとカノンノの気持ちを書いてます。こんなのありえない！とか思うかもしれないですが、上の理由なので…。

スキット　その2（前書き）

あ～、次話が書けん…。待っている方、もう少し待ってください！
遅くなりましたが、とりあえず繋ぎで埋め合わせです。
感想も欲しいっす（・ｏ・）ノ

スキット　その2

・弱点克服訓練

ルカ
「ねえ、ブレイヴ？」

ブレイヴ
「ん？どうした？」

ルカ
「これから甲板行かない？」

ブレイヴ
「かはっ……。ルカ…、高いとこ俺はダメだって言ったよな…」

ルカ
「分かってるけど…、ほら、風にあたると気持ちいいよ！」

ブレイヴ
「でも…」

ルカ
「それに、そうゆう事は克服しておくべきだと思うし…」

ブレイヴ
「気遣ってくれてるのか？」

ルカ

「え?う、うん、そんなとこ」

ブレイヴ
「…ありがとう。じゃあ弱点克服のために頑張るか！」

・そんな理由(ワケ)

タタタ…

ロックス
「ブレイヴ様！ジェウス様！船内を余り走らないでください！」

ジェウス
「そ、そんなの無理…。ゼェ…ゼェ…」

ブレイヴ
「やべ！追いついてきた！」

ロックス
「？」

ハロルド
「グフフ…☆やっと追いついたわよ！さ、解剖さ・せ・な・さ・い！」

ブレイヴ・ジェウス
「ハハハ～…。お断りしま～す！」

ハロルド

「あ、待ちなさい！」

タタタ…

ロックス
「ハァ…。そんなことですか…」

・とある面影

ヴェイグ
「……」

ジェウス
「ヴェイグ。さっきから見てるけど、どうした？」

ヴェイグ
「いや…、お前の戦闘方法が知り合いにそっくりだからな…」

ジェウス
「（ティトレイの事か…）そうなのか？」

ヴェイグ
「ああ、あいつにはお前程の落ち着きはないがな」

ジェウス
「でも、嫌いじゃないんだろ？そいつのこと」

ヴェイグ
「！、そうだな…。あいつとは本気で語れる…」

ジェウス
「いい友達だな…。ヴェイグは幸せモンだ」

・うらやましい…

ブレイヴ
「エミルはいいなぁ…」

エミル
「え？な、何が？」

ブレイヴ
「エミルには…好き、好き～！…って言ってくれるマルタがいるじゃん」

エミル
「そんな…。ブレイヴにもそんな人がいつか現れるよ！」

ブレイヴ
「でもさぁ…、目の前でまざまざと見せつけられると、やっぱりうらやましいよ。はあ～、うらやましい…」

エミル
「結構、深刻に悩んでるんだね…」

・悪い癖

アンジュ

「じゃあ、お願いね、アレス君」

アレス
「はい、行ってきます！」

ジェウス
「…今日幾つ目だ？」

アレス
「え？９つ目だよ？」

ジェウス
「その頼まれたら断れない癖…、どうにかならないかなぁ…」

アレス
「大丈夫だよ、ほらこんなに元気だし、簡単な依頼ばっかだから。じゃあ、行ってきます」

ジェウス
「ありゃ、アンジュにいいように使われるな…アレスに合掌！」

アンジュ
「何に向かって手を合わせてるの、ジェウス君？」

ジェウス
「はへっ！？あ、いや、そんなんじゃ…」

アンジュ
「懺悔するなら、聞いてあげるわよ。ミッチリと…」

ジェウス

（アンジュさん…。怖ぇ…）

スキット　その2（後書き）

ハロルドの解剖偏執狂の偏りがヤヴァいですね…。反省した方がいいのか…？

物資補給の裏で…。（前書き）

あぁ…、これはひどいかも…。
またまた二人の日常的なものです。

物資補給の裏で…。

ブレイヴ
「ダァーッ！待て、このー！」

今日の依頼…、逃げた飼い猫を捕まえることなのだが…。

ブレイヴ
「待て…、待てよ～…。そらぁっ！」

スカッ…。伸ばした腕は無情にも空をきった。

ブレイヴ
「ちくしょー…、捕まんねえよ…。待てー！」

依頼なので諦める訳にもいかず、すぐさま、また猫を追いかけはじめた。しかし…

ブレイヴ
「もう駄目…だ…」

疲労も限界に近付き、足がもつれそうになった。
…その時、曲がり角の影から不意にジェウスが飛び出してきた。

ジェウス
「そらぁっ！」

そして滑り込みながら、抱き抱えるようにその猫を捕まえた。

ジェウス
「よしよし、落ち着け…」

ジェウスの腕にすっぽり入っている猫は最初こそ抵抗していたが、次第に落ち着きを取り戻した。

ジェウス
「いい子だ…。依頼完了だな！…大丈夫か？」

ジェウスがちらっとブレイヴを見ると、かなり息を切らし、仰向けの大の字で倒れていた。

ブレイヴ
「大丈夫…な訳…無いだろ…。いいとこ…どり…しやがって…」

訓練のおかげで体力はついているはずだが、よっぽど走り回ったようだ。

ジェウス
「悪い、悪い…。ほら、街の人が見てるし、まだ簡単な仕事の方だぞ。立った、立った！」

ブレイヴ
「手…貸してくれ…。足がつりそうだ…」

猫は無事に飼い主に返され、二人は船に戻った。

アンジュ
「お疲れさ…ブレイヴ君すごい汗。大丈夫？」

ブレイヴ
「今は…」

報告を済ませた二人は気になっている事を聞いてみた。

ジェウス
「それより、あの四人は帰ってきました？」

この日は、ヘーゼル村の人へ物資を渡すため、ヴェイグ、シング、ミント、アレスの四人が出ていた。

アンジュ
「まだ帰ってきてないわ。あの四人なら大丈夫だから安心なさい！」

ブレイヴ
「結構長い時間かかるんだな…」

二人は、四人は無事に帰ってくるのはわかっているので、その心配はしていなかった。ただ、長い時間かかっているのが気になっただけだ。

アンジュ
「結構な荷物の量だったし、これくらいの時間は当然よ」

物資は届けられない…それを知っている二人は暗い表情を隠すのが精一杯だった。ちなみに、なぜ二人がそれについて行かなかったというと、人数制限もあったし、何より戦う事になるサレが二人とも苦手な感じだったからだ。…とりあえずブレイヴは明るく努めることにした。

ブレイヴ
「じゃあ大丈夫だな…。それよりさ、シャワー浴びていい？もう体中ベッタベタでさ…」

アンジュ
「いいわよ。でも一応ロックスにも許可はとってね」

そう言われたので、タオルを借りるついでに、ロックスに許可をもらうことにした。

ブレイヴ
「ロックス、シャワー浴びていい？」

ロックス
「おやおや、汗だくですね。使ってよろしいですよ。はい、タオルもどうぞ」

借りたいことを言う前にタオルを渡してくれた。

ブレイヴ
「おっ、さすがロックス！ありがとう！」

お礼を言い、ブレイヴは足早に風呂へ向かっていった。

ジェウスの方はというと、今後のことを部屋で考えていた。

ジェウス
「今後、このまま行けばラザリスが現れて、世界樹の危機…。ひいては世界の危機…。それを救うとする…。…その後は？」

よく考えてみれば、あの神様（二話参考）は扉が出る場所が予測できたら元の世界に帰れると言っていた。…つまり、そのうち帰る選択を迫られる訳だ。

ジェウス
「どうすっかなぁ…」

カノンノ
「何をどうするの？」

考えていると、いつの間にか部屋の入口にいたカノンノに声をかけられた。

ジェウス
「うわっ！？いつからいたの！？」

カノンノ
「ついさっきだよ。それで何に悩んでたの？」

どうやら最初に言ったことは聞かれてないらしく、ホッとした。

ジェウス
「いや、なんでもないよ。それよりどうした？」

正直あまり考えたくないことなので話題をそらした。

カノンノ
「あ、そうだった。ロックスがね、疲れているだろうから、甘いものでもってケーキ焼いてくれたの」

ジェウス
「お、じゃあいただきに参りましょう」

ジェウスは腰を上げ、食堂に向かうことにした。途中、シャワーを浴びてサッパリしたブレイヴと合流した。

ブレイヴ
「ん？どこ行くんだ？」

ジェウス
「ロックスがケーキ焼いてくれたんだってさ。お前の分もあるって」

ブレイヴ
「じゃ、タオル返すついでに…」

食堂に着くと、まんべんなく生クリームの塗られたケーキが置いてあった。いただきます、と言い一口、口に入れると

ブレイヴ・ジェウス
「うまぁ…」

としか言葉が出なかった。

ロックス
「そう言っていただけると、嬉しいです。まだ残ってますよ！」

そう言ってくれたが、一気に食えるものでもないので、

ジェウス
「残りは夕食の後に食べるよ」

ブレイヴ
「俺も！リッドに取られないように管理しといて」
と言って皿のケーキを食べ進めた。
ブレイヴ・ジェウス
「ごちそうさま…」
食べ終わったので部屋に戻り、少し休むことにした。すると何やら隣の部屋が騒がしい。
ブレイヴ・ジェウス
（あー、そういえば…）
思い当たる節があるので、その部屋に伺うことにした。
ブレイヴ
（いるいる…）
部屋の中には、アレス、アンジュ、それから新しい顔が三人いる。
アンジュ
「あら、ブレイヴ君、ジェウス君、ちょうどいいわ。あなた達も話を聞いてくれる？」
もとよりそのつもりなので、了承した。最初に簡単な自己紹介を済ました。
エステル

「初めまして。わたしは、ガルバンゾ国の王女エステリーゼ。エステルって呼んで下さい」

リタ
「あたしは、リタ・モルディオ」

ユーリ
「オレはユーリ・ローウェル。ガルバンゾ国のギルドの者だ」

そのあと、ユーリ達はエステルの護衛をしていること。何故、ギルドを雇っているか。生物の変化の話を聞き、その調査に乗り出したこと。森で迷いサレに誘拐されたことなど話してくれた。要約すると、《星晶(ホスチア)》の採りすぎが原因らしい。調査はできてないらしく、エステルはずいぶん焦っていたが、今は休息することを薦められ、少し落ち着いたようだった。
話も一段落し、ホールを通り部屋に向かった。部屋に戻り、ブレイヴとジェウスは休んでいたが、唐突にジェウスが話し始めた。

ジェウス
「明日は、星晶採掘跡地に誰か行くよな…」

ブレイヴ
「うん？ああ、あの三人も正式加入して、エステルが依頼だすだろ」

ブレイヴはいきなり話しかけられて、何かと思った。

ジェウス
「俺、行ってみる。星晶の採り尽くされた土地をこの目で見ておきたい」

ブレイヴ
「…おう、行ってこい。あ、多分俺は行けないけど。行く人が、リッド、フィリア、エステルが決まってるから、残りが後一人だからな」

ジェウス
「そうだったな。…って、これが決まったら初めて別々の行動か」

ブレイヴ
「言われてみりゃそうだな。ま、いいんじゃないか？お互い勉強になるし…」

ジェウス
「だな。よし、とりあえずアンジュさんに聞いてみるわ」

そう言って、ジェウスは部屋を出た。

ブレイヴ
「そういえば、この依頼でティトレイとユージーンに会えるんだな…。あいつにゃ、ホントにいい勉強だ」

しばらくして帰ってきたジェウスによると、ユーリ、エステル、リタは《アドリビトム》に正式加入したらしく、依頼も出ていて引き受けたらしいので明日、出立するらしい。

ブレイヴ
「俺がいなくても頑張れよ！」

ジェウス
「そっちこそ、俺がいないからって、悲しくて泣くなよ」

ブレイヴ
「んな訳あるか！」

そうして二人は、明日別々の行動をとることになった。

…余談だが、二人が残していたケーキ。ユーリにきれいさっぱり食べられましたとさ。

ブレイヴ・ジェウス
「リッドだけを油断していた…。…ユーリぃ！！」

ユーリ
「ヘックション！」

エステル
「風邪です？」

ユーリ
「いや、何か寒気が…」

物資補給の裏で…。（後書き）

こんな文ですいません（＜＿＞）
よろしければ感想下さい。

新たな出会い。ジェウスの気持ち（前書き）

ちょっと長くなりました。戦闘描写もちょこっとあります。文はいつもどうりグダグダです。
うーん、いい文が書きたい（悩）

新たな出会い。ジェウスの気持ち

星晶採掘跡地に行く当日になり、ホールには現場に赴くジェウス、リッド、フィリア、エステル。見送りにブレイヴが集まっていた。

ブレイヴ
「じゃあ、みんな！うちのジェウスをよろしく！」

ジェウス
「いつから、俺はお前の物になった…」

ブレイヴに激励（？）を受け、四人は《コンフェイト大森林》に旅立った。

リッド
「ここも、ずいぶん動物が減ったな…。よく狩りをしてたんだが…」

狩りが生業のリッドにとっては頭の痛い問題だ。

ジェウス
「魔物でも、狩ったら食えんのかな？」

リッド
「ああ、食えるぜ。毒性が無けりゃ、大抵はイケるはずだ」

ジェウス・フィリア・エステル
「へえー…」

リッドの豆知識にしばらく感心していた。

少し静かになりエステルが重々しく口を開いた。

エステル
「すいません…」

最初は何の事かと思った。どうやら、星晶採掘を自分の国が関わっていることを謝ったようだった。

ジェウス
「…何謝ってんの」

リッド
「そうだぜ、エステルが悪い訳じゃないだろ？」

フィリア
「採掘を止める為、ご自身の意志で国を出られたのでしょう？これからですよ…」

三人の励ましに少し元気になったようで、「はい！」と笑顔で返してくれた。
その後、星晶採掘による生物変化について話し合った。目撃証言によると、姿そのものが全く別の生物に変わってしまい、その現象は他に3ヶ所でおきたらしい。（ジェウスはこのあたりはうろ覚えだった）

ジェウス
「ま、調べてみないことには始まらないな…」

独り言のように呟き、魔物を倒しながら奥へと進んだ。
…歩いて行くと、開けた場所に出た。そこには、大きさが通常の十

倍はあろうかというオタオタがいた。

リッド
「あーあ、デカオタだ。こいつ、なかなかどいてくれねえんだよな」

ジェウス
「でも、やることは決まってるだろ？」

全員頷くと、ジェウスとリッドが突撃し、後ろでは、フィリアとエステルが詠唱を開始した。

リッド
「行くぜ！裂空斬！」

ジェウス
「幻龍拳！」

二人は特技で攻め立てたが、身体の大きなデカオタにはかすり傷のようなもので、怯むことはなかった。そしてデカオタの目がリッドの姿を捕らえた。

リッド
「ヤベ…」

リッドは技の着地姿勢に入っており、全くの無防備だった。

ジェウス
「やらせるかよ！獅子…戦吼！」

獅子を模った気を打ち出し、デカオタをギリギリで足止めした。

フィリア
「フレアトルネード！」

エステル
「フォトン！」

完了した詠唱が、炎と光を作りだし、デカオタを襲った。

ジェウス
「一気にいくぞ！」

ジェウスが合図を掛けると、リッドが先頭をきった。

リッド
「うおぉぉ！散沙雨！秋沙雨！」

フィリア
「いきます…。サンダーブレード！」

エステル
「援護します！シャープネス！」

リッドとフィリアが先に攻撃の手を加え、後を走るジェウスにエステルが攻撃増強の魔法をかけた。

ジェウス
「幻龍拳！…とどめだ。飛燕雷脚！」

素早く詰め寄ると同時に拳を当て、その後上空に向かって連続で蹴

り上げ、最後に雷を纏った蹴り落としを放った。
デカオタはしばらくの間、動いていたが、そのうち完全に動きを止め消え去った。

フィリア
「終わりましたね。先を急ぎましょう」

フィリアが剣を納め、皆に呼び掛けた。

リッド
「道は…？」

リッドが言うのも無理はなく、見渡しても木が生い茂っているだけで、道らしい道はどこにも無い。
するとエステルが一つの茂みに近付いた。

エステル
「サレの追跡から逃れる為に、ユーリがこうやって道を隠していたんです」

そうしてここで迷い、ユーリ達と逸れてしまったらしい。持っている剣で枝を払うと、道が現れた。リッドが感心するほど上手く道が隠されていた。とにかく、先に進むことにした。
木の根に沿って行くと、遂に星晶採掘跡地に着いた。…が、

ジェウス
「！……」

ジェウスは目の前にある光景のあまりの酷さに、思わず絶句してしまった。画面越しに見る光景では、ただ植物に石灰が被ったように

しか感じなかった。しかし、木も草も石になり、時が止まったような、酷い有様だった。

フィリア
「…ここが、採掘跡地ですね。今は封鎖されている様ですが」

リッド
「なあ、何か…やばいんじゃないか?見てみろよ、周りの植物を。こんなもの見た事ねぇぞ」

一部が無機物化しており、もはや植物とは言えない状態だった。フィリアが調査を試みようとすると、後ろから声がかかった。

???
「…お前達、アドリビトムか」

振り向くと、黒い獣のような大きな男と、緑の髪の男がいた。リッドは顔見知りのようだった。

リッド
「あれ?前にヘーゼル村に物資を届けに行った時にあった…」

ユージーン
「ユージーン・ガラルドだ。アドリビトムにはヴェイグ達の事も含め世話になっている」

ティトレイ
「おれはティトレイ・クロウ。ヴェイグがまたサレとやりあったらしいな。…ったく、あいつもしょうがねえ奴だな」

二人は自己紹介をし、本題に入ってきた。

ユージーン
「今日は、ここに何の用だ？」

そう聞かれたので、エステルが星晶採掘跡地で見られる現象についての調査をしにきたと説明した。ユージーンとティトレイは生物変化には頭を悩ませていたようだか、星晶との関連性については解らないらしく、とりあえず解っていることをヴェイグに伝えようと村からアドリビトムを目指す途中だったらしい。

リッド
「とにかく、船に来てもらおうぜ。細かい話はそれからだな」

リッドの意見に皆が賛成し、船に戻ることにした。
船に戻ったジェウスは部屋に通されたユージーン達の話を聞くことにした。
星晶が採掘され、森周辺の村々にマナの恵みはなくなり、マナを生み出す世界樹の根も張ってないため、まさしく八方塞がりの状態らしい。

ユージーン
「ああいった生物の変化は、星晶採掘が終盤に差し掛かった頃から始まった。土地が痩せ、畑からは作物が取れなくなった」

アンジュ
「あの様な場所は他にも？」

ティトレイ
「ああ、村近辺の星晶はゴッソリ盗っていかれたからな。それから

森の生物に奇妙な変化が現れてよ…」

エステル
「具体的には、どの様な…？」

ティトレイによると、狩る動物が、生き物という感じがせず、例えるなら、肉が無いらしい。仕留めた先から溶けていくものもあり、ちゃんとした獲物が取れれば奇跡ということだ。

エステル
「けれど…、元々星晶も世界樹の根も無い土地はありますが、そのような現象は聞いたことがありません…」

ジェウス
「ということはだ…」

ずっと黙って話を聞いていたジェウスが話したため、皆の目が一点に集まった。

ジェウス
「マナが少ない以外にも問題があるって事だな…」

ユージーン
「原因が判明しない事にはな…。あの現象も拡大しつつある」

ティトレイ
「くそっ！…村のみんなは、どうやって生活していきゃあいいんだよっ！サレはいなくなったけど、もう村に物資もねぇ、採取もままならねぇ…。もっと遠くに行って探してくるしかねえのか…」

二人が今後について悩んでいると、

ジェウス
「だったら、二人ともここで働いてもらわない？」

とジェウスが提案した。

ジェウス
「いいだろ、アンジュさん？こんな状況なら人手は必要だし」

アンジュ
「そうね。私もそう思ったわ」

アンジュもその案には賛成してくれたので、二人の加入が決まった。

ユージーン
「ジェウス…だったか？よろしく頼む。」

ティトレイ
「よろしく頼むぜぇ！」

ジェウス
「よろしく、ユージーンさん、ティトレイ」

挨拶を済ませ、部屋に戻るとブレイヴが本を読んでいた。

ジェウス
「似合わないモン持ってるな」

ブレイヴ

「おう、お帰り～。って、似合わないモンとはどうゆうことだ！」

ブレイヴは本を閉じ、ジェウスの方を向き、お互い今日のことを話し始めた。

ブレイヴ
「今日は大変だったぜ～…。カイウスとルーティとクラトスで魔物退治に行ったんだけど、ルーティが途中で「割に合わな～い！」って言って駄々こねだすし、カイウスと説得するの大変だったし、帰ったら帰ったで、クラトスとの手合わせは無茶苦茶しんどいし…。そっちはどんな感じだ？」

話を振られたため、ジェウスは今日感じたことを話し始めた。

ジェウス
「…お前さ、星晶の取り尽くされた土地のことどう思う…？」

ブレイヴ
「？。どう思うって…」

ジェウス
「俺はさ、最初ただ白い感じだろ、みたいにしか思ってなかった…。その場所を見るのも正直、興味本位でしかなかった…。でも、実際に見ると酷いもんだったな…。何もかも石になってて、まるでそこだけ時が止まってたみたいだった…。それを見た時、軽い気持ちで向かった自分自身がバカみたいで……何も言えなかった…」

ジェウスは自らを笑うように嘲笑した。

ブレイヴ

「……」

ブレイヴは初めて見るジェウスの姿に、黙ってしまった。しかし、いつもの笑顔で話しだした。

ブレイヴ
「…それをこれから変えていくために、俺達が頑張っていくんだろ？って…現場を見てないから言えるのかもしれないけど…。だけどさ、そんな顔じゃダメだ…と思う…。それに、その場所を見て、そんなこと思えたお前はバカじゃないよ…。むしろすごい奴さ」

バカじゃないよ…。自分を素で認めてくれる言葉が今のジェウスにはとても嬉しかった。

ジェウス
「…お前は、本当にいい奴だな。お前と話すと元気になるよ。」

ジェウスも笑顔になり、二人で笑った。

アレス
「ブレイヴ、ジェウス。夕飯の準備できたってー！」

話しが終わったタイミングでアレスが二人を呼びに来た。

ジェウス
「おー、じゃ行くかー！」

ブレイヴ
「今日のおかずはー！？」

アレス
「二人ともテンションが変だよ?…あれ?ジェウス目が赤い…」

ジェウス
「な!?な、泣いてなんかないからな!」

アレス
「泣いたの?」

ジェウス
「うるせー!もう聞くなー!」

三人は道中を騒がしく通って行った…。

新たな出会い。ジェウスの気持ち（後書き）

終わりかた変ですね…。反省、反省（^―^；）ゞ
感想お待ちしています。

ブレイヴ、初めての…（前書き）

早めにできたー！ま、原作と違う事ですからね…。
内容は読んでお楽しみです！

ブレイヴ、初めての…

星晶採掘跡地に行ってから、しばらくは大きな事件も無く、ブレイヴとジェウスは依頼人の探し物を探したり、移動の護衛などの簡単な依頼をこなしていた。

ブレイヴ
「んあー…。大きな事件が無いのはいいが、暇だなー…。ジェウス、これから…」

ジェウス
「悪い。これからティトレイと手合わせだ。せっかく戦い方が一緒なんだから学ばないとな」

ブレイヴ
「な～んだよ…。じゃ、誰か空いてる人いないかな…」

ブレイヴは部屋を出て誰か誘う人を探すことにした。

ブレイヴ
「食堂ならみんな集まるから、誰かいるかも」

と思い、食堂に向かった。しかし覗いて見ても、ロックスとクレアしかいなかった。

ロックス
「おや、ブレイヴ様。どうかなさいましたか？」

ブレイヴに気付き、ロックスが声を掛けてきた。

ブレイヴ
「あ、いや、今日の分の依頼も片付いたし、誰か相手になってもらえないかな～って…。でも、誰もいないな…」

クレア
「皆さん、それぞれに依頼や訓練や買い出しに行ってますので、多分今は空いてる方はいらっしゃらないと思いますよ」

クレアにそう言われ、ガックリきた。
ブレイヴ
「うーん…。ひ～ま～だ～…。」

哀愁を漂わせ、ブレイヴは食堂を出た。

ブレイヴ
「エステルから借りた本でも読んどくか…」

何も無いので部屋でじっとしとくのも、たまにはいいか。と思い歩きだした。しかし、途中ホールを通り掛かると、アンジュが一人忙しそうに依頼書の整理をしていた。

ブレイヴ
「アンジュ…。大変そうだから、何か手伝おうか?」

傍らを見ると膨大な数の依頼書があったので、思わず声を掛けてしまった。

アンジュ
「えっ?いいの?」

突然声を掛けられたので、少々驚いたようだった。

ブレイヴ
「いいよ、どうせ暇だったし…。何すればいい？」

アンジュ
「ありがとう！一人じゃ大変だったんだ…。じゃあ、こっちの依頼書、書いてある通りに分けてくれる？」

と言って、一枚の紙を見せた。

ブレイヴ
「へぇ、依頼をもらった時点で誰に行ってもらうか決めてるんだ」

感心しつつ、仕分けを始めた。

アンジュ
「ええ。でも最近は数が多いから大変で…」

ブレイヴ
「それだけ、このギルドが頼られているってこと。ありがたいと思わないと」

アンジュ
「うん、そうだね」

話をしながら仕分けの紙を見て、全員に依頼を分けていった。しばらくは滞りなく分けていたが、仕分け表の下の文字が急いで書いたせいか、だんだん小さくなり、読みづらくなってきた。

ブレイヴ
「…？。アンジュ、これなんて書いてあるの？」

表を手に持ち、アンジュに尋ねた。

アンジュ
「どれ？」

ブレイヴ
（うわっ…）

アンジュが表を見るために覗き込んできたのだか、そのせいでブレイヴとアンジュの顔の距離は、十センチに満たない距離に近づいた。アンジュは気にしてないようだが、ブレイヴの方は、心臓の鼓動がいくらか速くなった。

アンジュ
「ブレイヴ君？」

ブレイヴ
「あっ、ああ…」

アンジュ
「それは、セネル君とシャーリィの仕事よ」

…ブレイヴはそこからなぜか、心臓が引っ切りなしに波打ち、落ち着けなかった。

アンジュ
「今日は助かったわ、本当にありがとう」

大量にあった依頼書の仕分けも終わり、ブレイヴはお礼を言われた。

ブレイヴ
「ああ、うん…。どう致しまして…」

アンジュの笑顔を見ると息苦しささえ感じてきた。とりあえず受け答えをし、その場から離れた。

ブレイヴ
「ふぅ…。何だろう、この気持ち？」

心臓が締め付けられる感じ…。何だか落ち着かない…。

ブレイヴ
（待てよ…？誰かこんなこと言ってたよう…！）

何かに気付き、ブレイヴはある部屋に向かった。仕分けの間に時間も経ち、いろんな人が帰ってきてたが、ある人に会いに行った。

コンコン…

ドアをノックすると部屋の中から返事がし、扉が開いた。

エミル
「ブレイヴ？どうしたの？」

出てきたのはエミルだった。

ブレイヴ

「あ…、よっ！えーっとな、今日はエミルじゃなくてさ、マルタに話があるんだけど…。居る？」

エミル
「うん、居るよ？マルタ～！」

エミルが呼ぶと、マルタがすぐにやってきた。

マルタ
「なあに、エミル？ん、ブレイヴ？」

ブレイヴ
「よっ！ちょっと聞きたい事があるんだけど…いい…？」

ブレイヴが切り出すと、不思議な顔をされたが、

マルタ
「いいよ！エミル、ちょっと行ってくるね」

と言われた。

ブレイヴ
「悪いな、二人とも。せっかく二人でいたのに…」

そう言うと、気にしなくていいから！と二人に言われた。場所を移し、マルタと話し始めた。

マルタ
「で、私に聞きたい事って何？」

ブレイヴ
「あのさ、マルタってエミルの事を思うとどうなるって言ってたっけ？」

ブレイヴが質問すると、マルタの顔は紅くなり、のろけ始めた。

マルタ
「エミルの事を考えると～？私は、エミルの事考えると、息が苦しくなるくらい胸がドキドキしちゃうよ～！何てったって、私の王子様なんだから！」

ブレイヴ
「もしかして、心臓が締め付けられる感じとかってある？」

重ねて質問すると、ちゃんと答えてくれた。

マルタ
「うん！そんな感じもするかな～…って、よくわかるね。…もしかして…恋してる！？」

と言われたが、恋というものをしたことがないブレイヴには、わからなかった。

ブレイヴ
「恋…なのかな？俺もそんな気持ちになってる…」

マルタ
「…ホントに？」

どうやら、冗談が当たってしまい、びっくりしたらしい。

マルタ
「誰！？誰～！？」

ブレイヴ
「そんな簡単に言えるか！そうなのかはわかんないし…」

マルタ
「絶対恋だよ！私が言うんだから間違いなく！」

真面目な顔で言われて、ブレイヴは何も言えなかった。

ブレイヴ
「確かに…、他の人には、そんな気持ちにはならないし…。マルタ…。せめて、誰にも…」

マルタ
「わかってる…。このことは誰にも話さない。これでいいんでしょ？」

みなまで言わずに分かってくれた。さすが（恋の）先輩だ。

マルタ
「あっ！相手はまさか私じゃないよね！私にはエミルが…」

ブレイヴ
「バカ！んな訳あるか！帰るぞ！」

マルタを部屋まで送り、自分の部屋に戻った。

ジェウス
「おー。どこ行ってたんだ?」

部屋に着くと、ジェウスがすでに帰っていた。

ブレイヴ
「内緒…」

口に人差し指を縦に当て、そういった。

ジェウス
「?」

ブレイヴ
「あー!今日は記念日だー!」

ジェウス
「お前、大丈夫か?」

ジェウスに何を言われてもブレイヴ気にしなかった。それほどまでに気分は高揚していた。

ブレイヴ
(俺は今…恋してんのか…)

仰向けになり天井を見ながら、ブレイヴは静かに思った…。

ブレイヴ、初めての…（後書き）

ということで、恋、させてみました！
しかも相手はアンジュ（笑）
恋模様は主にスキットで描きたいと思いますが、いつか大きな話にしていきたいです！
こんなブレイヴ君に応援メッセージを！（笑）
ちなみにブレイヴは草食系。つまりは、シャイ。がつがつしてません。（ジェウスもですけどね）

火山出立前（前書き）

３つ程お話を…

一．投稿遅れてすんません。間違ってデータ上書きしてしまって…、はい…。急いで小説の所まで進めました。

二．今回は短いです。進展も無し。

三．ＰＶ＆ユニークがどんどん増えてます！感謝感謝です！

火山出立前

アレス
「ブレイヴ、いいことでもあった？」

ブレイヴは出会ったアレスに聞かれた。

ブレイヴ
「ん？なんで？」

内心では焦ったが、平静を装って問い返した。

アレス
「ううん、なんだかいい顔してるから」

アレスは首を振ってそう言った。

ブレイヴ
「俺はいつもいい顔してるよ」（コイツ…、自分の事は鈍いくせに、他人の事には鋭いなぁ…）

若干呆れたが、悟られずに済んだようだ。（何の事かは前話参照のこと！）

アレス
「ま、そうだね！ブレイヴはいつも笑顔だし！そういえば、ジェウスは？」

ブレイヴ

「あいつなら、朝っぱらからクレスとミントと出て行ったぞ。誰かを迎えに行くんだとさ…」

ブレイヴは知っているが、ジェウスはチェスターを迎えに行っていた。

アレス
「じゃあ、今日は一緒に訓練でもする？」

ブレイヴ
「お、いいねぇ！頼むよ！」

談笑しながら歩いて行くと、ホールに着いた。そこには、リッドとファラ、それからある二人がいた。

アレス
「リッド、ファラ！その二人は？」

ファラ
「あ、アレス、ブレイヴ！紹介するね。わたしの友達の…」

とファラが言う前に二人が自己紹介を始めた。

メルディ
「メルディだよう！」

キール
「キール・ツァイベルだ」

もともとこの二人も、《アドリビトム》発足時からのメンバーなの

だが、大学で勉強をしていたらしい。しかし星晶をめぐっての戦争で、大学が休校にになり戻って来たようだ。

キール
「ともかく、ぼくとメルディもここに戻って働く事にした。他に身を寄せる場所もないしな…」

とりあえず、キールも休みたいようなので、積もる話は部屋ですることになった。

……

ブレイヴ
「なんで俺まで…。」

たまたまその場に居ただけなのに、リッド達の部屋まで連れてこられた。キールの積み荷解きも終わり、話を再開した。

アンジュ
「アレス君、ブレイヴ君。キール君とメルディはね、「持続可能な社会」を研究しに大学へ行っていたの」

アンジュが切り出すと、キールが話し始めた。

キール
「ぼく達の世代が、将来の世代の為に、環境をありのまま利用して、充足した社会を作るっていうものさ。よって、星晶の採掘も行わない」

つまり、人々が自然を壊さず、生活する為の衣食住が十分に行き渡

る社会。その理念で運営する村、《オルタ・ビレッジ》を作るのが、キール達の、ひいては《アドリビトム》の目的だと話してくれた。

アレス
「へぇ！実現出来たらいいなぁ！」

メルディ
「きっとする！キールが研究、リッパ。絶対、実現させるよ！そしたら、たくさんの人幸せになる！」

アレスが言うと、メルディが元気良く答えてくれた。

アンジュ
「そうそう。あの現象については？」

本題に入り、アンジュの顔がいくらか厳しくなった。

キール
「星晶の採掘跡地で起こる、生物変化現象か…」

キールやメルディが街で聞いたのは、生物変化現象の場所には赤い煙の様なものが現れていたこと。その赤い煙も数日現れたのみで、今は消えてしまっていること。《オルタータ火山》で数日前に発掘が終わったこと。

…と、まあ、こんな所だった。

ブレイヴ
「次は火山か…暑そ…」

アンジュ
「依頼の登録はしておくわ」

と言って、アンジュは部屋を出て行った。

アレス
「行こうよ！ブレイヴ！」

ブレイヴ
「言うと思った…。俺もおんなじ事思ったけど！」

アレスとブレイヴは互いに笑い、登録へ向かった。

ブレイヴ
（赤い煙…見れたかな？心構えを怠らないようにしとかないと…）

火山出立前（後書き）

ＰＶ＆ユニークは増えつつあるんですが、週間アクセスはなかなか増えません（泣）

やっぱり、文章悪いかなぁ…。

いやいや！くじけずに頑張るぞ！

感謝の心を知る（前書き）

中身はある…はず…。
前の話がスッカスカの内容だったので、まだ見れる話だと思います。
あ、それから！
お気に入り登録が２０件越えました！もう、ほんっと、皆さんありがとうございます！

感謝の心を知る

ブレイヴ
「あ～つ～い～…」

火山に入っての感想はそればかりだった。

ルビア
「もう！暑いって言わないでよ、ブレイヴ！こっちまで暑くなるじゃない！」

痺れを切らしたルビアに怒られてしまった。

ブレイヴ
「ご、ごめんなさい…」

あまりの剣幕に素直に謝ってしまう。一方のウィルを見ると、平然としており、普段と変わらない様子だった。

ブレイヴ
「ウィル。暑くないのか？」

ウィル
「心頭滅却すれば火もまた涼し、だ。普段からこういう所にくる想定をしていれば、なんてことはない」

ブレイヴ
「こんな暑いとは思わなかったよ…」

アレスにいたっては、最初こそ元気でいたが、今は口をつぐんで黙っている。

ウィル
「それより、赤い煙の話だ…。採掘の際の有害ガスか…？」

ルビア
「空気の悪そうな場所だしね…」

アレス
「だけど、他の場所であったんじゃ、火山特有のものじゃないよね？」

ブレイヴ
「生物変化か…」

考えていても、この状況ではまとまらないので、まずは先に進むことにした。
《オルタータ火山》は火山活動が活発になっており、これも星晶採掘の影響だとウィルが教えてくれた。

ブレイヴ
「ったく…。みんなマナが無くなるとか考えないもんかねぇ…」

ルビア
「昔の人は、マナの恵みに感謝し、世界樹に感謝してた。でも、今の人は使うだけ…。いつから感謝の心を忘れてしまったのかしら…」

ブレイヴ
「感謝の心か…」

ブレイヴは、ルビアの言葉を深く噛み締めるように繰り返した。

アレス
「これから変えていけばいいでしょ？頑張ろうよ！」

重い空気を吹き飛ばすようにアレスが言った。

ブレイヴ
（…いつだか、俺も似たようなことジェウスに言ったな…）

ブレイヴは採掘跡地から帰ってきたジェウスに送った言葉を思い出し、アレスを見た。

ブレイヴ
「…だな。これから変わればいいんだよな。よし、俺も頑張るからな！」

アレスの言葉に最大限答えた。
火山の中は入り組んでおり、道がクネクネと曲がっていたが、目的地まで一本道で迷わず辿り着けた。

ウィル
「ここが目的地だな…」

ルビア
「キャッ！虫！？」

足元を見ると、虫が何匹か転がっている。

ブレイヴ
「…ジェウス来なくてよかった」

ブレイヴはジェウスがあの動き回る黒いヤツが苦手と知っているので、それに酷似している虫を見て本気でそう思った。

ウィル
「これは…！！ここにしか生息しない貴重な生物、「コクヨウ玉虫」だ」

しかし、そのコクヨウ玉虫、ピクリとも動かない。

ルビア
「動かないわ。死んでる…？」

ウィルが回りを調べるとコクヨウ玉虫が食す苔が枯れていた。不安定な地熱が原因のようだ。

アレス
「これも、星晶の採掘の影響？」

虫も苔もどうやら貴重な種のようで、ウィルが怒気を含んだ声で喋っていた。
…その時、部屋の中心辺りに、赤い煙が現れた！

ブレイヴ
「赤い煙…！」

赤い煙は自ら意志があるように動き、コクヨウ玉虫にまとわり付き、しばらくして消えた。すると、ウィルが赤い煙にまとわり付かれた、

コクヨウ玉虫に近づいた。

ウィル
「む…？まだ生きている様だな。ならば、こいつを持って帰るか」

それを聞くと、ルビアがあからさまに嫌な顔をした。

ルビア
「ええ～、気持ちわる～い」

ブレイヴ
「生物変化の原因を調べるにはしょうがない事だし、あきらめな、ルビア」

ルビア
「それじゃあ、早く戻りましょう。こんな場所、もうこりごりだわ！」

ルビアはそういって、先に部屋から出た。

ブレイヴ
「あの～、ウィル？」

ウィル
「なんだ？」

ブレイヴ
「その虫、ジェウスには見せないでくれる？その手は、あいつちょっと苦手というか…」

ブレイヴが交渉すると、ウィルは快く応じてくれた。

ブレイヴ
（これで、あいつの悲鳴も聞かずに済むか…）「赤い煙は確認したし、船に帰って報告しようか。とりあえず暑いし…速めに」

船に帰り、見た状況をアンジュにありのまま報告を始める。

アンジュ
「今回、赤い煙が本当に現れたのは、収穫だったね」

ウィル
「あの場で生物変化は確認出来なかったが、現れたあの赤い煙…。奇妙な事に生きている虫にしかまとわり付かなかった」

あの虫にも変化は見られず、ウィルが飼育し様子をみるという。

アンジュ
「じゃあ、依頼完了ね。みんなお疲れ様」

ブレイヴ
「ふい～、暑かったぁ…。お茶、お茶…」

食堂に行き、喉を潤した後、半時間ほどだらだらしていると、ジェウス達も帰ってきた。

ブレイヴ
「お～、お帰り…っと、新しい方が…」

クレス

「ああ、紹介するよ。僕の友達のチェスターだよ」

チェスター
「チェスター・バークライトだ。俺もこのギルドで働く事になった。よろしくな！」

チェスターに挨拶を返し、しっかりと握手もした。

ブレイヴ
「あ、ジェウス。おまえは研究室には近づかない方がいいぞ」

ジェウス
「あ？なんで？」

ブレイヴ
「黒い虫がいるから」

と言った瞬間、目視できるほど、ジェウスに鳥肌が立っていた。

ジェウス
「…わかったぁ～」

顔を引き攣らせながら、ジェウスはその場を離れていこうとした。

ブレイヴ
「それとさ…」

ジェウスを引き止めるように言葉を発した。

ジェウス

「なに？」

ジェウスは足を止め、振り返った。

ブレイヴ
（感謝の心…）
「いつも、ありがとうな！」

ジェウス
「？。お、おぉ？こっちこそ…。どうした、急に？」

改まって言われたので、ジェウスは不思議な顔をした。

ブレイヴ
「別に～？たまには感謝するのも大事だと思ってさ。んじゃな～」

満面の笑みでそう言い、ブレイヴは部屋へ戻っていった。

ジェウス
「…たまに言われるのも…、いいもんだな」

一人残ったジェウスもそう言って、ブレイヴの後を追い、部屋に向かった。

感謝の心を知る（後書き）

次は本編に絡まず、サイドストーリー的な感じになると思います。
感想いつでも待ってます！

ブレイヴ　進展？（前書き）

ブレイヴ×アンジュの話（片思いですが…）
重要サイドストーリーとして完成させたいですね…

ブレイヴ　進展？

マルタ
「ねー。ブレイヴが好きな人って、アンジュでしょ！」

悪戯っぽい笑みで小声で聞かれたのは、食堂での事。

ブレイヴ
「ぶふっ！！」

口に含んでいた水を思わず吹き出してしまった。

セネル
「おいおい、大丈夫か？」

ティトレイ
「喉にでも詰まらせたか？バッカだなぁ！」

近くにいたセネルが背中をさすってくれ、ティトレイは大笑いしていた。

ブレイヴ
「うん…、大丈夫、大丈夫。ありがとうセネル」

マルタの言葉は小声だったので、誰にも聞こえていなかった様だ。
マルタが『やっぱり～』みたいな顔で、ブレイヴを見ていた。ブレイヴはすぐにでもマルタに物申したかったが、食堂には他の人々が多勢にいたので後で話す事にした。
…食後、しばらくたち、ブレイヴはエミル達の部屋に向かった。

ブレイヴ
「マ～ル～タ～！」

部屋へのノックと同時にマルタを呼んだ。そのおかげか、エミルがでてこず、マルタがすぐに出てきた。

マルタ
「なに？」

ブレイヴ
「なに？…って…。話っ！エミル！マルタ借りるぞ！」

エミルに断りをいれ、展望室に行った。

ブレイヴ
「…いつ、気付いた？」

取り繕っても、あの反応では意味がないと考えたので、言い訳はせずに聞いてみた。

マルタ
「アンジュと話してる時だよ。だってブレイヴ、アンジュと話すとき目見てないもん。他の人にはそんなこと無いのに。よく観察しないと分からないけど」

ブレイヴ
「ってことは、お前…ずっと探ってたのか！？」

マルタ

「えへへ～」

ブレイヴはハァとため息を漏らし、額に手を当てた。

マルタ
「デートとか誘ってみれば～？」

ブレイヴ
「無理に決まってるだろ…。そんないきなり…。そういう気持ちは、マルタみたいに真っ直ぐ伝えられないよ…」

マルタの提案にブレイヴはあまり乗り気にはなれなかった。

マルタ
「この手の事に関しては、ブレイヴとエミルってそっくりね…。まぁ、思い悩むのも恋してる証拠だよ。でも、決めるときは男らしくビシッと決めるのよ、ビシッと！」

と助言を残し、マルタは去っていった。

ブレイヴ
「分かってますって…」

敬意を表し、敬語で答えた。
次の日は、納品依頼しか当てられなかったので、仕事はすぐに片付いた。

ブレイヴ
「依頼の品、水晶１０個。これでいいよな？」

アンジュ
「はい、確かに納品の品いただきました。お疲れ様。」

マルタに感づかれたので、なるべく目を見て話をするようにしたが、やはり目が泳いでしまう。

アンジュ
「あ、そうだ。ブレイヴ君?」

ブレイヴ
「んあっ?何?」

ふいに、声を掛けられ間の抜けた返事をしてしまった。

アンジュ
「依頼終わりで悪いけど、また手伝ってくれる?」

正直、こうして話すだけでも声が震えそうなのだが、頼まれて断るのもあれだと思ったので、手伝うことにした。

アンジュ
「じゃあ、この間みたいによろしくね!」

と言って、メンバーの名前が書かれた表を机の上に置いた。やることは前と変わらず、手際よく皆の仕事をわけていった。

アンジュ
「ブレイヴ君、具合でも悪いの?」

作業を進めていると、アンジュが聞いた。

ブレイヴ
「なんで？」

一旦、手を止めアンジュの方を見る。

アンジュ
「今日、あんまり喋ってないよ？」

そう言われてみると、確かに今日は口数が少なくなってしまった。

ブレイヴ
「あ…あ～、えっと…。まあ、こんな日もあるって、俺にも！体の調子も大丈夫、大丈夫！」

アンジュ
「そう。なら良かった」

笑って答えた分、特に怪しまれずに済んだ。

アンジュ
「今日も助かったわ。ありがとう！」

ブレイヴ
「いやいや、いつでも頼ってくれたらいいから」

ブレイヴはこうして頼ってくれる事に、心の中では嬉しく思っているので、自然とこんな言葉が出た。

ブレイヴ

「あのさあ、アンジュ…」

次に出た言葉にブレイヴ自身驚いてしまった。

ブレイヴ
「手伝った変わりって言ったらなんだけど…。今度は、俺に付き合ってくれない？」

アンジュ
「え…？」

ブレイヴがハッと我に返ると、急に自分の言った言葉に照れてきた。

ブレイヴ
「あっ！やっぱり今の言葉忘れ…」

アンジュ
「いいわよ？」

ブレイヴ
「…はい？」

あっさり言われ、またも間の抜けた返事をしてしまった。

アンジュ
「で、どこに付き合えばいいのかな？」

ポカンとしていると、アンジュから質問がきた。

ブレイヴ

「あ、うん、決めとくからまた後日言うよ。じゃっ！」

と言って、その場を去った。

ブレイヴ
「ヤベー、いくら好きとは言え、言ってしまった…。しかも、あっさりＯＫ貰えるとは…」

独り言を呟きながら、通路を歩いていると、突然後ろから誰かに声を掛けられた。

？？？
「アンジュのこと…好いているのか？」

ブレイヴ
「うわぁぁ！？」

一瞬で振り向くと、そこにはクラトスが立っていた。

ブレイヴ
「ク、クラトス？な、なんでそんなこと？」

精一杯、動揺を隠したつもりだが、隠しきれない。

クラトス
「…聞こえたのだ」

ブレイヴ
（天使聴覚～！ヤベー！すっかり忘れてたよ！クラトス天使なんだよ！ていうか、今までばれなかったのが不思議なんだよ！）

ブレイヴ頭を両手で抱え、回りには、負のオーラが渦巻いた。

クラトス
「触れるべきではなかったか…」

珍しくクラトスが動揺した。

ブレイヴ
「クラトス！絶対！マルタ以外のやつに言うなよ！…言ったらその口にトマトぶち込むからな！」

ブレイヴの必死の形相に身の危険を少なからず感じたのか、ややたじろぎながら、返事を返した。
ようやく部屋に帰ると、倒れるようにベッドに倒れ込んだ。

ジェウス
「なんだか、お疲れだな」

ジェウスが苦笑しながら話し掛けてきた。

ブレイヴ
「口は災いの元…今日、身を持って知った…。ハァ…。」

ジェウス
「ホントにお疲れだ…」

ブレイヴの様子を見て、ジェウスはそれ以上は話さなかった。

ブレイヴ

（はっ…！どこに誘うかな…？う～ん……マルタに相談だな…）

その後のブレイヴの一日は、本人いわく「考えすぎて覚えてない」とのことである…。

ブレイヴ　進展？（後書き）

ジェウス主役のサイドストーリー創りたいんだが、まとまらん…。
誰か提案ある方、挙手お願いします。こちらも、ない知恵しぼってみます。
感想待ってます。

スキット　その3（前書き）

スキット系は自己満です。
言っちゃえば、この小説も自己満ですが…。
いや、真剣に物語考えて執筆はしてますが…。

スキット　その3

・誘う場所

ブレイヴ
「てな訳でさ…、アンジュにＯＫ貰ったんだけど、どういう場所に行けばいいかな…？」

マルタ
「で？自分なりには、何処に行って、何をしたいわけ？」

ブレイヴ
「《コンフェイト大森林》で魔物退治…」

マルタ
「…バカ？」

ブレイヴ
「バカとはなんだ！バカとは！俺だって必死に考えたけど、何すりゃいいか分かんねぇよ！」

マルタ
（先は長いわね…）

・料理上手を隠すわけ

ジェウス
「どう？」

クレア
「…美味しい！」

ロックス
「確かに…。少し薄味ですが美味しいですよ！」

ジェウス
「良かった～。さじ加減、適当だったから不安だったんだよね」

ロックス
「こんなにお料理が上手ですのに、なぜ隠してたんですか？」

ジェウス
「だって…コーダが…」

ロックス・クレア
「あぁ…」

・弱点克服訓練２

ブレイヴ
「……」

ルカ
「……」

ブレイヴ
「……っあー！無理っ！もう無理っ！」

ルカ
「待ってよ！まだ甲板に出て、３分位だよ！今日は５分我慢する約束でしょ？」

ブレイヴ
「ううっ…。頑張るよ…」

ルカ
「次は、１０分間頑張ろう！」

ブレイヴ
「…７分間にしてくれ…。」

・律儀なジェウス

ジェウス
「ユーリさん、エステルが呼んでたよ！」

ユーリ
「…あのなあ、その「さん」付け、やめろよ…」

ジェウス
「うーん…、でも年上だしさ。それ以外は別に気にする喋り方じゃないでしょ？」

イリア
「言われてる側は気になるってもんよ？」

ジェウス
「そっか～…、でも俺より人生長く生きてて、いい人は敬わないとな！」

イリア
「か～…、律儀ねぇ…」

・化学では説明できない

チャット
「その機械、直りそうですか？」

ブレイヴ
「…まだわかんない」

リタ
「計算のイロハもあやふやなあんたに、直せるわけないでしょ。そのうちさじ投げるのがオチ…」

ブレイヴ
「よっし、出来た！」

リタ
「え…？」

チャット
「ああ、一応大丈夫ですね。ありがとうございます」

リタ

「ありえない…。その頭の知識でどうやって直すの？」

・確認

ルーティ
「よし、準備万端！お宝探しに行くわよ～！」

ジェウス
「ホントに大丈夫か？行き先でグミが無くなった時の素材は？」

ルーティ
「持ってるわよ」

ジェウス
「装備は万端？」

ルーティ
「それも大丈夫」

ジェウス
「雨が降った時の傘…」

ルーティ
「そんなもん、いるか！荷物がかさばるだけよ！」

ジェウス
「最後は軽い冗談だったんだけど、そんなに怒るとは思わなかった…」

ルーティ

「あんたが言うと、冗談に聞こえないのよ。不思議と…」

スキット　その3（後書き）

スキット、こいつ出して～。みたいな感想もお待ちしてます！
今の所、レイヴン預かってます。
今の俺は感想を欲してます…（－・－；）

赤い煙と…（前書き）

久しぶりの投ー稿ー？
やっと書けた…。
待ってた方（いらっしゃるでしょうか？）お待たせしました。
感想お待ちしてます。

赤い煙と…

この日は、レイヴン、ジュディスの二人が《アドリビトム》へやってきた。ユーリと同じギルドで働いていたのだが、ユーリにエステル誘拐の指名手配がかかってしまったので、しばらく国を出るにあたって訪ねてきたというわけ。

レイヴン
「よろしくね～、少年達！」

ジェウス
「少年…」

ブレイヴ
「よろしく～、レイヴン、ジュディス」

アレス
「これから一緒に頑張りましょう！」

ジュディス
「あら、よかったわねおじ様。二人は少しは魅力、分かってくれたみたいよ」

レイヴン
「……」

と、まあこれが初対面の挨拶。それから、こちらは大きなできごとだが、ジョアンという中年の男性が訪ねてきた。

ジョアン
「すいません…。アドリビトムというギルドはこちらでしょうか？私は、《モラード村》から来ました。ジョアンと言います。ここへ、依頼をしに来たんですけど…」

アンジュ
「どういった依頼でしょうか？」

ここまで喋るのも辛かった様で、咳込みながら依頼を伝えた。

ジョアン
「ゴホッ…！！《ブラウニー坑道》の奥地に行きたくて、護衛を…ゴホゴホッ…、お願いしたいんです」

アンジュが気を使って、薬を持って来ようかと聞くと、ジョアンは自分の病気は治らないと言って断った。

ジョアン
「でも、治す方法が一つだけ…。その《ブラウニー坑道》の奥には「病気を治してくれる存在」がいるそうなので…」

ジェウス
「病気を治す存在ねぇ…」

物語を知っているだけに、その存在を知っている。だが、物語の歯車を狂わすまでに行動を起こすのには、ジェウスはもちろん、ブレイヴでさえ躊躇した。モヤモヤと考えている内に、ジョアンの依頼をアンジュは引き受けていた。

アンジュ

「じゃあ、ぐ～ぜん近くにいたジェウス君？この依頼やってくれる？」

依頼書をひらひらさせながら、ジェウスに話し掛けてきた。

ジェウス
「ん～、べつにいいですよ。その存在も見てみたいですし…。アレス辺り誘ってみますんで、後二人見つけといて下さい」

と言ってその場を離れた。

ジェウス
（さて、後二人はファラとマルタだろうし、戦闘のバランスはとれてるし…問題は無いか）

訳を話した上でアレスを誘うと快く了解してくれた。ただ一緒にいたカノンノは哀しそうな顔をしていた。ジェウスはとりあえず、心の中で「ゴメン…」と言っておいた。…《ブラウニー坑道》に着いたが、それまでの道のりでジョアンが咳込んだりでかなり苦しそうだった。そのたびに女子二人が声を掛けなんとかここまで来た感じだ。

マルタ
「ジョアンさん、大丈夫ですか？歩くのも辛そう…」

ジョアン
「だが、その存在が私に残された、最後のチャンスなんだ…」

ファラ
「最後って…」

ジョアン
「私は…もう長くない…。その存在に賭けてみたいんだ…」

マルタ
「病気を治す存在なんて、ホントにあるのかな?」

ジェウス
「…あるよ」

その発言に「えっ?」といったような顔で皆一斉にジェウスを見た。

ジェウス
「そう考えた方が、夢があっていいじゃん?悪い方に考えるよりは」

アレス
「…うん、僕もそう思う!その存在がホントにいたら、みんな喜ぶだろうなぁ…」

皆、笑っていたが、ジェウスだけは一人哀しみとも、考えてるともつかない顔をしていた。

ジェウス
(病気を治す存在…。ホントの所を知れば、皆どんな顔をするんだろう…)

少し進み、鍵のかかった扉の前に着いた。鍵はジョアンが持っていた。魔物が出るとは言え、多少なりとも人間の行き来があるようだ。扉を開けたのち、病気を治す存在の話をジョアンに聞くと、この話は村の友人から聞いたらしい。その友人も同じ病気で《ブラウニー

坑道》を通り医者の元へ向かおうとしていた途中で発作にあい、死を覚悟した所にその存在に会ったとのことだ。その存在は…

ジェウス
「赤い煙か…」

分かっていた事だが実際聞くと、会うのに変な緊張感がある。ファラやマルタ、アレスは不思議な存在やら、精霊みたいなものやら、色々と思いを馳せていた。

アレス
「ねぇ、ジェウスは赤い煙のことどう思う？」

話の流れでアレスに聞かれた。

ジェウス
「そうだな…。俺には何とも言えないよ」

へたなことも言えないので、話をはぐらかした。そんな話をしていると目的地に着いた。が、かなり大きめの魔物がいる。

アレス
「でかぁ…」

マルタ
「大変そうだけど…戦うしかないね！」

ジェウス
「くるぞっ！」

ファラ
「いくわよ！」

そう言うと、各々に構えをとった。

ジェウス
「ファラ！ヘタに突っ込むな！ちょっとやそっとの攻撃じゃ反撃喰らうのがオチだぞ！」

この戦闘では主に前衛を勤めるのが、ジェウスとファラのため、諸注意だけをファラに送っておいた。

ファラ
「えっ？う、うん…」

会話を交わす間にも、アレスの詠唱が完成し、中級魔術が魔物に向かって放たれる。

アレス
「イラプション！」

すると、地面から魔術の溶岩が爆発的に噴き出し、二体いた魔物が軽く怯んだ。

ジェウス
「今！一体に的を絞るぞ！鷹爪蹴撃！」

ファラ
「臥龍空破！」

一体に集中して攻撃を浴びせたが、そうそう簡単には倒れない。更に敵に近付いた分、もう一体に距離を詰められ、攻撃圏内に入られてしまった。

ジェウス
「ヤベ…油断した…」

と言っている間にも、魔物の岩石の腕がジェウスに襲い掛かる！

ジェウス
「がはっ…！…っ！」

その腕は的確にジェウスの脇腹を捕らえた。…思い返せば、この世界に来て初めてもろにダメージを喰らった。その分痛みも半端ではないくらいに襲ってきた。

ジェウス
「あ…、うぁ…」

ファラ
「っ…！マルタ、ジェウスに治癒術お願い！少しの間、敵を止めるから！」

マルタはコクリと頷くと詠唱を始めた。

アレス
「くっ…。スプレッド！」

アレスもできるかぎりの足止めを行った。ファラは攻撃を喰らってはいたが、要所をガードしていたので、たいしたダメージは喰らっ

てない。

マルタ
「ヒール！」

完成したマルタの魔術がジェウスの身体を包み、痛みが引いた。

ジェウス
「はぁ…、はぁ…。ありがとう皆…」

痛みが引いたとは言え、完全な訳ではない。

ジェウス
（固い…。それになかなか怯まない…。一体に集中しても、もう一体がいる…）

考えうる作戦を頭の中で奔走させる。

ジェウス
「俺が一体引き付ける。後一体を三人で集中して狙ってくれ」

アレス
「そんな…。危ないよ！」

ジェウス
「引き付けるだけだよ。危ないマネはしないから大丈夫だ…」

三人とも、その案には同意しかねたが、迫ってくる敵を目の前に他の案は出せなかった。

ファラ
「…分かった。ただし、ホントに危なくなったら、すぐに下がること。いい？」

マルタ
「嫌とは言わないわよね？」

アレス
「気をつけてね！」

仲間の了解を貰い、敵の側面に回り込んだ。

ジェウス
「獅子…戦吼ォ！」

技を放った衝撃で、攻撃の喰らった脇腹にビリビリとした鈍い痛みが走ったが、気にしている暇は無かった。敵はグルリと向きを変えると、ジェウスに目標を絞ってきた。幸いにも、そこまで速い動きではない。むしろ遅いと言っていいくらいだ。

ジェウス
（よし、こっちに来い！）

ジェウスはしばらく一体を引き付ける事に成功した。ファラ、マルタ、アレスは綺麗な立ち回りで、もう一体の敵を翻弄している。倒れるのも時間の問題だろう。

ジェウス
（とにかく俺の仕事は、一分一秒でもこいつを長く、俺に集中させることだ…）

三人の片が付くまで、最小限の動きで攻撃をかわしていた。しばらく立つと、ついに三人が相手をしていた敵の巨体が、地に伏せた。

ジェウス
「よし、こいつに総攻撃だ！注意は怠るなよ！」

…三人と四人では勝手が違う。もう一体は、いとも簡単に倒れた。

ファラ
「ジョアンさん、ここはもう安心…」

と倒れた敵に背を向けた瞬間、虫の息だと思っていた敵が最後の力でその巨大な腕を振り回してきた！

ジェウス
「危ねぇ！」

いち早く、敵の動きを察したジェウスが、他の四人を押し飛ばした。しかし犠牲として、ジェウスがその攻撃をまともに背中から喰らってしまった。

ボキ…ボキッ…

ジェウス
「が…あ…」

背骨の砕ける音がし、ジェウスは激痛に気を失った。

―――――――――――――――

…次にジェウスが目を覚ましたのは、バンエルティア号の医務室だった。

ジェウス
「痛…」

ブレイヴ
「おぉ！やっと気が付いた！」

目を覚ましてまず目に入ったのは、ブレイヴの顔だった。

アニー
「ブレイヴさん、静かに！ジェウスさんは怪我人ですよ！」

ナナリー
「さぁ、ジェウスも目を覚ましたし、ブレイヴは帰んな」

次に医務室の二人、アニーとナナリーがいた。ブレイヴが渋々帰ってから、身体の状態を聞いた。

アニー
「背骨の損傷…、肋骨5本…、内臓も少し傷ついてました…。ファラさんの気功術と、マルタさんの治癒術がなければ身体の一部が麻痺してた所です！もっと自分を労って下さい！」

と凄い剣幕で怒られた。

ジェウス
「ごめん…なさい…」

怪我の状況を聞くと、迷惑を懸けたと、痛いくらいに分かったので素直に謝った。

ナナリー
「まぁまぁ…。弱り切ってるんだし、その辺にしといてあげなよ。あ、一緒いた三人にはちゃんとお礼言っときな。それからブレイヴにも…」

ジェウス
「あいつに…？」

ブレイヴの名前が出てきたため、思わず尋ね返した。

ナナリー
「あんたが酷い怪我で帰ってきたときは、泣きそうな顔してたよ。このまま死ぬんじゃないかってね…。それだけ心配してくれたんだ。きっちりお礼をしないとね！」

と、訳を笑いながら話してくれた。

ジェウス
「そうっすか…」

そんな話を聞くと胸が嬉しさで一杯になり、涙が出てきた。唯一動く腕を目に当て、涙を精一杯隠した。アニーもナナリーもその姿を見て、何も言わなかった。
次の日は、アレスが訪ねてきた

アレス
「あ、身体の方は大丈夫…じゃないね…」

ジェウス
「ああ、昨日の俺が気を失ってからの報告…。寝たままで悪いけど…」

アレスからは、昨日の記憶にない部分についての話を聞いた。
アレス
「あの後、例の赤い煙が出てきたんだ。それがジョアンさんの身体を包んだかと思うと、次に赤い煙が消えたときにはジョアンさんの病気は治ってたんだ」

ここも原作通りだ。

ジェウス
(聞くまでもなかったか…)
「ありがとう。報告は以上だよな?」

アレス
「あ…、これについては、ファラもマルタも見えなかったって言ってるんだけど…」

アレスが自信なさ気に喋りだした。

ジェウス
「?、何かあったか?」

アレス
「うん…。真っ赤な煙の中に、ほんのちょっとだけ、…青い煙も見えたんだ」

ジェウス
「青い…煙？」

青い煙なんて原作にはない。その話を聞いて、ジェウス混乱した。

ジェウス
（青い煙ってなんだ？訳が分からん…）

アレス
「もしかしたら見間違いかも知れないし、余り気にしないで…。これで報告はおしまい。じゃ、ゆっくり身体治してね」

と言ってアレスは部屋をでていった。青い煙の事を考えていると、次にファラが訪ねてきた。

ファラ
「身体の具合はどう？」

ジェウス
「見ての通り。あ、昨日は迷惑懸けたな…。ごめん…」

感謝を伝えるつもりだったが、謝ってしまった。

ファラ
「別に気にしてないわよ。それより早く身体治すこと！」

と笑って言われてしまった。

ファラ
「それより、ジェウス…」

急に真剣な顔になり、話された。

ファラ
「昨日の魔物…、初めて戦う相手だった?」

ジェウス
「え?ああ、初めて戦う相手だったけど?」

そう答えると、ファラが核心をついた質問をしてきた。

ファラ
「あなた…ううん、あなたとブレイヴ…。まだ何か隠してない?」

ジェウス
「…なんで?」

隠してる事は少なからずある。しかし、全てを話すのはできなかった。

ファラ
「昨日の敵、初めて戦うって言ったわよね…。なのに、なんであんなに、戦い方とか、相手の特徴を知ってるの?」

ジェウス
「……」

ファラ
「ねぇ、何を隠すの?」

ジェウス
「……」

ファラ
「答えて！」

珍しくファラが声を荒げた。

ジェウス
「今は…」

ジェウスが声を搾り出した。

ジェウス
「今は、何も言えない…。でも、話すときが必ず来る。その時まで…。ブレイヴも同じこと言うはずだから…」

ファラはしばらく黙っていたが、しばらくして口を開いた。

ファラ
「分かった…。ときが来たら必ず話してね。そのときを待ってるから」

そう言って、ジェウスの元から去った。

ジェウス
「話したいのは山々だけど、まだまだ先になりそう…。それに、青い煙…。これから原作通りにいくんだろうか？アレスの見間違いだったらいいんだけど…」

頭を働かせすぎたせいか、急に眠くなってきた。重くなってきたまぶたに逆らわず、ジェウスは静かに目を閉じた。

赤い煙と…（後書き）

ナナリーの声を担当してらっしゃった、声優、川上とも子さんがお亡くなりになりました。遅ればせながら、御冥福お祈りします。

ブレイヴの修業（前書き）

ブレイヴ、修業してます。
短いですが……。
ちょろっと、アンジュとの絡みもあります。
なんだかアスベルぽくなってもうた……。

ブレイヴの修業

静寂の包み込む《コンフェイト大森林》……。魔物の活動も収まっているその森林の中に、二人の男性が剣を抜き、向かいあっている。

クラトス
「準備はよいか？」

一人はクラトス。もう一人は……。

ブレイヴ
「ああ。いつでも行ける！」

ブレイヴだ。今日は実戦を想定し、剣は抜き身。そして足元の悪い森林で模擬試合を行おうとしている。

クラトス
「では……ゆくぞ！」

ブレイヴ
「うぉぉぉ！」

二人は神速のごとき距離を詰め、刃と刃をぶつけた。

ブレイヴ
「ふっ……、虎牙破斬！」

零距離から剣を回し、下から跳びつつ切り上げ、追い撃ちに切り下ろした。……が、クラトスにたやすく交わされてしまった。

クラトス
「最小限の動きでないと、その技は喰わんぞ」

ブレイヴ
「チェッ……」

反撃をされないようにバックステップをとり、距離をとった。

ブレイヴ
「……ならっ！」

鋭い踏み込みから、剣を突き出した。

ブレイヴ
「雷神剣ッ！」

クラトス
「ぬっ……！」

剣はクラトスの脇を掠め、瞬間、雷がそこに落ちた。

ブレイヴ
「……」

爆風と土煙でクラトスの姿を見失ってしまった。

ブレイヴ
（……どこだ？）

回りを見渡し、クラトスを探すが、影どころか気配さえ見付からない。

クラトス
「空破衝！」

不意に聞こえた声に驚きつつ、そちらを向くと、クラトスの剣はもうそこに迫っていた。

ブレイヴ
「な……っ！」
（避けれねぇ！）

考える隙もなく、その身体は剣により突き飛ばされた。

ブレイヴ
「ゲホッ、ゲホ……」

上体を起こそうとしたときには、喉元に切っ先を突き付けられていた。

ブレイヴ
「ふぅ……、まいった……」

そう言うと、クラトスは剣を納め、評価を口にした。

クラトス
「まだ、大振りな所がある。お前ほどの実力なら、やや小さく振っても通用するだろう。それと、もう少し気配を読めるようにしろ。あれでは、視界の悪い場所で、すぐにやられるぞ」

相変わらずのダメだしで、ブレイヴは少々へこんだ。

クラトス
「だが……。踏み込みは鋭く速い。あの突きは、避けきれんかったぞ。」

クラトスは脇腹の切り傷を見せ、薄く笑った。

ブレイヴ
「もっと、強くならないと……」

クラトス
「お前は十分強い。しかし、上を目指すのは良いことだ」

ブレイヴが本音をポツリと呟くと、クラトスはそう答えてくれた。

クラトス
「守りたい者もいるのだろう……？」

最後にそう付け加えてきた。

ブレイヴ
「俺はみんなを守ろうとしてるよ。……まぁ、一番守りたいのは……」

そこまで言って、ブレイヴは口をつぐんだ。別にどうと言う事ではなく、単純に自分の言葉に照れてきたのだ。

ブレイヴ

「さ、帰るか。次は、術も交えてやってくれよな」

クラトス
「ブレイヴ、それに関してなのだが……」

と急に呼び止められた。

ブレイヴ
「？、なに？」

クラトス
「お前の魔力は、私のそれを遥かに上回っているはずだ。術に関しては、お前の適性に見合った者に教えてもらうといい。剣と術を使った立ち振る舞いなら、私にも教えれるがな」

ブレイヴ
「……ふ～ん、そっか。じゃあ術の得意な誰かにあたってみるよ」

話すべき話は終わったので、船に戻ることにした。

ブレイヴ
「ん～、疲れた、疲れたっと……」

と、船に入ると、いつもの場所にアンジュがいる。

ブレイヴ
（守れるように、強くならないとな……）

アンジュ
「どうしたの？私のこと、じっとみて？」

アンジュの言葉にハッと気付いた。どうやらアンジュの事をじっとみていたようだ。

ブレイヴ
「へへっ……。何でもないよ。ジェウスの見舞いに行ってくる」

己の本心を照れ笑いで隠し、ブレイヴは医務室へと向かった。

ブレイヴの修業（後書き）

早いとこ、ブレイヴとアンジュを進展させたいですが……最後まで延ばさせていただきます（笑）
付かず離れずの関係を見てやって下さい（^―^；）
感想待ってます！（ｂ^ー。）

ジェウスの見舞い（前書き）

ジェウスに、みんなが見舞いに来ます。（主にシリーズ主役。デスティニー2はハロルド、シンフォニアはクラトスが主人公の代わりに来ます）

ジェウスの見舞い

療養中のジェウス。見舞いには、様々な人が来る。

セネル
「ジェウス、パン焼いてきたぞ。見舞いの土産はこれくらいしかできないが……」

ジェウス
「うおー！美味そう！ありがとう、セネル！」

……

ユーリ
「よう。エステルから本、借りてきたぞ。中身の話までは知らねぇが」

パラパラ……。

ジェウス
「ちらっと見たかんじ、面白そうっす。ありがたく、読ませていただきます」

……

カイウス
「よう！たまには、ジェウスと訓練したいんだよな。早く治して、俺と一戦頼むぜ！」

ジェウス
「その時は、加減してくれよ。怪我人だからな」

……

カノンノ
「ジェウス、怪我は？」

ジェウス
「ん、大分動けるようになった。もう少ししたら、現場復帰できるな」

カノンノ
「よかった！そうだ、今日は、アレスがね……」

ジェウス
「そっか。あいつも頼もしくなったな……」

……

とまあ、皆さん何かしら持ってきてくれたり、話をしてくれるのだが、大半は、［？］な話だったり、対応しづらい物をもってきたりする。

……

ヴェイグ
「俺、特製の氷枕を作ってきた。暑いときに使って見てくれ。」

ジェウス

「うん……確かに、氷枕……。［氷でできた枕］だけど……」

……

スタン
「ジェウス！依頼の合間に見舞いにきたぞ！」

ジェウス
「あ、どうもです」

スタン
「特に何も持って来れなかったから……そうだ！すぐに寝れる方法伝授するよ！」

ジェウス
「……なんだか、寝起きが悪くなりそうな気がするんで、遠慮します……」

……

リッド
「よう、怪我は大分治ったみたいだな。これ土産。俺が狩った獲物だ」

ジェウス
「気持ちは嬉しいんだけど……。そのままって……。せめて処理が終わった物を……」

……

エミル
「おい、何寝てやがる」

ジェウス
「おわっ!?何でそっちモードなんだよ!?」

エミル
「ショック療法で治してやろうと思ってな……俺が襲えば、防衛本能で動けるようになるはずだ……」

シャキン……

ジェウス
「エミル戻ってこーーーーい!」

……

クレス
「やあ、退屈してるだろうから、本を持ってきたよ!」

ジェウス
「おー、ありがと……なにこのタイトル?」

クレス
「僕が自作した『世界のダジャレの全て!』。全てが詰まってるんだよ!」

ジェウス
「ごめん、返す……」

……

ルカ
「ジェウス～……」

ジェウス
「どうした？いきなり半ベソで？」

ルカ
「またイリアが……。助けてよ……」

ジェウス
「いや、解決策ならまだしも、助けてっつうのは、今の身体じゃ、無理だよな……？」

……

シング
「身体の具合はどう？」

ジェウス
「まだ痛むけどな。随分治ったよ」

シング
「確か、背中を怪我したんだっけ……？」

サワ……

ジェウス
「痛てー！……なんで触った？」

シング
「ごめん、好奇心が……」

……

ハロルド
「ジャーン！画期的な薬を開発したわ。これを飲めば、その怪我もたちまち治っちゃう代物よ。飲んでみなさい！」

ジェウス
「そんなボコボコ泡立った緑の液体なんか飲めるか！怪我が治る代わりに死にそうだ！」

……

クラトス
「具合はどうだ？」

ジェウス
「あ、大事ないっす」

クラトス
「そうか……」

ジェウス
「……」

クラトス
「……」

ジェウス
「……あの、何しに来たんすか？」

クラトス
「いや……。聞けば皆、見舞いにいってるようだったので……」

ジェウス
「来てくれるのは嬉しいんですけど、無理しなくても……」

……

アニー
「ただいま、戻りました……。ジェウスさん何かありました？」

ジェウス
「なんで？」

アニー
「なぜか……疲れた顔してらっしゃいます」

ジェウス
「分かる？よくわかんない理由で来る人が割といるんだよ……」

……

これが医務室で過ごしたジェウスの一日だった。

ジェウス
「来んなとは、言わないけどさぁ……。あれが普通なの？」

カノンノ
「この船は、変わった人が多いだけだよ……。たぶん……」

ジェウスの見舞い（後書き）

活動報告にも書きましたが、このままいけば、無駄に（↑重要）１００話越えそうです……。
需要ねぇ～……（－・－；）
感想お待ちしてます。

砂漠横断荷物運搬（前書き）

原作通りの話です。
正直、おもしろ味はないかもです……（ー＿ー；）

砂漠横断荷物運搬

《アドリビトム》にスパーダがやってきた。何やらイリアと話をしていたが、二人ともわる～い顔をしていた。それを見てジェウスは、なぜだかニヤニヤしてしまう。

ジェウス
（俺は変態かっ！）

自分で自分をつっこんでしまった。

アンジュ
「あら、ジェウス君いたの？
スパーダ君が話があるそうだから、聞く？
きっと大事な話よ」

アンジュがそう言うので、ルカ達の部屋で話を聞くことにした。

……

スパーダ
「あン、誰だァコイツ？」

部屋に着くと、早速スパーダが絡んできた。不良っぽい物言いだが、実はスパーダはいいヤツと知っているジェウスは意に介さない。自ら名乗ると、スパーダも砕けた話し方になってくれた。……ルカだけはややオロオロしてたが。

スパーダ

「そういや、赤い煙ってヤツ？
アレ、割と知れ渡っているみたいだな。気になんのは、見る者によって、その煙の姿が違うらしいって事だ」

聞けば、姿は花や虫、多種多様で、「病気を治す存在」から、「願いを叶える存在」へと、話が拡大していると、スパーダが語った。
ルカやアンジュが話に入っていったが、ジェウスは一つ聞きたい事を聞くタイミングを待っていた。話が一段落したところで、ジェウスはようやく質問を投げた。

ジェウス
「なあ、一個聞きたい事があるんだけど……。青い煙を見た、って話はないのか？」

正直、「何言ってんだ？」みたいな雰囲気になると思っていたが、返ってきた答えは予想外だった。

スパーダ
「おおっと、忘れる所だったぜ。確かに青い煙の目撃証言もある」

それを聞き、ジェウスは俄然興味を持った。

アンジュ
「青い煙？」

ジェウス
「あれっ？
アレスから何も聞いてないですか？
……まぁ、見たのはアレスだけって言ってたし、省いたのかな？
それより、青い煙の話、頼む」

視線をスパーダに戻し、続きを話してもらう。

スパーダ
「赤い煙に比べて、目撃証言は少ねぇ。だが、赤い煙同様、病気が治ったらしいから、色違いみたいなもんじゃねぇか？」

ジェウス
（やっぱり、存在した青い煙……）

しかし、色以外は赤い煙と全く一緒の所にどうも引っ掛かった。

ジェウス
（一体何なんだよ……？）

話は終わり、各自解散していった。ジェウスはいち早くブレイヴに青い煙の話をした。

ブレイヴ
「青い煙、あったのか……」

ジェウス
「アレスの見間違いじゃなかった……。青い煙は俺達にも分からない事だ。用心するに越したことはない」

ブレイヴ
「煙に関する依頼をこなして行けば分かることだよ」

とにかく二人は依頼を待った。

イリア
「ぎゃあぁぁぁ！」

依頼を待つ二人に耳をつんざくような悲鳴が聞こえてきた。

ブレイヴ
「スゲー悲鳴……。研究室からだ」

ジェウス
「虫に生物変化が起こったんだろ」

ブレイヴ
「俺、見てくる！」

そう言ってブレイヴは部屋を飛び出した。研究室に着くと、透明なケースの中をウィル、ハロルド、（ちょっと離れた所で）イリアが見ていた。

ブレイヴ
「虫がどうにかなった？」

と、ブレイヴもそのケースの中身を覗いた。

ブレイヴ
「……石みたいだな。目も無い」

ハロルド
「目、だけじゃないわ。口も無くなってる。生物として、あるべきものが欠けているのよ」

淡々とハロルドが説明してくれる。

イリア
「これって、あの赤い煙のせいなわけ？」

引き腰にイリアが聞いた。

ハロルド
「その可能性は濃厚ね。もう一例くらい、確認出来ればいいんだけど」

確実な症例を得ない事には、確実性はないということだ。そんなとき、ある依頼が飛び込んできた。《モラード村》の村長、トマスが出してきた依頼がそれであった。……捕まえた魔物をケージに閉じ込めたので遠くの地に捨ててほしい。という依頼である。

トマス
「ただし、中は見ないでくれんかのぅ……」

これが、唯一の契約だった。

アレス
「ブレイヴ、行こうよ。僕とクレスとイリアと後一人なんだよ～」

肩を揺さ振られ、アレスに催促される。

ブレイヴ
「分かった……。分かったから、そんなに揺さ振んなって……」

イヤと言っても無駄そうなので、結局折れた。

……

ブレイヴ
「火山に比べて、カラッとしてるなぁ……」

今回訪れた場所は《カダイフ砂漠》。火山である程度慣れていたブレイヴとアレスは、多少の暑さは感じていたが愚痴にするほどではなかった。クレスも同様のようだ。ただ一人、文句が止まらない者がいた。

イリア
「暑い、暑い、暑〜い……。誰か、どうにかして……」

クレス
「じゃあ、ここは僕が一つ……」

ブレイヴ
「くっだらないシャレならいらないぞ。涼しいの通り越して寒くなる」

すぐさま、ブレイヴがつっこむと、クレスは「そんなに……？」と小声で言った。

アレス
「……」

イリア
「アレス。あんた、そんなに黙りこくっちゃって……。そんなに暑いわけ？」

箱を見て黙っているアレスに、イリアが声をかけた。

アレス
「いや、この中身が気になって……。薬で眠ってるって言っても、こんなケージで大丈夫かなぁ、って」

と、ケージをそっと触った。

ブレイヴ
「あんまり気にすんなって。ほら、先に行くぞ！」

一行はクレスがケージの乗る台車を運び、道を進んだ。少し行くと、開けた場にでた。そこには、アリジゴクの様な巣をもった、何とも言えない魔物がいた。

イリア
「うっわ、最悪！
砂漠でこいつだけには会いたくなかったのに……」

クレス
「ケージを守る為にも、倒しておいた方が良さそうだ」

クレスが剣を構える。

イリア
「ケージをアイツに投げて、仕事も終わりでいいじゃん、もう！」

アレス
「それじゃ、アンジュに怒られるよ……」

もっともだ。とブレイヴも相槌をうつ。

ブレイヴ
「それじゃあ、行くか！」

先頭を切り、ブレイヴとクレスが、その敵、サンドワームに駆けていった。

……

ブレイヴ
「何だ、以外と呆気なかったな？」

総攻撃をかけ、サンドワームは倒れ、消え去った。

クレス
「とにかくこれで、ケージを安全に運べるぞ」

イリア
「う～～お～～……。もうひと仕事終わった気分になってた……」

アレス
「いきなり、魔物はついてなかったな～」

各自、思ったことを述べて、まだまだ先のオアシスを目指した。

？？？

「ウゥ……」

途中、どこからか唸り声が聞こえた。

イリア
「ちょっと、なにっ！？
今の唸り声みたいなの！？」

イリアが過剰に驚いた。

クレス
「え？
風の唸りじゃないのか？」

クレスには聞こえなかったようだ。

？？？
「ア……アァ……」

イリア
「ほらっ！
聞こえたっ！」

アレス
「ケージの中から聞こえるね。薬がきれてきたのかも……」

アレスがケージを見て答えた。

イリア
「やっぱり、何発かブチこんどいた方がいいわよ！」

クレス

「落ち着け、イリア！
オアシスもすぐだ。早めに運ぼう」

クレスの言葉に皆が少し足速になった。

アレス
「……？
ブレイヴ全然話さないね。まだ暑い？」

ブレイヴ
「ん？
あぁ、いや、そんなんじゃないけど……。今は言えねぇや」

そう言って、ブレイヴはケージをじっと見つめた。急いだおかげで、予想より少し早めにオアシスに着いた。

イリア
「ふ～……、やっとオアシスね。さっさと済ませて帰りましょ」

クレス
「手順は、まず鍵を外して……。そのまま開けずに、ここを去ればいいんだったね」

鍵を外そうと、クレスが近づこうとした瞬間、ケージの上に魔物が飛び乗ってきた。

クレス
「しまった、魔物に！」

イリア

「ゲェッ！
まさかあんた、アレ追っ払う気！？」

イリアは魔物が気もくれてないうちに、逃げるべきだと言った。しかしクレスは……

クレス
「駄目だ。それでは依頼を完遂した事にはならない」

イリア
「なんつー、どマジメ人間……。絶対結婚したくないタイプ……」

呆れつつ、イリアも二丁の銃を引き抜いた。

？？？
「ひいいい！
何だ、何なんだよ！
何が起こってるんだあああ！？
た、助けて、助けてくれぇぇぇ！」

魔物がケージをしつこく叩いていると、明らかに人間の悲鳴がケージの中から聞こえてきた。

アレス
「人の声……！？」

ブレイヴ
「魔物じゃなくて、人が入ってるってオチだな」

イリア

「なぬ！？
じゃあ、あたし……危うく撃っちゃうとこだったワケ！？」

クレス
「まずはあの魔物を倒さないと！」

全員、戦闘体勢に入り、身構えた。

ブレイヴ
「じゃ、久々に術でも放つか……。……サンダーブレード！」

イリア
「って、バカー！
今、術放ったら、魔物ごとケージも吹っ飛ぶでしょーが！」

しかし、雷の剣が落ちた位置は、ケージの2～3メートル手前だった。術の衝撃と爆風でケージの上の魔物は全て吹っ飛んだ。ケージはもちろん無事だった。

ブレイヴ
「……何か言った、イリア？」

イリア
「先に言いなさいよね……」

クレス
「ブレイヴ、アレス、イリア！
魔物がこっちに狙いを定めてきたよ！」

魔物……サンドファングが次々と起き上がり、合計４匹。殺意の篭

った目で、こちらに走り寄ってくる。

ブレイヴ
「ふっ！」

側面に素早く回り、首を切る要領で、下から上に剣を振り上げる。

ガッ……！

ブレイヴ
（うげ……、かてぇ～！）

サンドファングの鱗は想像を上回り、与えた傷は致命傷とは程遠いものだった。

ブレイヴ
「クレス！
固いぞっ！」

クレス
「そうみたいだね！」

先頭の1体を相手してると、後の3匹がぞろぞろと集まってきた。

アレス
「ロックブレイクッ！」

サンドファングが集まると真ん中に、強烈な勢いで岩が地面から迫り出した。直撃した、サンドファング達は、奇声をあげ四方八方に散った。

イリア
「逃がしゃしないわよ！」

イリアは素早く、１２発の弾丸を宙に放った。それは3発ずつ、４匹の宙に浮いていたサンドファングに外すことなく命中した。

クレス
「次元斬！」

追撃はまだ止まらない。クレスは、まだ地にすら着かないサンドファングを、まとめて2体切り刻んだ。ブレイヴは、1体に的を絞り、地に着いた瞬間を狙う。

ブレイヴ
「秋沙雨！」

サンドファングは、無数の突きで貫かれ、締めの切り上げでまたもや上空に飛ばされた。……が、もはや息はしていなかった。クレスが斬った2体も含め、合計3体が倒れ伏した。

ブレイヴ
「よし！
後、１匹ッ……！？」

ブレイヴが後ろを振り向こうとしたその時、足に鈍い痛みを感じた。サンドファングがブレイヴの足に噛み付いていたのだ。

ブレイヴ
「……！」

それだけでない。噛み付かれた箇所から、どんどん自らの身体が石になってきている。

アレス
「ブレイヴッ！」

ブレイヴ
「構うな！
まずはコイツを倒せ！」

そう言って、剣でサンドファングを払った。

ブレイヴ
「イリア！
後で治せよっ！」

イリア
「わかった！」

その言葉を聞き、ブレイヴの意識は完全に持って行かれた。

……

視界が急に明るくなった事に、ブレイヴは目を細めた。今、イリアの治癒で石化状態から解かれたのだ。

アレス
「ブレイヴ、大丈夫？」

クレス
「何ともないみたいだね」

イリア
「ったく、手間懸けさせない！」

言いようは様々だが、とにかく心配はされていた。

ブレイヴ
「心配懸けてゴメン……」

その場を収め、問題のケージについての話を始める。

クレス
「よし、ケージを開けるよ」

イリア
「契約は？」

ブレイヴ
「お前が気にするか？」

ブレイヴがちらりとイリアを見る。

アレス
「中は人、だからね……」

クレス
「僕達が受けたのは、人を捨てる仕事じゃない」

クレスが放った言葉は、怒気さえ含んだ声だった。カチャリと鍵を外すと、ズルズルと何か……いや、人が2人這って出てきた。しかし、身体の一部が鉱物化しており、人としての面影が少し残っている程度だ。

アレス
「ジョアンさん……？」

それは以前、依頼に来たジョアンであった。

ジョアン
「は、はいぃ……」

ジョアン達は赤い煙を浴び、病は治ったものの、なぜか村での居心地が悪くなり、生きてる意味、自分の存在の意味さえ解らなくなった、と話した。

ジョアン
「そうして、次に意識がハッキリした時には檻の中でした。私は、この異形の姿で暴れていたようです。彼、ミゲルもです」

隣の人物、ミゲルを見た。ミゲルも、ジョアンと同じ運命を辿ったようだ。

ミゲル
「もう、村には置いておけないと……。でも、確かに……俺の身体は、もう人とは違うようだ。人の中じゃ、生きていけないんだろうよ」

二人は、もうこれからここで野垂れ死ぬしかないのかと、嘆いてい

た。

アレス
「……」

その時、アレスが二人の前に歩み出た。すると、アレスの身体が、まばゆい光に包まれ、ジョアン、ミゲルの身体をも、包み込んだ。

……

眩しくて何も見えなかった。だが、ジョアンとミゲルは、異形ではなく、人としての姿を取り戻していた。

イリア
「ゲェッ!?」

ジョアン
「人の……、元の姿に!」

ジョアンは元に戻してくれた、アレスに涙ながらに、お礼を述べた。

クレス
「アレス。君がやったのか!?」

アレス
「よく……わかんない……」

イリア
「無意識にやったってワケ?
それともやっぱ、アンタの力じゃないって事?」

ブレイヴ
「やめっ！
イリア、わからないって言ってんだ。質問攻めは可哀相だ。っと、後、2人共。このままじゃ村に帰れないでしょ？
一旦、船に来てもらいましょうか？」

イリアの質問を止め、二人を船に誘う。

クレス
「そうだね。ここに留まるのは危険だから……」

イリア
「誰か、いい知恵出してくれるだろうし。そうと決まれば、船に戻りましょ」

……

持ち帰った情報により、赤い煙と生物変化の関連が結び付いた。ジョアン達の今後を伺うと、アンジュが「任せて」と言っていた。

アンジュ
「とにかく、医務室へ行って、彼らと話をしてみないとね。二人共、一緒にいらっしゃい」

ブレイヴ
「俺はいいや。話せる事も無いし。アレスは、ジョアンさん達も話したいだろうし行ってきな」

と言って、部屋に戻った。

ジェウス
「アレスの力が見れたか……」

ブレイヴ
「眩しくって、なーんにも見えなかったけどな」

部屋に戻ったブレイヴは、ジェウスにアレスの力について話した。
すると

コンコン……

部屋に、扉をノックする音が響き、扉が開いた。

ブレイヴ
「おー、噂をすればなんとやらだ」

部屋に来たのはアレスだった。しかしその顔は珍しく、険しい表情だった。

アレス
「ブレイヴ……あのケージの中が人だって、いつから気付いてた？」

飾りのない疑問は、ブレイヴの胸に突き刺さった。ホントは最初から分かっていた事だが、さすがに洗いざらい話すことはできない。

ブレイヴ
「最初から薄々。虫に変化が起きたから、赤い煙を浴びたジョアンさんにも、その可能性はあった。村の人も気味悪がって、どうにかしたくなるだろうしな」

ブレイヴはしっかりと説明した。だが、それが逆にアレスにとって引っかかった様だ。

アレス
「やっぱりおかしい……。言っちゃ悪いけど、ブレイヴはそこまでしっかり説明できる人じゃない。まるで最初から用意されてた文みたいだ！
ねぇ、ブレイヴ、ジェウス……。二人は……本当に味方だよね……」

ジェウス
「おい、アレスッ！」

ブレイヴ
「やめろっ、ジェウス！」

堪忍袋の緒が切れたジェウスがアレスにつかみ掛かりそうになったが、ブレイヴがそれを制した。

ブレイヴ
「……アレス、これだけは言っておく。俺達はアドリビトムのみんなの味方だ、仲間だ！
決して裏切ることはない……。それだけは……それだけは嘘じゃない！」

真っ直ぐ目を見て話すブレイヴを見て、アレスも信じてくれた。

アレス
「うん……。二人は僕達の仲間だ。疑ってごめんね……。ブレイヴ、ジェウス」

ブレイヴ
「ん、気にしてないよ」

ジェウス
「俺も、喧嘩腰になって、悪かった……。仲直りだ。ホイ！」

と言って、三人で握手をした。

ジェウス
「そういや、アレス。青い煙……お前の見間違えじゃなかった」

アレス
「そうだったんだ……。アンジュに報告してなかったけど、良かったのかな……」

ジェウス
「俺が伝えた。大丈夫だ。それに目撃情報も少ない。赤い煙の方に集中しとけ」

アレス
「うん、分かった。じゃあ、僕は部屋に戻るね」

そうして、アレスは部屋を出た。

ジェウス
「アレスの力が青い煙にも、通用すればいいんだがな……」

ブレイヴ
「んなこと、そん時に考えりゃいいだろ？

」

ジェウス

「ああ……、そうだな……」

そこで二人は話を切った。

青い煙……その存在が自分達に大きく関わってくることを、二人はまだ知らない……。

砂漠横断荷物運搬（後書き）

ユニーク５０００越えてました～！
これを自信にこれからも頑張ります（＾―＾）
感想待ってます（＾∀＾）ノ

約束の付き合い（前書き）

いつかの約束をブレイヴが果たします。

約束の付き合い

アンジュ
「ブレイヴ君、約束の件まだかな?」

依頼から帰ってきたブレイヴは、急に質問された。

ブレイヴ
「んぁ?
……あぁ!」
(そういや、どっか付き合ってくれって言ったな)

すっかり忘れていた。というわけでなく、まだ行くべき場所を考えてないだけだった。

ブレイヴ
「それにしても、そんな約束覚えてるモンなんだな」

アンジュ
「ずっと船にいるから、誘われることなんてないもの」

ロックスが運んで来たであろう、紅茶を優雅にすすりながら言った。

ブレイヴ
「……明日は天気が良かったっけな。じゃあ、午前中に依頼をぱっぱと終わらせるから、午後から出るか」

アンジュ
「場所は?」

ブレイヴ
「空気のいい場所。《ルバーブ連山》に散歩にでも行こうか。魔物の活動も今は収まってるし」

アンジュが了解すると、ブレイヴはじゃあ、と言って部屋に帰った。
……え？
なんだか素っ気ないなって？
そんなことはない。証拠に、部屋に帰ったブレイヴを覗くと……

ブレイヴ
「うわああ！
どうしよう、どうすんだぁ！
何にも考えれねぇよ！」

半端じゃないあわてふためき様だった。

ジェウス
「帰って、早々うるせーな……。何なんだよ……」

事情を知らないジェウスは耳に手を当て、尋ねた。

ブレイヴ
「なぁ……。女の人と二人の時って、何話せばいいんだろうな？」

ジェウス
「はぁ……。はぁ！？」

ジェウスは、突然された質問に一旦はスルーしかけたが、内容を理解し、驚愕の表情を見せた。

ジェウス
「って事は、何だ？
お前、デートか？」

ブレイヴ
「デッ……！」

ジェウス
「あっはっはっは！
そうか、お前が！？
はっはっは！
腹痛ぇ～！
意外すぎるだろ！
相手は誰よ？」

大爆笑の後、やっと話を戻してくれた。

ブレイヴ
「……アンジュ」

あんなに笑われた後では、なぜだか言いづらい。それでも、ポツリとその質問に答えた。

ジェウス
「なるほどなぁ～」

それでもなお、ニヤニヤとしている。

ジェウス

「ま、楽しんでこいよ。寝不足にならないように、夕食食ったらベッドに入っとけ」

ブレイヴはこの日、言われた通りに早めにベッドに入り、寝ることにした。

……

ロックス
「おはようございます。今日は雲一つない、よい天気ですよ」

ブレイヴ
「んーっ！
そりゃ良かった！」

大きく伸びをしながら、ロックスと話した。

ブレイヴ
「あ、そうだ。ロックス。今日は依頼を午前中に終わらせて、午後から出たいんだけど、何か軽く食べれるもの作ってくれる？」

ロックス
「そういう事なら、お任せ下さい！
何人分でしょうか？」

ブレイヴ
「二人分。通常の、な」

ロックスに釘を刺し、依頼を電光石火の如く片付けた。

……

ブレイヴ
「ふえ～……。終わった、終わった……」

いつもより倍のペースだったので、少し疲れたようだ。

アンジュ
「お疲れ様。やっぱり、疲れてるわね」

ブレイヴ
「だからって、約束は破んねーぞ。昼食食って、用意したら、迎えに来るからな」

食堂で昼食を食べ終わると、ロックスが軽食の入ったバスケットを持ってきた。

ロックス
「ブレイヴ様。こちらを」

ブレイヴ
「お、ありがとう！
今度雑用でも何でもするよ！」

それを受け取ると、食堂を出て、午前中の汗をシャワーで流す。それが終わり、ようやく、出発することにした。

ブレイヴ
「んじゃ……行こうか……」

アンジュに声をかけ、ブレイヴが先頭で《ルバーブ連山》に降り立った。

アンジュ
「どこまで行く？」

ブレイヴ
「高原まで行けば、景色がいいと思うから、そこまで行こう」

多少……いや、かなり早いペースで心臓が音をたて、動く。

ブレイヴ
「ふぅ～……」

左胸をギュッと掴み、落ち着けとばかりに深呼吸をする。

ブレイヴ
「ロックスに軽食作ってもらったし、そこまで行ったら、な？」

と言って、手に持つバスケットを掲げた。

アンジュ
「あら、楽しみ♪
そこまで用意してくれるなんて」

アンジュは口に手を当て、軽く笑った。

ブレイヴ
「アンジュ～。ちょっと遅いよ……」

山道はブレイヴにとっては、緩いものだが、アンジュにとっては少しきついようだ。

アンジュ
「ちょっと待ってよ……。そんなに言うなら、ブレイヴ君が少しくらい腕引っ張ってくれてもいいじゃない」

ブレイヴ
「え？
腕を引っ張る？」

俺の気持ち、見透かしてるのか？と思ってしまうほど、自然にだされた言葉だった。

ブレイヴ
「いや、でも……」

アンジュ
「いいから、ほらっ！」

と、左手を差し出してくる。

ブレイヴ
「あ……はい……じゃあ……」

気圧されて、ブレイヴも右手を差し出し、アンジュの手を握った。
女性特有のすべっとした、肌触りにどぎまぎしながら、しっかりと、アンジュを引っ張っていった。そしてようやく高原へとたどり着いた。

アンジュ
「やっと着いたわね……」

ブレイヴ
「体力なさすぎ……。でも、それが普通なのかもな……」

高原には、魔物は出ない。辺りを警戒することなく、二人は地面に腰を下ろした。

アンジュ
「ねぇ、ブレイヴ君は、こんなふうに女の人を誘うのは何度目？」

ブレイヴ
「初めてだよ。ちなみに嘘じゃない。アンジュが初めて」

ロックスが作ってくれた軽食（サンドイッチだった）をぱくつきながら、答えた。

アンジュ
「何で、私なの？」

ブレイヴ
「うーん、何だろうなぁ……。俺にとって、アンジュが魅力的だったのかも」

冗談ぽく言ったが、本心は嘘ではない。今のブレイヴにとってアンジュは、魅力的な存在そのものなのだ。

アンジュ
「ふふっ。嘘でもそういってくれるのは嬉しいわ。ありがとう」

やはり本気とは受け取らず、基本的な対応をしてくれた。それからは、風を感じ、景色を見ながら、他愛もない話をしていった。そういった時間が流れるのは早い。あっという間に船へ帰る時間となってしまった。

ブレイヴ
「あぁ……帰らなきゃいけない時間だな……」

アンジュ
「早いものね、こんな時って……」

二人は立ち上がり、高原から下り、船へと戻った。

アンジュ
「山道は疲れたけど、今日はゆっくりできて楽しかったわ。ブレイヴ君、ありがとう」

ホールでアンジュは、そう笑顔で言った。

ブレイヴ
「うん、なら良かった」

ブレイヴもつられて笑顔になる。

ブレイヴ
「良かったら、また今度……違う所で……」

また今度……これを言うのに、ブレイヴにとっては覚悟がいった。
その覚悟にアンジュは……

アンジュ
「うん、また今度、ね」

そう答えてくれた。ブレイヴはガッツポーズを抑え、

ブレイヴ
「じゃあ、このバスケット、ロックスに返してくるな」

平静を装い、食堂に向かった。

……後日談

ジュディス
「ずいぶんと、楽しかったみたいね？」

ブレイヴ
「へ？
あ……ああ……（照）」

ジュディス
「好きなんでしょ？
否定しても、分かるわよ」

ブレイヴ
「……ジュディスには、敵わないな」

……

マルタ
「ねぇねぇ！

遂に二人っきりで一緒に船を出たらしいじゃない！
どこまでいったの～！？」

ブレイヴ
「手、繋いだくらいだよ……」

マルタ
「あは～！
いいじゃない！
第一歩よ！
次は……どこまでいくかなぁ？」

ブレイヴ
「そんなもん！
そ、想像できない……」

約束の付き合い（後書き）

ほのぼのとした感じが伝われば幸いです。
感想待ってます。

闘技場の出会い（前書き）

そろそろ史上最強の「妹」をだしますか……。
それと「チャンピオン」も少し……。

闘技場の出会い

ジェウス
「闘技場でけぇーっ！」

ジェウスの闘技場に着いて第一声がこれ。

スタン
「あはははは！
確かにでかいよなー！」

ジェウスの言葉に笑って乗ってきたのはスタンだった。

アレス
「今日は自分の力を思いっきり試せるから楽しみだぁ～」

最近のアレスは戦いに気負いがない。本当にずいぶんと変わったものだとジェウスは思う。
ところで何故、闘技場にいるかと言うと、スタンが二人を誘い、ここまで連れてきたのだ。

スタン
「本当は寝ときたいんだけど、それじゃあ、ルーティもアンジュさんも怒るしなぁ……」

はぁ、と言って肩を落としていた。

モルモ
「闘技場へようこそ！

あれ？
オイラが始めて会う人がいるな？」

闘技場カウンターに行くと、ロックスによく似た、ロックスよりは全体的に白い生物がいた。

スタン
「ああ、モルモ。この二人は《アドリビトム》に新しく入隊した二人。髪が蒼いのがアレス、黒くてくせっ毛なのがジェウス」

二人は慌てて、よろしく、と言って頭を下げた。

モルモ
「よろしく！
オイラはこの闘技場の支配人、モルモだよ！」

モルモは簡単な挨拶の後、闘技場のルールを説明してくれた。

スタン
「じゃあ馴らしも兼ねて、簡単なミッションからいこうか」

闘技場の利用法を知っているスタンが、モルモに挑戦ミッションを告げる。

スタン
「じゃあ、舞台に行こう」

アレス
「ドキドキするなぁ……」

ジェウス
「しっかり、術唱えればいーの！
肩の力抜いて！」

舞台に着くと、予想以上の観客の数に、驚く。けれど、そんな隙もないほど、すぐに色とりどりのチュンチュン達が現れる。

ジェウス
「やるぞー！」

……

アレス
「うわー……。呆気ない……」

ジェウス
「馴らしっつったのに、中級術バンバン放つからだろーが！」

アレス
「しっかり術唱えればいいって……」

ジェウス
「加減があるだろー！」

言い争いをする二人の回りには、十連戦の後の、術に焼かれ、切り裂かれ、矢で貫かれ、拳で吹っ飛んだ、痙攣している魔物の姿が散らばる。

スタン
「あちゃー……。二人ともやり過ぎだよ……」

苦笑いでスタンが近づく。

ジェウス
「ああ、すいません……。でもこれだけ連戦すれば、今日はもういい……」

と切り上げようとした時……。

？？？
「お兄ちゃん♪」

アレス
「お兄ちゃん？」

ジェウス
（あ～……、やっぱり、ここで会うんだな……）

スタン
「お兄ちゃんって、まさか……」

三人がそろーっと振り返る。

スタン
「リリス！？」

お兄ちゃんと呼んだ声の主はスタンの妹、リリスだった。

スタン
「な、何でここに……」

リリス
「何でここに！？
お兄ちゃんがちっとも連絡くれないからじゃない！
ここに来たら、誰かお兄ちゃんを知ってる人がいるかと思ったけど、
まさか、その本人に会えるとは思わなかったわ！」

相当ご立腹。手に持つお玉が、どんな剣より、フライパンが、どんな鈍器より恐ろしく見える。

リリス
「お・し・お・き。必要みたいね♪」

スタン
「あ、いや、ち、ちょっと待って……」

実の妹に、ひどい焦り様。どちらが年上か、端から見ると、判らない。

ジェウス
「……じゃあ、スタンさん。頑張って……」

スタン
「って、おい！
手伝ってくれないのかよ！」

ジェウス
「いや、兄妹喧嘩に首は突っ込みたくないですし、それに……」

スタン

「それに……？」

ジェウスは溜めた言葉はく。

ジェウス
「その……妹さんが怖いです……」

ジェウスはアレスの腕を引いて、一歩下がる。

アレス
「あの……ジェウスと同意見で……」

何者にも恐れないディセンダー（みんなはまだ知らないが）でも、リリスは怖いらしい。

リリス
「覚悟。いいわよね？」

ジェウス
「じゃあ、スタンさん、お先に失礼しますっ！」

アレス
「僕も逃げますっ！」

そんな台詞を残し、二人は脱兎の如く逃げた。

スタン
「ちょっ……！
本気で逃げるのか！？
おーい……！」

ジェウスとアレスは振り向かず、前だけ見て走った……。

……

ブレイヴ
「おう、お帰り～。ん？
スタンは？」

ジェウス
「今は、壮大な兄妹喧嘩をしてるはずだ……」

ブレイヴ
「お、おお……。そうか……」

察したブレイヴはただただ返事を返した。数分後、スタンがリリスを連れて帰って来た。

リリス
「兄を見張るため、私も今日からお世話になりまーす！」

横にいるスタンは、俺は何も見てないし、聞いてない。とばかりに、黙殺している。もはや諦めたようだ。

ジェウス
「ま、まぁ、人手はあるだけいいだろうし……、ねぇ、アンジュさん？」

アンジュ
「そうね。じゃあ、リリス？

正式にメンバーにします。いいわよね、スタン君？」

スタン
「俺はもう何も言いません……」

……というわけで、これが、リリスが加入した日の話でした。

……

ジェウス
「ん？
何か忘れてるような……」

コングマン
「おい！
闘技場に来て、俺様を忘れるなんて、いい度胸してんじゃねぇか！
俺様もここで厄介になることになった。よろしくな！
この俺様がいれば、依頼の一つや二つ、ちょちょいのちょいで……」

ブレイヴ
「魔神剣！」

コングマン
「のわぁぁー！？」

ブレイヴ
「ん？
コングマンだったか……。てっきり叫ぶ怪しい人かと……」

ジェウス

「わざとだろ……」

闘技場の出会い（後書き）

リリスは、いいキャラしてますよね？
あ、コングマンは、僕は嫌いではないです。嫌いなテイルズキャラはいない者で……。
明日にももう一話、投稿出来そうです。
感想待ってます！

スキット　その４（前書き）

スキット　その４です。
予告通り、今日投稿できました。
次の投稿は……遅れるかもです……。

スキット　その4

・恥じらいは知らず

ブレイヴ
「……」

シャーリィ
「……」

ジュディス
「二人とも。私の耳に何か？」

シャーリィ
「あ、いえ……」

ブレイヴ
「んー、ちょっと気になって」

ジュディス
「触ってみる？」

シャーリィ
「え……？
いや、私は……」

ブレイヴ
「じゃあちょっと……」

シャーリィ
「えっ？」

サワサワ……

ブレイヴ
「うーん、形が違うだけで、触った感触は、俺のとおんなじ感じだ」

シャーリィ
「ブレイヴさんは、すごいです……」

ジュディス
「あなたは少し変わってるわね……」

・特殊能力

ジェウス
「……！」

セネル
「？」

どうしたジェウス？」

ジェウス
「扉の陰……。あいつがいるっ！」

セネル
「あいつ……？」

カサカサ……

ジェウス
「ほら、いたー！
無理、無理、無理ー！
セネルやっつけてくれー！」

セネル
（見えてもなかったのに、いるって分かったのか……？
ある意味、すごいな……）

・印象

ブレイヴ
「レイヴンってさぁ……」

レイヴン
「なになに、少年？
おっさんについて何か気になった？」

ブレイヴ
「うん、どう見ても、変態みたいな印象しか受けないんだよな……」

レイヴン
「へ……？」

ブレイヴ
「いや、真面目なとこもあるし、良いとこもあるよ？
でも、どう頑張っても、（変態：真面目）の割合が（9：1）で動

かないんだよね……」

レイヴン
「……」

ブレイヴ
「……レ、レイヴン？」

レイヴン
「え～ん、少年ひどいわっ！
少年は正直なのはいいけど、正直過ぎるのも考え物よ！」

ブレイヴ
「す、すいません……。冗談です……」

・よき姉

ジェウス
「髪、伸びたなぁ……」

ナナリー
「だったら、あたしが切ってあげるよ。後で、医務室においで」

ジェウス
「ホントですか？
ありがとうございます！」

ナナリー
「なんだい？

やけに、喜んでるね？」

ジェウス
「髪切ってさっぱりできるし、ナナリーさんは、いい姉貴って感じなんで、話してて楽しいんですよ！」

ナナリー
「あはは！
いい姉貴か。悪くないね！
だったら、悩み事や相談があったらいつでも乗ってあげるよ！」

・まだ良い方の好奇心

アレス
「カイウス、ちょっと獣化してくれる？」

カイウス
「え？
なんでだよ？」

アレス
「キュッポ達と比べてみたい事があるんだ。……あ、変な実験みたいな類じゃないから」

カイウス
「ん、じゃあ……」

フサフサ……

アレス
「キュッポ達と比べて少しだけ毛が固めかな……？
でも指通りはサラっとした感じだ……。うん、ありがとう！
今度は、クイッキーに頼んでみるよ！」

カイウス
「アレスとブレイヴはとにかく触ってみないと駄目なのか……？
ハロルドみたいに変な好奇心じゃないのが救いかもな……」

・壮絶な喧嘩の末……

ジェウス
「だーかーらー！
なんで、テメーはそう口が悪いんだよ！」

イリア
「なによ！
私がどんな口きこうが、別にいいでしょ！」

ジェウス
「そんなんだったら、ルカ以外の男に好かれねーぞ！」

イリア
「……言ったわね！」

……ドンドン！（弾の音）

ジェウス
「うわっ！

テメー……銃撃ってくるなんて、いい度胸してんじゃねーか！」

……ヒュンヒュン（矢を放つ音）

……

アンジュ
「……それで、こうなったの？
ルカ君が隅で震えてるじゃない……」

ジェウス
「すいません……」

イリア
「反省しております……」

アンジュ
「でも、壁や床の穴は、反省や謝罪じゃ塞がらないわよ……ねぇ……？」

ジェウス
（ひいぃぃ……）

イリア
（怖ぁぁ……）

ジェウス
「直します、直します！」

イリア

「あ、あたしも手伝うからっ！」

アンジュ

「そう。分かってくれたなら、いいわ」

ジェウス・イリア

（完璧、脅しが入ってたじゃん……）

スキット　その４（後書き）

そういえば皆さん、僕のオリキャラ（ブレイヴ、ジェウス、アレス）にどんなＣＶ（キャラボイス）を想像してるでしょうか？
ちょっと気になりました。

恐怖を越えるためには……（前書き）

ジェウスの秘奥義、お披露目です。
秘奥義だけは、自分で考えたオリジナルですが、技名にセンスないかもです……。
でも、温かい目で見てください。

恐怖を越えるためには……

アレスが、リカルドを連れ、帰ってきた。

アレス
「会った瞬間、銃突き付けられた時は、何かと思ったよ」

笑いながら話しているが、ブレイヴとジェウスは、実際そんなことがあったら腰抜けるよな。等と話していた。リカルドの方は、ルカとイリアとスパーダと話している。なんだか険悪な感じだが……。話が終わり、ブレイヴとジェウスに気付いたリカルドが二人に近付いてきた。

リカルド
「貴様らも、まだまだガキだな……」

ブレイヴ
「ガキじゃねぇ！
ブレイヴ・テンダーって名前があるし、俺は１８歳だ！」

ブレイヴはむきになって反論したが、

ジェウス
「俺達がガキって言うなら、リカルドさんはおっさん。ですよねぇ……？
あ、ちなみに俺の名前はジェウス・フレードです」

ジェウスも反論はしたが冷静だった。リカルドも少しばかり眉を寄せた。

ブレイヴ
（そういえば、リカルドの……）

ジェウス
（額の傷って……）

ブレイヴ・ジェウス
「……くくっ」

リカルドの傷の起源を思い出した二人は同時に笑ってしまった。

リカルド
「おい、貴様ら……。何故、笑う？」

ブレイヴ
「いや、なんでもねぇ……」

ジェウス
「気にしないでください……。くくっ……」

これ以上は、リカルドとの仲が険悪になりかねないので、その場を逃げた。

後日、次はアーチェがアドリビトムにやってきた。ブレイヴとジェウスは実際会ったわけじゃなく、そのような話が耳に届いた。ソーサラーリングの話も同時に聞いた。今のソーサラーリングには何の力も無いので、自然界の息吹を吹き込まなければならない。

アレス

「そんなわけで、この依頼、ブレイヴかジェウス。どっちか一緒に行こう！」

ブレイヴ・ジェウス
「何故、俺達？」

最近、二人がよくハモる。

アレス
「やだなぁ、長い付き合いでしょ？」

ジェウス
（だいたい三ヶ月ほどだけどな……）

ブレイヴ
「ジェウス。お前行ってこい……」

ブレイヴが指で「行ってこい」のジェスチャーをする。

ブレイヴ
「最近の行き先は、暑い場所が多いんだよ、俺……。火山やら砂漠やら……」

行き先は火山とのことなので、ブレイヴとしてはもう避けたかった。

ジェウス
「そんなら、アレス。俺が行くよ」

ジェウスはベッドから立ち上がり、軽く腰を捻る。その後、ジェウス達は《オルタータ火山》へ向かった。

……

チャット
「アンジュさん……。ボクが、毛がフサフサなのを苦手だと知っていながら、この組み合わせ……」

今回のメンバーは、アレス、ジェウス、チャット、ユージーン。毛のフサフサが苦手なチャットとしては、ユージーンとの組み合わせは最凶の組み合わせだ。

ユージーン
「どうした、チャット。忘れ物か？」

チャット
「うわっ……！？
あ、あまり近寄らないで下さい！」

ユージーンが近付いた瞬間、凄い勢いでジェウスの後ろに隠れた。

ジェウス
「そ、そんなにか？」

アレス
「苦手なものは、人それぞれだしね。僕には無いけど……」

実際見る、チャットの反応に驚いていると、隠れながらチャットがまくし立てる。

チャット

「だいたい、ボクを子供扱いしないで下さい！」

ユージーン
「そうか、それは悪かったな。しかし、今回はお前のその小さい身体が必要になる。俺達は、お前にしか出来ない仕事をする間の護衛というわけだ」

護衛だったら、ユージーンじゃなくてもよかったんじゃ……というアレスとジェウスの気持ちも知らず、チャットとユージーンは話を進める。

チャット
「な、何をさせる気なんですか？」

ユージーン
「行けばわかる」

全てを言い終わり、ユージーンは先を歩き出した。

チャット
「うう……。一番怖い前置きです……。二人とも！何があっても、ボクを守ってくださいよ！」

ジェウス
「うん、分かったから、そろそろ離れてくれ……」

さっきから、チャットはジェウスの足に張り付きっぱなしだ。チャットは何も言わなかったが、ジェウスからスッと離れた。一本道をずっと進むと、固く閉ざされた扉の前に一行は着いた。

チャット
「ここは通れないでしょう？
進めないじゃないですか！」

ユージーン
「この扉は向こう側からなら開く」

的を射ない言葉にチャットが尋ねる。

チャット
「そう言っても、どうやって向こう側へ行くんですか？」

ユージーン
「それがお前の仕事になる」

と、ユージーンは横の壁にある穴を指差す。

ユージーン
「あの穴は、扉の向こう側へ続いている」

アレス
「なるほど、身体の小さいチャットに行かせるわけ……」

アレスは納得しているが、チャットは小さな穴に入る抵抗があるらしい。渋ってはいたが、ユージーンが言いくるめた。

チャット
「う……」
（奥にフサフサのネズミとかいたら……、どうしよう……）

土壇場で行こうか行かないか、葛藤しているチャットだが、

ユージーン
「どうした、何かいるのか？」

ユージーンが近付くと……、

チャット
「うわぁぁああ、こっちもフサフサ！
こっちに来ないで下さい！
行きます、行きますってば！」

覚悟を決め、チャットは穴の中へ入っていった。

ジェウス
「ユージーンさん……、もしかしてチャットのこと遊んでる？」

ユージーン
「？
遊んでいるとは？」

本当に何も知らないようだ。

アレス
「無知って……怖いなぁ……」

ジェウス
「記憶が無いお前だけには、ユージーンさんも言われたくないだろうな……」

しばらくすると、扉が開きチャットが帰ってきた。ものすごく不機嫌だが……。

チャット
「……どうぞ、……開きましたよ」

ユージーン
「よくやった、チャット。しかし、その帽子で、よく穴を通れたな」

チャット
「……そうですね。……我ながら不思議です」

チャットが、なんだか投げやりっぽくなってしまったが、とにかく扉は開いた。一行は先を目指し歩を進めた。入り組んだ道を行くと、上層の最深に着いた。

ゴアァァ……

ユージーン
「む……、あれはフィアブロンクか。アレスとジェウスはともかく、チャットは大丈夫か」

チャット
「馬鹿にしないで……」

ジェウス
「大丈夫だよな、チャット？
なにせ、バンエルティア号の船長だもんな？」

チャットを遮り、ジェウスが言うと、チャットは顔を背けたが、ど

こかしら嬉しそうでもあった。

チャット
「……当たり前です。毛が無い相手なら怖くありません！」

アレス
「頼もしいなぁ。……じゃあ、僕も後方支援頑張るよ！」

アレスの詠唱を皮切りに、ジェウス、チャット、ユージーンが前へ飛び出した。

ジェウス
「鷹爪蹴撃！」

ユージーン
「瞬迅槍！」

チャット
「ポイハンッ！」

前衛を三人で固めたが、フィアブロンクは何事もなかったかのように振る舞う。思いっきり振られた尻尾に三人は吹っ飛ばされた。

ジェウス
「ぐあっ……！」

ジェウスは、ついこの間の傷が癒えたばかり。横からの打撃に恐怖が無いわけではなかった。それは、結果的に……後方からの矢による支援にまわる事となった。

ジェウス
「……っ！
凍牙！」

氷の力を宿した矢は、火山に住むフィアブロンクには確かに有効だった。

ジェウス
「ふっ……！」

次は矢を順に三つ放つ。悪い戦いではないが、本来のジェウスと比べると、「消極的」の言葉が浮かぶ。

アレス
「ジェウス！？
なんで、下がるの！？
あのでかさじゃ、前衛二人じゃ厳しいよ！」

アレスの叱咤にも、顔を歪めるだけで、やはりジェウスは前に出れない。

アレス
「……怖いの？
この間の事もあったし……」

図星をつかれ、ジェウスは薄く笑った。

ジェウス
「怖いなぁ……。でも必ず前にでるから、待っててくれ」

そう言って、左手のボウガンを構える。

アレス
「……」

アレスは何も言わず、真剣な顔になり、フィアブロンクを見据え、詠唱を開始する。前衛のチャットとユージーンは、最初こそ大きく吹き飛ばされたが、今はフィアブロンクの攻撃を受けてもなんとか踏ん張っている。

ユージーン
「裂駆槍！
轟爆旋風牙！」

ユージーンが、槍の一突きから、自分の周りに岩と真空破を発生させ、

チャット
「ピコハンッ！
パラライッ！」

チャットが四つのハンマーを投げ、雷の力を持つボールも連続で投げ、フィアブロンクを攻め立てる。しかし、踏ん張っているとは言え、ダメージは二人にも蓄積されている。

ユージーン
「チャット……！
まだ行けるか……？」

チャット

「ボクは……まだいけるに決まってるでしょう……」

言葉とは裏腹に、ユージーンも、チャットも本心はきつかった。

アレス
「スプレッド！」

アレスが、フィアブロンクに効いている水系の術で攻めるが、前衛にいる二人がこれでは、詠唱に集中できない。

アレス
「……っ！

ジェウス！
二人を回復するから……少しの間だけあいつを止めて！」

もう、待ってはいられかなかった。アレスは心の底から叫んだ。

ジェウス
「でもっ……！」

あの時の……恐怖の衝撃が蘇る。

アレス
「行けよっ！
今は、ジェウスしかいないんだよっ！」

ジェウス
「……！」

アレスの叫びは……ジェウスに届いた。

ジェウス
「……陽炎」

チャットとユージーンに今、襲い掛かろうとしているフィアブロンクだったが、上空から不意に現れ、一撃を加えられたジェウスをゆっくりと睨んだ。

ジェウス
「チャット……、ユージーンさん……。一旦下がって、アレスに回復してもらって……。俺がこいつを相手してるから」

危ない。と止めるべきところだが、下がれと言われた二人は、ジェウスに大きな覚悟を感じ、言うことに従った。フィアブロンクはジェウスだけを狙い、自らの巨大な尻尾を振り下ろしてきた。

ジェウス
（俺が……止めるっ！！）

その大きな覚悟は……大きな力を呼び込んだ！

ジェウス
「あぁぁぁぁぁぁ！」

ジェウスの咆哮が響くと同時に、身体は青く輝きだした。

ユージーン
「……！
オーバーリミッツ……！」

身体から吹き出す強い闘気は、フィアブロンクの巨体すら怯ませた。

ジェウス
「いくぞ……でかぶつ！」

ジェウスは突っ込んでいった。猛攻は受けたが、痛みを感じず、怯みもせず、ひたすら懐に向かった。

ジェウス
「連牙弾！」

懐に入ると、まず連続で蹴りを浴びせる。

ジェウス
「飛燕雷脚！」

次に、雷をまとい、連続で蹴り上げる。

ジェウス
「飛連……幻竜拳！」

最後に、大きい踏み込みのパンチから、連続の回し蹴りを浴びせた。

ジェウス
「まだまだ、終わらせねぇっ！」

いや、最後ではなかった……。ジェウスのまとう輝きが一層強くなった。

ジェウス

「だぁぁぁぁ！」

渾身の力で放ったアッパーは、フィアブロンクの巨体を上空高く浮かせた。ジェウス自身は……消えた。いや、「消えたように見えた」。部屋の中を、床も、壁も、天井も、縦横無尽に光速の速さで跳び回る。

ただ跳び回るだけでない。力の込めた矢を、徐々にだが、確実に本数を増やし、フィアブロンクの四方八方から容赦なく打ち込む！

ジェウス
「刹那の如く……その身を貫くは、我が矢の一閃！」

矢を打ち尽くしたジェウスは、フィアブロンクの真上に現れ、空を蹴り、急降下する。

ジェウス
「鳳舞……疾風閃！」

降下のスピードもあり、ジェウスの拳は、フィアブロンクの腹部に大きくめり込み、皮膚が裂ける音、骨が砕ける音だけが響いた。フィアブロンクは……もう二度と起き上がることはなかった。

ジェウス
「ふぅー……」

と、息をつくと、身体の光は役目を果たしたかの様に消えた。

アレス
「ジェウス……？」

ジェウス
「ん？
ああ、大丈夫……っていいたいとこだけど、ちょっと回復頼むよ。
と……、恐怖を越えたこと、褒めてほしいなぁ」

ジェウスが笑ってそう言うと、心配顔だったアレスも、笑った。

チャット
「ジェウスさん、凄かったです……。いえ、凄まじい、の方があってるでしょうか」

ユージーン
「うむ。オーバーリミッツを発動させるとは……お前の力、まだまだ先が見えないな」

二人からは、驚きの言葉が並べられた。

ジェウス
「そんなことないですよ。それより……目的地はこの先でしょう？早く用は済ませましょう」
アレスの回復術を受け、立ち上がると、笑ってそう言い、先に歩いていった。

アレス
「ジェウスは強くなった……。この戦いで……。ジェウスとブレイヴは二人三脚だから、きっとブレイヴも強くなる……」

ユージーン
「焦るな。お前はお前の速さで歩けばよいのだ」

チャット
「アレスさん。一応、期待しときますからね」

会話を少し交わし、三人もジェウスの後を歩いていった。先のリングスポットで、ソーサラーリングに息吹を吹き込み、今回の依頼は達成された。

……

アンジュ
「お疲れ様！」

アレス
「今日は、ジェウスに助けられたよ。ね？」
アレスはチャットとユージーンを見る。二人も納得の顔でウンウンと頷く。

アンジュ
「あら、そうなの？
でも確かに、何か吹っ切れた顔ね」

ジェウス
「だとしたら、アレスのお陰っす。あぁ、疲れた……。お先に失礼しますね」

ニカッと笑い、ジェウスは部屋に戻った。

アレス
「たいした事なんか、してないよ？」

と、言うが、ジェウスには大きな言葉だった。

アレス
『行けよっ！
今は、ジェウスしかいないんだよっ！』

アレスの叱咤は、ジェウスの心にアレスの予想以上に響いていた。

恐怖を越えるためには……（後書き）

秘奥義の感じは伝わったでしょうか？
ブレイヴの方も考えてますが、二人の秘奥義のテーマは、「派手」です。
感想お待ちしてます。

暇な夜は……（前書き）

意味深なタイトルですが、そっち系ではありません。
断じて。

暇な夜は……

ブレイヴ
「じゃあ、発表だ……。先にジェウスから！」

ジェウス
「よし、分かった……」

《バンエルティア号》の一室。ブレイヴとジェウスが何やら真剣な顔で向かい合い話している。

ブレイヴ
「まず……？番から」

ジェウス
「……アンジュさん」

ブレイヴ
「……」

ジェウス
「イメージなんだから、そう睨むなよ……。お前は？」

ブレイヴ
「俺は、ミントかなぁ？」

ジェウス
「あー、わかる。うんうん」

謎の会話だが、話は終わらない。

ブレイヴ
「？番！」

ジェウス
「ユージーンさん。だな」

ブレイヴ
「なるほど……。俺は、クラトスだな。どうだ？」

ジェウス
「妥当なとこだな」

続いて……

ブレイヴ
「次は？番だ」

ジェウス
「断トツ、ナナリーさんだ」

ブレイヴ
「あー、いいとこ！
でも、俺はあえてジュディスだ」

ジェウス
「お前それ、？番に近いだろ……」

ブレイヴ

「いーや、?番が、もしジュディスだったら自慢できるだろ?」

ジェウス
「まあ、確かに……」

勘の凄く良い方は、もう話の内容に気付いているかもしれないが、二人の話は尽きない。

ブレイヴ
「よし、?番だ」

ジェウス
「スタンさんでどうだ!」

ブレイヴ
「ほほう、スタンも捨て難い!
俺はユーリだ」

ジェウス
「おお!
それは俺も納得だ!」

話は落ち込む所か、更に熱を帯びる。

ブレイヴ
「?番はどうなった?」

ジェウス
「……カノンノ?」

ブレイヴ
「おぉ！
初めて被った！」

ジェウス
「マジか！」

ブレイヴ
「いやな、メルディと迷ったんだが、最終的にそっちに……」

ジェウス
「なるほどー、メルディかー」

話が止まらない二人は次の質問に移る。

ブレイヴ
「？番いくぞ」

ジェウス
「カイウスだな」

ブレイヴ
「ルカだ」

ジェウス
「やっぱ、その辺だよな？
いまんとこ」

ブレイヴ
「いや、この二人は動き難いぞ……」

?～?番の質問まで作っていた二人だが、

ブレイヴ
「まだいけそうか?」

ジェウス
「まだまだ甘いね、ブレイヴ君?」

ジェウスは、チッチッチッと人差し指を立て、指を左右に振った

ブレイヴ
「お、何だよ、まだあんのか?」

ブレイヴも興味津々でジェウスに近付く。

ジェウス
「(ごにょごにょ……)」

ブレイヴ
「……なるほどぉ～。まだ?番と?番があったなぁ～」

さらさらっと、持っている紙に、?と?の番号を付け、ブレイヴとジェウスはまた考える。

……数分後。

ブレイヴ
「よし、まとまったか?
?と?!」

ジェウス
「俺の中では決まった！」

ブレイヴ
「では発表！
ジェウスからっ、？番！」

ジェウス
「？番はファラ！」

ブレイヴ
「こっちは、エステル！」

ジェウス
「ここは、二人で逆タイプの人を選んだな」

ブレイヴ
「活発と清楚、って言葉が似合う二人だからな。まあ、こういうのも面白いな」

そして最後の……

ブレイヴ
「ラスト、？番！」

ジェウス
「ここは、セネルで」

ブレイヴ

「俺は、シングを選んだ」

ジェウス
「二人で、動ける人を選んだな」

ブレイヴ
「そこは似たな」

ここで、二人の座談会は終わった。

ジェウス
「うん、たまにこんなこと考えるのも、楽しいな」

ブレイヴ
「なかなか、な」

と、話していると、カノンノが部屋にやってきた。

カノンノ
「なんか、楽しそうだね？
何の話をしてたの？」

ブレイヴ
「いやいや、変な話じゃないよ。こんな話をしてた」

ピラッと先程の質問用紙をカノンノに見せた。紙をザッと見たカノンノは途端に吹き出した。

カノンノ
「あはは！

うん、なかなか当たってるね、これ！
二人とも、私が？番？
すっごく嬉しいよ！」

果たして、二人の話してた内容とは？

カノンノ
「そっかぁ、私は「妹」みたいな感じなんだ。あっ！
ナナリーが「お姉さん」はピッタリだね！
「弟」にルカかぁ……本人が聞いたらちょっとショックかもね！」

そう、暇な二人が話していたのは、

（メンバーでもしも家族を作るなら）

？＝母
？＝父
？＝姉
？＝兄
？＝妹
？＝弟
？＝親戚（女）
？＝親戚（男）

として考えていたわけ。

ジェウス
「カノンノも考えてみたら？」

ブレイヴ

「俺達とは全く別になるかもな！」

カノンノ

「うん、私も考えてみよっかな？」

突発的に始めたものだが、なかなか楽しめたかな？

と思う二人であった。

暇な夜は……（後書き）

家族うんぬんは、全部俺のイメージです。
皆さんはどうでしょうか？
感想待ってます。

久々の料理（前書き）

最近思う……。

誰か、俺のオリキャラを、イラスト化してくれないだろうか？

……超わがままから、入りました。

スルーでお願いします……。

久々の料理

ロックス
「ジェウス様。恐縮ですが、お料理の方、少し手伝っていただけますか？」

部屋に入ってきたロックスは一礼して、そう頼んできた。

ジェウス
「へぇ？
何で俺？
ナナリーさんとか、ユーリさんとか、料理得意な人はいっぱいいるでしょ？
クレアとリリスとで間に合わないの？」

ジェウスは、話し相手のブレイヴが他の依頼に出ていたため、暇ではあったが、あまりキッチンには立ちたくないのだ。

ロックス
「ナナリー様もユーリ様も、依頼に出られていて、帰ってくるのが今日は遅いんですよ。それに、クレア様とリリス様が、ジェウス様が料理ができると知って、それならと……」

ジェウス
「でもなぁ……」

渋っていたが、ロックスがいよいよ困り始めた。

ロックス

「ううう……。こんなに頼んでもダメですか……？」

ロックスは涙目になって懇願してきた。

ジェウス
「え？
ええ！？
わかった！
わかったから、泣かないでって！」

その言葉を聞くと、打って変わったように、ロックスは笑顔になり、

ロックス
「では、よろしくお願いします！」

と言って、部屋を出て行った。

ジェウス
「嘘泣きかよ！？」

ワンテンポ遅れたツッコミはロックスには聞こえなかった。

……

ジェウス
「はいはい、来ましたよっと……」

騙されたとはいえ、約束してしまったからには、行かないわけにもいかない。

ロックス
「待ってましたよ！」

クレア
「ジェウスさん、これお願いします！」

と言われ、じゃがいも、人参、玉ねぎ、包丁を渡される。

ジェウス
「うわあ……、カレーってすぐわかった……」

文句を言いながらも、包丁を持ち、皮剥きと材料の切り分けを行う。

リリス
「男の方が料理が得意なのは、珍しいですね。それに、ジェウスさんは手際もいいですし……。誰かに習ったんですか？」

ロックスとクレアがスパイスの調合をして（ちなみに一人でしないのは、ロックスが無駄に何かを入れないために）、ジェウスとリリスが食材を切る。ジェウスが作業をしていると、リリスがそのような事を聞いてきた。

ジェウス
「ううん、独学。手際が良いって言われるのは、嬉しいな。いっても、リリスも独学でしょ？」

手を休めることなく、返事を返す。

リリス
「はい。兄に食事を作っていたら、いつのまにか腕が上達してて…

…」

こちらも手を休めず、きっちり会話をこなす。

ジェウス
「偉いなぁ。リリスはホントに凄いよ」

リリス
「そんなことありません。でも、ありがとうございます！」

ジェウス
「それにしても、こんだけの材料……。いつも一人で切ってたの？」

大所帯なだけに、机の上の材料はハンパじゃない。

リリス
「基本は一人ですけど、ロックスさんも、クレアさんも、手伝ってくれますよ。だけどジェウスさんのおかげで、今日はかなり早い方です」

ジェウス
「そりゃ、よかった」

そう言われると、ジェウスとしては、気分は悪くない。自然に顔がほころんだ。

ロックス
「こちらは、鍋とスパイスとお肉の用意ができました！
お二人共、そちらはどうですか？」

厨房の方から、ロックスが大声で叫ぶ。

リリス
「はーい！
材料、もう少しで切り終わりまーす！
じゃ、あと少し、早く切りましょう」

ジェウス
「わかった」

しばらくして、材料を切り終え、それを厨房に運ぶ。

ロックス
「では、材料を三つの鍋で炒めましょう。クレア様は甘口。リリス様は中辛、ジェウス様には辛口をそれぞれ作っていただきましょうか」

結局最後まで作るはめになってしまったジェウスだが、もはや、鍋を渡されてしまっては仕方がない。

ジェウス
「俺が辛口ね……」

クレア
「はい。この作ったスパイスに、その赤と茶色の粉をもう少し足してください」

ジェウスはとりあえず味を見るため、粉を加わるのは後にした。

ジェウス

「俺風には……、油ひいて、じゃがいもと肉を初めに炒めて……、次に人参……。そこそこ炒めて、玉ねぎ……。少しだけしんなりしたら、水投入。煮込んで出てきた灰汁をとって、合わせスパイスも投入っと」

ここで、味見のため、少し舐めてみる。

ジェウス
「んー、辛すぎず、甘すぎず。さすが、ロックスとクレアのスパイス」

ジェウスが作るのは辛口なので、言われた通り、赤と茶色の粉を少しずつ足していく。

ジェウス
「こんなもんか？
では、味見……。……んん！
いい感じじゃん！
ロックス、ちょっと味見して？」

と言って、少量のカレーをロックスに渡す。

ロックス
「では……。……絶妙です！
やはり、ジェウス様を頼ってよかったです！」

ジェウス
「おいしいならよかった……。まずかったら洒落にならないもんな……」

ジェウスはホッと一息ついた。

ロックス
「ご苦労様でした。今日は助かりました」

ロックスからお礼を述べられたが、ジェウスとしては、ここまできたら、厨房の役回りを最後まで引き受けたくなった。

ジェウス
「よし！
俺も皿に盛るよ。ここまできたら全部やる！」

これには、ロックスも意外だったらしく、少しだけ驚いていたが、すぐいつもの調子になった。

ロックス
「そうですか！
では、お言葉に甘えさせていただきましょう！」

この日、ジェウスが作ったカレーは結構な評判を集めた。

ブレイヴ
「うおう！
ジェウスが作ったのかぁ。まあ、元々料理は得意だったしな。では、そのカレーをいただきましょうかね……。」

パクリ……

ジェウス
「どう？」

ブレイヴ
「……世界一」

ブレイヴは親指を立てた。

ジェウス
「大袈裟だろ～」

とは、いったものの、チェスター、ファラ、ティトレイ、セネル、スパーダ、レイヴン、ナナリーにさえ、おいしいとの評価をもらった。

……

クレア
「本当によかったんですか、皿洗いまで……」

ジェウス
「いいよ、いいよ。手伝いのついでだし」

皆の食事が終わり、食堂には、ジェウス、ロックス、クレア、リリスの四人だけが残った。

リリス
「でも、ジェウスさんのカレーの評判よかったですね」

ジェウス
「たまたまだよ。それに、リリスのも、クレアのも美味しかったし。……にしても、スタンさんが、何も知らずに三皿食べ比べて、一番

おいしいって言ったのは、リリスの作ったカレーだっていうんだから笑ったよなぁ」

その時を思い出して、あはは、と四人で笑ってしまう。

ジェウス
「でも、リリス？
いい兄さんじゃん。リリスのが一番いいって言うんだから」

リリス
「でも、寝起きは悪いですし、飛び出したら戻って来ない放浪癖もあるし……」

ジェウス
「そこ含めて好きなんだろ？
もっと素直になれって」

リリス
「好きじゃありません！
どうして、そうなるんですか！」

二人の会話を見ていたロックスとクレアだが、クレアが思い出したように喋った。

クレア
「あ、そういえば、研究室のお皿を下げるの忘れてました。ロックスさん、手伝ってくれませんか？」

ロックス
「そうでしたか、では、ジェウス様、リリス様、少し出てきます」

そして二人は部屋をでた。部屋をでて、ロックスは小首をかしげる。

ロックス
「あれぇ？
クレアさん、やっぱり研究室のお皿は下げた気が……？」

クレア
「ええ、下げましたよ。あの二人、なんだかいい雰囲気な気がするので、嘘つきました」

クレアはフフッと笑ってロックスを見、続いて、食堂の方をそっと伺った。

ジェウス
「別に兄弟を好きってことは、恥ずかしいことじゃないよ。俺は兄弟がいないから羨ましいくらいだよ……。ブレイヴが代わりみたいなものだけどな」

リリス
「それは……。けど面と向かって、そう言うのは恥ずかしいです……」

リリスの言葉を聞いて、クスッと笑い、ジェウスは話す。

ジェウス
「言葉にしなくても伝わってくるんだよ、俺達にも、スタンさんにも。俺が言いたいのは、今のままのリリスがいいなぁ。って話」

リリスは少しキョトンとしていたが、言葉の意味を理解し、笑顔に

なった。

リリス
「ありがとうございます……。なんだか、ジェウスさんとの話は、いい意味で不思議な感じです。あ、私は洗ったお皿片付けます！」

ジェウス
「うん、じゃあよろしく！」

互いにフフッと笑いながら、片付けをこなしていった。

ロックス
「なんだか……、変わった組み合わせですね……」

クレア
「そうでしょうか？
とってもお似合いの二人だと思いますよ？」

様子を見ていた二人は、食堂の外でこんな会話を交わしていた。

久々の料理（後書き）

ジェウスとリリスは、どっちがどっちを好きとかじゃなくて、第三者から見て、「なんだか、いい雰囲気だなぁ……」みたいな関係にしていきたいですね。

あ、次の投稿は遅れそうです。

感想待ってます（ｏ＾∀＾ｏ）

～PV500000記念投稿ッ～（前書き）

PV500000記念による、ブレイヴ、ジェウス、アレスの座談会です。
※台詞のみ

～ＰＶ５００００記念投稿ッ～

ブレイヴ
「ＰＶ！
５００００記念ッ！」

ジェウス・アレス
「イェーイ！」

パチパチ……。

ブレイヴ
「ついに、５００００にきたか……」

アレス
「いきあたりばったりで書いてるから、更新が遅くなったり……というか、今つまってるけど……」

ブレイヴ
「それでも、俺達の活躍を見てくれる方々に感謝しないとな？」

ジェウス
「それより、ＰＶ５００００記念だけど、何をするんだ？」

アレス
「じゃあプログラムを……」

ジェウス
「運動会みたいだな……」

プログラム
1．筆者より感謝の言葉。
2．ブレイヴ、ジェウス、アレスの戦闘台詞集。
3．三人より、一言。

アレス
「……です！」

ブレイヴ
「プログラムって言った割には、予定は3つかよ……」

ジェウス
「俺も同じ事を思ったけど、筆者の頑張りに命じて、許してあげよう……」

・プログラム1
筆者より感謝の言葉

ブレイヴ
「え～、ここに手紙が届いてっけど、これか？」

アレス
「差出人、Ｆｒｏｍ刀剣士……。これだね」

ジェウス
「じゃあ、ブレイヴ。代読！」

ブレイヴ
「はいはい……。じゃあ、読むぞ。この小説、（流れ落ちた二つの

新星）を読んで『下さった皆様。お気に入り登録をして下さった、皆様。さらには、お気に入りユーザー登録までもして下さった、ユーザーの皆様。ほんっっとぉぉぉに！
ありがとうございます！
最初に投稿したときは、様々なユーザーの方々が、マイソロジー３の二次創作をやってらっしゃったので、受け入れていただけるか、正直不安でした。ですが、感想での温かい言葉や、次も楽しみにしています。などの言葉は、すごく嬉しかったです。皆様のおかげで、次も頑張って書こう！
とか、もっといい文章を書こう！
とか思え、心の励みにしています。現在、俺自身が少し忙しくなり、執筆が遅れていますが、途中で投げ出す事は、絶対しません！
意地でも、完結に持って行きます！
だから、この小説を待っていて下さる方がいると信じ、これからも頑張ります。もっとたくさんの方々に読んでいただける事を願って……。

By刀剣士』

……だそうだ。俺としても、秘奥義見せずに終わるのは嫌だしな」

アレス
「噂によると、僕の秘奥義もオリジナルでいくみたい」

ジェウス
「まぁまぁ、とにかく。筆者が本当に感謝しているのが伝われば良しってことで……」

・プログラム２
ブレイヴ、ジェウス、アレス、戦闘台詞集

ブレイヴ
「な、なんと！
俺とアレスの秘奥義の名前と、台詞を発表するそうだ！」

アレス
「本当！
わあ～、楽しみだ！」

ジェウス
「俺の秘奥義は披露したが、台詞集ってことで載せるみたいだな」

ブレイヴ
「ではでは、発表！」

……

・ブレイヴ
戦闘開始
「敵さんの、お出ましだ」

戦闘終了
「相手するんなら、実力を見極めないとな／悪ぃ、本気でやっちまった」

瀕死終了
「ちょっと、やりすぎたかぁ……？」

戦闘不能
「だっせぇの……」

対決
「手加減無し！
全力でいくぞ！」

オーバーリミッツ
「いくぜっ！」

秘奥義
「風よ神風の如く、雷よ鳴神の如く！
風雷とともに！
切りっ、刻む！
雷覇、皇嵐衝！」

・ジェウス
戦闘開始
「準備はいいか？」

戦闘終了
「俺達に勝とうなんて、１００年早いんじゃないか？／俺達が強いのか、はたまた、相手が弱いのか……」

瀕死終了
「いや、まずいなぁ……」

戦闘不能
「こんな……ところでっ……！」

対決
「よっし、やるぞ！」

オーバーリミッツ
「あぁぁぁぁぁ！」

秘奥義
「刹那の如く、その身を貫くは我が矢の一閃！
鳳舞……疾風閃！」

・アレス
戦闘開始
「僕も頑張るよ！」

戦闘終了
「こんなとこかな？／次もこの調子で！」

瀕死終了
「油断……したわけじゃないんだけどな……」

戦闘終了
「みんな……ごめん……」

対決
「今日の僕は一味違うよ」

オーバーリミッツ
「輝ける力よ！」

秘奥義
「総てを司る光よ……彼の者の邪悪を照らせ……。光は聖なる弾丸となりて、その身体を貫く！
ガデスインフリエイト！」

……

ブレイヴ
「……と、まあ、こんな感じのようだ」

アレス
「あ、また手紙だ」

ジェウス
「なになに……『微妙な感じですが、これも温かい目で見てください……』……と一言」

ブレイヴ
「筆者なりに、真剣に考えたようだしな」

アレス
「ちなみに、僕の秘奥義の名前は、『女神の逆鱗』って意味だって」

ジェウス
「あ、手紙に詳しく書いてある……『女神（ｇｏｄｄｅｓｓ）、逆鱗（ｉｎｆｕｒｉａｔｅ）』……だってよ」

ブレイヴ
「他の台詞は、筆者が考えたり、原作からもじったりしたそうだ」

・プログラム３
三人より、一言

ブレイヴ

「と言うわけで、最後のプログラム！
一人ずつ、一言！」

ジェウス
「まだ言うこと考えてねぇ……」

アレス
「同じく……」

ブレイヴ
「じゃあ、俺が最初に言うから、その間に考えろよ！
では……。皆さん！
長らく読んでいただき、ありがとう！
今は、物語の中盤。これから、技も増やして、秘奥義も披露したい！
そう思います！
……アンジュとも頑張るよ……」

ジェウス
「最後の台詞は、アレスには……」

アレス
「最後なんて言ったの？
うまく聞き取れなかったよ」

ジェウス
「聞こえてなかったら、それでいい……。そのうち、分かるから……。じゃあ、次は俺が……。えっと、ブレイヴと同じく、技を磨いて、皆さんを楽しませていきたいと思います。後、影が薄めですが、『青い煙』が俺達に深く関わってくるようなので、楽しみに待っててください。それから、船内でリリスとの噂がたっていますが、良

い友達ですから……」

ブレイヴ
（どうだかなぁ～）

アレス
（これからが楽しみだね）

ジェウス
「なーに、コソコソ話してんだ、二人とも？」

ブレイヴ
「ま、まて！
矢を向けるな！」

アレス
「次は僕が話すから、落ち着いて！
……はい、ども、ディセンダーです。もう少しで、僕がディセンダーと判明しそうです。と言っても、筆者が、原作一話↓閑話二話のペースなので、やっぱり、先になりそうです……。これから僕がどのような立ち振る舞いをするか、見ていてください！」

ブレイヴ
「……さて、全プログラムが終了。筆者によると、次の日曜、月曜には次話を投稿の予定だそうだ……」

ジェウス
「ミブナの里に向かう回だな」

アレス

「次の投稿待っててください！
では、また来週！」

ブレイヴ・ジェウス
「いや、毎週はやんねぇよ、この座談会……」

～ＰＶ５００００記念投稿ッ～（後書き）

ブレイヴ・ジェウス・アレス
「座談会、お疲れっした～」

次は、目指せＰＶ１００００！
これからは、本文で触れた通りです。

ミブナの里へ……（前書き）

やっと書けたよ……。
久々だから、文章ボロボロだよ……。
ブレイヴの秘奥義、もうちょっとかっこよく書きたかったなぁ。

ミブナの里へ……

ブレイヴ
「いいか……。これはこれに勝つ。んで、これはこれに勝つ。最後にこれはこれに勝つ。同じ場合は引き分けで、勝負が着くまでだ」

アレス
「なるほど……」

真剣な表情で話しているが、内容は……

アレス
「ジャンケンって、すごく簡単な勝負だね」

ジャンケンのことだった。

ブレイヴ
「ちなみに手の形は、グーが石。チョキがハサミ。パーが紙を表している。俺が知っている限りでは」

アレス
「でもそれなら、グー（石）でパー（紙）を破いたりできるよね？」

目ざとい。

ブレイヴ
「そこは、暗黙の了解。それを言っちゃあ、おしまいだ。あー、研究室かキールに言やあ、切れるが、破けない紙とかできるかも……」

そこで、クラトスが咳ばらいをした。

クラトス
「少し、緊張感とかは持たないのか……？」

今回の依頼は、［ブラウニー坑道］を通り、ミブナの里に向かうこと。精霊と交流がある里なので、赤い煙と青い煙について聞いてみると言うことだ。

ブレイヴ
「緊張感って言われてもなぁ……。［暁の従者］とか言う、ディセンダー信仰組織みたいなのが現れたら、馬鹿な話でもしてないと、やってられないよ……」

と、肩をすくめ、ため息をはいた。［暁の従者］が現れ、信者が増えているらしい。大事件の発端になってしまうが、世界各地に信者が増えては、止めようにも止められない。

ハロルド
「それより、クラトス。忍の里って……どんなトコぉ！？」

止められないのは、［暁の従者］だけではなかった……。ハロルドが興味津々でクラトスに詰め寄る。

クラトス
「それには答えられん。忍は他とは一線を画し、生きるもの。今回は特別だが、本当は他言無用にすべきことだ」

ピシャリとクラトスが言い放つ。

ハロルド
「いいじゃない、教えてくれたって……。私たちそこに向かってるんだから、今知っても……」

ブレイヴ
「はーい、詮索はおしまーい。黙って付いてきゃ、分かるんだから」

ブレイヴがハロルドの襟を持って引きずって行った。

ハロルド
「待ちなさいよ、ブレイヴ！
話が済んでないのよ！
実験台のくせに、こんなことしていいと思ってんの！？」

ブレイヴ
「そんなもんになった覚え、ねぇよ！
あんた、一応大人なんだから、我慢を覚えろ！」

この日、「ブラウニー坑道」には、１８歳に怒られる２３歳がいた。
……みなまでは言わないが。

クラトス
「……」

アレス
「クラトスさん、僕もいますから頑張ってください……」

クラトス
「ああ……、よろしく頼む……」

先に進むと、明らかに人為的な壁があり、向こう側には何かありそうな感じだ。ハロルドが苦言を呈したが、クラトスが横の方にある壁の穴に、剣を刺し入れると、音をたて、壁は地面に埋まった。

アレス
「ふえ～……」

ハロルド
「ふうん。忍びが作った隠し通路、ってワケ」

ハロルドも納得する。

クラトス
「……行くぞ」

しかし、クラトスはいつものようにクールに振る舞い、一人先に進んだ。

ブレイヴ
「んっ？
ハロルド、その紙……」

途中、いつの間にかハロルドが読んでいた紙に、ブレイヴは食いついた。

ハロルド
「ああこれ？
新興宗教の勧誘チラシ。そこに落ちてた～」

こんな人のいない所まで布教なんて、ご苦労ね～。と、ハロルド。

クラトス
「暁の従者……。ディセンダーの出現を待つ集団か」

ハロルド
「世界の危機が訪れた時に現れるディセンダー、ね～」

ハロルドとクラトスは、まだ話を続けていたが、ブレイヴは横目でアレスを見ていた。アレスは、どこ吹く風で、その辺りの散策をしている。

ブレイヴ
（ディセンダー……か。たまに忘れちまうな、アレスがそうだってこと……）

過去を顧みてると、突然誰かの声が聞こえてきた。

???
「わー！
待てっ！
こらーーーっ！」

ブレイヴ
「？
今の声……？」

確か……、と思っていると、クラトスも心当たりがあるようだ。

クラトス
「何か、異様な気配が流れてくる。先を急ぐぞ！」

階層の一番最奥にたどり着くと、石像の様な魔物がそこにいた。

クラトス
「恐らく、門番のつもりだ」

クラトスはそう言うと、剣を抜いた。

クラトス
「こいつを倒さねば、《ミブナの里》へは行けそうにないだろうからな」

ハロルド
「やっぱり～！
これが忍びの技術なのね！」

ハロルドは何か嬉しそうだ。

ブレイヴ
「ここは、もう好きに分解でも解剖でもどーぞ、ハロルド」

ブレイヴも剣を抜き、切っ先を魔物に向ける。

アレス
「僕は、それは勘弁してほしいなぁ……」

げんなりしながら、杖を構える。

クラトス
「無駄口を叩くな。来るぞ……！」

二匹いるうちの一匹が、高々と跳び上がり、重い身体を活かし、一気に踏み潰してきた。

ブレイヴ
「うぉーっ！？
予想以上！」

避けた地面には、亀裂が入り、さながら小さな隕石が落ちたようだ。

アレス
「ブレイヴ、大丈夫！？」

ブレイヴ
「大丈夫！
喰らってない！」

体勢を立て直しながら、ブレイヴは答える。

クラトス
「動きは遅い！
回り込んで、後ろから攻めろ！」

クラトスの助言を聞き、ブレイヴが攻めを変える。戦局は、ブレイヴとアレス、クラトスとハロルドの組に分かれ、一匹ずつ相手をしている。

アレス
「エアスラスト！」

アレスが唱えると、真空の刃が魔物の周囲に渦巻き、切り刻んだ。

ブレイヴ
「そこっ！
散沙雨っ！
秋沙雨っ！」

無数の突きが、魔物を襲う。

ブレイヴ
「魔神、双破斬！」

衝撃波を放ち、上へ下へ、二回切り裂いた。すると、魔物が上下で二つに分かれた。

アレス
「これが、こいつの正体？」

そう、これがこの魔物の正体、ストーンシーサーとシーサーチェストだ。

ブレイヴ
「問題無い……。一匹ずつ片付けるぞ、アレス！」

アレスもコクリと頷き、詠唱を開始する。ブレイヴはまず、動きが緩慢なストーンシーサーに狙いをつけた。

ブレイヴ
「ふっ！
虎牙破斬！

虎牙連斬！」

ブレイヴがここまで攻めると、アレスの詠唱も完了した。

アレス
「いくよ！
イラプション！」

アレスの術により、ストーンシーサーの足元から、溶岩が噴き出す。
ブレイヴの追随は止まっていない。

アレス
「とどめっ！
驟雨双破斬！」

連続突きの後、二回の切り付けで、魔物の片割れ、ストーンシーサーは跡形もなく消え去った。

ブレイヴ
「テンション上がってきたっ！
次、いくぜっ！」

ブレイヴがシーサーチェストに向き合うとほぼ同時に、ブレイヴの身体は青く輝きだし、噴き出す闘気は、豪風となった。

アレス
「オーバーリミッツだ……！」

アレスがクラトスとハロルドの組に目をやると、こちらとは逆に、シーサーチェストを退治したところだった。

アレス
「クラトス！
ハロルド！
後一匹、こっちに飛ばして！」

クラトスとハロルドはブレイヴの様子を見て、事情を察し、無言で頷く。

クラトス
「どうやら、終わりの時間だ。ブレイヴ……お前の力、見せてもらうぞ！」

クラトスは踏み込みから突きを放つ。

クラトス
「瞬迅剣！」

もう一度……更に強く、突きを放つ！

クラトス
「吹き飛べ……、空破衝！」

大分、飛んだが、まだブレイヴの射程には入っていない。

ハロルド
「はいは～い♪
わたしの事忘れちゃダメよ～。派手に飛ばすわよ！
ブラッディクロス！」

黒い十字架が、ストーンシーサーを空に張り付け、そして、その十字架は破裂し、ストーンシーサーを吹き飛ばした。ハロルドの術で、ストーンシーサーは、遂にブレイヴの剣の射程に入った。

ブレイヴ
「散沙雨！」

無数の突きでストーンシーサー、シーサーチェスト、二匹の身体を貫く。

ブレイヴ
「魔神剣、双牙！」

二つの衝撃波を、それぞれにぶつける。

ブレイヴ
「風雷神剣！」

風と雷を纏った剣を二匹に同時に突き刺した。そして、ブレイヴの身体の青い輝きはより一層増す。風雷を纏ったままの剣を、高速で振り回し、ストーンシーサーとシーサーチェストを切り刻む。

メッタ斬り。

その表現がよく似合う。

ブレイヴ
「風よ神風の如く、雷よ鳴神の如く！
風雷とともにっ……切りっ……！」

右から袈裟切りを放ち、

ブレイヴ
「刻むっ！」

左から袈裟切りを放った。

ブレイヴ
「雷覇、皇嵐衝！」

最後は、雷の風がストーンシーサーとシーサーチェストを包み込み、
それが晴れた時は、ストーンシーサー達の姿は跡形もなく消え去っ
ていた。

ブレイヴ
「終了っ！」

ブレイヴの身体を覆っていた青い輝きも消えていた。

クラトス
「……身体は大事無いか？」

クラトスが尋ねてくる。

ブレイヴ
「ん？
んん、特には……無いかな？」

クラトス
「フ……、ならば、よい」

クラトスは薄く笑って、そこで、会話は終わった。

ハロルド
「……」

ブレイヴ
「な、何？
ハロルド？
目がやばいのは気のせいカナー？」

ハロルド
「グフフ……☆
オーバーリミッツを間近で見たのは初めてだったから～♪
やっぱりあんた気になるわ！」

解剖だけは勘弁してください……。と、ブレイヴは内心思った。

アレス
「それより、この魔物跡形もなく消え去ったけど……」

アレスが話を戻した。

クラトス
「そいつは人工精霊だ……」

と、クラトスが話かけた所に、一人の人物が現れた。

クラトス
「しいな。お前だったか……」

しいな
「クラトスだったのかい！
久しぶりだねぇ」

どうやら、ストーンシーサーもシーサーチェストも、しいなが「光気丹術」なるもので作ったものだそうだ。やはり、ハロルドはその響きに目を輝かせ始めた。つもる話を終わらせ、クラトスが本題に入る。

クラトス
「精霊と話がしたい。会わせてはくれないか？」

しかし、しいなの話では、精霊との交流は前の話で、今はいないらしい。これも星晶の影響のようだ。

ブレイヴ
「また、星晶絡み……」

サレのいる《ウリズン帝国》以外の国も動いており、ミブナの里も見つかるのは時間の問題だ。

ハロルド
「とりあえず、精霊との接触は無理ってことね。どうする、引き返す？」

クラトス
「そうだな……」

帰ろうとした所、しいなに引き止められる。

しいな
「待ちなよ！
あんたが精霊を頼るって事は、余程の事なんだね。他の地域の精霊なら、もしかしたら……。里に文献があるんだ。後であんた達のギルドに届けにいくよ」

しいなのその言葉を信じ、しいな以外の四人は、《バンエルティア号》に帰還した。少し話に出た「光気丹術」。科学者達、特にリタには興奮するには、いい材料だったようだ。とにかく《アドリビトム》はしいなの文献を待ち、「精霊」についても、「光気丹術」についても、それまでお預けという形になった。

ミブナの里へ……（後書き）

めちゃくちゃ真面目な質問しますが、俺の文って、どの辺直せばもっと良くなりそうですか？
批判とか無しで、アドバイスとかお願いしたいです。
普通の感想も待ってます。

スレチガウオモイ……、タイセツナコト……（前書き）

よく見たら誤字ってるじゃないか！
シリアスが台なしだ……。
とにかく、修正しました。

スレチガウオモイ……、タイセツナコト……

今日、ブレイヴは大きなミスを犯した。とは言っても、一緒についていったメンバーから言わせれば、「しょうがない」と口を揃えて言うだろう。詳細を話すと、ブレイヴ、クレス、アニー、エステルの四人で《ルバーブ連山》に依頼をこなしに行き、クレスとアニーが魔物の様子を偵察し、ブレイヴとエステル二人きりになった所、

ブレイヴ
「少しだけ、この辺りも散策してみようか？」

エステル
「そうですね。何か見つかるかもしれませんし」

と、回りに魔物がいないのを確認し、散策を開始したはずだったが、突然現れた魔物の襲撃に、二人の身体は硬直してしまった。

ブレイヴ
「しまっ……！
エステル！」

叫んだが、既に時遅し。エステルは魔物の攻撃を受け、小高い丘より転落した。

ブレイヴ
「エステルっ！」

ブレイヴは魔物を切り伏せ、エステルの様子を伺った。

エステル
「あ、ブレイヴ。大丈夫です？」

ブレイヴ
「こっちの台詞だろ、それは！
怪我は！？
怪我はしてないか！？」

エステルの怪我の具合を見ると、右手首から肘まで擦り傷。右足も捻ったようだ。

エステル
「これくらいなら大丈夫です！
捻った足は治るのに少し掛かりそうですけど、擦り傷ならすぐに治ります」

エステルが自らの左手を擦り傷にかざすと、淡く光り、傷は治った。

ブレイヴ
「……ご……ん……」

エステル
「え？」

ブレイヴに似つかわない、あまりにも小さな声だったので、エステルは聞き逃してしまった。

ブレイヴ
「ごめんな……俺が……いたのに……」

守れたはずだった。軽い怪我で済んだから良かったものの、命に関わる重傷になっていたら……とブレイヴは考える。彼は世間一般的に言えば、頭の良い方ではない。しかし、仲間の危機に関しては、恐ろしく気を使う人物。そういう人となりだった。

エステル
「あの……、大丈夫ですから……、自分を攻めないで下さい……」

ブレイヴの姿に、エステルが困っていると、クレスとアニーが戻ってきた。

クレス
「エステル！？
その怪我……」

エステル
「傷は治癒術で治してます。足を少しだけ捻りましたが……」

アニー
「足の方は私が見ましょう」

医務室に務めるアニーがいたのは、不幸中の幸いだった。捻った際の治療を適確にこなしていく。

クレス
「それにしても……、なんでこんなことに？」

ブレイヴが、ポツリポツリと事のあらましを説明し、二人に全てを伝えた。

ブレイヴ
「俺がちゃんと見てれば……」

クレス
「それは違う。起こってしまった事だ。周りにはちゃんと気を配っただろう？
だからブレイヴは悪くないよ……」

アニーは治療に専念し、何も言わなかったが、同じ事を考えていた。

ブレイヴ
「……」

今回の依頼は納品依頼で、敵と戦わず、避けて通ることで、さしてエステルに負担もかけず、依頼は完了した。船に戻り、エステルは本格的な治療をしに、医務室に向かった。

アンジュ
「お疲れ様、ブレイヴ君」

ただ一人、呼び止められ察した。

ブレイヴ
「……クレスから聞いた？」

アンジュ
「ええ。あなたは悪くないじゃない。むしろ、魔物の接近を許したエステルの方が悪いかもね」

軽い冗談を交えながら話してくれたが、考えた最悪のパターンが頭

から離れない。

ブレイヴ
「たとえそうだとしても、あそこでエステルが頼れるのは、俺だけ、だったんだよ……」

アンジュは黙って聞く。

ブレイヴ
「今回は軽い怪我だから良かったものの、これが、死に関わる重傷だったら？
転落したのが、小高い丘じゃなくて、崖下の奈落だったら！？」

とめどなく溢れる不安な要素に、ブレイヴ自身、言葉に熱が帯びてくるのが分かった。

ブレイヴ
「……実際さ、俺はまだ、人が死にかけの所を見たのは、ジェウスが大怪我をした一回きりだ。それを見てから、余計に思うんだよ。
「仲間を目の前で失いたくない」って……」

アンジュはまだ口を挟まず、ブレイヴの言葉を受ける。

ブレイヴ
「あの時……、確かに守れたんだよ……。でも出来なかった！
あそこで、動けなかった俺は、今後も仲間のために動けるのか……
不安なんだよ……」

全てを吐き出し、二人の間に一瞬か、それとも長い間か、沈黙が流れる。

アンジュ
「……それで？」

沈黙を破ったのはアンジュだった。

アンジュ
「だから？
……ブレイヴ君。あなた、大切な事忘れてるわ」

口調はいつもと変わらないが、ブレイヴはその言葉に、はっきりと怒りの感情を感じ取った。アンジュが怒っている。本気で。

アンジュ
「これは宿題！
3日あげるから、大切なこと、ちゃんと思い出しなさい！
自惚れは……自らを滅ぼすわよ。それから、頭を冷やすために、明日から仕事二倍！
いいわね」

ブレイヴ
「……」

アンジュの剣幕に押され、ブレイヴは自分の部屋に戻っていった。

アンジュ
「ふぅ……」

スパーダ
「よう。お前にしちゃ、派手に言ったもんだな」

物陰から聞いてたスパーダが姿を現した。

アンジュ
「あら、聞いてたの？」

スパーダ
「あんだけ、でかい声で言ってたらな」

呆れ顔でスパーダが話す。

スパーダ
「ま、俺からしたら、お前の言ってることも、あいつの言ってることも分かるんだけどな……。あいつなりに考えて、悩んでんだろ？」

アンジュ
「でも大切なこと……一番大切なことを忘れてるわ」

スパーダ
「それもそうだが……、ま、俺は、これ以上なんにも言わねぇよ。ただ、このままじゃ、すれ違ったままだ。フォローはしっかりしろよ」

スパーダはそれだけ言うと去っていった。

アンジュ
「彼なら……ブレイヴ君なら必ず気づくよ……。あれだけの思いがあるのなら……」

独り言を呟くと、アンジュは依頼の整理を始めた。

……

部屋に戻ったブレイヴは、一人悩んでいた。

ブレイヴ
「大切なこと……？
俺は何を忘れてるんだ……？」

どれだけ考えても、答えが出ない。頭を抱えていると、ジェウスも部屋に戻ってきた。

ジェウス
「ただいま～……っと……。何やらお悩み中だな。」

ブレイヴ
「ジェウス……」

ジェウス
「なんだ？
何があった……？」

ブレイヴの隣に座りながら、威圧的でない、諭すような優しい口調でジェウスは尋ねる。ブレイヴはジェウスに事を話した。

ジェウス
「なるほどね……。それで怒られた、と」

ジェウスは一呼吸おいて、次の言葉を出す。

ジェウス
「ようするに、やり過ぎなとこがあるんだよな、お前は。考える事は間違っちゃあ、いねえよ？
だけど、さ。お前がそう思うことによって、エステルはどう思う？
「申し訳無いことをした……」、そう考えちゃうだろうな」

そこまできて、ブレイヴの体がピクリと動く。

ジェウス
「やり過ぎ。今回の場合、考え過ぎ。助かって良かった。そう考えてた方が、怪我した本人も気が楽ってもんだ」

ブレイヴ
「それが……答え？」

顔を上げ、ブレイヴが口を開く。

ジェウス
「おっ……と、宿題だったんだな、これは」

喋り過ぎたと言わんばかりに、ジェウスは口を押さえた。

ジェウス
「まぁ……、これは俺なりの解釈。でも、分かってんだろ？
俺が言ったこと、お前は自覚してる……。難しく考えんな、ってだけ言っとくよ。……んじゃ、俺はカイウスとエミルと遊んでくるかな……」

ジェウスはそう言って、部屋を後にした。

ブレイヴ
「……」

ブレイヴは一度、ジェウスの言葉を頭で反芻する。目を閉じ、落ち着いて考える。次に目を開けたとき、足はある場所へ向かっていた。

アンジュ
「……早いのね、答えを出すのが」

ブレイヴは向かったのは、ホール。アンジュと話を着けるために。

ブレイヴ
「大切なことって……やっぱ、「相手の気持ち」の事。だよな……。俺が変な気持ちを持つことで、相手も不安になることを分かってなかった……。それから自惚れ。頼れたのは、俺だけ。なーんて……半人前の俺が言う台詞じゃあねぇよな……」

アンジュは、今回もゆっくりと話を聞いている。しかし、表情は柔らかく、決して怒ってはない。

ブレイヴ
「けどさ……。俺の、あの時助けようとした気持ち……、これだけは、俺は間違ってはないと思う」

ブレイヴはきっぱり言った。

ブレイヴ
「だからさ、俺は誰も死なせないように、もっともっともっと、強くなる。この腕も、この気持ちも……」

ここでブレイヴは初めてアンジュを見た。アンジュは目を閉じ、話を聞いていたようだ。

ブレイヴ
「正解……なんて言わなくていい。だって正解なんてないんだから。強いて言えば、この答えなんて、人の数だけあるんだろ?」

ブレイヴがそう言うと、アンジュはゆっくり目を開けた。

アンジュ
「……惜しいなぁ。最後だけ違う……」

アンジュが話す。

アンジュ
「人の数だけ……、それは違うわよ。少なくとも、この船のみんなはブレイヴ君と同じ気持ちだよ。だからこそ、ブレイヴ君もすぐに気づいたんでしょう?」

ブレイヴ
「あ……」

ジェウスもそうだった。だから、ブレイヴの悩みにもすぐに答えれた。

アンジュ
「誰かに助言でももらったでしょう?」

ブレイヴ
「お、おっしゃるとおりで……」

アンジュのあまりの鋭さに、思わず普段使わないような言葉をブレイヴは使ってしまった。

アンジュ
「でも……自分なりに出した答えだってことは分かるわ。分かったなら、エステルとしっかり話をなさい」

と、アンジュは医務室に続くドアを指さす。

ブレイヴ
「ああ……」

ブレイヴは医務室に向かおうとした。しかし、ドアの前で一度立ち止まり、アンジュの方を向く。

ブレイヴ
「アンジュ……、明日からの仕事……、やっぱり二倍？」

アンジュ
「……そうね。すぐに答えたし、明日「だけ」、二倍にしましょうか」

ブレイヴ
「やっぱり二倍なんだ……」

と苦笑い。しかし、船に帰還して初めて笑った。

少しだけ気持ちのすれ違いが起きた二人。短い時、だが、ブレイヴには長い時。しかし、ブレイヴが大切なことに気づき、二人の気持

ちは、再び巡り会うことができた。

スレチガウオモイ……、タイセツナコト……（後書き）

誤字とかすいません……

スキット　その5（前書き）

スキット　その5！

スキッと作りました！

……ごめんなさい。

呆れないで、見ていってください↓

スキット　その5

・押し付け

コングマン
「おい、ブレイヴ！
俺様と、一回勝負だ！」

ブレイヴ
「またかよ……。いやだ。一回じゃ済まねぇもん……」

コングマン
「当たり前だ！
この間は、たまたま！
たまたま！
負けたがそう何度もいかねぇぞ！」

ブレイヴ
（あぁ、めんどくせぇ……）
「あー、そうだ。たまには、拳で語れる相手とやってみたらどうだ？
俺は格闘技は、からきしだし」

コングマン
「例えば、誰でえ？」

ブレイヴ
「……ジェウス！
お前しかいない！」

ジェウス
「なっ……！
おまっ……！」

コングマン
「よし、そうと決まりゃあ、早速、死合だ！」

ジェウス
「字が違うよ！
字が！
試合だろ！
おい離せって！
おーい……！」

ブレイヴ
「すまない……。ジェウス……。お前の事は、生涯忘れない……」

ジェウス
「俺、死ぬのかよ！？」

・天然の恐ろしさ

メルディ
「なーなー、ブレイヴ、これどういう意味な？」

ブレイヴ
「な、なんで俺に？」

メルディ

「キールはいないし、近くにブレイヴがいたから聞いてみたな！」

ブレイヴ
「う、うう……。メルディ、この手は、俺は苦手なんだ……」

メルディ
「バイバ！
ブレイヴは戦闘は凄いのに、こっちはダメか？」

ブレイヴ
（グサッ……！）
「メ、メルディ……、それは、直球過ぎる……！」

ミント
「メルディさん、その言い方はよくありませんね」

ブレイヴ
「おぉ！
ミント！」

ミント
「そちらの分、ブレイヴさんは闘いの腕が優れているんですから、
そんなこと言っては駄目ですよ」

ブレイヴ
（グサッ……！）
「ミント……、俺の心の傷……、えぐってる……！」
（二人とも、悪気なしに言ってるから……何も言えない……）

・謝ります

ジェウス
「シング……、謝りたい事が二つ……」

シング
「な、何？
急に……？
謝りたい事って……？」

ジェウス
「一つは、コハクの足に無意識に目が向いてしまうこと……」

シング
「それなら、俺も一緒だよ……。仕方ないと思うよ……」

ジェウス
「問題がもう一つの方で……、その……、コハクの足を……、下心で見るんじゃなくて、凶器を見る目で見ちゃった……」

シング
「……」

ジェウス
「……」

シング
「……うん、……まぁその、……それも、……仕方ないかな？」

ジェウス

「うん……、恐怖なんだよ……」

シング
「確かに、ね……」

ジェウス
「……」

シング
「……」

ジェウス
「ひ、秘密な……？」

シング
「うん……、この会話は、墓場まで持って行こう……」

・無言の重圧

アニー
「まったく、怪我をしすぎです。ブレイヴさん！」

ブレイヴ
「まあまあ、いいじゃん。死ぬような怪我はしてない訳だし……」

アニー
「起こってからは、遅いんですよ」

ブレイヴ

「大丈夫、大丈夫！
そん時には、またアニーの介抱で……痛い！」

アニー
「あら、すいません。包帯をきつく巻きすぎました」

ブレイヴ
「アニー……」

アニー
「何でしょう？」

ブレイヴ
「……わざとだよな？」

アニー
「そんなことはありません。ともかく、魔物と戦って怪我をするならまだしも、草木に飛び込んで怪我をするなど、今後はないようにしてください」

ブレイヴ
「いや、それは珍しい鳥がだな……」

アニー
「そんなことがあれば、また包帯をきつく巻いてしまいそうです」

ブレイヴ
「はい……。今後はしないように、肝に命じます……」

・似た者同士

エミル
「おらおらおらぁ！
てめぇはそんなもんかよ！」

ジェウス
「……くぅ！」

リッド
「ん？
訓練か？」

ブレイヴ
「エミルとジェウスか」

エミル
「おら、立てよ。それとも、その両手の武器は飾りか？」

ジェウス
「……」

ブレイヴ
「あちゃー……、ジェウス、ブチ切れモード……」

リッド
「え……？」

ジェウス
「くくく……。図に乗るなよ……。ちょっとくらい威勢がいい坊ち

ゃんくらい、俺が捻り潰してやるよ！」

エミル
「ハッハッハ……。安い挑発したこと……後悔するんだな！」

リッド
「うわぁ……、あのジェウスが……」

ブレイヴ
「たまにあることだから、気にしない方がいいと思うよ？」

リッド
「いや、気になるだろ、どうしても……。って言うか、ほどほどに止めないと船壊れないか？」

ブレイヴ
「チャットに怒られるのは、あの二人だし……、ほっとこうか」

リッド
「だな……。さすがに船は壊さねぇか……」

ジェウス・エミル
「ハッハッハ！」

スキット　その5（後書き）

次は原作沿いです。
ＰＳＰプレイの為、投稿は遅れるかもです……。
感想、お待ちしてますｍ（＿＿）ｍ

赤い煙と青い煙（前書き）

いやぁ、この回イベント多いっす（ ∀ ；）
説明文みたいなのが少々長いですが、読んでください。
些細な事でも感想受付中です。
待ってまーす＼（＾ー＾）

赤い煙と青い煙

《ブラウニー坑道》詮索の数日後、約束通り、しいなは文献を携え、アドリビトムへとやってきた。光気丹術とは、やはりというか禁忌で、それを使ったしいなは、ミブナの里の頭領の助言もあり、一時的に里を出、アドリビトムで働くようだ。同時に、ロイド、コレット、すず。と、仲間も連れてきたので、船は一気に賑やかになった（主にロイドとコレットのおかげ（？）で）。更には最近、ウッドロウとノーマの二人も加入したので賑やかさには、拍車がかかっている。……とまあ、重要なのは文献で、リタがしいなに切り込む。

リタ
「ねえ、しいな。光気丹術について聞きたいんだけど……」

しいな
「悪いね。あれは、外部の者には教えられないんだ」

ほぼ即答でしいなが返す。口の固さは流石の忍びだ。

リタ
「興味本位で言ってるんじゃないわ」

しかしリタも食い下がる。ヒトや植物。あらゆるモノを変異させる現象を訴える。光気丹術がそれを解決する糸口だと……。

アレス
「しいな、全部、本当の話だよ……。だからお願い。協力して……。」

しいな
「……わかった」

しいなが頷き、懐から巻物を取り出す。

しいな
「これが「光気丹術経」。人工精霊の作り方やら何やら載ってるけど……あたしには、さっぱりだよ。あんたらにわかるかい？」

ブレイヴ
「大丈夫、大丈夫！」

傍らにいるブレイヴが明るい声を上げる。

ジェウス
「うちの科学者達は変わってるけど……、調べる事に関しては一流だからさ」

ジェウスも呼応するように口を開いた。「光気丹術経」の解読はキールに任せ、リタは早速研究室に入り、光気丹術の研究に取り掛かったようだ。キールに解読をさせるまえに、リタがざっと目を通した様子で、最近リタやハロルドが話してる、ソウルアルケミーと同等だと語っていた。正直、ブレイヴもジェウスも話は知ってるとはいえ、ややこしい理論にはちんぷんかんぷんだ。要約すると、物質には「ドクメント」なるものが存在しており、その物の情報があり、ソウルアルケミーとは、それらを作る、いじるといった技術。とメルディのドクメントを展開しながら説明をしてくれた。

メルディ
「……何か、くらくらするよぅ～」

ドクメント展開の被験者になっていたメルディが、ドクメントを閉じると同時にそう発した。

リタ
「ごめん。無理、させてしまったわね」

本来、不可視のものを、無理矢理可視状態にしたため、メルディに負担がかかったようだ。

ハロルド
「細かいドクメントの展開も危険ね。本当は細かいトコまで解析させてもらいたいけど」

残りの注意点をハロルドが述べる。人工精霊の作り方についても話をしてくれたが……

ブレイヴ・ジェウス
「？？？？」

全くわからない。とにかく、人工的にドクメントを作り、物質に植え付ける。みたいな感じだと、二人は理解した。

――――

数日後、キールの解読具合を伺うと、まだまだ時間はかかりそうだった。と、同時に、赤い煙に会いたいと依頼が来た。場所は《ルバーブ連山》。

アンジュ

「依頼者には悪いけど、私達はその赤い煙を追いましょう。依頼は私から出しとくわ」

ジェウス
「ははあ……。じゃあ、俺も行きます」

手を挙げ、ジェウスはそう答えた。

ジェウス
「なんだかんだで、赤い煙って見てないんで、俺。少しは現物も見ておきたいですし」

アンジュ
「そう。じゃあ、よろしくジェウス君。方法、手段は問わないわ。出来うる限りの調査をしてちょうだい」

それと、民間人を赤い煙に会わせないように、帰らせるようにも言われた。

ジェウス
「ここは……、アレスと会って以来だな……」

アレス
「うん。何だか、あの時会ったのも、懐かしい思い出になっちゃった。エヘヘ……」

ジェウスは、アレス、ティトレイ、メルディと一緒に《ルバーブ連山》へと着いていた。

メルディ

「あそこが人、山登るか？
やめる言わないとダメだな！」

メルディが指差す先には、いかにも俗っぽい二人の男女がいた。

ティトレイ
「おーい、そこの二人。そんな軽装じゃ、この山登れないぜ」

ティトレイの制止に振り返った二人は、願いを叶えてくれる存在に会うために山を登り、金持ちにしてもらうとか夢物語みたいな話ばかりをする。

ジェウス
「残念だけど、そんなのいないよ。諦めて帰んな」

ジェウスが話すと、二人の男女は愚痴りながら、帰っていった。

ティトレイ
「命知らずな上、俗っぽい奴らだぜ。人の欲って、際限ねえからな。あんな連中が私利私欲の為に一斉に願いを叶えまくったら世の中滅茶苦茶になっちまう」

ジェウス
「でもさー、わかんない訳でもないんだよな……」

ティトレイ
「あ？」

山を登りながら、ジェウスとティトレイが話す。

ジェウス
「ティトレイはさ、自分に何の力もなくて、頼れる人もいなくて、何もかもに絶望したとき、願いを叶えてくれる存在……そんな話を聞いた時、それにすがらずにいられる？俺は……自信無いな」

ティトレイ
「そりゃあ……。でも、そいつを自分で乗り越えてこその人生だろ」

ティトレイも言葉に詰まるが、自分の意見を口にする。

ジェウス
「そいつはティトレイの話だな。世の中、そんなに前向きに考えれない人もいるわけ」

ティトレイ
「……」

ティトレイが難しい顔をしだしたので、ジェウスは笑って話をくくる

ジェウス
「まあ、これは極論だ。この世の中、そんなに世知辛くないだろうし、人はその気になれば何でも出来るしな」

メルディ
「二人とも、早くするな！」

アレス
「ジェウスー、ティトレーイ。メルディの面倒、一人じゃ見れないよ……」

ティトレイ
「おっ、遅れてるみたいだな。早いとこ、依頼を済ませて、船に戻っぞ！」

ジェウス
「おう！」

そうして、ジェウスとティトレイは、足早に歩みを進めた。

しばらく行くと、以前まで門が閉ざされ、行けなかったはずの道が、通行できるようになっていた。

メルディ
「きっと、誰か通ったよ」

アレス
「願いを叶える存在に会いに来た人が……？」

四人は顔を見合わせた。

ティトレイ
「ちいっと、急ごうぜ！」

四人はほぼ小走りで山道を駆け上がっていった。山の中腹に着くと、霧がきつくなり、先の視界が悪くなってきた。目を凝らし霧の先を伺っていると……。

ティトレイ
「おい、ありゃ何だ？」

真っ先き声を上げたのはティトレイだった。

メルディ
「光ってるよ！」

四人の目先には……。

アレス
「……紫色？」

身体が光っているが、赤。ではない……。

ジェウス
「違う……！」

ジェウスが、一歩前に出て言った。

ジェウス
「赤と青が重なってんだ！」

その言葉が合図だったかように、その存在は、赤と青のヒトの形をしたものに分離した。

ティトレイ
「人間……じゃねえな。お前らは何だ、何者なんだよ！」

「それ」は質問に答えず、代わりに、一歩前に出ていたアレスとジェウスに、赤と青。それぞれが歩み寄った。

ジェウス
「お前は一体……？」

ジェウスは青の「それ」に話し掛けようとした時、「それ」は空気に溶けるように消えた。

ジェウス
「……！？」

暁の従者・信者1
「いたぞ！
ディセンダー様だ！」

驚く隙もなく、後ろから誰かがやってきた。……暁の従者だ。信者は、異常なまでの妄信で、ディセンダー、ディセンダーと喚いている。ティトレイの制止にも耳を貸さず、閃光玉の様な物を投げ、視界を奪ってきた。

ジェウス
「うわっ！」

アレス
「真っ白だ！」

メルディ
「バイバ！
見えないよぅ！」

光りが収まると、赤い「それ」はどこにもいなかった。

ティトレイ
「やべぇ！
人の手に渡っちまった！
急いで、報告だ！」

ジェウス
「……」
（青い煙も実体かするのか……？
わかんねぇ……）

ティトレイ
「おい、急げジェウス！」

ジェウス
「ああ、今行く！」

ジェウスはもう一度、青い「それ」がいた場所を一瞥してから、急いで下山をした。

――――

アンジュ
「まさか、あの存在が暁の従者に渡ってしまうなんて……」

報告を聞いたアンジュは、さすがに暗い顔だった。

メルディ
「赤い煙が違った。ヒトが姿してたな」

アレス

「赤い煙だけじゃない……。青い煙も姿を持っていた。一緒にいたんだ……」

メルディ
「何でヒトが姿を持っていたかわかんないよぅ……」

ティトレイ
「うすっ気味悪い奴らだったぜ。何考えてるか、まるで読めねぇ……。何となくだが、あいつら、自分が何なのか、どうやらわかってない感じだったぜ」

ティトレイとメルディが個々にあの存在の感想を言う。

アンジュ
「ディセンダー？
いいえ、まさかそんなはずは……。もし、あのまま信仰の対象にされてしまったら、多くの人々に接触して、大変な事になってしまう……」

メルディ
「ジョアンさんみたいに、みんな魔物になってしまうか？」

アンジュの言葉にメルディが不安を隠せず、尋ねた。

アンジュ
「大いに考えられる事ね」

ジェウス
「暁の従者……。とにかく、その存在を、暁の従者が手放す訳はないだろうし、早く、潜伏場所を見つけないと……。それから青い存

在も……」

ジェウスが腕を組んで話すのが終わると、

アンジュ
「あ、そうだ。」

アンジュが思い出したように話を始めた。

アンジュ
「リタの研究に進展があったみたい。今から話を聞く為に、研究室に行きましょう」

ジェウス
「あ、待ってください！
だったらブレイヴも呼んできます。表面上の話だったら、俺が伝えるより、リタの口からの方が理解できるだろうし……」

アンジュ
「分かったわ、じゃあ呼んできて頂戴。」

ジェウスは頷くと、ホールの階段を滑り降り、ブレイヴを呼びに行った。

ジェウス
（青い煙が本格的に、赤い煙と同等の物になってきた……！
僅かだけでも、話をあいつにも聞かせねぇと……、何かヤバい予感がする！）

ブレイヴを呼んだジェウスは、すぐさま研究室に向かう。研究室に

入ると、リタが早速説明を始めた。前回、生物変化の起きた、コクヨウ玉虫を指し、ドクメントの書き換え。つまり、まったく別の物に変化をしていると話された。

リタ
「それに……、このドクメントはあたし達の世界のものではなかったわ。あの赤い煙……だった存在。あれは、あたし達の世界にはない、異質なドクメント。なのかもしれない……」

ジェウス
「ストップ！」

リタの説明を遮り、ジェウスが声を上げる。

ジェウス
「青い煙は？
症例が少ないとはいえ、ちゃんとそっちの話もあるんだろ？」

その言葉にリタは、んー、と軽く息を吐く。

リタ
「結論だけ言うと、赤い煙とまったく一緒ね。不気味なほど……」

ブレイヴ
「まったく……一緒……」

リタ
「とにかく、そいつらが、どこからどうやって現れ、目的が何かもわからないわ」

会話が一度中断し、しばらく経ち、しいなが口を開く。

しいな
「願いを望む人のドクメントを覗き、学習、進化をしているとしたら……どうだい？」

ティトレイ
「人はそうかもしれねえが、虫や植物の変化はどう説明するんだ？そいつらにも意思や、願いがあるってのか？」

ブレイヴ
「あるさ。虫や植物も生きてるものだよ」

ジェウス
「生きたいという思い。生きとし生けるものは誰もが思うもんだ、ティトレイ」

しいなが答える前に、ブレイヴ、ジェウスの二人が口を挟む。

しいな
「二人の言う通り……、生存欲ってもんがあるのさ。瀕死、絶体絶命の境地の生物の意識は絶大だよ」

説明を聞いても、ティトレイは首を捻っている。すると、しいなは具体例を見せると言って準備を始めた。サボテンのドクメントを展開したと思えば、火を見せ、サボテンを燃やす。と言いはじめた。すると……サボテンのドクメントが異常なまでの反応を見せた。

しいな
「ごめん、試させてもらったよ……」

しいなはサボテンに向かいそう言った。その後のしいなの説明を二人は覚えていない。目の前で実際に見た、生物の生存欲に驚きを隠せなかった。端々の説明は後にしいなに聞き、赤い煙、青い煙は、星晶が枯渇し、生存欲に駆られた植物、虫に、それが反応。標的は、ヒトになり、ドクメントを覗き学習。これが仮説された話のくくりだった。二人も中途半端に忘れていた話の内容も思いだしてきた。

ブレイヴ
「なあ、ジェウス。改めて言うけどさ……」

ジェウス
「あん？
何だよ……？」

ブレイヴ
「遊びじゃ……さすがに済まなくなってきたな俺達……」

ブレイヴの真剣な顔。かなり珍しいと言っていい。

ジェウス
「ああ……。青い存在なんて不確定要素まで現実になっちまった……。この先は、ホンットにわかんねぇ……」

ジェウスは顔を両手で覆い、盛大にため息をついた。

ブレイヴ
「俺達が追おう、ジェウス……。青い存在を！」

ジェウス

「不確定要素は……、先に潰すべきだよな！」

二人は決めた。青い存在を追うことを。これが長い戦いの……やっと始まり……。

赤い煙と青い煙（後書き）

ふぅ、書くのが大変だったですね、この話は……。
次は閑話なんで、1、2週間程で仕上がると思います（－．－；）

真犯人は誰だ！（前書き）

今回、初めて視点を第三者ではなく、W主役の一人、ジェウス視点で書いてみました。
↓では、どうぞ

真犯人は誰だ！

ジェウス
「ふぇー、疲れた、疲れた……。ただいまー」

俺が討伐依頼を済ませ、ホールに入ると、白を基調とした服に刀を提げた、まぁーイケメンの男と、紫色の長い髪をツインテールにした少女がいた。

ジェウス
「アンジュさん、どなた？」

ま、知ってるが、聞かないのは失礼だし、そもそも名前をちゃんと聞くのは礼儀だ。

アンジュ
「あら、いいとこに帰ってきたわね、ジェウス君」

デフォルトの笑顔。黒くない笑いの分、良かったと思う。

アスベル
「アスベル・ラントだ。まあ、その……、いろいろあったが、このギルドの厄介になることになった。よろしく頼む」

うん、礼儀正しいな。好感度が持てる。

ジェウス
「おう、よろしくっ！」

次にツインテールの少女。

ソフィ
「私、ソフィ。アスベルがそう呼ぶから……」

アスベルの後ろに隠れながら言われた……。最初ってどうすればいいの？

ジェウス
「ん、よろしくな……」

とりあえず、目線を合わせて、優しく言ってみる。

ソフィ
「よろしく……」

……ま、返事を返してくれた分、良かったのかな？
おっと、俺の話、俺の話……。

ジェウス
「ところで、アンジュさん。……風呂って沸いてる？」

汗、ヤバいんです。

アンジュ
「んー、ロックス君に聞いてみないと、分からないわね」

ジェウス
「じゃあ、聞いてみます」

とにかく、早くこの身体の不快なベタベタを洗い流したい。

ロックス
「お風呂ですか？
ええ、沸いてますよ！
先程、女性の方々が向かってましたし」

ラッキー！
ベストタイミングじゃん！

ジェウス
「じゃあ、タオル、タオル！」

ロックス
「はいはい……。どうぞ」

ジェウス
「ひゃっほう！
浴びるぜっ！」

我ながら、意味が分からんテンションだ。

ジェウス
「あ〜あ〜」

湯舟にゆっくり浸かるとこんな声出すよね？
他には誰もいない、貸し切り状態だ。
あれだ、あれ。今、「カポーン」って擬音がしっくりくる。

ジェウス

「くあ～、気分爽快！」

風呂を出て、そんなこと言いながら、ちょっと。ホントにちょっと歩いていると、幾多の足音が近付いてきた。

しいな
「ジェウス！
あんたかぁっ！」

は？

ルビア
「最低！」

なにっ？

マルタ
「変態！」

ジェウス
「待てやぁぁ！
何だ、急に！？」

風呂入ってただけだぞ！？

しいな
「とぼけんじゃないよ！
あんた、風呂覗いただろう！」

……はあぁぁ！？

ジェウス
「んな事、するわけないでしょーが！」

ルビア
「お風呂から、すぐ出て、すぐに会ったのがあなたなのに、疑わない訳ないでしょ！」

ジェウス
「そんなこと言われても！？」

そのあとしばらく、女性三人の言葉のマシンガンに、俺のハートは蜂の巣になったが、何とかして、俺の疑惑を晴らすことができた。

ジェウス
「……」

しいな
「ご、ごめん……、ちょっと頭に血が上ってて……」

……

ルビア
「あの……、その……、ごめんなさい……」

……

マルタ
「……ちょ、ちょっと、周りが見えなくて……。……すいません……」

やめて！
それ以上謝らないで！
逆にこっちが辛いよ！

ジェウス
「と、とにかく、覗かれてたのは事実？」

しいな・ルビア・マルタ
「絶対！」

あらー、おかんむり……。真犯人はご愁傷様……。っつーか、俺も真犯人見付けないと気が済まなくなってきた！
そいつのせいで俺のガラスのハートがっ！

ジェウス
「そいつ、俺が捕まえてやるっ！」

しいな・ルビア・マルタ
「は？」

ジェウス
「ぬけぬけと、俺に罪を被せやがって……」

冷静に考えれば、偶然だが。

ジェウス
「真犯人の拷問は、三人とハロルドさんに任せたっ！
目星は三人、ぜってぇ取っ捕まる！」

というわけで、早速その三人の元へ向かう。

容疑者１：チェスター

チェスター
「ん？
その時間なら、リッドと一緒に狩りに行ってたぜ。何ならリッドにも聞いてみたらどうだ？」

容疑者１：チェスター……白

……

容疑者２：スパーダ

スパーダ
「あぁ？
そん時は、確か……あぁ、ロイドの奴と一緒に訓練してたはずだぜ。曖昧だから、ロイドにも聞いてみてくれ」

容疑者２：スパーダ……白

……

容疑者３：レイヴン

レイヴン
「なに？
そん時おっさんはねぇ……依頼の帰りの途中だったかしら？
……疑ってる目ねぇ。ユーリの青年とジュディスちゃんも一緒だっ

たから、ちゃんと証明してくれるわよ」

容疑者３：レイヴン……白

……

ジェウス

「うあぁぁ……。目星が全員、白だと……。一体誰なんだよ、犯人は……」

覗きをしそうな人物なんて他には……

？？？

「よぉ～！

なにかお困りですかい？

……って野郎かよ。髪だけで判断しちまったよ……」

おいおい、ちょっと待てや……。

ジェウス

「待てや……」

俺はそいつの襟首をむんずと掴んだ。

？？？

「おいおい、なによ？」

ジェウス

「まず、名前を聞こうか？」

一応年上だが、今は関係ねぇ。

ゼロス
「俺様？
才色兼備、ゼロス・ワイルダーとは、俺様のことよぉ！」

よし、取り調べ開始。

ジェウス
「そうか……。俺は、ジェウス・フレード。基本、年上には敬語で接する様にしてるが、悪いが、今は控えさせて貰う」

ゼロス
「……な、なんか怖いよ、ジェウスくーん……」

怖くしてんだから当たり前だ。

ジェウス
「不躾だが、午後3時半頃、何してた……？」

ゼロス
「え、え？
そ、そりゃ、俺様真面目だから、勉強を……」

ジェウス
「な・ん・の？」

ゼロスの冷や汗なんか、無視だ。

ゼロス

「……保健体育？」

おーおー、目も逸らしてきたぜ？

ジェウス
「ど・こ・で？」

ゼロス
「あ、あれだよ、あれ！
みんながゆっくりできて、落ち着ける空間……」

ジェウス
「端的に！」

ゼロス
「……風呂」

ジェウス
「覗いたんだな？」

ゼロス
「……はい」

よし、吐いた。

ジェウス
「研究室でみんながお待ちかねだぜぇ……」

ゼロス
「ま、待てよぉ！

風呂を覗くのは、男のロマンだぜ？」

ジェウス
「そうか。でも……」

ゼロス
「でも……？」

ジェウス
「俺に罪を被せたのが、失敗だ」

その後、ゼロスは何かと喚いていたが、研究室まで引っ張っていった。（ズルズルと）

しいな
「あんたかぁ！
ゼロス！
来て早々、覗きをするとは思わなかったよ！」

だから、容疑から除外されてたのか……。

ジェウス
「ハロルドさん。……「殺さない」程度にお願いします」

ハロルド
「りょーかーい」

ハロルドさんの後ろにあった、ゴツい機械は見なかった事にしよう。
そして、研究室を出た後、研究室の中から聞こえたゼロスの悲鳴もなかったことにしよう。

……後日談

ジェウス
「改めて、よろしくお願いします！
ゼロスさん！」

ゼロス
「ジェウス君……もう「あれ」はやめてくれよな……」

ジェウス
「いいんですよ、覗いてもー！
ただ、俺に罪を被せなきゃいいんですよ……」

ゼロス
「なーんだ、話わかるじゃないのー、ジェウスくーん！」

ジェウス
「覗きはロマン。わかりますよー！
俺はやらないですけどねー！
ばれたら、殺される。じゃあ済まないです……」

真犯人は誰だ！（後書き）

閑話ですが、アスベル、ソフィ、ゼロスの三人が一気に加入です。
今月はこれがラスト投稿か……？
まあ、気長に書いていきますよ＼（＾ー＾）／
感想もよろしくお願いします！

判明する敵の名前（前書き）

いや、駄文過ぎる……。
生暖かい目でみてください……。

判明する敵の名前

ブレイヴ
「地面でこぼこしすぎっ……」

アレス
「足元悪いよ……」

ジェイド
「文句は、こんな所に潜伏する「暁の従者」に言ってください」

アンジュ
「ちゃんと足元確認しながら歩きなさい」

今回、アドリビトム一行は、「暁の従者」が潜む、《アルマナック遺跡》にブレイヴ、アレス、ジェイド、アンジュの４人で侵入していた。情報を提供してくれたのが、《ライマ国》の要人、王女ナタリア、護衛の二人ジェイドとティアだった。三人は国で暴動が起こり、身を隠すため、アドリビトムにやってきて、そのまま加入。という形になった。

アレス
「にしても……ろくな事してくれないね「暁の従者」。ジェイド達の国の暴動だってそうなんでしょ？」

足元を確認しながらアレスが愚痴る。

ジェイド
「そうですね……まったく、「暁の従者」に悪意がないのも困った

ものです……」

やれやれ、と言わんばかりにジェイドがため息をはく。

アンジュ
「彼らは、自分達の信仰をまっとうしているだけだものね……」

ブレイヴ
「力がないから、力あるものに助けを求める……。人間本来の行動としては、当たり前の事なんだけどな……」

ジェイド
「ですが、彼らのやる事は常軌を逸しています」

眼鏡の奥の、赤い瞳がブレイヴを射ぬく。

ブレイヴ
「分かってるよ、そんなきつい目をしなくても」

ブレイヴは、手を頭の後ろで組みながら、ジェイドに返した。

アレス
「ところどころ、通路は塞がってるけど、奥には行けそうだね」

通路の先を見ながら、アレスが呟く。

ブレイヴ
「とっとと、行こうぜ」

魔物を打ち倒しつつ、足早に通路を歩いた。少し広い場に出たかと

思うと、二人の従者がそこにはいた。一人は、授かったと言う力で、数キロもありそうな石の塊を浮かせていた。しばらくすると、こちらの足音に気付き、向こうから話しかけてきた。

暁の従者1
「なんだ、お前達も同志になりにきたのか？」

アンジュ
「いいえ、そうではないの」

アンジュがきっぱりと否定の言葉を述べた。

ジェイド
「あなた方がディセンダーと呼んでいるものを引き渡してもらいます」

ジェイドが言葉の二の次を次ぐ。

アレス
「あれはディセンダーなんかじゃなくて、もっと危険な存在かもしれないんだよ」

最後にアレスが言葉を締めくくった。

暁の従者1
「……危険な存在だと？
馬鹿なことを！」

暁の従者2
「今は誕生されたばかり。予言通り、名前以外何も記憶はない。だ

が、今この奥でこの世の事を学んでおられるのだ！」

ブレイヴ
「……めんどくさい」

そこで黙って聞いていたブレイヴがボソリと呟いた。

暁の従者1
「なんだと？」

ブレイヴ
「要するに、そのディセンダー様は、会わせれない、渡せれない、加えてこの先には行かせれない。ってとこか？
……だったら御託はいい」

鞘から剣を引き抜き、切っ先を暁の従者に向ける。

ブレイヴ
「力ずくでも、そいつに会わせてもらう」

ジェイド
「やれやれ、血の気が多いですね。あなたも、この方々も」

アンジュ
「でも、今となっては仕方ないわね」

アレス
「確かに。それしかないよね」

各々に武器を構え、戦闘の姿勢を見せる。

暁の従者１
「ククク……。我等に勝てると思うな！
ディセンダー、ラザリス様より授かった力、とくと見よ！」

従者の二人は、一般的な格闘術の構えをとり、向かってきた。自身の強化も術により行ってはきたが、やはり授かった力は伊達じゃなくすごい。一人は、格闘による近接攻撃に長け、一人は、術による遠距離攻撃に長けていた。しかし……

ブレイヴ
「襲爪、雷斬！」

アレス
「エアスラスト！」

アンジュ
「レイ！」

ジェイド
「セイントバブル！」

……四人の猛攻の前に、従者の二人は膝をついた。

暁の従者１
「くっ……、やるな！」

暁の従者２
「だが、まだ屈しはせんぞ。一部の者ばかりが益を得る腐った世の仕組み。必ずやディセンダー様が打ち砕く！」

余りにも都合がいい言い訳に、ブレイヴの中で、なにかが弾けた。

ブレイヴ
「「一部の者ばかりが益を得る」……？
馬鹿じゃないの？
あんたらがそうじゃん！
自分達が強くなってどうすんのさ！
何？
あんたらが望むその世界って、独裁の社会！？
一瞬だけでも、あんたらを保護する発言をしてた俺が情けないよ！」

ブレイヴ自身は静かに話したつもりだが、収まりきらない激昂が言葉の端々に滲んでいた。

暁の従者１
「黙れ！」

従者が反論しようとした――その時。従者の二人の周りに、あの赤い煙が二人を包むように現れた。

暁の従者１
「何だ……、これは……？
身体が……、身体がぁぁぁぁ！」

そして……、赤い煙が晴れた時、二人の身体は見るも無残な、無機物のような身体になっていた。

暁の従者２
「ヒィッ！？

な、何だっ、この姿は！」

アンジュ
「まさか……、生物変化現象！？」

暁の従者２
「あぁぁ、……なぜ。なぜだ、なぜ！
……こんな姿に。ラザリス様……。ラザリス様……助けて下さい……。ディセンダー、ラザリス様ぁぁぁ！」

先程の態度とは１８０。変わり、ほとんど泣くような声で、従者の二人は遺跡の奥へと逃げていった。

ブレイヴ
「追わなくても……？」

ジェイド
「出入り口は、私達が入って来たあそこだけのはずです。慌てなくてもよいでしょう……」

眼鏡のブリッジをあげながら、ジェイドが答える。

ブレイヴ
「あんな事が起きても、自らの「神」って信じるんだな。人間って怖……。ま、あいつらだったら、例え「神」が「悪魔」だったとしても、おんなじ事をするんだろうな……」

アレス
「だったら、尚更止めないと。行くよ、ブレイヴ」

四人は歩を進め、遺跡の奥へと向かう。

ジェイド
「時に……。ブレイヴ、あなたは、魔術の心得がありますね？
それも、かなりの……」

ブレイヴ
「……？
あぁ、まぁ確かに？」

突然の質問に「？」となったが、曖昧な返事を返した。

ジェイド
「どこで覚えたのでしょうか？」

これには、ギクッとした。
今まで触れてこられなかった分、この発言は不意打ちだった。

アンジュ
「そうよねぇ……。言われてみれば……」

アンジュも追い撃ちをかけるように、会話に入ってくる。

ブレイヴ
「い、いや、あれだよ、あれ！
何となく、何となく！
何となく使ってみたら、使えたよー。みたいな！？
そこまで深いワケはないから！」

アレス

「そうだよ。記憶のない僕も、何となくで使えてるし」

アレスの天然フォローもあり、何とか取り繕えたが、ジェイドはまだブレイヴをジッと見る。

ジェイド
「ほお……」

ブレイヴ
（ゴクリ……）

ジェイド
「……わかりました。いえ、少し気になった程度ですので、気にしないで下さい」

目の笑わない笑顔でそう言い、ジェイドはブレイヴから目を離した。

ブレイヴ
（こえー、こえー……。神様からもらった力とか、言えるわけないじゃん……。ジェイドの鋭さには、参るよ……）

心の内でそう思い、ブレイヴはアレスと共に先頭を歩いた。

アンジュ
「なぜあんなことを聞いたんですか？」

アンジュがそっとジェイドに質問する。

ジェイド
「彼の戦い方は、魔術と剣技を駆使した戦い方です。もちろんそう

であれば、魔術の方は、本職の魔術師に敵わないはずなのですが……」

アンジュ
「ですが……？」

ジェイド
「彼の魔術は、その本職の魔術師に比べても、ほとんど遜色はありません……。異世界から来た……とうかがっていますが、彼の相方も気になるところですね」

アンジュ
「そうね……、ブレイヴ君も、ジェウス君も、自分達の話については、はぐらかすところがあるから……」

ジェイド
「ふむ……」

そこでジェイドは一度腕組みををし、思考に浸る。

アンジュ
「いずれは本人達の口から話してくれるでしょう。私はそれを待ちます」

ジェイド
「そうですか。ギルドのリーダーであるあなたがそう言うのであれば、私もそうしましょう」

そう言って、ポケットに手を入れ、ジェイドは歩みを進めた。
……遺跡の一番奥に着くと、はいつくばる先程の二人の前に、一人

の少女が立っていた。

アンジュ
「あの子が……あの、赤い煙だったもの……？」

余りにも幼い少女の姿にアンジュは驚きを隠せない。

ラザリス
「誰……？」

か細い声で、ラザリスは尋ねてくる。

アンジュ
「あなたは一体何者なの！？」

ラザリス
「ラザリス……。僕はラザリス……」

アンジュ
「あなたが人々の願いを叶えてきたの？
願いを叶えるのはなぜ？」

その質問にラザリスは、小さく「ふぅ……」とため息をついたように見えた。

ラザリス
「……どうしてかな？
実のところ僕にもわからない。けども、君らから少しずつ世界を知るには、都合が良かったからだと思う」

ジェイド
「あなたが願いを叶えた生物から、学習した。こういう事ですか？」
表情はさすがのジェイドも硬いが、臆せず尋ねる。

ラザリス
「そうなるかな。「願いを叶えて」と、向こうから僕に接触して来たからね。この世界に出たばかりの時は、僕にも接触する能力がなかった。でも、やがてあらゆる生物が僕の方へ手を伸ばしたんだ。願いを叶えるという意志のコネクトを通じて、僕はこの世界の生命力と情報を少しずつ手に入れた」

一貫して、か細い声のままだったが、伝わることは伝わった。

アレス
「しいなの仮説が……当たったね」

ラザリス
「おかげで実体も思考も手に入れた。思う存分、僕の好きな様に力を振るうことが出来る」

途切れそうな会話に、アンジュが更に質問をする。

アンジュ
「あなたは、さっき世界の生命力と情報を手に入れたと言ったけれど……、あなたは、ヒトじゃない。……何者なの……？」

その質問に、ラザリスの言葉はいくらか熱を帯びた。

ラザリス

「僕は、この世界ルミナシアの様に、誕生するはずだった「世界」だ」

アレス
「誕生……するはずだった？」

ラザリス
「ああ……、ああ……！
この世界にはうんざりだ！
僕ならもっといい世界になるはずだった！」

突然ヒステリックになったラザリスに、ブレイヴを除く三人は驚いた。

ラザリス
「こんな、腐りきった世界をもたらすヒトがいる世界なんて、僕なら造らなかった！」

尚も叫ぶラザリスが左手を薙ぎ払った。

ブレイヴ
「……！
伏せろっ！」

だが、一歩反応の遅れた四人は、衝撃波で吹き飛ばされた。通路の奥まで飛ばされた四人に、悠然とラザリスが近付く。

ラザリス
「君も何故こんな者達を守ろうとするんだ。わからないよ……ディセンダー……」

そう言うと、ラザリスは四人に背を向けた。

ブレイヴ
「待て……よ……」

微かに意識を保った、ブレイヴがラザリスを精一杯の声で呼び止める。

ラザリス
「……へぇ。人間の割に、頑丈だね」

ブレイヴ
「ラザリス……。お前と一緒にいた青い煙……。あれは……何だ……！？」

ラザリスは考えるそぶりも見せないが、数秒のち、答えた。

ラザリス
「……シリウスの事かな？
あいつも僕と同じさ。兄妹、って言うのかな、これって」

ブレイヴ
「シリウス……。兄妹……！？」

ラザリス
「質問には答えた。僕は行く」

その言葉を最後に、ラザリスはフッ……と消えた。

ブレイヴ
「ぐっ……。アレス、アンジュ、ジェイド！」

呼んだが、返事がない。死ぬような衝撃ではなかったはずなので、おそらくは気を失っているとブレイヴは予想した。

ブレイヴ
「ハァ……、ハァ……。ヒールウィンド！」

ブレイヴが唱えると、回復と風の魔術による魔法陣が展開され、魔法陣に触れた三人の意識が戻ってきた。

アレス
「うぁ……。ブレイヴ……？」

ブレイヴ
「お目覚めか？
悪いけど、代わりに俺は寝る……。意識が……」

アレス
「いいよ寝といて……。僕とジェイドで船まで運んであげるから……」

ブレイヴ
「サンキュ……」

ブレイヴはゆっくりまぶたを閉じ、意識を闇に預けた。

……

ブレイヴが目を覚ますと、医務室だった。

ブレイヴ
「……んん」

顔を横に向けると、椅子に座っているアニーと目があった。

ブレイヴ
「……おはよう」

アニー
「夕方です」

ブレイヴ
「おそようございます……」

ハァ……とため息をつくアニー。

アニー
「あなたとジェウスさんは、よっぽどこの部屋に縁がありますね……」

ブレイヴ
「今回は怪我じゃないぶん、勘弁……」

アニー
「わかってます。アレスさんにも、言われましたから」

ブレイヴ
「ふーん。気がきいてるねぇ」

軽く笑いながらそんなことを言ってみる。

アニー
「何か身体の調子に異変は?」

ブレイヴ
「異変……」

ぐうぅぅ……

ブレイヴ
「腹減った……」

そんなブレイヴの様子を見て、アニーはクスクスと笑った。

アニー
「もうすぐ夕飯です。今日の当番はナナリーさんですから、おいしいはずですよ」

ブレイヴ
「よかった……。あっ……報告!」

ラザリス本人から聞いた話を報告してない。

ブレイヴ
「ちょっとアンジュに話があった。俺しか聞いてない話だから、話さないと……」

ベッドに倒れていた身体を起こし、ブレイヴはホールへ向かった。

……

アンジュ
「シリウス……。それが青い煙の名前？
兄妹って事は……」

ブレイヴ
「多分ラザリスと一緒……。ヒトの願いを叶えて、知識を吸収して形を成してきてると思う……。違うか……、「もう形を成している」かな……？」

アンジュ
「……どこかにいるのかな？」

ブレイヴ
「そん時は、俺が行くさ！
ほら、暗い顔しない！
リーダーなんだから、そんな顔せずに！」

ブレイヴが笑って言うと、次第にアンジュの顔も明るさを取り戻した。

アンジュ
「……そうね。私がこんな顔じゃ、みんなに不安を与えてしまうわね。うん、頑張りましょう！」

しかし、アンジュとの会話を済ませたブレイヴの顔は、余裕をなくしていた。

ブレイヴ
（シリウス……。新たな敵……。まあ……名前がわかっただけで進歩か……）
心で呟いたブレイヴの足は、ジェウスへの報告のため、部屋に向かっていった。

判明する敵の名前（後書き）

うぅ、キツ……。

完結までは頑張りますので、応援はよろしくお願いします……。

「流れ落ちた二つの新星」予告編（前書き）

はい、これは夕影さんの

テイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー３　―そして、僕の伝説―

の中の

ｉｆ閑話―『予告』という名の何か―

を見て、「自分も予告、書いてみたい！」って思ったので、参考にさせていただきつつ、書きました。

もちろん、筆者の夕影さんには許可はいただきました。

※ネタバレ要素アリ

エクシリア並のＰＶを想像（もとい、妄想）しつつ、見てください！

「流れ落ちた二つの新星」予告編

――遂に出会う謎の存在、シリウス――

ブレイヴ
「お前が……シリウス……！」

ジェウス
「何か、喋ったらどうだ！」

シリウス
「君達は……誰……？」

――シリウスという存在――

シリウス
「おかしいのは、僕か……？
自らの世界を助けたいと思うことの何が悪い……？」

ジェウス
「――俺達とお前達が共に生きる未来は、いくらでもあるだろ！？」

シリウス
「綺麗事だ……。――所詮は理想論……。――食うか食われるか…
…それが世界の理（ことわり）さ……」

ジェウス
「……！」

――揺らぐ、戦いの意思――

ブレイヴ
「ふざけんなよ！
ここまできて、逃げようとすんなよ！」

ジェウス
「じゃあ、あいつを殺すのか！？
俺達の自分勝手なエゴのために！」

ブレイヴ
「殺すんじゃない！
あいつを救うんだよ！」

ジェウス
「……あいつは言っていた。「所詮は理想論」だってな！
お前の言っているそれも理想論か！？
俺は！
俺は……もう自分がどうすればいいか……わからない……」

ブレイヴ
「……馬鹿野郎が！」

――ぶつかり合う、新星達――

ブレイヴ・ジェウス
「魔神剣（拳）！」

カノンノ
「もう、止められないの……？」

ロックス
「もはや……見守るだけしかありません……」

ブレイヴ・ジェウス
「うおぉぉぉ！」

――遂に明かす、自らの真実――

ブレイヴ
「――話すときだ。みんなに俺達の真実を伝える……」

ジェウス
「――にわかには信じがたい話だけど――俺達は――」

――決意を決めて――

ブレイヴ
「アンジュ……。伝えたい言葉があるから……俺達は……必ず帰ってくるからな……」

アンジュ
「ええ……必ず帰ってきなさい……。みんなが待っているから……」

ブレイヴ
「ああ……」

――――

ジェウス

「じゃ、行くか……」

アレス
「もう、迷いはない……？」

ジェウス
「迷ってたら、ついていかない……。もう迷わないよ」

アレス
「わかった……」

――そして……――

ゾブリ……

ブレイヴ
「ガハッ……！」

ドゴン……！

ジェウス
「ゲフッ……！」

――血の溜まりに……横たわる二人……――

シリウス
「死んだか……」

カノンノ
「ブレイヴ……？

ジェウス……？」

アレス
「……目を開けてよ……。二人とも……。……動いてよっ！
ブレイヴっ！
ジェウスっ！」

カノンノ
「死んじゃ駄目っ！
お願い！
目を開けてよ！」

シリウス
「息の根を止めた……。オワッタンダ……」

カノンノ
「そんな……。嫌……、嫌ぁぁぁ！」

――二人は……どうなる……？――

「流れ落ちた二つの新星」予告
来年二月完結？

「流れ落ちた二つの新星」予告編（後書き）

……満足！

この予告の場面に向かって、頑張って物語を進めていきますっ！

ありがとうございましたっ！

～ユニーク100000記念～　ゼロスとジェイドのゴールデンビクトリー！（前

ゼロス
「あー……、あー……。マイクテスト、マイクテスト……。よし、いくぜ！」

ジェイド
「諸注意です。この作者の文才のせいで、内容はグダグダです。悪しからず。それと、「こんなのＧＶじゃねーよ！」……的な発言は作者が泣いてしまいます。大目に見てあげてください。それでは……」

～ユニーク10000記念～　ゼロスとジェイドのゴールデンビクトリー！

ゼロス
「レディースアーンドジェントルメーン！
今宵、この小説を読んでくださった方だけに！
お届けするスペシャルプログラァァム！
司会はお馴染み、このコンビ！」

ダン！

ゼロス
「テイルズオブシンフォニアより、ゼロス・ワイルダー！
いい子にしてたかい、俺様のハニー達ぃ！」

ジェイド
「テイルズオブジアビスより、ジェイド・カーティスです。いやー、
こんな所でもあなたと共演するとは……。つくづく、奇妙な縁です
ねぇ」

ゼロス
「だよなぁ……、お前さんとはＰＳＰ版テイルズオブデスティニー
２特典、レディアントマイソロジー２特典、その他もろもろ……。
コンビを組むことが多いよなぁ……」

ジェイド
「これも、中の人の影響でしょうが……（……ボソリ）」

ゼロス
「あ？

何か言ったかー？」

ジェイド
「いいえー！
何でもありません」

ゼロス
「何だよ……。しかし俺様、今日の出演者を知ってるんだよねぇ……」

ジェイド
「おや、どうしました？
テンションが低いですよ？」

ゼロス
「あんただって知ってるでしょーが！
今日の出演者は……女の子がいなーい！」

ジェイド
「そうでしたか？」

ゼロス
「そーなんだよ！
野郎ばっかの、むさ苦しい空間で司会なんかしたくねーよ！」

ジェイド
「出演者登ー場！」

ゼロス
「無視すんなよ！」

ブレイヴ
「……」

ジェウス
「……」

アレス
「……」

ジェイド
「どうしました？
登場してくれないと進まないじゃないですか？」

ブレイヴ
「……出づらいわ！
あんなに嫌々オーラだされたら！」

ジェウス
「俺達、仮にも出演者なんですから、もっと盛り上げてから呼んでくださいよ！」

アレス
「あ……、二人と同意見で……」

ジェウス
「やれやれ……、しょうがないですねぇ……。ゼロース！
総合司会、もっと盛り上げ……何帰ろうとしてるんですか？」

ゼロス

「ギクッ……。女の子呼びに……。いや、せめて一人くらい女の子がいないと、俺様モチベーション上がらないというか……」

ブレイヴ
（ゼロス……。ゼロス！）

ゼロス
（何だよ？）

ブレイヴ
（安心しろ。二人呼んでる！）

ゼロス
（マジかよ！）

ブレイヴ
（ああ、一人はすぐ来る。もう一人は……まあ、少し特別だから、時になれば来るよ）

ゼロス
「よーし、俺様頑張っちゃうもんねー！」

ジェイド
「では、早速やり直しましょう」

ゼロス
「この小説の主人公達！
ブレイヴ・テンダー！
ジェウス・フレード！
アレス・カレイジャス！」

ブレイヴ
「こんちわ！」

ジェウス
「どうも」

アレス
「よろしく～」

ゼロス
「で？
で！？
女の子はどこよ～？」

ブレイヴ
「興味持てや、俺達に！」

ジェイド
「ここは円滑に司会を進めさせるため、お願いします」

ジェウス
「ジェイドさんまで……」

アレス
「あはは……。いいよ、呼んじゃおうよ。カノンノ！」

カノンノ
「こんにちは！
レディアントマイソロジー3、メインヒロイン、カノンノ・グラス

バレーです！」

ジェウス
「恥ずかしくない……？
自分で「メインヒロイン」って言うの……」

カノンノ
「あは……、あはは……」

ゼロス
「カノンノちゃーん！
むさい男ばかりの空間に、まさに、オアシスのような存在！」

ブレイヴ
「あ、手は出すなよ。アレスとカノンノは「アレ」で「あーなってこうなる」、「コレ」な関係だから」

ジェイド
「なるほど！
そんな関係だったんですか！」

ジェウス
「確かに……」

ゼロス
「うわ……、俺様テンション、がた落ちー……」

アレス
「ええ！？
今のでみんな分かるの！？」

カノンノ
「「アレ」とか「コレ」しか言ってないよ!?」

ブレイヴ
「通ずるものがあるんだよ……」

カノンノ
「何、その謎の連携!?」

アレス
「というか、四人の通ずるものが、目を凝らしても見えてこないよ……」

ジェイド
「さて、閑話休題。
ここに集まっていただき、話すテーマは……」

主人公達のキャラを振り返ろう!

全員
「・・・・」

ジェイド
「おや、どうなさいました?
皆さん固まって?」

ジェウス

「……ジェイドさん。気付いてるでしょう……」

ジェイド
「そうですね。薄々……」

アレス
「振り返る程の歴史が無い」

ブレイヴ
「じゃなくて！
この小説ここまで読んでくれた方には、不要のテーマじゃねーか！」

ゼロス
「おいおい……。もはや、この話の意味が無くなってきたぜ……？」

カノンノ
「いいじゃない？
もう一度、みんなの事知ってもらおう！」

ゼロス
「そう？
カノンノちゃんが言うなら、俺様司会進めちゃう！」

ブレイヴ
（俺達の選択権って……）

ジェウス
（ああ……、無いに等しいな……）

アレス

（司会があれじゃ、実質、選択権はカノンノが全部握ってるよ……）

ジェイド
「ならば、最初に……恋に悩める少年、ブレイヴ・テンダー！」

ブレイヴ
「変な通り名を付けんなぁ！」

ジェウス
「え？
これって、俺達も付けられるの？」

アレス
「さすがに、嫌だなぁ……」

ジェイド
「ブレイヴ・テンダー。現世から、ルミナシアに飛ばされた、純人間。神様の力により、剣技、風の魔術に優れた魔法戦士となる」

ゼロス
「ちょっと待ったぁ！」

ブレイヴ
「いきなり何だよ！？」

ゼロス
「俺様と技の性質が被ってんだよ！
剣技！
風の魔術！
それに職業名まで一緒じゃねーか！」

ジェイド
「それについては、この小説の作者も気付いていたようですね」

ゼロス
「だったら何で！？」

ジェイド
「思い悩んでいたそうですが、「あれ、ウッドロウやスパーダもおんなじ感じか……。だったらいいか♪」みたいなノリで、変更はナシ、になったそうです」

ゼロス
「納得できねー！」

アレス
「いや、納得しないとまずいよ……」

カノンノ
「作者の権限で、この話の台詞なんて、簡単にカットされるよ……」

ゼロス
「ハッ！
やれるもんなら、やってみ

※ゼロスの台詞はカットされました。（ＢＧＭ……カノン）

ジェイド
「さ、続きを……。ん？
ゼロスが何か喋ってますねぇ……。なになに……。

「もう暴言は吐きません。今一度、チャンスをください」
……だそうです」

※ゼロスの台詞カット、解除

ゼロス
「……べらせてくれー！
は！
ハァ……」

ジェイド
「改めて……おや、あなたは高い所が苦手なんですね……。これは良いことを聞きました……」

ブレイヴ
「残念。ルカのお陰で、大分治ったよ！
甲板くらいなら出れる」

ジェイド
「下は覗けます？
自由落下は？」

ブレイヴ
「さすがにそこまでは……」

ジェイド
「ほほう……（ニコリ……）」

ブレイヴ
「……あんたには、絶っ対ついてかない！」

ジェイド
「余談ですが、この設定のお陰で、裂空斬系や、閃空裂破系のような、激しく回転しながら宙に飛ぶ剣技は、あなたは封印されたそうです」

ブレイヴ
「理に適った設定だよな……。あんなブンブン飛び回るみんなの方が、信じられんわ……」

ゼロス
「そして謎の機械通……」

ブレイヴ
「あー、あれね。スキットでちょびっと見せた俺の特技……。機械の理屈とかよくわかんないんだけど、ばらして……チョチョイ！……ってやると、直るんだよね。あはは～！」

ジェウス
「それは特技と言うより……」

アレス
「びっくり人間に近いよね……」

カノンノ
「そっか、この設定が後々重要に……！」

ジェイド
「いえ。これは皆との絡みのために備わったモノのようです。したがって、物語の根本には何の関係も無いようですよ？」

ブレイヴ
「意味無し……」

ジェイド
「いいじゃありませんか。お陰で、チャット、リタ、これから出る、ガイ等の皆さんとの絡みが期待できます」

ゼロス
「何だ？
今日は、やけに毒舌が出ねーじゃねーか、ジェイド」

ジェウス
「ああ、違います違います……。いじるべき要素が次出てくるから、押さえてるんでしょう」

ゼロス
「あ？
なんだそりゃ？」

ジェイド
「さあ、次は恋に悩める少年の通り名の如く、我がギルド、アドリビトムのリーダー、アンジュに恋をしているのが、あなたの最大の特徴ですねぇ」

ブレイヴ
「ッ……！」

アレス
「照れてるね」

カノンノ
「うん、照れてる」

ジェウス
「照れてるな」

ゼロス
「照れてる～」

ジェイド
「照れてますねぇ」

ブレイヴ
「ここぞとばかりに、一斉に喋りだすなぁ！
……って、ちょっと待て！
この設定はお前らにばれていいのか！？」

ジェイド
「ああ、安心してください。本編に戻れば、綺麗さっぱり忘れますから」

ゼロス
「だから、深いとこまで言っちゃおうぜ～！
なんだったら俺様が、恋の相談に……」

ブレイヴ
「却下、無理、断る」

ゼロス

「あら……。そんなに断らなくても……」

ジェイド
「断るのは、ゼロスの恋の相談の事でしょう。恋のいきさつは、話してもらいましょうか？」

ブレイヴ
「いや……、なんつーか……、気付いたらアンジュのそばにいるのがドキドキしてて……、意識して目を合わして会話できないとか……。マルタに相談に乗ってもらったら……やっぱり、恋だって……」

ブレイヴ以外
「Ｆｏｏｏｌ！」

ブレイヴ
「やめろ、それ！」

ジェイド
「しかし……。あなたの設定年齢は１８でしたよね？対するアンジュは２０……」

ブレイヴ
「な、なんだよ……」

ジェイド
「知ってますか？男性が年下の男女交際の発展率は著しく低いんです」

ブレイヴ
「な、な……！？」

ジェイド
「しかもお相手は、腹黒聖女で名の通った方です……。となれば、その率はさらに下がると考えるのが賢明です」

ブレイヴ
「あ……、あああ……！」

ジェイド
「それ以前に、お二人の今の関係でそこまでいけるのでしょうか？」

ブレイヴ
「そ、それはこれからだな……」

ジェイド
「これから？
筆者は、残り４５話＋αで物語を終わらす算段です。この残り話数でこれからを頑張れますかねぇ～？」

ブレイヴ
「う……、ううう……」

チーン……

ゼロス
「相変わらず、ひどい毒舌だこと……」

ジェイド
「あはは～。もちろん全部嘘ですけどね～」

ジェウス・アレス・カノンノ
（お、恐るべし！
ジェイド・カーティス！）

ジェイド
「さて、お次は……、ゴキブリ嫌い、ジェウス・フレード！」

ジェウス
「ひどい通り名だ！」

ジェイド
「ジェウス・フレード。ブレイヴと同じく、現世よりルミナシアに飛ばされた、純人間。神様の力により、格闘と小型ボウガンによる弓技に優れた、格闘弓士となる」

ジェウス
「これに対してはさすがに……」

ジェイド
「私から一つ」

ジェウス
「あったか！」

ジェイド
「皆さん。まずはこれを……」

ジェウス
ジェイド

ジェウス
「……まさか、名前が似てるとか言うんじゃ……」

ジェイド
「そのまさか、です♪」

ジェウス
「です♪。じゃないですよ！
そんなこと言ったら、改名するしかないじゃないですか！」

カノンノ
「一部を伏せ字にするとか？」

ジェウス
「一部を伏せ字に……？」

ジ○○ス
ジ○○ス
「誰かわかんねーよ！
おいコラ、作者！
台詞前の俺の名前直せ！」

ジェイド
「仕方ありません……。私が我慢する方向でいきましょう……」

ジェウス
「悪いのは俺か！？
俺なのか！？」

ジェイド
「次は、通り名のゴキブリ嫌いについて……」

ジェウス
「思いだしただけで、身がすくむ……。あれは遠い夏の日……。少し上の方の壁に、ヤツは張り付いていました。俺は体が硬直し、ただただヤツを見ていたんです……。するとですね、ヤツがグロテスクな羽を広げて飛んだんですよ！
至近距離で飛ばれて、苦手にならない訳ないでしょう！」

ゼロス
「そ、そいつはリアルな思い出だな……」

ジェウス
「まだあるんですよ！
寝転がってたら、足の上に乗ってくるし、台所の流しの下を蹴っただけで、5～6匹が一気に走って逃げるシーンも目撃したんですから！」

ゼロス
「……全部、作者のリアル生活で起こった事のようだぜ？」

ジェウス
「くそぉ！
何でこんな設定を俺に……！」

ジェイド
「ならば、私が克服させて差し上げましょう……」

ジェウス

「え！？
い、いや！
お気になさらず……」

ジェイド
「遠慮しなくても結構ですよ？
私にかかれば、「すぐに」直るものですから……（ニコリ……）」

ジェウス
（ガタガタ……）（↑恐怖でもはや声が出ない）

ゼロス
「それより、お前は料理が上手なんだよなぁ？」

ジェウス
「え？
まあ、人並みですけど……」

ゼロス
「いいぜ、いいぜ……。料理が上手な事は、すんばらしい事だぜ……」

ジェイド
「我々の旅の仲間には殺人料理（ヘル・クッキング）を作る、リフィルとナタリアがいますからねぇ……。マイソロに至っては、そこにアーチェも加わってくる訳です……」

ゼロス
「そんな個性は、俺達にとって、ひじょーに重要な訳なんだよ……」

ジェウス
「あはは……。みんな上手になったらいいんですけどね……」

ゼロス
「しかも、その個性のお陰で、リリスちゃんといい感じになってるじゃねーの！」

ジェウス
「あの……。それについては、ＰＶ５００００記念で話しましたように、リリスはいい友達ですから……」

ジェイド
「おや、そうですか？
結構、お似合いだと思いますよ？」

ジェウス
「俺にはもう毒吐いたから、そこそこ、褒めに回ってきましたね……」

ジェイド
「いやですね。私は普段通りに話してるだけなのですが……」

ジェウス
「もういいです……」

ジェイド
「良い判断です♪
最後に……あなたのキャラは、たま～に「黒ジェウス」が出ますね」

ジェウス

「スキットに一回ポッキリしか出てませんけどね」

ジェイド
「実は結構重大な場面で……！」

アレス
「出るの！？
あの「黒ジェウス」が！？」

ジェイド
「出たり、出なかったり……」

全員
「・・・・」

カノンノ
「ジェイドさんのキャラを忘れちゃ、ダメだね……」

ジェイド
「この設定のせいで、私はあなたをあまり追い込めません。なにぶん怖いもので……」

ジェウス
「……の割には、口元、笑ってますよ。というか、追い込んでる自覚、あるんですね……」

ジェイド
「おっと、口が滑りました……。不覚ですね」

ジェウス

「どうだか……」

ジェイド
「さ、ブレイヴも立ち直ってきましたよ」

アレス
「ものすっごく、どんよりしてるよ……」

ブレイヴ
「はぁぁぁぁぁ～……」

ジェウス
「すごいため息だ！」

カノンノ
「げ、元気だして！
さっきのは、嘘なんだって！」

ブレイヴ
「ホントに……？」

ジェウス・アレス
「うんうん！」

ブレイヴ
「ジェイドー！」

ジェイド
「私は、ホントだともウソだとも言ってません。はやとちりは駄目ですよ？」

ブレイヴ
「ぐうう……！」

ゼロス
「そういや、このやり取りで思い出したんだが、ブレイヴは多少馬鹿。ジェウスは多少賢い。っつー設定があるんだと」

ブレイヴ
「俺が馬鹿だと！？」

ジェウス
「あってんじゃん」

ブレイヴ
「あってたまるか！
ほら、だれでもいいから問題だしてくれよ！」

ジェイド
「１４５×５６８×３６９＝？」

ブレイヴ
「スーパー高校生レベル！
解けるか！」

ジェウス
「３０３９０８４０」

ジェイド
「正解です」

ブレイヴ
「ウソだー！」

アレス
（……ねえ、カノンノ？
ジェウスは、「多少」頭がいい。でいいんだよね……）

カノンノ
（う、うーん……。深いツイキューはよそうか……）

ジェイド
「さて、最後の方の紹介ですね。この小説のディセンダー、アレス・カレイジャス！」

ブレイヴ・ジェウス
「通り名が普通っ！？」

アレス
「普通でいいよね……。むしろ二人がおかしいんだよ……」

ジェイド
「アレス・カレイジャス。ルミナシアに現れた、世界樹の守り手、ディセンダー。職業はビショップであり、主に後方支援を努める」

アレス
「文句は……ないよね……」

ブレイヴ・ジェウス
「待てぃ！」

アレス
「まさかの主役からっ！？」

ブレイヴ
「ディセンダーなのに、ビショップってどういう事だー！」

ジェウス
「そうだ、そうだ！
後方支援なんて、ちまちましすぎだー！」

ブレイヴ
「お陰でジェウスは一回死にかけたぞー！」

ジェウス
「そうだ、そうだ！
前にでろ、前にー！」

ゼロス
「あ……、あー、残念な知らせが……。アレスが、後方支援キャラになったのは、そのー……」

ジェイド
「あなたがたのせいなんですね♪」

ブレイヴ・ジェウス
「え……？」

ジェイド
「あなたがた、後衛や中衛も努めれますが、基本は前衛です」

ゼロス
「で、作者が……「ディセンダーまで、前衛にしたら戦闘描写が書きづれーな……。よし、思いきって、ディセンダーは後方支援を努めてもらおう！」……ていう結論に至った訳だ……」

ブレイヴ・ジェウス
「……」

アレス
「ふ、二人とも……？」

ブレイヴ
「いやー、いつも助かってるよ、アレス！
知ってたよ……アレスにも事情があるって……」

ジェウス
「俺も知ってたよ……。作者の思惑なんてさ……」

カノンノ
「すごくいい顔で、悪魔のようなウソをついた！」

アレス
「あ……あの……」

ブレイヴ・ジェウス
「な……？」

アレス
「う……うん……」

ジェイド
「ううむ……なかなかやりますね、二人とも……」

カノンノ
（あの鬼畜眼鏡と名高い人を感服させた！？）

ゼロス
「……先、進むぞ……。えー、アレスの特徴としては……
・優しさは人一倍
・断れない性格
・他人の事→鋭い、自分の事→鈍い
……？」

ブレイヴ・ジェウス
「……」

アレス
「何……？」

ジェウス
「いやぁ……、その……」

ブレイヴ
「ツッコミ要素のない性格だな……と……」

アレス
「ほっといてよ！
というか作者のせいだよ！」

ブレイヴ
「典型的な日本男児かよ！」

ジェウス
「どれだけ損する性格だよ！」

アレス
「……？」

ブレイヴ・ジェウス
（ジトッ……）

アレス
「ツッコミが欲しいの！？」

ブレイヴ
「いやー……？
別に……？」

ジェウス
「いいんじゃないの……？
その感じも……？」

アレス
「空気が悪くなった！
僕のせい！？」

ジェイド
「いいようにとれば、あなたはキッチリと型にはまった主役像。だということですね」

アレス
「あ、うん……。そんな感じなら、悪くはないかな……？」

ブレイヴ
「裏を返せばー？」

ジェウス
「可もなく不可もない、中途半ｐ……」

アレス
「僕、二人にボロクソ言われてるけど、なにかした！？」

ゼロス
「ディセンダーの定めだ……。残念だが、諦めるしか……」

アレス
「いくら無知でも、それはウソって一発でわかるよ！」

ジェウス
「ボロクソ言う理由は、ないんだけどね」

ブレイヴ
「いや、俺もこいつの「黒部分」に悪ノリしてただけだし」

アレス
「「黒」だったの！？
さっきまで！？」

ジェウス

「半黒」

アレス
「ややこしいジャンル作らないでよ……」

ジェイド
「さーて、主役達のキャラ紹介は、ざっくりですが終わりましたね……。カノンノ。何か一言ありませんか？」

カノンノ
「えっ？
私……？
んーと……。じゃあ……」

ゼロス
「うんうん。何かあるなら、ドーンと言っちゃって！」

カノンノ
「結局のところ、第一主役って誰なんだろうね！」

ピシッ……

ブレイヴ・ジェウス・アレス
「……んん？」

ゼロス
「こ、これは……」

ジェイド
「地雷を踏みましたね……」

ブレイヴ
「ハッハッハ……。もちろん俺。だよなぁ……？」

ジェウス
「冗談きついぜ、ブレイヴ……。俺に決まってんだろ……？」

アレス
「二人とも何言ってんの……？
ディセンダーの僕が一番の主役に決まってるでしょ……？」

ブレイヴ・ジェウス・アレス
「・・・・・」

ブレイヴ
「バカヤロー！
何言ってんだ！
一番主役は俺だよ！
証拠に、複数人の「」の前の名前、俺が一番最初にきてるじゃねーか！」

ジェウス
「それは「作者が作ったキャラ」順だろうが！
俺なんか、ここで一番主役じゃねぇ。なんて言われたら、死ぬ一歩手前まで怪我したあれは何なの！？
ってことになるだろうが！」

アレス
「違うでしょ！
ディセンダーっていう設定がある僕が、一番主役に近いでしょ！

要所要所で目立ってるのは、結局僕じゃないか！」

ブレイヴ・ジェウス・アレス
（ワーワー、ギャーギャー！）

カノンノ
「あ、あれ……？
私の発言で大変な事に……？」

ゼロス
「まーまー、カノンノちゃんは気にしないでいいのよ！
それよりどうだい……？
俺様、このあと二人でゆ～っくり、お話したいなぁ。とか思ってるんだけど～！」

カノンノ
「は、はぁ……」

ジェイド
（ん？
え？
呼んでいたもう一人の女の子が来た？
……はい。……はい。あ、わかりました～）
「ゼロース！
もう一人の女の子が来たようですよ？」

ゼロス
「おぉ～！
やっとか！
さてさて、どんな子なんだろうな～！」

しいな
「……ゼロス？
カノンノと二人で話したい事ってなんだい……？」

ゼロス
「ゲッ！？
し、しいなぁ！？
お前、何でここに！？」

しいな
「あそこに居る（なんでか知らないけど、言い争っている）三人に……「ゼロスが暴走して、カノンノに手を出すかもしれないので、タイミングを見計らって出て来て下さい♪」……って言われて、ずーっと、見張ってたんだよ……！」

ゼロス
「い、いや、俺様手を出す気はなかったよ。……まだ。……どほぉっ！」

しいな
「まだぁ！？」

ゼロス
「手が早いんだよお前は！
大体！
女の子ってなんだよ！
詐欺じゃねーk……げほぉっ！」

しいな

「殴るよ！」

ゼロス
「殴ってから言うなぁ！」

ジェイド
「不用意ですねぇ、ゼロス？
しいなは19歳。女の子と呼ばれても差し支えありません」

ゼロス
「マジで詐欺じゃねーか……」

しいな
「調子に乗ったあんたには、きつーいお灸が必要だね！」

ゼロス
「イテ！
イテテテ！
ひっぱんな！
そこ、ひっぱんな！」

カノンノ
「行っちゃった……。結局このコーナーって、収拾つかなくなるよね……」

ジェイド
「それもこのコーナーの醍醐味です♪
おや？
どうやら終わりの時間が近いようですね？
では、「メインヒロイン」のカノンノに締めていただきましょうか」

カノンノ
「また、私!?
え、えーっと……。この小説、まだまだ続きます!
あそこの三人の活躍、どうぞご覧下さい!」

ジェイド
「……ありがとうございました。よかったですねー、前代のカノンノみたいに、「添え物ヒロイン」扱いされる隙もなくて」

カノンノ
(裏を返せば、誰もいじってくれなかった。ってことかな……?
ジェイドさんが言うと、なぜかそう聞こえてくるよ……)

ジェイド
「では、本編でまたお会いしましょう」

ジェイド・カノンノ
「バイバーイ!」

ゴールデンビクトリーの章

完!

ブレイヴ・ジェウス・アレス
「うぉおいっ！
まだ誰が、一番主役だって結論がでてねぇよ！
結局、誰なんだよ！
作者ぁぁぁ！」

……完；

～ユニーク１００００記念～　ゼロスとジェイドのゴールデンビクトリー！（後

三人ともちゃんと主役ですよ♪

ユニーク１００００記念、読んでいただき、ありがとうございました！

感想いただけたらうれしいカナー……なんて……。

スキット　その6（前書き）

くっ……！

閑話が三連続か……！

マイソロ3のセーブで事故らなければ……（泣）

※詳しくは活動報告で！

スキット　その6

・鬼畜発揮

ジェウス
「ハァ……！
ハァ……！
ハァ……！
……い、行き止まり！？」

ジェイド
「どうしたんですか？
私を見るなり、血相を変えて逃げるとは……？」

ジェウス
「く、来るな！
頼むから、来ないでくれ！」（↑焦りで敬語すら忘れている）

ジェイド
「嫌ですね～？
なぜですか？」

ジェウス
「手に持ってる「ソレ」が問題なんだ！
お願いだから来ないでくれ～！」

ジェイド
「ふむ、あなたに嫌われて、私の手汗がひどいです……。手が滑っちゃうかもしれません♪」

ジェウス
「……！
やめろ……！
それだけは！
それだけは～！」

ジェイド
「そ～れ！」

ジェウス
「うぎゃー！
ぎゃー！
あ……、あ……。……ガクッ」

ジェイド
「……気絶しましたか。それほどまでに苦手とは……。面白いですねぇ……」

……

ロックス
「……？
クレアさん、ここに仕掛けてた「ホイホイ」どうしましたか？」

クレア
「え？
さぁ……？
ロックスさんが仕掛けたのでしょう？」

ロックス
「えぇ？
僕はてっきり、クレアさんが置いたものかと……？」

ロックス・クレア
「……？？」

・お近づき

ブレイヴ
「あ、ども」

ティア
「よろしくお願いするわ……」

ブレイヴ
（無愛想だなぁ……）
「んー……。そうだ、お近づきに何かあげようか？」

ティア
「……別にいらないわ」

ブレイヴ
「ホタテ三兄弟をモチーフにしたぬいぐるみ……とか？」

ティア
「えっ！？」

ブレイヴ

「好きなんでしょ、カワイイ物？」

ティア
「なんで！？
誰から聞いた……あっ！？」

ブレイヴ
「あはは！
軍人だからって無愛想にせずに、年相応の振る舞いくらいすればいいのに」

ティア
「べ、別にそういうつもりじゃ……！」

ブレイヴ
「あ、そう……。なあんだ……。せっかく「カワイイ」ぬいぐるみ、あげようかなって思ったのに……」

ティア
「えっ……？
……も、もらって欲しいなら、もらおうかしら……」

ブレイヴ
「え？
いらないんだ……」

ティア
「下さいっ！
欲しいです！」

ブレイヴ
（……無愛想も、うまく誘導すれば面白いなぁ）

・お父さんは心配？

ジェウス
「ソフィのカニタマへの執着はすごい……」

ソフィ
「うん、カニタマ大好き……。ジュル……。だから、ジェウス作って……」

ジェウス
「わかった……、ハイ、作ります……。ったく、誰から聞いたんだ？俺が料理すること……（ブツブツ……）」

ソフィ
「ジェウス？」

ジェウス
「あ、はいはい！
ソフィの好みは濃口？
薄口？」

ソフィ
「わたしは……」

……

アスベル
「……」

ブレイヴ
「心配か、お父さん？」

アスベル
「お父……。いや、ソフィが積極的に誰かに話し掛けるのはいいことだと思うよ」

ブレイヴ
「ジェウスはジェウスで、実はまんざらでもないんだよな。あいつ面倒見はいいから、安心してていいはずだぞ」

アスベル
「ああ……。当初の目的とは違えど、ここにきて……ソフィにとっては良かったのかもしれないな」

ブレイヴ
「アスベルにとってもいいようになるさ」

ブレイヴ・アスベル
「フフ……」

・やはり計り知れない

リタ
「ちょっと、あんた！」

ブレイヴ
「……？
俺か？」

リタ
「あんた以外に誰がいるのよ？
ちょっとコレ直してみて」

ブレイヴ
「これ、何かの機械部品？
だったら、リタだけで直せるじゃん」

リタ
「いいからやるっ！」

ブレイヴ
「まあ、やるだけ……」

リタ
「一つ問題」

ブレイヴ
「今！？」

リタ
「世界の一般的な法則で……うんたらかんたら、あーだこーだ……
なんだけど、結果どうなると思う？」

ブレイヴ
「俺の頭じゃ、「世界の一般的な法則で……」のとこから無理……。

っと……出来たかな？」

リタ
「な、直ってる……」

ブレイヴ
「リタが驚くことじゃないだろ？
俺よりチャチャッと直すんだから……じゃ、お疲れ～」

リタ
「なんで……？
さっきの物理化学の基礎中の基礎問題すら解けないバカなのに、なんでこんな複雑な機械が直せるのかしら……？
今世紀最大の謎だわ……」

・極論

ジェウス
「ロイドが二刀流なのは、「剣が二本で、二倍強い！」……っていう考えからだよな？」

ロイド
「ああ！
これほどシンプルな強さは他にはないぜ！」

ジェウス
「じゃあ俺は五倍だな」

ロイド

「へ？」

ジェウス
「だって俺、基本格闘技だし、右手、左手、右足、左足、加えて左手のボウガン！
……な、五倍だろ？」

ロイド
「くっ……、まさか二刀流を越えるものがあるとは……。こうしちゃいられない！
俺も何とかしないと！
うおぉぉ！」

クラトス
「……頼むから、止めてやってくれないか……」

ジェウス
「あ、やっぱりですか？」

・兄妹みたい

コレット
「キャッ！」

ブレイヴ
「おいおい、大丈夫か？」

コレット
「うん、だいじょぶだよ！

私、よく転んじゃうんだ」

ブレイヴ
「まあ……よく見るけど……」

コレット
「だから心配しなくてもいいよ！」

ブレイヴ
「はあ……、でもとりあえず心配だから着いてくよ。部屋は機関室の隣だったよな？」

コレット
「え……？
うん。ごめんね、着いてきてもらって」

ブレイヴ
「コラ。「ごめんね」は無し。ロイドも言ってるだろ……？」

コレット
「あ……、ごめんね……じゃなくて……ありがとう！」

ブレイヴ
「よろしい」

……

ルビア
「何だか兄妹みたいね、あの二人。年齢的にもピッタリだし……」

ファラ
「ブレイヴは滅多に怒らないし、包容力があるもんね。年下から見たら、お兄ちゃんに見えちゃうのかも」

ルビア
「あの性格じゃ、相手は年上ね」

ファラ
「わかる！
でも、実際どうなんだろうね？」

・ジェウスの料理教室１

ジェウス
「今日は何を作ろうって訳じゃないが……。「見ていて欲しい」と「様々な」方々に頼まれたので、ナタリア。見張るぞ」

ナタリア
「いいでしょう！
そこで私の腕前をご覧になってくださいな！」

ジェウス
「……って、早速包丁の持ち方ぁ！
何だその人を刺すような持ち方！？
上から持てっ！
上から！」

ナタリア
「次は食材ですわ。栄養が採れるようにいろいろと用意致しました」

ジェウス
「……おい待て。「マグロ」と「ミルク」と「アップル」で一体何を作る気だ？
考えて……」

ナタリア
「いちいち、一つずつ食すのは面倒ですわ！
すべて鍋に……」

ジェウス
「やめろ、バカー！」

ナタリア
「まあ！
バカとは何ですの！
皆さんお腹を空かせて待っているのですよ！」

ジェウス
「料理っつーのは、面倒を一つ一つこなしていく物なの！
食えるもん出すんだったらみんな待つわ！」

ナタリア
「男のくせに、小さいことにこだわり過ぎですわ！」

ジェウス
「何だと、コラー！」

……

カイウス
「食えるもの……出てくるよな……？」

クレス
「……ジェウスの頑張り次第、だね……」

・共通点

ブレイヴ
「……」

リカルド
「……」

ブレイヴ
「……リカルド、端っこの方お願い」

リカルド
「お前がやれ……」

ブレイヴ
「……お願いします！」

リカルド
「む……。お前まさか……？」

ブレイヴ
「これでも大分マシになったんだぞ。「高所恐怖症」……」

リカルド
「何故俺には、そんなに簡単に話す？」

ブレイヴ
「だってリカルドも高い所苦手じゃん？」

リカルド
「なっ……！
そんなことはない！」

ブレイヴ
「いやいや、見てりゃ分かるって……」

リカルド
「う……」

ブレイヴ
「あれなんだよな、高い所に立つと、身体の中からスウッと何かが抜けて、力がはいらないんだよな……。でも、立とうと思って、膝が震えてくるんだよな～……。基本、風も強いし……」

リカルド
「……」

ブレイヴ
「無言は、同意と受け取るぞ？」

リカルド
「くだらん……」

ブレイヴ
「まー、まー……。共通点があってよかったなー。無かったら俺も話しづらかったよ！」

リカルド
「お前は分からんヤツだ……」

・謙虚さ

ウッドロウ
「……と言う説もあるのだよ」

ジェウス
「へぇー……、なるほど……。勉強になります。ウッドロウさんは、ホントにいろいろ知ってますね？」

ウッドロウ
「ハハ……。そんなことはないよ。ジェウス君も世界を周り、人々の話を聞けば、自然と知識を得るはずだ」

ジェウス
「そういう謙虚な所も、見習いたいもんです……。でも本当にすごいんですから、もっと自慢してもいいんじゃないですか？」

ウッドロウ
「……君と話すのは、本当に勉強になるよ」

ジェウス
「へ？」

ウッドロウ
「年上には必ず敬語で接するが、変にかしこまることもない。自分の意見をはっきり言いつつ、相手を立てる。私としても、勉強ができるものだ」

ジェウス
「……そんな。過大評価しすぎですよ。俺はまだまだ、人生の半分も生きてない半人前なのに、恐れ多いです。あ、いろいろとありがとうございました。また、お話しましょう！」

ウッドロウ
「フフ……。私の事を「謙虚」と言うが……。いやはや、彼には敵わないだろうな……」

・なじみ

ノーマ
「ジェ～ウ君！
ねぇねぇ、ちょっとお宝探しに行かない？」

ジェウス
「……そのあだ名、ハズレと思うのは俺だけか？」

ノーマ
「えー？
いいと思うけどなぁ？
で、結局行ける、行けない？」

ジェウス
「悪い、無理」

ノーマ
「あ、そう。じゃー……。ブレブレ～！」

ブレイヴ
「んー、何ー？」

ジェウス
「！？」

ノーマ
「お宝探しに行くんだけど、来てくれない？」

ブレイヴ
「他、誰がいる？」

ノーマ
「あたしと～、ルーと～、セネセネも呼んでるよ！」

ブレイヴ
「あー、じゃあ付いてこうかな？」

ノーマ
「オッケー！
じゃあ、また後でね～！」

ジェウス
「……馴染み過ぎだろ！？

お前、あのあだ名になんら疑問抱いてねぇな！」

ブレイヴ
「だって……つっこむだけ疲れるって。特にノーマには……。だから馴染む事にしたんだ……。ブレブレに……」

ジェウス
「格好よさ気に言ってるけど、微妙だぞ……」

・見た目は重要

アレス
「すずは忍者なんだよね？」

すず
「はい……。私だけでなく、しいなさんもそうです」

アレス
「でも、すずはみんなのイメージする忍者っぽいよね。符で戦うしいなもそれっぽいけど」

すず
「アレスさんは、刀で戦うのが忍者らしいと？」

アレス
「いや、暇なときに本で見ただけなんだけどね。そこの挿絵の忍者は、刀を持ってたから」

すず

「そうですね、しいなさんの符術技は里でも少し変わっています。しかし、戦いにおいては信頼できます」

アレス
「ああ、いや……。僕も信頼してるよ？
でも、見た目はすずの方が忍者っぽい。っていうことで……」

すず
「そうでしたか。てっきり、不安があるのかと……」

アレス
「……そんな後ろ向きに考えてるって、捉えられてたんだ……」

スキット　その6（後書き）

次こそは物語を進める！
……と自分に、暗示をかける。

霊峰の闘い。そしてアレスの正体。（前書き）

ふいー……、「セーブ事故」からやっと立ち直ったぜ……。

あぁ、書きづらかった、ここ……。戦闘ありますが、期待はしないでください！

ええぇ、胸を張って言えますとも！

霊峰の闘い。そしてアレスの正体。

ラザリス
「ヒトは、どれだけのものを欲しがるんだ……。動物や植物や虫達は、ただ生きたいとしか願わなかったのに……」

シリウス
「……ヒトが一番、世界を食いつぶしている……。この世界は、ヒトの手により、ただ死ぬだけ……」

ラザリス
「僕達が生みたくても、生めなかった世界。僕達が世界を造ったら、きっとこうではなかったろう」

シリウス
「……違う。僕達ならこんな世界にはしなかった……」

ラザリス
「……」

《霊峰アブソール》に佇む、二人……シリウスとラザリス。二人は会話を終えると、別々に別れた……。

――――

その頃船では、《ライマ国》の第一、第二王位継承者のルーク、アッシュ、二人の師範のヴァン。それから、ウッドロウの国の　客員剣士、リオンがアドリビトムに加入し慌ただしくなっていた。そして、精霊がいると言われる《霊峰アブソール》の着陸地点も見つか

り、重要任務がだされた時でもある。

ジェウス
「俺、行きます、行きます」

アンジュ
「……」

ジェウス
「何ですか？」

アンジュ
「あなたか、ブレイヴ君か、アレス君が絡む任務って……だいたい大事になるのよねぇ……」

それは、俺達のせいじゃなくて、大方アレスのせいだよ……。とジェウスは心の中で否定した。

アレス
「ん？
僕が何？」

と見計らったかの様に、アレスが操舵室から下りてきた。

ジェウス
「うわっ！
びっくりしたぁ……」

思わぬ展開だったので心底、驚いていた。

ジェウス
「カノンノの絵か……。何か思い出せた？」

答えは、力無く首を横に振るアレスの姿でわかった。実際、ジェウスもブレイヴと一緒にカノンノの絵を見たが、もちろん見たこともない世界だった。

ジェウス
「……ま、記憶くらい何とかなるって。よし、精霊会いに行こう！」

アレス
「ああ、霊峰の？」

ジェウス
「そうそう。記憶戻してくれるかも？」
（と言うか、実際そうなるけど……）

今のところの想定外は、敵の強さとシリウスだけなので、戦いにさえ気を配っていれば、何とかなるはずと践んでいる。

アレス
「うん、ジェウスが行くなら、行こうかな？」

ジェウス
「決定！
アンジュさん、よろしく！」

アンジュ
「は～ぁあ……、何か起こるのは、決定的ね……」

盛大にため息をつきながらも、紙にサラサラとジェウスとアレスの名前を記した。

――――

《霊峰アブソール》に着いた二人に加え、エミルとカイウスは、雪積もる道で寒さに震えていた。

ジェウス
「さ、さ、さ、寒い……」

エミル
「こ、こ、堪えるね……」

身体を摩りながら話すジェウスとエミルだが、口が思うように動かない。

ジェウス
「カイウス……獣化したら、抱き着いていいか……？」

カイウス
「バカ言うな！
嫌だよ！」

ジェウス
「だよな……ルビアじゃないと嫌か……」

カイウス
「なあっ！？」

雪道を踏み締めながら、カイウスとも、馬鹿な会話をする。

アレス
「ねぇ……任務の確認するよ？」

ジェウス
「あー、はいはい……」

アレスが話を引き戻し、ようやく本来の会話になる。

カイウス
「精霊に会って、シリウス、ラザリスの事と、世界の成り立ち。を聞くんだよな？」

エミル
「精霊って、そうやすやすと会ってくれるものなのかな……？正直、何かありそうな気がするよ……」

ジェウス
「行けば分かるよ。とにかく先に進もう……。……ヘックション！」

アレス
「うわぁ……大丈夫？鼻水が……。「ファイアーボール」だそうか？」

ジェウス
「なんという魔力の無駄遣いだ……」

杖の先の火の玉に群がる男四人……。この上なくシュールな光景の出来上がりである。

―――

カイウス
「おりゃあっ！」

エミル
「冷っ……！
お返しっ！」

ジェウス
「カイウス。後ろががら空きだっ！」

山の中腹に差し掛かると、魔物を倒したせいもあって、身体があったまり、無駄にはしゃぎ倒し、雪合戦をしていた。……しかし。

エミル
「てめぇ……。手を抜いてりゃいい気になりやがって……！」

ジェウス
「あぁん？
の割には、投げ方は必死そのものだったぜ、坊ちゃん？」

カイウス
「くっ……！
そこまで本気なら、俺もっ！
目覚めろ、野生の魂！」

ヒートアップした三人は、ほぼ戦闘体制に入ってしまい、本物の雪「合戦」になりつつあった……。

アレス
「……どうすればいいの？」

数分後、事は収まり、なんとかはなった。

――――

その後は、途中何度か魔物に襲われたくらいで、何事もなく進んだ。
道中では、精霊とマナの関係や、世界樹の根があることと、星晶があることがマナが豊富な条件だとか話をしていたが、結局、精霊に聞いてみないことには、わからないらしい。

ジェウス
「頂上……」

そうこうとしている内に、頂上へたどり着いた。

エミル
「だ、誰かいるよ……」

カイウス
「精霊じゃ無さそうだな」

アレス
「でも……、目的地はここだよね？」

ジェウス
「あの人に聞いてみるが、一番だな……」

近付いて行くと、その男は振り返った。

エミル
「あ、あの、すいません……。え、えっと、精霊を探しているんですけど……」

？？？
「精霊を探している、だと？」

いかにも、うたぐる目。四人を見定めているようだ。

ジェウス
「俺達はギルド、アドリビトムの者で……」

？？？
「精霊に会わせる事は出来ない。早々に立ち去れ」

話を遮り、男はそう言い放った。

カイウス
「オレ達は精霊に聞かなきゃいけない事がある。話がしたいだけなんだ」

？？？
「話だと？」

男の目がより一層鋭くなる。

？？？
「そんな嘘は、今まで訪れた者は皆言っていた。お前達の目的は、

精霊を捕え、星晶がある場所を探知させる為に利用したいだけだろう？」

アレス
「まぁ、そう思われても、仕方ないかも……」

ジェウス
「こんなご時世だしな……」

とジェウス。

カイウス
「でも、オレ達はそんなのじゃない！
だいたい……あんた、何者なんだよ！」

リヒター
「俺は、リヒター・アーベント。ここにいる精霊と契約し、この地と精霊を守る者だ。……精霊に会いたくば、俺に勝ってみせろ」

その男――リヒターは右に剣を、左に小型斧を持ち、戦闘体制をとる。

カイウス
「そういう事か」

アレス
「人だから、話し合いでどうにかしたかったけど……」

ジェウス
「解りやすくていいんじゃない？」

エミル
「無駄口叩くな……。行くぜ！」

各々に武器を構え、ジェウス、カイウス、エミルが飛び出し、アレスが詠唱に入る。

ジェウス
「幻龍拳！」

先手必勝とばかりに、トップスピードに乗ったジェウスが、打撃を繰り出す。

ジェウス
「……チッ！」

ジェウスの攻撃は、軽く後方に受け流され、次の手が出せず終わった。

エミル
「虎乱蹴！」

二波目にエミルが切り掛かる。しかし、その連続切りは、両手の武器によって防がれ、無防備な身体は空中に残ったままだ。

リヒター
「跳べば、隙だらけだ……！」

カイウス
「やらせるかよっ！

魔神剣・双牙ッ！」

ジェウス
「後ろも空いてるぜっ！
獅子……！」

後ろから、ジェウスは獅子を模した気を右手に集めて、走り寄る。

アレス
「こっちも詠唱完了！
行くよ！
ロックブレイク！」

アレスの術もリヒターへと襲い掛かる。

ジェウス
「……戦吼ォ！」

リヒターにカイウスの放った、二つの衝撃波と、ジェウスの闘気の一撃、アレスの術と一気に攻めたが……。

リヒター
「甘いっ！
陽流・丙！」

ジェウス・エミル
「どあっ！？」

リヒターが地面に斧を叩きつけると、爆風が生じ、衝撃波と術は相殺され、ジェウスも空中にいたエミルも吹っ飛ばされた。

カイウス
「ウソだろ……」

アレス
「術が……相殺された！？」

ジェウス
「デタラメに……強いなぁ……」

全員、苦笑いだが、この寒い気候の中、皆、冷や汗をかいている。

リヒター
「距離が空いたからと、油断か……？
セイントバブル！」

ジェウス
「散れっ！」

ジェウスの指示通り、皆が散ると、さっきまで固まっていた場所に、水泡が爆弾の様に破裂している。

ジェウス
（バカ正直に行っても、絶対潰される……。策……、何か策が……。
……雪？）

ジェウスは足元に積もる雪を見た。

ジェウス
（これにかけるっきゃ……！）

ばれたら終わりの作戦だが、ジェウスは実行に移した。

ジェウス
「カイウス！
エミル！
とにかく足止め、頼む！」

カイウス
「あ……？
お、おう……！」

エミル
「言われなくても、どんどん行くぜ！」

二人はジェウスの指示を聞き入れ、再び前へ飛び出した。

リヒター
「力ずくでも、俺に勝つつもりか？
それとも……策をろうする為の時間稼ぎか？」

リヒターの問い掛けにジェウスは答えず、アレスへと指示を出す。

ジェウス
（アレス！
お前は――――してくれ！）

アレス
（ええ？
いいけど、何するつもり？）

ジェウス
（そのうち分かるから！）

アレスにそう言うと、ジェウスも前衛に加わった。

アレス
「ファイアーボール！」

杖の先から飛び出た火の玉は、しかし狙いを外れ、リヒターの足元に沈み、雪解け水を作るだけだった。

エミル
「おい！
何処、狙ってんだ！」

ジェウス
「エミル、集中！」

エミルはチッと舌打ちをし、意識をリヒターに向けた。

アレス
「ファイアーボール！」

再びの火の玉。それも狙いを外れ、足元に沈む。その後もアレスは、何度も何度も、術を足元に外していた。

カイウス
「アレス！
いい加減、なにやってんだよ！」

リヒター
「フッ……出来の悪い魔術師を連れて来たものだな！」

その瞬間、ジェウスが口元でフッと笑った。

リヒター
「……！？」

ジェウス
「そいつはどうかな！？
カイウス、エミル、一旦後ろへ！」

不思議な顔をする二人を下げ、ジェウス自身は、獅子戦吼の構えをとっていた。

ジェウス
「獅子……戦吼！」

本日二度目の獅子戦吼は、やはりリヒターには決まらず、交差させた剣と斧に防がれた。しかし、その攻撃はリヒターを吹き飛ばし、間合いを作った。

リヒター
「一体、何の真似だ……？」

ヒラリと一回転をし、リヒターが地に立つ。

ジェウス
「あ～ぁ、足元びしょびしょ……。アンタだけだけど……」

リヒターが足元を見ると、確かに自身の回りだけ、雪解け水でびしょびしょだった。

バリッ……！

帯電した矢を、ボウガンにつがえ、ジェウスは更に言う。

ジェウス
「感電注意……」

リヒター
「……！！」

ようやく、身に起こっている事態を把握し、その場から、跳躍力に任せ、ジェウスに飛び掛かってきた。

アレス
「僕、確かに未熟かもしれないけど……。術の狙いを外した事はないんだ」

リヒターがハッとアレスに目を向けると、詠唱の完了手前だった。

エミル
「空中は……隙だらけなんだよな？」
エミルも口の端を吊り上げ、言う。

カイウス
「自分で言った注意、忘れちゃダメだぜ？」

とどめとばかりにカイウスが最後に言い放った。

リヒター
「くっ……！」

アレス
「吹け、真空！
エアスラスト！」

空中で真空の刃を受け、堪らずリヒターはバランスを崩し、落下し始めた。

リヒター
「ぐあぁっ！」

ジェウス
「アレスが足元にファイアーボールを打ち続けたのは、俺の指示。単に水属性の術ばっかり使用したら、さすがにこの作戦がばれやすいしね。それにアンタは引っ掛かってくれた訳だ……」

リヒター
「貴様……ッ！」

ジェウスが言い終わると同時に、リヒターも雪解け水の溜まりに落ちてきた。

ジェウス
「轟天！」

ジェウスの放った矢は、水溜まりの真ん中に突き刺さり、落雷を起

こした。

リヒター
「ぐあああああ！」

水溜まり全体に雷は広がり、そこに浸かっていたリヒターは案の定、感電を起こし、そのまま立ち上がってはこなかった……。

ジェウス
「……アレス、あの人回復させてあげて」

ポン、と肩に手をやり、頼む。

アレス
「あ、うん」

カイウス
「助けるのかよ！」

ジェウス
「だって、あの人いないと、精霊と話できないでしょ？」

あ、と呆けた声をあげる、カイウスとエミル。

ジェウス
「熱くなりすぎちゃ、ダメだよ」

ジェウスは笑いながら言った。そして、懐からキュアボトルを取り出し、痺れが残っているであろうリヒターに近付いていった。

リヒター
「くっ……」

アレス
「よかった……。意識はある」

ジェウス
「うわ、あの電撃喰らって？
ま、死なない様にはしたけど……痺れはやっぱ残ってるか」

ジェウスはそう言って、キュアボトルの液体をリヒターの口に注いだ。

エミル
「僕達……精霊を捕らえようなんて思ってなくて……。本当にただ、話がしたくて……」

？？？
「リヒター、もういいでしょう？
それに、そのヒト達は、敵ではないわ」

エミルが必死に自分達の事を説明していると、女性の声が聞こえた。
声の方向を見ると、雪風が舞い上がり、その女性は現れた。

セルシウス
「わたしは、氷の精霊セルシウス。あなた達が知りたい事に答えるわ」

目の前に精霊が現れた事に、皆しばらくポカンとしていたが、慌てたように、カイウスが質問を出した。

カイウス
「え、ええっと、じゃあまず世界の始まり、創世の時について……」

セルシウス
「創世の時……。ごめんなさい。それについては答えられないわ」

セルシウスの返答に、エミルからは落胆の声が聞こえた。

セルシウス
「だって、精霊にも世界の始まりの事はわからないんだもの」

精霊とは、マナを自然界の現象に作用させる為、世界が創られた後に生まれた者なので、それについては分からないと言う。

セルシウス
「そして、星晶により封じられていた「あの存在」の事しか知らないわ」

カイウス
「あの存在って何だ?」

セルシウスの口から出た、「あの存在」について、カイウスが聞き返した。

セルシウス
「わたし達、精霊にもわからないの。ただ、精霊が生まれる以前に、既にこの世界にいたものの様よ。精霊ですら届かない次元にいる、何か歪んだ力……。そして、それが大きな災厄となる事を、本能的に察知しているだけなのよ」

セルシウスは矢継ぎ早に話し、ここで一息入れた。

エミル
「大きな災厄になる、歪んだ力……。それを星晶が封じていたの？」

セルシウス
「けれど、その封印は解かれてしまったわ。星晶を人々が採り尽くした事で……」

セルシウスの言葉にエミルは目を伏せた。

セルシウス
「だから、世界樹は「あなたを」遣わせたのかしら？」

アレス
「へ？」

リヒターの治療に専念していたアレスが視線を感じ、セルシウスに目を向けた。

セルシウス
「あなたの事よ、ディセンダー」

それを聞いたカイウスとエミルは大きく口を開けた。

アレス
「え……？」

カイウス

「は……？」

エミル
「へ……？」

アレス・カイウス・エミル
「えええぇぇー！？」

驚愕した三人の声は、霊峰に余すことなく響き渡った……。

霊峰の闘い。そしてアレスの正体。（後書き）

はぁー……。やっとディセンダーって判明です。俺の小説なげーな……。

あ、それはそうと、ＰＶが目標の１０００００を越えそうです！
ありがとうございますっ！
またまた、記念話を投稿しなければ……。

『ディセンダー』（前書き）

久々に
感じてますよ
グダグダ感

刀剣士、心の俳句……

『ディセンダー』

アレス
「ぼ、ぼ、ぼ、僕が、ディセンダー……！？」

衝撃の事実を聞かされたアレスは、正に、口から魂が抜けそうだった。

エミル
「あ……、じゃあ記憶が無いっていうのは……、予言で言う通り、世界樹から生まれて何も知らないからだったんだ……」

アレスがディセンダーということで、記憶が無いことに関しては、ここにいる皆が合点した。

セルシウス
「……あなた、あまり驚かないのね……」

セルシウスの目線の先には、ジェウスがいた。セルシウスの発言で、一斉にジェウスに視線が集まった。

ジェウス
「……結構、驚いたつもりだけど？
アレスがディセンダーでも、俺のアレスへの対応は、変わらないしね……」

セルシウス
「そう……」

それを聞き、セルシウスは少し笑ったようだった。

リヒター
「しかし、そういう事か、セルシウス。こいつがディセンダーとはな」

先程の戦闘の傷が癒えたリヒターが、改めてアレスを見た。

セルシウス
「世界樹の福音を受けし、光まとう者……。わたしも、あなたに与して力を貸すわ。あの災厄が何なのかは、わたし達精霊にも分からないけど」

カイウス
「もしかして、その災厄ってのは「シリウス」と「ラザリス」の事じゃ……」

「災厄」という言葉に、カイウスが再び質問をする。しかし、セルシウスは、シリウスとラザリスの名前を呟き、考え込んでしまった。

ジェウス
「……とりあえず、船、来ない？
二人とも……。精霊本人から聞いた方が、話も聞きやすいし……」

ジェウスが誘うと、ならば協力すると、二人は船への案内を求め、全員で船へ向かった。

――――

アンジュ

「まさか、あなたがディセンダーだったなんて……。」

事の全てを聞いたアンジュは、驚きで言葉を失っていた。

アレス
「えと……、僕もびっくりしてるんだ……。ええと……、とりあえず落ち着こ？」

アレスは頭を掻きながら、落ち着きを促すと、多少マシにはなったようだった。

ジェウス
「見た目は、ヒトとなんら変わりはないんだし……、そんなに気にしなくても……」

イリア
「あんたは、とりあえず少しは驚きなさいよ……。」

いつもと変わりないジェウスの態度に、イリアは少なからず呆れ、次に、アレスに話を向けた。

イリア
「だいたい、あんたは生物変化を起こしたジョアン達を元に戻したでしょ」

アレス
「ああ、うん……。あんまり覚えてないけど……」

「あの時」の話をされ、アレスは曖昧に返事をした。

イリア
「あれがきっと、ディセンダーの力なのよ」

アンジュ
「そういえば、「暁の従者」の人達も……」

と、アンジュが話を続けようとすると、甲板からエミルが入ってきて、話は中断した。

エミル
「アンジュさん。セルシウスさんは甲板がいいって……。部屋への案内は……？」

アンジュ
「了解よ、エミル君。氷の精霊だから、少しでも涼しい場所がいいのかしら」

アンジュは、セルシウスからの話を優先し、アレスの話は、また近いうちに、ということになった。甲板に出ると、セルシウスは心地よさそうに、風にあたっていた。

セルシウス
「さて……、わたしが話せる事は、全部話すわ。何が聞きたいのかしら？」

アンジュ
「ではまず、星晶に封じられていた「災厄」について……」

大半の話は、エミルから聞いたようで、やはり「ラザリス」、ひい

ては「シリウス」もきっと災厄とのことだ。そして、ラザリスが発した、「誕生するはずだった世界」という言葉について、何故この世界ルミナシアに封じられ、どういう災厄になっていくのか、深いところまでアンジュは聞いていく。

セルシウス
「さすがに、その様な事までは、精霊にも分からないわ」

やはり、精霊でも詳しくは分からないらしい。

リタ
「ともかく、星晶の採掘が引き金だったわけね……。」

そこでリタは、大きくため息をはいた。

リタ
「知らなかったとはいえ、こんな事態を引き起こすなんてね……。採掘を止めても、手遅れね」

そう呟き、下を向いた。

ジェウス
「なあ、セルシウス……」

そこで、質問のため、ジェウスが声を上げた。

ジェウス
「「誕生するはずだった世界」ってラザリスは言った。もう一つの災厄、シリウスとは「兄妹」とも言った。一つの世界から、二つの存在ができるとか、あるのか？」

その質問に、セルシウスは目を閉じ、しばし思案した。

セルシウス
「……それも分からないわ。ただ、「誕生するはずだった世界」というラザリスと兄妹ならば、シリウスもそういう事なんでしょうね……」

ジェウスも妥当な答えだと思ったので、それ以上の事は聞かなかった。

セルシウス
「そういえば……」

と、セルシウスが、ふと何かを思い出したようだ。

セルシウス
「この世の創世に立ち会った者がいたらしいけれど……」

アレス
「そんなヒトが……？」

確かに、創世から何千年も生きているヒトなどいるわけがない。

セルシウス
「ヒトではなく、精霊でもないの。その存在から、創世の時について聞いたのが「ヒトの祖」なのよ」

リタ
「ヒトの祖……？」

「ヒトの祖」という言葉に、リタが少なからず興味を持ったようだった。

ジェウス
「はぁ……。多分こっから先の話は、俺には理解不能……」

アンジュ
「そうね……。リタ、この話については、あなたが聞いておいてくれる？」

リタは二つ返事で了承したため、ジェウス、アレス、アンジュは船内へと戻った。

アレス
「ねえ、ジェウス……？」

ジェウスが歩いていると、後ろからアレスに呼び止められた。

ジェウス
「どうした？」

アレス
「僕、ディセンダーだったんだね……。自分自身がそうだったってわかると、この「ディセンダー」って肩書き……っていうのかな……？
それが、嫌に重く感じるよ……。僕、この名前に見合った事、できるかな……？」

ジェウスは目を見開いた。「ディセンダー」という、大きな名前に、

逃げず、真っ正面から立ち向かい、事の重大さを、真摯に受け止め、押し潰されそうなアレスに心底、敬服した。アレスは何も言わず、下を向いている。そんなアレスに、ジェウスは近づき、優しく肩をポンポンと叩いた。

ジェウス
「肩の力抜けって。いつも通りのアレスでいいんだよ？それでみんな助かってる。無理をしないお前の方がいいんだよ。それに……。みんな、お前が「ディセンダー」なんて関係無しに、お前を助けてくれるから。なっ？」

ジェウスはニッと笑い、アレスの頭をガシガシと撫でた。

アレス
「アハ……アハハ……。ありがとう……」

安心したアレスは、少しだけ気が楽になったようだ。

カノンノ
「ア……アレス……」

声がした。いつまにかそこに、カノンノがいた。

カノンノ
「ディセンダー……だったんだね……。もう、絵を見る必要もなくなっちゃったね……」

伏せた目で、カノンノが言うと、近くにいたイリアも話に入ってきた。

イリア
「そーね、予言通りなら生まれたばっかで、記憶が無くて当たり前なんでしょ。思い出すモンも無いんじゃねぇ……」

思った事をズバズバと、イリアは言い、場の会話が一瞬途切れた。
そして、イリアが会話を再開した。

イリア
「ところでさー、あんたが世界を危機から救う為に現れたディセンダーなら、これからどんな災厄が訪れるのか、知ってたりしないワケ？」

アレス
「……ごめん。僕だって、何も分からないんだ……」

イリアの質問に、アレスは小さな声で答えた。

イリア
「はーぁ？
何も知らないっての？」

呆れ返った声を上げた。

イリア
「調子狂うわー。ディセンダーつっても、あんまり当てにしない方が良さそうねー」

バシッ、と音がした。後ろから、ジェウスが思いっきりイリアの頭を叩いたのだ。

イリア
「痛っ……！
なーにすんのよ！
……！」

条件反射で銃を構えたイリアだったが、振り返った瞬間に見たジェウスの目が、悲しみで染まっているのを見て、思わず息を飲んだ。

ジェウス
（頼むから、わかってやってくれ……。アレスの気持ちを……。ディセンダーと言われ、思い悩む心境を……）

決して声には出さなかった。目で訴えた。……しばらくすると、イリアはゆっくりと銃を下ろし、黙ってそこから去っていった。

カノンノ
「ん……、えっと……」

アレス
「カノンノ」

アレスが、上手く次の言葉が出ないカノンノを呼んだ。

アレス
「また……、絵が見たいな……」

カノンノが「え？」といったように、アレスを見返した。

カノンノ
「見て……くれるの？」

アレス
「うん……。だって、カノンノの絵が好きだし、一緒にいることも好きだもん！」

屈託のない笑顔で、そう言った。

カノンノ
「……うん！
じゃあ描くよ。アレスのためにたくさん描く！」

二人が笑ったことで、ジェウスも笑顔になった。野暮だと思い、そこに二人を残し、ジェウスはそっとその場を離れた……。

『ディセンダー』（後書き）

ペース上げないと、「二月には終らせるぜ！構想」が崩れそうです……。

笑い、のち泣き。時々爆弾（前書き）

※この話の事は、良い子のみんなは、絶対マネしちゃダメだよ！

笑い、のち泣き。時々爆弾

ブレイヴ
「ロックスー！
クレアー！
喉渇いたー！
何か冷えた飲み物ない？」

《カダイフ砂漠》での任務を終え、帰ってきたブレイヴは食堂に飛び込み、飲み物をねだった。

クレア
「あ、ブレイヴさん。すいません……今少し忙しいんです……。飲み物だったら、冷蔵庫に冷やしてるので、持って行って結構ですよ？」

そう言い残し、クレアはそそくさと食堂を出ていった。回りを見渡せば、ロックスもおらず、確かに忙しさを感じさせた。

ブレイヴ
「そんじゃ、適当に貰っちゃおー♪」

しかし、パカリと冷蔵庫を開けると、ラベルのないビンばかりで、中身の判別がつかない。

ブレイヴ
「……。いいや、これ持ってこう。透明だから水だろうし……。ジェウスにもコップ持って行ってやろ」

軽く鼻歌を歌いながら、ブレイヴも食堂を後にした。

――――

ブレイヴ
「おーい、ジェウス。冷えた水持ってきたぞ。飲むだろ？」

ジェウス
「あー、じゃあ頂こうかな？」

ブレイヴは、二つのコップに水を注ぎ入れ、一つをジェウスに手渡した。

ジェウス
「……なんか、変な味がするぞ？」

その飲み物の異変に、ジェウスが真っ先に気付いた。

ブレイヴ
「確かに……。でも、食堂の冷蔵庫だし、変なものじゃないだろ」

ジェウス
「まあ、さすがに研究室の面々も、実験材料ぶち込む訳無いしな……。大丈夫か……」

深くは気にせず、その後も、何かの魔力に取り付かれたように「ソレ」を二人は飲みつづけた……。すると、しばらくして、足元がフワフワとした感覚に二人は襲われた……。

ブレイヴ

「ふえっ……？」

ジェウス
「ありゃりゃ……？」

――――

ロックス
「全く！
一体、どこに置いたんですか！？」

レイヴン
「おっかしいわね……？
絶対ここに置いたはずなんだけど……」

その頃食堂では、ロックスとレイヴンが部屋をひっくり返さんばかりに、何かを探していた。

ロックス
「冷蔵庫で「お酒」を冷やすなんて言語道断です！
このギルドには、未成年の方もたくさんいるんですよ！
間違って、誰かがお飲みになったらどうするんですか！？」

レイヴン
「それについては謝ったじゃない！
大体、冷蔵庫に入れてたの、ほんの数十分よ！？
まさか、無くなるとは思わなかったのよ！」

口喧嘩をしつつも、手を休めず探しつづける二人だが、肝心の捜し物の「お酒」が見つからない。

ロックス
「全く見つからないじゃないですか……。誰か持って行ったんじゃないんですか！？」

レイヴン
「だから、数十分だけしか置いてないって言ったじゃない……。その可能性は限りなく低……」

クレア
「お二人で何なさってるんですか？
何か捜し物でも……？」

「お酒」を探している二人に、用事から帰ってきたクレアの声が掛かった。

ロックス
「あ、クレアさん。聞いてください！
レイヴンさんが勝手に冷蔵庫にお酒を置いてたんです！」

レイヴン
「だから謝ったじゃない……。んで、それが見つかんないのよね。少年達の口に入る前に、なんとか見つけたいのよ。ほらほら、わかったらお嬢ちゃんも探すの手伝って！」

クレアに主旨を簡単に説明した二人は、捜索を再開した。クレアは頬に手を当て、しばし考えたのち、ハッとした。そして、重々しく口を開いた。

クレア

「あの……、心当たりがあるんですけど……」

その言葉を聞いた途端、二人の手が止まり、視線がクレアの方に向かった。

ロックス
「心当たり……あるんですか……」

クレア
「ハイ……。もしかしら……というか、私の予想が正しければ……もう、手遅れだと思います……」

その言葉を聞き終わり、二人はサッと血の気が引いた。

クレア
「ブレイヴさんが持って行ったかもしれません……。多分ですけど……」

ロックス
「うわわわ！」

と、すべてを聞く前にロックスは、ブレイヴとジェウスの部屋に飛んで行き、後にクレアとレイヴンが追って行った。

ロックス
「お二人とも！
失礼します……って、酒臭っ！」

ロックスが部屋に入ると、部屋の中には、酒の香りが漂っていた。

レイヴン
「あーらら……。完璧、できあがってるわね……」

二人とも起きていたが、ブレイヴはベッドによっ掛かり、ジェウスは隅で体育座りと、明らかに普通の状態ではなかった。

ブレイヴ
「あ～……、ロックス～……」

ジェウス
「ロックスだ……。アハハ……」

ブレイヴは、なぜか今にも泣きそうで、ジェウスは、なぜか笑っている。二人の脇には、空のビンが転がっていた。

クレア
「全部飲んだんですか!?」

ロックス
「フタに名前があります……。「霊峰の雫」……。これは、度数の高いお酒ですね……」

レイヴン
「しかも、複数人で飲むために、結構な量だったわよ……？それを……。末恐ろしいわね、この少年達……」

そこまで話し、三人は改めてブレイヴとジェウスを見た。

ブレイヴ
「うぅ～……」

ジェウス
「アハハ……」

ロックス
「どうしましょう……」

クレア
「とりあえず医務室に連れていきましょう……」

そういう事になり、二人に声をかけた。

レイヴン
「おーい、少年達。医務室行くわよ、医務室」

しかし……

ブレイヴ
「医務室……やらぁ（やだぁ）……」

ジェウス
「いい、いい……。らいじょうぶらから～（大丈夫だから～）……」

と、行く気も立つ気もなく、呂律も回らなくなってきている。途方に暮れていると、気付けば部屋の回りは人だかりができていた。

アンジュ
「これは……、いったい何があったの？」

アレス

「カノンノ……。これは見ちゃまずい光景かな……？」

カノンノ
「どっちかって言ったら……。見ちゃまずいかも……」

ブレイヴとジェウスの状況が伝わるにつれ、集まりはざわざわとし始めた。

ジェウス
「アリェス（アレス）……、カニョンニョ（カノンノ）……！」

アレス
「は、はい！？」

カノンノ
「二人とも酔いすぎだよ……。ほら立って……」

ジェウス
「二人とみょ（二人とも）、俺のいみょうと（妹）と弟たぞ～……。ウフ、フフフ……」

そう言うと、ジェウスは笑顔のまま、二人に抱き着いた。

アレス
「うわわわ！？
ちょっ！
ジェウス、くっつかないでよ！」

カノンノ
「きゃっ！？

もう、しっかりしてよ、ジェウス！」

ジェウス
「いみょうと（妹）と弟だ～……」

カノンノ
「わかったから……、私、妹でいいから……早く立って……」

アレス
「僕も弟でいいから、しっかりしてよ……」

だんだん、めんどくさくなったアレスとカノンノは、適当に相槌をうち、その場を逃れた。

ブレイヴ
「二人とも……。おりぇ（俺）は～……？」

しかし、ジェウスばかりを相手していたアレスとカノンノを、ブレイヴはじっと見ていた。……涙目で……。

カノンノ
「あ、あっ！
えっと……ごめん！
忘れてた……」

カノンノが言うと、ブレイヴは体育座りになり、下を向いてしまった。

ブレイヴ
「しょう（そう）……、しょうだよにゃ（そうだよな）……。おり

ぇ（俺）の事は、忘れちゃってて、当たりみゃえだよにゃ（当たり前だよな）……。こんにゃおりぇにゃんて（こんな俺なんて）、きりゃいらろうし（嫌いだろうし）……」

アレス
「うわぁぁー！
忘れてない、忘れてない！
僕たち、ブレイヴの事、大好きだよ！
ねえ、カノンノ！」

アレスが必死に取り繕い、カノンノにも同意を求めた。

カノンノ
「あ……あー！
うんうん！
さっきのは冗談だよ！
本当は、ブレイヴの事、大好きだし、忘れてなかったから！
だから、ね？
機嫌直して！？」

ブレイヴの機嫌をとっていると、またもやジェウスが二人を呼んだ。

ジェウス
「おりぇには（俺には）、しょんにゃこと（そんなこと）、いってにゃいぞ（言ってないぞ）……！
おりぇにみょいってくりぇ（俺にも、言ってくれ）……」

アレス
「ハイハイ、大好きだから……」

ジェウス
「ここりょがこみょってにゃい（心がこもってない）！
みょういっきゃい（もう一回）！」

カノンノ
「大好きだよっ！
二人ともおんなじくらい、本当に大好きっ！」

アレス
「大好きだよ！
いや、もう、大好きなんて言葉じゃ足りないくらい大好き！」

慌てて二人は、表面上、思いを精一杯込めて、ジェウスに言った。

ジェウス
「うむ、うむ。くるしゅうにゃい（苦しゅうない）……。フフフフ……」

上機嫌になったジェウスは、また、ニコニコと笑い始めた。

アレス
「アンジュさん……。もう面倒臭いです……」

堪らず、アレスがアンジュにギブアップの意志を示した。

アンジュ
「うーん……。どうしようかしら……」

さすがに、二人の相手をアレスとカノンノにさせるのは酷だと思ったのか、人差し指を頬に当て、考え出した。

ブレイヴ
「アンジュ～……」

すると、不意にブレイヴがアンジュの名前を呼び、おもむろに立ち上がった。

アンジュ
「？……」

ブレイヴ
「にぇえ（ねえ）、アンジュ～……」

ブレイヴはフラフラとアンジュの方に歩いて行き……

アンジュ
「きゃっ！？」

アンジュの両肩に手を置いた。

ブレイヴ
「にぇえ（ねえ）？
アンジュ……？
おりぇのきょと（俺の事）、しゅき（好き）？」

……場の空気が一瞬で凍った。ヴェイグすら、たじろぐ程の冷気だった……。しかし、ブレイヴは止まらない。

ブレイヴ
「にぇえ（ねえ）、アンジュ～……？」

アンジュ
「え、ええっと、それは好きだけど……」

まさか、正面切って、「嫌いです」とは言えない為、アンジュはフワリと話を流した。……が、今のブレイヴはそれを許さない。

ブレイヴ
「ちーがーうー！」

バシバシと、アンジュの肩を叩き、否定の意を示す。

ブレイヴ
「おときょとしてどうにゃにょ（男としてどうなの）？って、きいてるにょ～（聞いてるの～）……」

周りは皆、ポカン状態である。開いた口が塞がらない状態。ただ一人、テンションあがりっぱなしなのが、マルタである。

マルタ
（こ、これは……、怪我の功名ってヤツじゃないの～！？）

ブレイヴの爆弾発言に、一帯はシン……とし、アンジュのうろたえ声しか聞こえない。一方で、この雰囲気の元凶のブレイヴは、上目遣いの涙目でアンジュを見据える。

アンジュ
（うぅ……。その目は反則だよ……）
「え、え、えぇっと……。その……、あの……」

ブレイヴ
「んん……？」

何も言わないアンジュに、ブレイヴは思いっ切り顔を近付けた。深い意味はないだろうが、ブレイヴとアンジュの距離は、顔と顔がぶつかるくらいまでに近付いてしまった。

アンジュ
「ちょっ！？
ブレイヴ君、顔近い！？」

これ以上、この距離を保つのも、限界に近かったので、アンジュは切り出した。

アンジュ
「あ、あのね、ブレイヴ君、ごめんなさい……。あの、これは……」

ブレイヴ
「グスッ……」

アンジュ
「……えっ？」

その瞬間、ブレイヴからしゃくりあげる声が聞こえてきた。

ブレイヴ
「やっぱり……ヒック……。アンジュは、おりぇにょこと（俺の事）……ヒック……。きりゃいにゃんだ（嫌いなんだ）……ヒック……」

アンジュ

「あ……、え？
ええっ！？
い、いや！
今の、「ごめんなさい」は、そういう「ごめんなさい」じゃなくって……。ああ、もう……」

先程の言葉の説明をしようとすればするほど、上手な言葉が出てこず、アンジュはプチパニックを起こした。そこに、ブレイヴの爆弾発言が再び飛び出す。

ブレイヴ
「おりぇは（俺は）、こんにゃにアンジュにょことだいしゅきにゃにょに（こんなにアンジュの事大好きなのに）……」

本日二度目の氷河期の到来である。セルシウスも真っ青だ。

アンジュ
「へ……？」

ブレイヴ
「ありゃりゃ……？」

すると突然、ブレイヴが膝から崩れ落ち、地面に倒れた。

アンジュ
「ちょ、ちょっと！
ブレイヴ君！？
大丈夫！？」

ブレイヴ

「スゥ……、スゥ……」

心配もつかの間。ブレイヴは安らかな寝息をたてていた。

カノンノ
「アンジュさん……、こっちも寝ました……」

カノンノがずっと介抱していたのか、ジェウスも幸せそうな顔で寝息をたてている。

アンジュ
「……とりあえず、一件落着ね……。ほら、みんなも部屋に戻って！」

アンジュが手を叩くと、皆は部屋に帰っていった。

アレス
「お疲れ様、アンジュ」

アンジュ
「泣き上戸と笑い上戸の相手は疲れたわ……。レイヴンさんには、きっちり罰を与えないと……！」

頭の中では、仕事二、三倍の案ができてるであろう想像をすると、アレスは苦笑いするしかなかった。

カノンノ
「アンジュさん……。ブレイヴの最後の言葉……」

アンジュ

「よ、酔った勢いでしょ？
さ、さて、あの二人は……さすがに明日働くのは無理でしょうから、休みにしといてあげましょうか……」

アンジュはそう言い残すと、そそくさとホールに戻っていった。その様子を、アレスとカノンノだけが、ニヤニヤしながら見ていた。

――次の日――

ブレイヴ
「うあぁぁ～……。頭いてぇ～……」

アレス
「おはよう、ブレイヴ。昨日の事覚えてる？」

ブレイヴは朝起きると、アレスに満面の笑みでそう言われた。

ブレイヴ
「……？
あれ……昨日……？
あれぇっ！？」

アレス
「あー……、じゃあ、アンジュに何言ったかも、覚えてないんだね……。まあ、ブレイヴは今日は休みだから、ゆっくりしといてね！」

アレスはなるべく、顔に出さぬよう、話題をさりげなく変え、その場を去っていった。

ブレイヴ

「おい……、なんだよ……、なんなんだよー!?
何言ったんだよー!?」

――――

ジェウス
「が……！
頭……痛い……！」

ジェウスの方も、もれなく二日酔いで頭痛に襲われていた。

カノンノ
「あ、おはよう、ジェウス！
頭、痛い？」

すると、ばったりとカノンノに会い、朝の挨拶を交わした。

ジェウス
「うん……痛い……。なんで痛いんだろ？」

カノンノ
「昨日の事覚えてないの？」

ジェウス
「ん……、あれ……、ホントだ……。全然覚えてない……」

記憶が飛んでいることに、ジェウス自身より、カノンノ方が驚いていた。

カノンノ

「うーん……。たぶん思い出さないほうがいいと思うよ……。あ、今日、ジェウスは仕事休みだよ。昨日、「慣れないこと」したからね」

ジェウス
「休みか、珍しい。頭痛いからちょうどよかったかも……」

カノンノ
「私はもう、依頼こなしにいくね。じゃあ、ゆっくりしてね！」

と、ジェウスが見送っていると、数メートル先で、カノンノが振り返った。

ジェウス
「どうした？」

カノンノ
「行ってきます……、お兄ちゃん！」

ジェウス
「ブッ！？」

カノンノ
「えへへ……。言ってみただけ！」

驚愕の表情を見せるジェウスを背に、カノンノは依頼にいった。

ジェウス
「お兄ちゃん……。お兄ちゃん……。お兄ちゃん……？」

呆然としたジェウスは五分程、その場に立ち尽くしていた。

―――

カノンノ
「お酒はハタチになってから！
飲み過ぎや、無理強いもダメだよ！」

アレス
「カノンノ……、何言ってんの……？」

カノンノ
「……言わなきゃ、まずい気がして……」

笑い、のち泣き。時々爆弾（後書き）

カノンノの言う通り！
という事にしてあげて下さい。

刀剣士のメモ帳。「主役、攻略本の紹介ページ」（前書き）

タイトル通り、攻略本の紹介ページを想像して、執筆です。
「メモ帳」って言うのも、ホント（笑）
（ケータイのメモ帳に、大半は書いてあります）

刀剣士のメモ帳。「主役、攻略本の紹介ページ」

名前：ブレイヴ・テンダー

性別：男

年齢：１８歳

称号：風雷の剣士

職業：魔法剣士

武器：片手剣／短剣

防具：魔法剣士系

メモ：魔法剣士なのだが、好んで前衛によくでる。だが、魔術の訓練は怠っていない。盾を装備しないのは、本人いわく「逆に邪魔」らしい……

好き：ロックスが入れるお茶

嫌い：高所

長所：滅多に怒らない。年下の扱いが上手（いい意味で）

短所：馬鹿。前向きさの反動か、たまにネガティブに考える

特技：機械いじり

容姿：銀色の短髪（フレンの銀髪を想像するとよい）。黒色の瞳。
身長は１７０?後半

プロフィール：「現世」から「ルミナシア」にやってきた。バンエルティア号に墜落した縁で、ギルド「アドリビトム」で働いている。前向きで、遠慮はほとんどしないが、アンジュに恋をする、思春期の男の子っぽさもある

術技：魔神剣　虎牙破斬　散沙雨　魔神剣・双牙　虎牙連斬　秋沙雨　雷神剣　風雷神剣　魔神双破斬　魔神千烈破　驟雨双破斬　ライトニング　ウインドカッター　サンダーブレード　エアスラスト　ファーストエイド　ヒールウインド
（※まだ増えます。あと五つ）

秘奥義：雷覇皇嵐衝……雷をまとう剣でメッタ斬りしたあと、敵に風雷の闘気を飛ばす。（イメージは、ルークの「ロスト・フォン・ドライブ」）

台詞：「風よ神風の如く、雷よ鳴神の如く……。風雷とともに、切り刻む！
雷覇皇嵐衝！」

名前：ジェウス・フレード

性別：男

年齢：１８歳

称号：紅蓮の拳弓士

職業：格闘弓士

武器：拳／ボウガン（サブ）

防具：格闘家系

メモ：基本、前衛。だけど危なければ下がって、ボウガンで応戦する。ボウガンはヒスイのを流用。戦いのスタイルは、本人いわく、「カッコイイと思ったから、コレ」と語っている。

好き：誰かと遊ぶ事

嫌い：ゴキブリ

長所：面倒見がよい。頭はいい方

短所：たまに黒い……。ゴキブリに対して、異常過ぎる反応をみせる

特技：料理

容姿：黒髪のくせ毛で、長さは襟辺りまで（髪質は、シェリアやエリーゼに近いもので、長さはエミル位の）。茶色の瞳。身長は１７０?前半

プロフィール：「現世」から「ルミナシア」にやってきた。バンエルティア号に墜落した縁で、ギルド「アドリビトム」で働いている。年上への敬語で接する態度は崩さない。歳に似合わず、冷静さがある。

術技：魔神拳　幻龍拳　連牙弾　迫撃掌　紅蓮　凍牙　衝破　轟天
　鷲羽　獅子戦吼　緋炎連脚　爆竜拳　鷹爪襲撃　軽岩砕落撃　礫
岩迫落撃　陽炎　飛連幻龍拳　連牙飛燕脚　爆牙弾
（※まだ増えます。あと四つ）

秘奥義：鳳舞疾風閃……拳で打ち上げたのち、光速で敵の周りを飛び回り、矢の連射。とどめに、空中落下からの正拳。（イメージは、シングの「翔旺神影斬」）

台詞：「これで終わらせる！
刹那の如く、その身を貫くは、我が矢の一閃！
鳳舞疾風閃！」

名前：アレス・カレイジャス

性別：男

年齢：０歳（世界樹から生まれたため）。見た目は１５歳位

称号：ディセンダー

職業：ビショップ

武器：杖

防具：ビショップ系

メモ：バッチリ後衛。攻撃術から回復術まで唱えまくる、みんなを

守るディセンダー！
本編での出番はないが、一対一の時は、戦士に転職してるらしい……

好き：アドリビトムのみんな

嫌い：一人になること（淋しいから）

長所：気遣いをよくする。責任感が強い

短所：断ることを知らない。たまに鈍い

特技：ブレイヴとジェウスの扱い（任務のとき、アレスといつも一緒にこの二人のどちらかがいるのは、このため。アレスの押しに弱い二人……）

容姿：蒼髪のストレート（ビショップの公式イラストがいい感じ）。髪と同じ、蒼い瞳。身長は１６０？後半。

プロフィール：空から、光をまとい舞い降りてきた、不思議な男の子。出会ったカノンノ、ブレイヴ、ジェウスのつてで、「アドリビトム」で働く。のちに、ディセンダーと判明。カノンノ、ブレイヴ、ジェウスには、特に懐いている

術技：ファイアーボール　イラプション　ストーンブラスト　ロックブレイク　ウィンドカッター　エアスラスト　アクアエッジ　スプレッド　ファーストエイド　ヒール　ナース　レイズデッド　リカバー
（※もちろん増えます。あと六つ）

秘奥義：構想しており、一応、公開もしていますが（ＰＶ５０００

０記念参考）、本編で使っていないため、割愛。（ゴメンナサイ！）

台詞：同上。（こちらもゴメンナサイ！）

刀剣士のメモ帳。「主役、攻略本の紹介ページ」（後書き）

物語半分位まできたので、おさらいでした。
（自分も含めて）

二度目の空からの訪問者。そして、久々の再会（前書き）

カイル達のイベントをピックアップして執筆しました。久々にヤツが出てきます。そして最後に、伏線を少しばかり張りました。

後書きに、アンケート的な物あります。よければ、ご協力を……。

二度目の空からの訪問者。そして、久々の再会

アドリビトムに、フレン、チェルシーが新しく加入した時期、研究室のハロルドとリタが慌ただしく動いていた。

アレス
「ねえ、これからハロルドとリタが実験するみたいなんだけど、一緒に来ない？」

部屋に入るなりアレスは、ブレイヴとジェウスにそう聞いてきた。

ブレイヴ
「実験～？
何の？」

アレス
「さぁ……？」

ジェウス
「さぁ、って……」

アレス
「非物質とか、それが見えるようになるとか……」

ブレイヴとジェウスは、その「ワード」にピクリと耳を傾けた。

ジェウス
「ヴェラトローパ……？」

アレス
「あ、うんうん。そんなことも言ってた気がする」

もうそんな時期に来たか……。と思いつつ、アレスに誘われるまま、二人は実験に参加することにした。

――――

実験を行う甲板に行くと、ハロルドは設置された機械をいじっており、リタはこちらを一瞥した。

リタ
「また、ぞろぞろと来たわね」

虚空を見上げ、やれやれと言った調子で、リタが言った。

ブレイヴ
「……三人だけなんだけど」

ハロルド
「まーまー、人数は多い方が楽しいじゃない？
んじゃ、ちゃっちゃと始めちゃうわね」

ハロルドが更に機械をいじると、空に向かって立っている機械のてっぺんが光った……気がした。しかし、何も起こらない。

ハロルド
「触媒が足りなかったかしら」

アレス

「なんだ、つまんな……」

と、アレスが不満を言いかけた時、

???

「うわぁぁぁぁ！？」

けたたましい悲鳴が空から降ってきた。そして「ソレ」はこの船…

…バンエルティア号に墜落した模様だ。

ハロルド

「今の音、なぁに？」

ブレイヴ

「いや、音より声だろ！

悲鳴！」

一瞬の静寂の後、ハロルドが発した言葉に、ブレイヴは思わず突っ込んだ。

リタ

「そんな事より、その装置はまだ手を加えないといけないんじゃないの」

アレス

「あれ、空耳だったのかな……？」

ジェウス

「はっきり聞こえた。この二人が興味を持ってないだけ……」

はぁ……と三人でため息をつく横で、ハロルドとリタは撤収作業をさっさとやって、部屋に戻っていった。

ブレイヴ
「……どうする？」

ジェウス
「……どうするって、俺達の時みたいに、あそこに墜ちた可能性高いよな……？」

一番上の展望室を指差し、ジェウスが言った。

アレス
「行ってみるのが、早いんじゃないの？」

コクリと三人で頷き、一目散に展望室を目指した。そこに着くと、男女四人が倒れて気絶していた。

アレス
「僕、誰か呼んでくる！」

空から墜ちてきた四人を確認すると、アレスは踵を返し、下に降りていった。

ブレイヴ
「あぁ……、俺達が直した天井がぁぁ……」

ジェウス
「どんぴしゃりで、おんなじ所に墜ちてきたな……って、違う！早く、医務室、運ぶぞ！」

人より天井を心配するブレイヴに、一発突っ込み、手早く四人を医務室へ運んだ。

――――

アンジュ

「あら、空からのお客様の先輩が運んでくれたの？奇妙な縁ね」

アンジュが笑いながら入ってきた時には、墜ちてきた全員が意識を戻し、怪我の治療も終わっていた。空から墜ちてきた経緯を聞くと、

？？？

「私たち、ある男と戦っていたんですが……」

と、ピンクのワンピースを着た少女が答える。

？？？

「突然、地面が無くなって、眩しい光に包まれたんだ……」

後を次ぐように、金髪の少年が言った。

アンジュ

「状況的には、あなたたちとそっくりね？」

とアンジュが、ブレイヴとジェウスを交互に見る。

？？？

「なあ、やっぱりこれって夢なんじゃねぇか？」

と、急に銀髪の青年が話し出した。

アニー
「空から墜ちてきたんですから、そう思われても不思議はないかも……」

ロニ
「いいえ、お嬢さん……。このロニ・デュナミス。貴女に愛という夢を……」

ブレイヴ
「とーう！」

ロニ
「ごぁあぁ！？」

全部言い切る前に、ブレイヴが鳩尾を殴って止めた。

？？？
「上出来だな……」

その時、黒衣を纏い、骨の仮面を被った少年がそう呟いた。

ジェウス
「あぁ、頭を強く打ってしまったか」

アニー
「大変。ハロルドさんに直してもらわないと」

棒読みでジェウスとアニーがそう言うと、どこから聞き付けたか、ハロルドがドリルを持って現れた。

ハロルド
「はいは～い♪
術式は、開頭術、穿頭術、ど・ち・ら？」

ロニ
「ゲフッ……。そ、その両手のドリルは……？」

鳩尾を殴られた衝撃から少し立ち直ったロニが、苦笑いを浮かべ少し後ずさった。

ロニ
「目が本気じゃねぇかよ！
……ぎゃあああ！」

生命の危機を感じたのか、ロニはハロルドから追い掛けられながら、部屋から逃げていった。

ジェウス
「ふー……。落ち着いたか……」

ブレイヴ
「落ち着いた所で、挨拶済ませないと……な。」

場をまとめ、ブレイヴ、ジェウス、アンジュが先に名乗った。そして後から、部屋から逃げていった、銀髪の青年……ロニ以外の自己紹介をされた。

金髪の少年が、カイル。
ピンクのワンピースを着た少女が、リアラ。
仮面を着けた、黒服の少年が、ジューダス。

三人は、そう名乗った。

リアラ
「墜ちたのがこの船でよかった……。あのまま地面に墜ちていたと思うと……」

想像したのか、リアラの顔が若干青ざめた。

アンジュ
「それについては謝らなきゃね。どうせ私たちのせいだし……。」

カイル
「えっ、そうなの？」

アンジュの言葉に、カイルがほうけた声を上げた。

ジェウス
「訳の分からん機械いじった直後に、こうなったしなぁ……」

とジェウスが同意をする横で、ブレイヴもうんうんと頷く。

アンジュ
「どこかに送ってあげたい所なんだけど……、ここの二人の前例があるしなぁ……」

アンジュは、ちらっとブレイヴとジェウスを見て、しばらく考えた。

アンジュ
「ごめんなさい。失礼を承知で聞くけれど、あなたたち「世界樹」は分かる？」

ルミナシアに住んでいる人々ならば、あるのが当たり前の「世界樹」。あえてアンジュは、それを聞いた。

カイル
「……世界樹って？」

アンジュ
「やっぱり……。ブレイヴ君、ジェウス君。あなたたちと同じと考えていいみたいね」

「世界樹」という言葉を初めて聞いたような反応を見せたカイルに、確信を感じたようだ。

ジューダス
「……つまり、ここは僕達の世界とは全く別だと？」

説明をするとジューダスの理解は早かった。呼び寄せたなら、帰すこともできるだろうと言ったのもジューダスだった。しかし、それを研究室にいたハロルドやリタに話したものの、どういう原理でこちらに来たか分からない以上、どうにもできないらしい。

ブレイヴ
「まあまあ、実験に成功したらすぐに言えるように、ここで働いたら？」

ジューダス
「僕達には倒さないといけない男がいるんだ。残虐で、強いものがいると聞けば、戦いを挑む……。そのおかげで、多くのものが殺された……。早くしないと、手遅れになるんだ！」

その男の残虐さからか、ジューダスには焦りの色が見えた。そんなジューダスの横で、ジェウスがゆっくり口を開いた。

ジェウス
「その男も、お前らが墜ちてきた時、近くにいたんだろ？だったら……？」

カイル
「こっちの世界に……バルバトスが来ている！？」

ジェウス
「そゆこと。だったらこのギルドで働きながら、その男……バルバトスの情報がくるのを待つのが得策だ」

ジェウスの意見に、カイルもジューダスも黙った。

リアラ
「今は、そうするしかないわね、カイル？」

カイル
「そうだね。オレ、一度ギルドで働いてみたかったんだ！えっと……ブレイヴとジェウスだったよね？よろしく！」

ここで、このギルドに新しく、カイル、リアラ、ジューダス（つい

でにロニ）の一行がメンバー入りした。

――――

ホールに出ると、グッタリしたロニがいた。

ロニ
「カイル……。リアラとジューダスは？」

カイル
「先に部屋に行ったよ。ブレイヴとジェウスがロニの方が心配だからって待ってるんじゃないか」

頬を膨らませ、カイルはロニに抗議した。

ブレイヴ
「そら、行くぞ？」

ジェウス
「カイルも、行こうか？」

と部屋に向かおうとした時、甲板の扉が開き、ある二人がホールに入ってきた。

ルーティ
「あら、新人君？
あたしは、ルーティ・カトレット。よろしく」

一人はルーティ。

スタン
「俺は、スタン・エルロン。二人とも、よろしくな！」

もう一人はスタンだった。

ブレイヴ・ジェウス
（さすが、親子……。タイミングが素晴らしい……）

ロニ
「ル、ルーティ……さん！？」

カイル
「ウソ……父さん……？」

心の中で、今の感想をブレイヴとジェウスが呟いている横で、カイルとロニは、目に見えて動揺していた。そこで二人は軽いイタズラを仕掛けることにした。

ブレイヴ
「そうそう、新入り！
金髪の方がカイルで、この銀髪の方がロニ！
それでさぁ、カイルの父親がスタンにそっくりなんだってさ！
だから、スタン？
「父さん」、って呼ばれてあげたら？」

ジェウス
「ルーティはカイルの母親にそっくりだって！
だからルーティは、「母さん」って呼ばれてあげようか？」

この発言に驚いたのが、スタン、ルーティ、カイルの三人だった。

カイル
「な……な……？」

カイルは驚きすぎで、身体が小刻みに震えていた。

スタン
「父親に似てる……？
まあ、それなら別に嫌とは言わないけど？」

最初こそ、若干戸惑いを見せたが、スタンの方は、別段気にした様子は見せなかったものの、

ルーティ
「か、か、母さんって……。嫌よ！
それにこの流れじゃ、カイルが、あたしとスタンの息子に見えちゃうじゃない！」

ブレイヴ・ジェウス
（その通りなんですけどー……）

ルーティの方は、頑なに拒否した。しかし……

ジェウス
「今度の依頼、俺の分の報酬、全部そっちに回す（コソッ……）」

ルーティ
「うっ……。わかったわよ！
カイル！
もう好きに呼びなさい！」

こんなところで、お金の力の偉大さを、ジェウスは知れた。

カイル
「へっ……、あっ……！
は、はい！
えっと……父さん！
母さん！」

やはり照れていたが（特に、ルーティとカイル）、カイルが終始笑っていたので、これで良かったのだと、ブレイヴとジェウスは安堵した。

――――

カイル
「びっくりしたよ。この世界にも……若いけど、父さんと母さんがいた……」

ロニ
「俺もビビったぜ……。だが、俺達の世界のスタンさんとルーティさんと全く変わらないな……」

スタンとルーティがホールから去った後、カイルとロニは思い思いの事を口にしていた。

ブレイヴ
「でも、カイル？
あの二人の子供ってことは言わない方がいいぞ」

カイル
「何で？」

ブレイヴ
「それは……、ジェウス！
続きを！」

バッと、視線をジェウスに向け、説明を投げた。

ジェウス
「お前、そのネタ……！
はぁ、まあいいや……。こっちの世界のスタンとルーティはまだ男女のなかにすら成ってないの。そこにカイルが干渉しちゃったら、あの二人がうまくいかないようになるかも、だろ？
そしたら、こっちの世界でのカイルが生まれなくなっちゃう。了解？」

ロニ
「カイルが生まれなくなる……！？」

その未来を描いたロニが、不安の顔を見せた。

ブレイヴ
「という訳で、父さん、母さんと呼ぶだけ。それ以上は、話しちゃダメだからな？」

カイル
「うん……」

理解をしたのか、カイルは一言そう頷いた。

ブレイヴ
「よし、じゃあ部屋に行こうか！」

ハロルド
「ちょいと、あんた」

歩き出そうとすると、ハロルドに呼ばれた。

ハロルド
「ああ、どっちかでいいわ。そこの二人を早く部屋に連れていってあげなさい」

と言われたので、ブレイヴが残り、ジェウスがカイルとロニを部屋へ案内していった。

ブレイヴ
「……で？
カイルに、「父さん」、「母さん」と呼ばせた事にやっぱり問題あり？」

ハロルド
「ギリギリだと思うわね。あ、セーフの方よ？」

ハロルドは笑って言っているが、いつもより真剣実があった。

ハロルド
「あんた達が言っていた、「こちらの世界のカイル」がそれのせいで生まれなかったらどうする？」

それはそれで面白そうだけどね♪
と最後に付け加えた。

ブレイヴ
「どうとでもなると思うけどなぁ……。ちょっとやそっとで、スタンとルーティが離れることはないと踏んだ、俺とジェウスのお節介だから」

ブレイヴは笑ってそういい、そこを去って行った。

ハロルド
「ふーん……。非科学的だけどね。ま、なんだか当たってる気もするけどね♪」

一人で呟き、ハロルドも研究室へ戻って行った。

――――

ブレイヴ
「これにて、全作品の主人公達が揃ったわけだな」

部屋に戻ったブレイヴとジェウスは、今の状況と思いについて話し合った。

ジェウス
「そういえば、俺達この世界に馴染み過ぎちゃったけど……、まだ帰る道、神様は見つけてくれないのかな?」

ブレイヴ
「あぁ、言われてみれば……」

フゥ……と揃ってため息をついた。

神様
「呼んだ？」

ブレイヴ・ジェウス
「フォッ！？」

唐突に聞こえた声に、二人は意味の分からない奇声を発してしまった。

神様
「お久しぶりだね。えっと……今は、ブレイヴ君とジェウス君だっけね？
いやー、すっかり馴染んじゃってるね？」

神様は何も変わってない。サラサラとした、長い金髪。紳士の様な黒い服を、細身の身体で着こなしている、いつか会ったあの時のままだ。

ブレイヴ・ジェウス
「はー……」

神様
「あはは。びっくりさせちゃったかな？
まあ、まずは聞いてよ。途中経過なんだけど、君達の世界に帰る扉、多少捉えた」

神様の報告で、二人は我に返った。

ブレイヴ
「た、多少って……？」

神様
「うーん……。まだ正確に捉えれなくて、不安定なんだ。だからこれは、もう少ししたら元の世界に帰れるよ、って報告だよ。以上、何か質問でも？」

神様が目をキョトキョトと二人に送る。なので、ジェウスはいくらかの質問をしてみた。

ジェウス
「帰れる日が近いのは分かりました。だったら、それ以外の質問を……。「シリウス」。これは災厄の片割れですが、コイツは原作には出てきてないです。……何か知ってます？」

その質問に、神様は頭を掻きながら、少し考え答える。

神様
「……君達がこの世界に存在していることにより、物語の歯車が狂った……というより、新たな歯車が増えたのかな？君達二人と、そのシリウス……。ああ、分かりづらいか……。簡単にいえば、君達がいるのであれば、何か起こってもおかしくなかったワケ」

淡々と話す神様を、二人はじっと見た。

ブレイヴ
「つまりは、俺達が存在するから、シリウスも存在している。……

そういうことか？」

神様
「そこまで強い繋がりは無いけどね。例えばの話、君達が死んでもシリウスは死なない。運命共同体って事はないんだ」

ブレイヴ
「シャレにならないことゆーな！」

ブレイヴが突っ込む横で、ジェウスは、はたと神様の態度に疑問に感じた。

ジェウス
「……？
全部知ってるような態度で話しますね……？
あなた、一体なんの神様？」

一瞬、神様がピクリと反応を示した気がした……。しかし、ジェウスに目を向けた神様は、いつもの飄々とした神様だった。

神様
「神様は神様さ？
……そのうち、知りたくなくても、知るようになるかもね？
あ、言っとくけど、俺がその「シリウス」とかいう、雑なオチじゃないからね？」

ふふふ、とイタズラっぽく神様は笑い、ジェウスはそれ以上は聞かなかった。

神様

「じゃあ、俺はそろそろ帰るよ。じゃね♪」

左手で手を振り、右手で指を鳴らす準備をしだした。

ブレイヴ
「じゃあ、また！」

ジェウス
「次は帰れるって報告待ってますよ！」

二人も、手を振り返した。

神様
「あ、君達……」

と、最後に神様が言った。

神様
「君達、今イイ顔してるよ。これからも頑張りな」

パチン、と指を鳴らす音が聞こえ、神様は二人の前から消えた。

――――

神様
「……フゥ。危ない、危ない。ジェウス君は、やっぱり頭がいいね……。」

白い世界に佇む神様は、独り言を呟く……。

神様
「だけど……。もう少し頑張ってよ？
ブレイヴ君、ジェウス君……。君達には話してないけど、君達を「ルミナシア」に送ったのは、偶然じゃあないんだよ……。ま、次元の扉に落ちたのは、ホントに偶然だけど……」

クスッ、と笑い、更に独り言は続く。

神様
「「シリウス」の事は、俺にも予想外の出来事で分からないけど……、ブレイヴ君、ジェウス君。君達なら、乗り越えてくれる。そして、君達二人が「ルミナシア」を……、そのシリウスを……、ラザリスを救ってくれると信じてるよ……。それが……、それが俺……――の願いだから……」

……最後の言葉は、何かに掻き消された……。しかし、神様は温かな目で、二人を見守っていた……。

二度目の空からの訪問者。そして、久々の再会（後書き）

ＰＶ１００００００記念に当たり、ブレイヴ、ジェウス、アレスに何か質問を！

……的な物を。

なんでもいいですので、下さい……。

集まりが悪ければ、来た質問に答えつつ、どうにか記念話仕上げます。えっと……とりあえず質問締め切りは１２月１日　～１２：００までってことで！

お祈り、小さな願い事（前書き）

今回はブレイヴ視点でお贈りします。
久々にアンジュと絡ませました。

お祈り、小さな願い事

午後の依頼がやっと終わった……。魔物退治は慣れたからいい……。しかし、あれを探してくれ、これを探してくれっていう依頼は意外と大変で、今日の大半はルバーブ連山の往復だったよ……。うわ、膝が笑ってる……。一緒に依頼に行った、カイル、ロイド、シング（よく見りゃ、三バカだ……。俺も加えられたのか！？）とそのあたりに座っていると、お迎えのバンエルティア号がやってきた。

ブレイヴ
「お疲れ……様っ！」

アンジュ
「はい、お疲れ様。悪いわね。往復させるような事しちゃって……」

ホールに入り、納品依頼の品をアンジュに渡すと、労いの言葉が返ってきた。もう、そんな笑顔で言われたら、なんにも言えないでしょ！

今日も、俺の想い人はアンジュは変わりありません！

ていうか、なんだか研究室が騒がしい……。今回に限っては、ハロルドやリタが騒がしい。とは別のものだ。

ブレイヴ
「誰か新しいメンバーでも入った？」

アンジュ
「ええ。ウィルさんやノーマの知り合いで、ジェイ君が新しく……。今は話してるみたいだから、また今度挨拶なさい」

と話し終わると同時に、ゴツンという鈍い音が研究室から聞こえ、俺は肩をすくめた。きっとノーマとジェイがげんこつを喰らったんだろう……。オヤジのげんこつ怖ぇー……！

アンジュ
「あ、ブレイヴ君？」

ブレイヴ
「ん？
何？」

唐突に呼ばれました。跳ねたよ、心臓が。名前呼ばれただけなのに……。あぁ重症だなぁ、我ながら……。

アンジュ
「明日、私、街に用事があるついでに、買い出し頼まれたんだ。荷物持ち、手伝ってくれない？」

キターーーー！
と、いう気持ちは、抑える。抑えろ、俺っ！

ブレイヴ
「いいよ？
明日……な？」

アンジュ
「そう、よかった！
ブレイヴ君ならそう言ってくれると思った！」

断るわけないでしょ？

好きな人の頼み事なんですから……。
……あ、割り当てられてる、明日の依頼どうすんだろ……？
ま、いっ……

アンジュ
「お昼から出るから、それまでに依頼は全部終わらせる様にね♪
私も終わらせるから」

……キビシー……。
アンジュさん……、俺とあなたの依頼数、俺の方が圧倒的に多く見えるのは気のせいですかー……？

――翌日――

……痛い。腕痛い……。一日の依頼を午前中に終わらせるのは、鬼畜じみてますなぁ……。

アンジュ
「大丈夫？
無理なら誰かと代わって……」

ブレイヴ
「大丈夫、大丈夫！
荷物何キロでも任せろ！」

最近誘えてなかったからなー……。たまには一緒に歩きたいもんな。
……今度どっかに誘おうか。

――――

街に出ると、アンジュはメモをチェックしながら、買うものを選んでいる。チラッと見ると、船内のショップでは売っていない調味料類いのものが、つらつらと書かれている。さすがに調味料は船内じゃあ売ってないもんなぁ。

アンジュ
「えっと……。塩、味噌、醤油、料理酒、砂糖、酢、昆布、鰹節……」

と、ポンポンとカゴに頼まれたものをいれていった。ギルドの人数が人数だもんな……量の多いこと、多いこと……。だから正直……

ブレイヴ
「お、重い……」

アンジュ
「やっぱり、もう一人誰か連れてきた方がよかったかしら……」

ブレイヴ
「う、いや……、大丈夫……だと思う……」

両腕に荷物をぶら下げ、更に荷物を抱え、なんとかバランスは保てた。

ブレイヴ
「ふう、楽になった。なんとかなりそうだわ」

アンジュ
「そ。ならよかった」

俺達は互いに顔を見合わせ、笑った。ん……、周りから見たら、今の俺達ってどう見えてるんだろうな……？
仲のいい姉弟……？
はたまた、従姉弟……？
それとも……？

アンジュ
「ブレイヴ君？」

アンジュの声で、俺は現実に引き戻された。……危ない、危ない……。想像が大暴走しちまいかけたぜ……。

ブレイヴ
「はい？
呼んだ？」

アンジュ
「次は私の個人的な用事なんだけど、ブレイヴ君は先に帰る？」

……んー。どうしよ？
って、迷うとこでもないんだよな。

ブレイヴ
「迷惑じゃなかったら付き合うけど？」

アンジュ
「わかったわ。多分、３０分程で終わると思うから」

３０分程の用事ってなんだろう？
誰かに会うとか……ではなさそうだし……。

アンジュが先にスタスタ歩くのを、後からはぐれない様について行くと、そこには、ほんの少しばかり大きい教会があった。

ブレイヴ
「教……会？」

アンジュ
「お祈りは毎日してるんだけど……、たまには船じゃなくて、教会でしようかなって……」

話もそこそこに、アンジュは教会の扉を開いた。

ブレイヴ
「うわぁ……。なんか……神秘的な綺麗さだな……」

教会に入ったブレイヴは、その光景に目を細めた。綺麗に整列された長椅子。荘厳な雰囲気のパイプオルガン。七色のステンドグラス。そして傾いている日が、ステンドグラスを通り、教会を七色に輝かせていた。

アンジュ
「じゃあ、ブレイヴ君は座って待っててくれる？」

そういったアンジュは、一番前の方に座り、手を組み、お祈りをし始めた。

ブレイヴ
「じゃ、座って待っとこうか……」

お祈りの邪魔になると思ったので、とりあえず、一番後ろの長椅子

に座っといた。ふと、周りを見ると、今は俺とアンジュ以外の人は誰もいない。目線をアンジュに戻し、少し様子を見た。その姿は、聖母マリア様を思わせる程に綺麗だった。

ブレイヴ
（ああやって、毎日お祈りしてるんだ……）

後ろからアンジュを見ていて、純粋にそう思った。毎日そんなことをしているとは、今まで知らなかったけど、それを今日知れて、なんだか、嬉しくなった。

ブレイヴ
（……俺も、お祈りしようかな、神様に……。神様……、神様か……）

少し、笑ってしまった。あいつに祈るのか……。飄々としてて、あのつかみどころのない神様に……。まあ、いいか……。それでも神様だ。たまには俺達のために必死に動いているくれていることに感謝でもしよう。それと……お願いしよう……。荷物を持ち、一番前にいき、アンジュが座っている椅子とは反対側の椅子に座った。そして、アンジュのみようみまねで手を組み、目を閉じた。

ブレイヴ
（神様……。なんだかんだ言いながら……って、特には何も言ってないか？
でも、俺達の帰る道を必死に探してくれてるのには感謝してる……。ありがとう……。で、こっからは、俺個人のお願いだ……。聞いていて、なおかつ、できるなら叶えてほしい！
……あのさ――！）

――――

アンジュ
「びっくりしたわ。お祈りが終わって、ブレイヴ君を見たらお祈りしてるんだもん」

そ。俺はびっくりするくらい、お祈りに集中してたらしい。我にかえった自分でもびっくりしたもん。

ブレイヴ
「アンジュの祈ってる姿は、マリア様みたいだったよ？」

アンジュ
「マリア様？」

ブレイヴ
「あ、知らないか……。俺の世界じゃ、マリア様はある宗教じゃ聖なる母で、その宗教を信仰する人はみんなマリア様に祈るんだ。俺の宗教ではないけど、とても優しくて綺麗な人だったはずだよ」

と、説明をする。俺の説明あってるかな？
間違ってたら、宗教団体の方々にジャパニーズイズ土下座だな……。

アンジュ
「ふふ……。ブレイヴ君はその時、私がそのマリア様に見えたんだ？」

口に手を当て、嬉しそうにアンジュが笑った。……さっきの説明……、間違っていたとしても、目の前の人を喜ばすことができたから、その宗教の神様も許してくれないかな……？

アンジュ
「そういえば、あんなに何をお祈りしたの？」

ブレイヴ
「普段の感謝と、後は……お願い事？」

荷物を持っているため、照れ隠しに頭も掻けない……。あー、ムズムズするぅ！

アンジュ
「へー……。お願い事……ねぇ？」

そんな、いいおもちゃを見つけたような顔で……

ブレイヴ
「アドリビトムの平和と世界の平和。をお願いしたー」

アンジュ
「あら、なんとも普通ね？
もうちょっとひねたお願いかと思ったわ……」

ブレイヴ
「……人が平和を祈ったのに、それは、キツイっすわぁ……」

……嘘。
実はもう一つ願い事をした。だけど、ガラじゃない願い事だし、言うのは恥ずかしかった。

……え？

どんな願いか聞きたい？
……笑わないで聞いてくれるなら、じゃあ言うよ……。

――――

ブレイヴ
（アドリビトムがいつまでも平和であるように！
世界はこれから、アドリビトムのみんなが平和にしていくから！
それと……、俺達のこの限りある時間のなかで……、俺は最後まで
アンジュと……それとアドリビトムのみんなと！
笑って過ごせる様に……！）

お祈り、小さな願い事（後書き）

人物視点は慣れてないんで、難しいです……。

アンケートは引き続き、お待ちしてます。

二つでも、三つでも質問を！

～ＰＶ１０００００記念～　主役三人のＱ＆ａｍｐ；Ａコーナー（座談会）（前編）

座談会でーす。
ご質問にもお答えしました！
かなり雑ですが！
……すいません。

～ＰＶ１０００００記念～　主役三人のＱ＆ａｍｐ；Ａコーナー（座談会）

ブレイヴ
「ＰＶ！
１００００００記念ッ！」

ジェウス
「イェーイ！」

アレス
「って、デジャヴュ！？」

ブレイヴ
「何が？」

アレス
「滑り出しが、ＰＶ５００００記念と全く同じだよ！
作者さんが、血迷ってしまったと思われるよ！？」

ジェウス
「……実際、そうなんじゃないか？」

アレス
「うっ……」
（なんだろう……。素直に「違うよ！」とつっこめない……）

ブレイヴ
「まあまあ、とにかくＰＶが１０００００できたんだ！
それに伴い、作者が俺達への質問を募集してくれたらしいんだ」

ジェウス
「たいして、知名度のない作者のくせに……」

ブレイヴ・ジェウス
「なぁー？」

アレス
「もうやめてあげて！
きっと本人が一番分かってるよ！
とにかく、その質問内容に答えてあげようよ」

ブレイヴ
「そうだな、ダラダラと俺達の話を聞いてるのも、飽きるだろうし」

アレス
「じゃあ、票を開示するよ？
せーの……！」

パサッ……（票の落ちる音）

三人
「……」

ジェウス
「三……票……だと？」

ブレイヴ
「なん……だと？」

アレス
「あ……、あ……、二人とも仕方ないよ……作者さんの知名度に問題があるって、今、二人が言っ……」

ブレイヴ
「三票もきたぁあぁ！」

ジェウス
「これは予想以上だぁ！」

アレス
「は！？
さっきの沈黙は残念じゃなくて、驚嘆なの！？」

ブレイヴ
「やべー、やべー……。ノストラ〇ムスも、三票もくるなんて予言できなかったろうな……」

アレス
「そんな予言するわけないよ！
ていうか、ノストラ〇ムス！？
古！」

ジェウス
「細木〇子の占いでも、これは……」

アレス
「だから、チョイスがちょいちょい古い！
もうこのくだりいいよ！
早く、質問に移ろう！」

ブレイヴ
「はいはい、っと……。よし、じゃあ読み上げよう！
P．Nサニーレタスさんからです。ありがとうございます！」

ジェウス・アレス
「ありがとうございます！」

ブレイヴ
「――ジェウスはゴキブリが苦手なんでしょうか？
それとも虫自体が苦手なんでしょうか？――
さあ、ご指名いただきました、ジェウス。納得いく答えをどうぞお答え下さい！」

ジェウス
「あい、お答えします……。
虫自体は……苦手ではないんですこれが。ただヤツだけは生理的に嫌というか……。とにかく見ただけで鳥肌がたつ……」

アレス
「ゴキブリに関して話しはじめた途端、目に見えてテンションが下がってるね……」

ジェウス
「目の前で飛び回られた日には、とどめを刺されたな……。発狂したさ……。……も、もういい？
俺としては、ヤツを語るだけでも、背筋が寒いんだが……」

ブレイヴ
「じゃあ、他に苦手なのはいる？」

ジェウス
「ヤツほどではないけど、コオロギとキリギリスもダメだな……。なんか……気持ち的に……。一般的に苦手な人が多そうな、クモとかムカデは普通に対処できるんだが」

アレス
「あ、そこに黒いのが動い……」

ジェウス
「いぎゃあぁ！」

ブレイヴ
「あ、ゴメン。俺がさっき食ったおにぎりの海苔だわ」

ジェウス
「……（ゲソッ……）」

ブレイヴ
「本当にゴメン……。つ、次いこうか？」

アレス
「あ、じゃあ次は僕が読むよ！
P．N颯さんからいただきました。ありがとうございます！」

ブレイヴ・ジェウス
「ありがとうございます！」

アレス
「――ジェウスはどういう経緯があってゴキブリが嫌いになったの

ですか――
だそうだよ、ジェウス？」

ブレイヴ
「大丈夫か？
まず、水飲め」

ジェウス
「ゴクッ……。よし……語るぜ！」

アレス
「おぉ、いい気合いだ！」

ジェウス
「さっきの話の発展なんだけど……。あいつら、飛ぶのは必ずって言っていいほど、天井に近い壁からなの。……あんなグロテスクで、おまけに雑菌まみれのやつが天井からこちらに急降下してくるの……。どう思う？」

アレス
「どう思うって……」

ブレイヴ
「まあ、生きてりゃ、一生に一度突撃されたりは……あるか、ないかぐらい……」

ジェウス
「その一生に一度あるか、ないかが俺には４度ふりかかったんだよ！おかげで、ヤツに対峙したら、意識しなくても俺の身体が「ニゲロ」という信号を脳に送るようになったんだよ！」

ブレイヴ
「よかったなー、お前？」

ジェウス
「あぁ？」

アレス
「えっと、多分、一生に一度あるか、ないかの事が、４度も起きたんだから……」

ブレイヴ
「そうそう！
そういう事！
つまりお前は、一度の人生で４回の人生を生きたって事に……」

ジェウス
「ならねぇよ！
夏には大量発生して、流しに行けば必ず三匹はいるし……。狭い場所に逃げ込んでは、突然現れるし……。なにより見た目がえぐいんだよ！」

アレス
「まとめると……
・見た目がまず嫌
・意味が分からないほどの繁殖能力
・飛ぶのが嫌
・神出鬼没
……ってとこ？」

ジェウス
「あげりゃキリがないよ……。
・共食いを見てしまった
・倒そうと努力をするが、生命力が高すぎる
……も加えてくれ……」

ブレイヴ
「本気でジェウスがやばいので、ここら辺にしようか……。ささ、次は最後だから、ジェウスが読めって！」

ジェウス
「ふぅー……。よし、テンションを元に戻して、最後の質問、読み上げるぞ！
P．N青猪さんからの質問。ありがとうございます！」

ブレイヴ・アレス
「ありがとうございます！」

ジェウス
「――ブレイブが高所恐怖症なのは何か原因があるんですか？それとも初めからダメなのですか？――
という質問だけど、ブレイヴ？」

ブレイヴ
「ん……。えと、まず最初に言うと、初めからダメな訳ではなかったんだよね……」

アレス
「じゃあ何か原因がある方なんだ」

ブレイヴ
「あの、高い所から落ちたら、「フワッ……」みたいな感覚があるでしょ？
あれがとてつもなく嫌いなの、俺」

ジェウス
「初めからダメじゃなかったって言ったってことは……」

ブレイヴ
「うん、あるとき少し高い所から落ちて、「フワッ……」を経験して、俺はダメだって気付いた。それに、高い所から落ちたら「死ぬ」っていう考えが、俺は人より強いみたいで……。プラスして、風が強かったりしたら、もうアウト……。いくら金詰まれて、頼まれても、絶対無理……」

アレス
「でも、高い所に行くときって、基本的に命綱付けるよね？
だったら風が強くても問題ないんじゃ……？」

ブレイヴ
「それでも、落ちた時「フワッ……」は味わうだろ！
それに……俺は命綱を信用できない！
もし命綱が切れたらどうすんだ！
落ちる→命綱切れる＝死
この図式ができちまうだろう！」

ジェウス
「切れないから、「命綱」だぞ……」

ブレイヴ

「無理、無理、無理、無理！
落ちたら死ぬっていう考えが、俺の頭から離れない！」

アレス
（つまりこれは、ヘタレってやつ？）

ジェウス
（的を射た言葉だな）

ブレイヴ
「聞こえてんだよ、バカ！
謝れ！
世界中の高所恐怖症の方々に謝れ！」

ジェウス・アレス
「ご、ごめんなさい……」

ブレイヴ
「多分、俺なんてまだマシだぞ。ダメな人は、本当にダメだからな……。……俺、質問にちゃんと答えれたか？」

アレス
「あー、うん、多分……。そこそこは伝わったかも……」

ジェウス
「物の苦手は、本人が知らないうちにあるもんだしな。皆さんには伝わったとは思うんだけど……」

ブレイヴ
「まあ、俺達の説明がダメなのは、作者のせいだしなー」

ジェウス
「この後の後書きで、「説明が雑ですいません……」っていう謝罪をするのが、目に見えるな」

ブレイヴ・ジェウス
「あっはっは！」

アレス
（哀れだよ……作者さん……。僕も薄々感じてるから、フォローできないよ……）

ブレイヴ
「質問は全て、お答えできたかな？
じゃあ、そろそろ締めにいこうか」

ジェウス
「次回は、砂漠に行く回……らしいよ」

アレス
「僕の秘奥義、早く出して欲しいよ……」

ブレイヴ
「アレスが秘奥義フラグを出した所で、今回はお別れします！」

ジェウス
「次回からも、この小説ごひいきに！」

アレス
「よろしくお願いしまーす！」

～ＰＶ１０００００記念～　主役三人のＱ＆ａｍｐ；Ａコーナー（座談会）（後

二人の苦手なもの……実は作者の苦手なものと全く同じです……。
苦手意識もそのままそっくり、作者のコピーです。
返答が雑にみえてしまったらすいません……。

動き出す、半分の世界（前書き）

タイトル関係あるのは最後だけー！
詰め込み過ぎだ、俺！
会話やら、戦闘シーンやら、アレスの秘奥義やら……（他多数……。

動き出す、半分の世界

ブレイヴ
「この暑さ……。何だかもう慣れてきたなぁ……」

アレス
「うん、僕も……。火山とかこの砂漠に何度も依頼に来てれば、慣れるのも当然だけどね」

ユーリ
「だが、女子供から見れば、厳しい環境だな。いや、男から見ても厳しい事には変わりはねぇな」

すず
「その上、魔物が出るのであっては、この砂漠越えは更に厳しいでしょう……」

この日四人は、《カダイフ砂漠》に訪れていた。《ウリズン帝国》に星晶を食いつぶされ、もはや生活困難な《ヘーゼル村》の移住をする際、速やかに移住をしてもらう為の近辺の魔物退治が依頼内容だ。

アレス
「《ウリズン帝国》が全ての元凶、なんだよね……」

ユーリ
「《ヘーゼル村》の事に関してってだけじゃない。大国のお偉いさん方は、全てを食い尽くすまで気づかねぇんだろうな」

ブレイヴ
「シリウスやラザリスがいたって、ヒトが変わらないと何も変わらない……そのお偉いさんは、いい反面教師だな」

すず
「今が岐路ですね……。この危機を回避出来るかどうか」

すずに同意し、コクリと三人は頷いた。

ブレイヴ
「……ん、まあ、気負いすぎてもダメだろうし……、俺達が頑張れば、少しはいい方向になるようになるだろ？」

ユーリ
「ははっ、違いねえな。俺達が頑張れば、か」

アレス
「うん……頑張れば、ね」

すず
「はい、道は必ず開けるでしょう」

重い話を切り上げ、一行は歩みを進めた。たどり着いたのは、以前ブレイヴとアレス達がサンドワームと戦った流砂の横にある、格子の扉の前だ。

アレス
「道……確かこっちだって言ってたよね？
開かないよ……」

アレスの言うように、扉は押せども引けども、開く気配がない。

ユーリ
「向こうっかわから、鍵がかかってんな……」

すず
「私に任せて下さい」

すずはそう言うやいなや、力強く跳び、何メートルもあろう壁を軽々と飛び越え、扉をむこうから開けた。

ブレイヴ
「すげ……」

すず
「先に行きましょう」

思わず驚嘆の声が漏れたブレイヴを、特別意識せず、すずは勤めて冷静に言った。

――――

ユーリ
「チッ！
何匹いやがる！」

ブレイヴ
「また、きたぁー！」

扉の先は、魔物がでる以外は普通の砂漠荒野だったが……。しばら

く進むと、以前戦ったサンドワームの巣窟だった……。

すず
「ブレイヴさん、右手にいます！」

アレス
「左からもきてるよ！」

ブレイヴ
「だーっ！
こんな多数を相手するなんて知らねーよ！」

ブレイヴの記憶にある、ここのサンドワームとの戦いは、要所要所にサンドワームが配置され、出てくる匹数は一匹だけだ。まったくもってその通りなのだが……。

ゴアァァァ……！

ブレイヴ
「――！
後ろからもっ！？」

今、体験している現実では、一度に前後左右、四匹のサンドワームに立ち向かっている。

ユーリ
「俺とすずが前と右のヤツの相手んなる！
お前ら二人で後ろと左のヤツ、どうにかしろ！」

すず

「ご無事で……！」

ユーリとすずは一言残すと、瞬時にサンドワームに駆けていった。

ブレイヴ
「準備は！？」

アレス
「いつでもっ！」

アレスは詠唱に入り、ブレイヴは後ろにいるサンドワームに駆け寄った。

ブレイヴ
「虎牙、破斬ッ！」

様子見の牽制。しかしサンドワームが怯む様子はない。

ブレイヴ
（やっぱり、畳み掛けないとダメか？）

サンドワームの首ふりを避け、そう思ってるうちに、アレスの術も発動する。

アレス
「荒ぶる水流……スプレッド！」

立ち上る水流がサンドワームに直撃したが、効いてはいるはずだが、やはり怯まず、こちらに向かってくる。少しばかり距離をとり、再び攻める。

ブレイヴ
「散沙ッ、秋沙ッ！」

無数の突きを浴びせ、反撃の隙も与えずアレスが再び術を繰り出す！

アレス
「風よ、刃となりて敵を切り刻め！
エアスラストッ！」

幾重もの風刃がサンドワームを襲うと、さすがのサンドワームも僅かばかり怯んだ。

ブレイヴ
「これが最後！
驟雨、双破斬ッ！」

僅かに怯んだ隙を逃さず、一体のサンドワームをブレイヴは切り伏せた。

ブレイヴ
「よし、次っ……」

アレス
「まだだよ、ブレイヴ！」

アレスの声に、とっさに後ろに飛びのいた。ブォン……、という風切り音が、ブレイヴの眼前を通り抜けた。……倒れたサンドワームが首を振り回しつつ、再び起き上がったのだ。

ブレイヴ
「あぶねー……。助かった、アレス」

アレス
「どういたしまして！
次、左にいた元気なヤツがくるよ！」

先程まで相手をしていたサンドワームは、さすがに動きが鈍くなり、
次は左にいたサンドワームを相手にすることにした。

ブレイヴ
「雷神剣！」

ブレイヴ得意の雷神剣を当てるが、やはり止まらない。

ブレイヴ
「まだまだっ！
風雷神剣！」

雷神剣に風圧を加え、更に突く。と同時にアレスが術を唱える。

アレス
「大地に住みし地霊の怒り！
ロックブレイク！」

サンドワームの足元から出現した岩石が、サンドワームの身を容赦
なく打つ！
しかし……、やはり火力不足か、サンドワームの勢いは止まらない。
サンドワームの首による薙ぎ払いが……、ついにブレイヴに直撃し
た。

ブレイヴ
「……ッ！」

胸付近を強打され、肺の空気が一瞬にして外にだされた。……無論、ブレイヴは一種の呼吸困難に陥り、酸素を求め、無防備な状態になった。しかも運悪く、もう一匹のサンドワームも、前線に出ていたブレイヴに狙いを定めたのだ！

ブレイヴ
「か……ッ、はっ……ッ！」
（息が……！）

アレス
（まずい！）

アレスは、ブレイヴの状況をとっさに判断したが、普段後衛のアレスが前に出たところで、足手まといになるのは明白だ。やられる場面が目に浮かぶのは、当の本人、アレスでさえもそうであった。

アレス
（僕が……前に出たところで……ッ！）

アレスは心の中で、一瞬迷った……。

……しかし。

……しかし、体はアレスが考えもためらいもする前に動いていた。

アレス
「やらせないよ……！」

アレスはブレイヴを庇うように、サンドワーム二匹の前に立ち塞がった。

アレス
「絶対に……、僕がやらせないっ！」

瞬間、アレスの体が青い闘気に包まれ、周りには爆風を巻き起こした。その爆風は、体の半分が砂に埋もれているサンドワームさえ、その全貌が明らかになるほどに空高く吹き飛ばした。

アレス
「悪いけど、こうなった以上は、……一瞬で終わらせてもらうよ！」

そう告げると、アレスは詠唱に入る。いつもと違う詠唱……。明らかに規模の大きい魔術を唱えようとしている。
ヒヤリ……、としたものを感じ取ったのか、サンドワーム達は、アレスを相手に猛攻をかける。だが、今のアレスは鉄のように固く、地面に根が張ったかのように、その場を動かない。

アレス
「いくよ……。総てを司る光よ……。彼の者の邪悪を照らせ……」

ポウッ……と、アレスの持つ杖の先から、直径５ｃｍにも満たないような光の玉が出現し、フラフラと二匹のサンドワームの間に向かっていった。

ブレイヴ
（ダメ、か……）

ようやく呼吸を整えたブレイヴは、その長い詠唱に見合わぬ、あまりにも小さな光の玉を見ていた。そしてその光はフッ……と、サンドワーム達の傍らで消えさった……。

ブレイヴ
（やっぱり……失ぱ――！？）

諦めかけたその刹那、先程の光が一瞬で膨れ上がった！

アレス
「光は聖なる弾丸となりて……」

アレスが再び詠唱を始めると、膨れ上がった光から四方八方に、さながら「光の弾」のように光が飛び散る……。

アレス
「……その身を貫くっ！」

飛び散った光は、容赦なくサンドワームの体を蜂の巣にし、サンドワーム達は悶えた。

アレス
「ガデス……インフリエイト！」

とどめとばかりにアレスが叫ぶと、中心にあった光は霧散し、更なる数の「光の弾」が生成され、大爆発を起こした。……砂塵で視界は霞んでいるが、戦いの勝ち負けは、火を見るよりも明らかだった……

アレス
「ハァ……、ハァ……」

ブレイヴ
「半端じゃないな……。何なんだよその技……？」

砂塵が晴れたその場所は、先程のアレスの秘奥義でクレーターができ、サンドワームがいた形跡さえも消し去っていた……。

アレス
「これが……オーバーリミッツ？」

アレスは自分の両手を見つめ、今だ、信じられないような表情を浮かべている。

ブレイヴ
「……アレス？」

アレス
「あっ……！
ブレイヴ、大丈夫！？
痛いところは！？」

ハッ、としたかのように、アレスはブレイヴの体調を気遣い始めた。

……いつもとなんら変わりないアレスの姿だ。

ブレイヴ
「ああ……うん。一瞬、肺の空気が全部だされたのかな？
でも、今は大丈夫だ。お前は大丈夫か？」

アレス
「うん。僕も大丈夫……。……ブレイヴ」

唐突に名前を呼ばれたブレイヴは「何？」とアレスに顔を向けた。

アレス
「僕、また強くなれた……。みんなを、これからもっと守っていける！」

屈託のない笑顔でアレスは言った。つられてブレイヴも笑う。

ブレイヴ
「そうだな……。そいじゃ、これからも頼りにしてるぜ、ディセンダー！」

ブレイヴとアレスはゴツン、と拳を当て合い、アレスの更なる進化を祝った。ユーリとすずの二人も、サンドワームを片付け終えたようで、そろって合流した。

ユーリ
「さっきの爆発、アレスか？」

クレーターを見ながら、ユーリが尋ねてきた。

ブレイヴ
「そ。まさに秘奥義！
って感じの」

すず
「アレスさん……ディセンダーの秘奥義ですか……。間近で見たかったものですが、惜しいですね」

表情を崩さずにすずが言う。

アレス
「ハハ……。うん、機会があれば、また見せれるかも……」

三人の褒め言葉を受け、若干照れ臭そうに、アレスは言った。

――――

ユーリ
「にしても……、魔物がみつかんねえな」

すず
「ティランピオン、でしたか？」

ティランピオンは、砂漠越えをするにあたり、最も厄介な相手だ。

ユーリ
「普通の奴が束になってかかっても、なかなか倒せるもんじゃねえ」

他の魔物はそうでもないんだが……と、ユーリは付け加える。

アレス
「でもそれを倒せば、《ヘーゼル村》のみんなは、無事に砂漠を越せるよね」

ブレイヴ
「早く見つけて、倒す！
さっきはアレスに助けられっぱなしだったからな……」

ブレイヴは自身に気合いを入れ、先頭を歩いた。

ユーリ
「空回り、しないようにしてほしいもんだが……」

アレス
「だね……」

すず
「ですね……」

小声で話す三人の声は、運よくブレイヴの耳には届かなかった。

――――

ブレイヴ
「み、みんな……。ちょっと待って……」

ユーリ

「だから待ってんだろ？
早く来いよ」

ブレイヴ
「はは早くって言われても……」

現在、砂漠の中の吹き抜け地帯。つまりは崖のような、非常に高い場所。つまりのつまり、ブレイヴとは相性の悪い場所なのだが……。
三人とも、ブレイヴの［高所恐怖症］を知らない。

すず
「……もしかして、高い場所が怖いのですか？」

アレス
「そうだったの、ブレイヴ？」

核心を突かれ、ブレイヴは目を背けた。

ブレイヴ
「ババババカヤロウ！
そそそんなわけ、なななな……」

ユーリ
「わかりやすいな……」

ブレイヴ
「ひぃー！
風がぁー！」

アレス・ユーリ・すず

「ハァ……」

その後、ヨタヨタとしながらも、ブレイヴはなんとかそこを歩ききった。

――――

アレス
「もうすぐで着くかな？」

すず
「ティランピオンの目撃情報が多いのはこの先です。ティランピオンが住家を移動してなければ……」

砂漠の砂をサクサクと踏み締め、ティランピオン目撃情報多発の場へ向かった。

ユーリ
「ここだ……」

ピタッと歩みを止め、一度岩陰に四人は身を潜めた。

ブレイヴ
「様子を確認するぞ……？」

ブレイヴは岩陰から顔だけ出し、そっと様子を伺った。……魔物はいない……。照り付ける太陽の日差し、悠然と吹き溜まりに流れる風の音だけがそこにあった。

ブレイヴ
（ティランピオンがいない……。一体どこ……！？）
そう思った矢先、あるものを凝視し、ブレイヴは息を呑んだ。

ブレイヴ
「……みんな。ティランピオンが……、やられてる……！」

ユーリ
「ンだと……！？」

岩陰から、全員飛び出し、その様子を伺う。……確かに、力無く体を震わすティランピオンが倒れていた。

すず
「これは、刀傷でしょうか？」

ティランピオンの傷を見て、すずが呟く。

アレス
「みたい……だけど、普通の刀剣じゃなくて、風のマナが関係してると思う……。切り口が、あまりにも鋭利過ぎるよ……」

ディセンダーであり、ビショップのアレスが言うのであれば、風のマナは関係してるのだろう。しばらくすると、ティランピオンは上げていた尾をパタリと倒し、光と消えた。

ユーリ
「依頼は完了したが……、すっきりしねえな」

すず
「とにかく戻りましょう。私達がここにいても、何もわかりません」
すずの言う通り、何もできはしないので、四人は踵を返し、船との合流地点へ戻ることにした。

ブレイヴ
「……！？」
不意にブレイヴがバッと振り返った。その瞳は、小高い岩山の一点を見つめていた。

アレス
「……どうかした？」

ブレイヴ
「いや……、ちょっと調べたいことがあるから、先に行ってて？」
きわめて普段通りにブレイヴが言うと……

すず
「一人は感心しませんね」

ユーリ
「だな。せめてもう一人付き添わせろ」
当然のことを言われたので、ブレイヴはしばし考え、言った。

ブレイヴ

「じゃあ、アレス。少し付き合ってくれ」

アレス
「うん。なんかわかんないけど……」

ユーリとすずと別れると、ブレイヴはすかさず、先程見つめていた岩山の裏側へ向かい跳んだ。

アレス
「ブレイヴ、どうしたの！？」

驚くアレスを無視し、ブレイヴは着地した足場を更に跳び、岩山のてっぺんに着いた。

ブレイヴ
「盗み見は感心しないな」

？？？
「ハハハッ、よく気付いたね？
君は初めて見る人だ……。ヴェイグのお知り合い？」

アレス
「その声……、サレッ！」

サレ
「おや、いつぞやの」

サレはアレスを一瞥し、冷たく言い放つ。ブレイヴは先程、気配と視線、そして原作での出来事を重ね合わせ、サレの存在に気付き、こうして向き合ったのだ。

ブレイヴ
「俺の事なんて大体分かるくせに、「お知り合い？」とか聞くか？ま、いいや。俺はブレイヴ・テンダー。アドリビトムのもんだ。お前に質問があるから、こうしてお前の前に来た」

サレ
「僕がわざわざ質問に答えるとでも？」

挑発するような物の言い方だが、ブレイヴは更に続ける。

ブレイヴ
「……見逃してやる、つってんだ。質問に答えろよ。ティランピオンはお前がやったのか？」

刀の柄に手を添え、軽く刃を見せる。

サレ
「怖い、怖い……。あの魔物は僕がやった訳じゃないよ」

ブレイヴ
「じゃあ誰が！？」

サレに当たっても仕方ないが、ブレイヴは声を荒げた。

サレ
「それこそ知らないさ。白い髪で毛先辺りだけ青かったかな？なんか身体中に結晶みたいな物が張り付いている変な奴だったね」

ブレイヴ

「そいつが……？」

サレ
「律儀に教えてあげたんだ。ここは争いは無し。だよ？」

クックッと喉を鳴らし、サレが言う。

ブレイヴ
「……ああ。ただし、アドリビトムの誰かに手を出したら……そん時は容赦無しだ……」

刀から手を離し、威嚇を解くと、サレは冷たい笑いを顔に張り付けたまま、帰っていった。

アレス
「ブレイヴ……。何を話したの？」

ブレイヴ
「情報収集。割とまともに話してくれたな。……ティランピオンをやったのは、十中八九、シリウスだ」

アレス
「シリウス……。僕達が見たラザリスみたいに、まだ姿は見せてないね」

ブレイヴ
「ああ……。そのうち会わないとな、シリウスに……。どんな奴か見ないと」

ブレイヴはフゥと軽く息を吐き、ストンと座る。

アレス
「さ、帰ろうか？
ユーリとすずも、多分ゆっくり歩いてくれてるだろうから……」

ブレイヴ
「そうだな……。考え事なら、歩きながらでも、船に帰ってからでもできるもんな」

パッパと砂を払い、ブレイヴは立ち上がり、アレスと共に、先にいった二人の後を追っていった。

……帰り道、ブレイヴが吹き抜けを渡るのに時間をかけたのは、また別のお話……

ブレイヴ
「ギャー！
下、見ちまったー！
ああ歩け、ない……」

アレス
「手が掛かる……！」

動き出す、半分の世界（後書き）

予定よりかなり遅れた投稿となってしまった……。
Ｘ'ｍａｓ記念投稿がんばります……。

～X'ｍａｓ記念～　アドリビトムのX'ｍａｓ（前書き）

みんなー！
メリークリスマス！
X'ｍａｓ！（↑めっちゃ発音良く）

～X'ｍａｓ記念～　アドリビトムのX'ｍａｓ

ブレイヴ・ジェウス
「ふぇっくしょい！」

寒々とした空気を感じ、ブレイヴとジェウスは同時にくしゃみをし、飛び起きた。

ブレイヴ
「……おはよう」

ジェウス
「……おはよう。……なんか寒いな？」

冷えた身体を摩りながら、ベッドから出て、二人はホールに向かった。

アンジュ
「あら、おはよう」

ロックス
「おはようございます」

ホールに着くと、いつもの場所にアンジュ。そしてロックスがいた。

ブレイヴ
「何、この肌寒さ……」

ロックス

「今日はクリスマス・イヴですからね。雰囲気をだそうと《霊峰アブソール》の麓に船をつけているんですよ。ほら、雪も……」

ジェウス
「ああ、だから……」

甲板の扉をくぐれば、フワフワと粉雪が舞い踊り、セルシウスが嬉しそうにうっすら微笑んでいる。

アンジュ
「今日と明日は依頼を受けてないの。みんなにゆっくり過ごしてもらうためにね」

ブレイヴ
「だから、ここ数日仕事多かったのかよ！」

ブレイヴがツッコミを入れる横で、アンジュはクスクスと笑った。

ロックス
「クリスマスパーティーも開きたいと思うんです。こんなご時世ですが……、皆さんには少し肩の力を抜いてもらいたいんです」

ハハ……と、力無くロックスが笑う。世の状況から、「こんなときに」と後ろめたさがあるようだ。

ジェウス
「へえー、いいね！」

ブレイヴ
「具体的にはなにやるの？」

興味津々で二人が尋ねた。

アンジュ
「船内全部を使った立食パーティーと、プレゼント配りかしら？
何か案があったら、言ってくれても構わないわよ？」

そこまで言うと、話を二人に振ってきた。

ブレイヴ
「んー……。まぁ、みんなのテンションが上がれば、許容範囲でなにかしら起きるでしょ」

ブレイヴの言うことにある意味納得したのか、そこにいる三人は「うんうん」と頷いた。

ジェウス
「プレゼントとかは揃ってるんですか？」

アンジュ
「一応これからね。買い出しのメンバーは決まってないけど……」

と、アンジュがしばし考え込んだ。

ジェウス
「じゃあ、俺が行きますよ！
いいプレゼントチョイスしてきますよ！」

アンジュ
「そう？

ならお願いするわ、ジェウス君」

ジェウスが立候補すると、アンジュも快諾してくれた。

ジェウス
「クリスマスムードの街を見せる意味でもアレス。船にいたら何もしなさそうだからルーク。ルークのストッパーにナタリア……いや、ティアの方がいいかも。女性群へのプレゼントの助言にゼロスさん。騒ぐゼロスさんとうまく話をしてくれるエステル。値切り要員にルーティ。物にこだわりがあるユージーンさんとリカルドさんとリヒターさんがいれば、良いものも買えそうかな？
……うん、この九人と買い出し行きます。いいですよね？」

指折り数えた人数をアンジュに示し、ジェウスは尋ねる。

アンジュ
「ええ、本人から許可が出ればね」

これまた、アンジュからＯＫがでたので、ジェウスはありがとうございますといい、人を集めに行った。

ブレイヴ
「じゃあ、俺は船内の飾り付けでもしとくかぁ。ロックスの方に料理は任せて……」

ロックス
「はい、お任せ下さい。腕によりをかけましょう！」

ツリーや飾りは事前に買っていたらしく、ブレイヴはそれを抱えながら船内を回り、人手を集めた。その呼び掛けに乗り気でないもの

もいたが（リオン、キール、ジューダス、アッシュのこと）、それぞれに説得（中には無理矢理）され、全員が手伝ってくれることになった。

……

ブレイヴ
「じゃ、クレス、ミント。あっちお願い。こういう……感じで」

ミント
「わかりました。綺麗に仕上げますね！」

クレス
「でも、あんまり張り切り過ぎると、風邪をひいたりして、今年のクリスマスは苦しみます！
になったりしてね！」

ミント
「……ハァ……」

ブレイヴ
「……じゃ、任せた、ミント」

クレス
「ええっ！？
スルー！？」

……

ブレイヴ

「おお。スタンの飾りつけ、なかなかいいな！」

スタン
「Ｚｚｚ……」

ブレイヴ
「……は？
スタン？
スタン！？」

スタン
「Ｚｚｚ……」

ブレイヴ
「寝ながら作業してやがる……！
もはや才能だろ……」

……

リッド
「ハァ……」

ブレイヴ
「どうしたリッド？
ため息なんてついて……」

リッド
「あぁ、ブレイヴか……。見てりゃわかるよ……」

ブレイヴ

「……？」

ファラ
「リッドー！
そこずれてるわよ！
もうちょっと上ー！」

リッド
「あー、はいはい、わかりましたー！
な、わかっただろ……」

ブレイヴ
「よくわかった……」

……

ブレイヴ
「……？
リアラ、カイルは？」

リアラ
「カイルは、ほら、反対側の壁の飾り付け」

ブレイヴ
「……まさか、な。カイル。カイルー！」

カイル
「Ｚｚｚ……」

ブレイヴ

（親子そろって……！）
「リアラ……。気付いてんの？」

リアラ
「カイルが寝てること？
ええ、寝ててもちゃんと手を動かしてるから、問題ないと思って」

ブレイヴ
「器、でけー……」

……

ロイド
「よっ……と。こんなもんだろ！」

ブレイヴ
「流石だなぁ！
手先が器用なことはある！」

ロイド
「へへっ！
いつもとやることは違うけど、気に入ってくれたのなら、よかったぜ！」

コレット
「ねえ、私は何すればいいかな？」

ブレイヴ
「そうだなー。コレットは……
（以下ブレイヴの想像←

コレット
「キャッ！
引っ掛かっちゃったー……」

ロイド
「うわぁぁ！
俺の傑作がぁ……」

コレット
「あれ？
これなにかな？」

ブレイヴ
「あー！
飾りがちぎれたー！」

……）

……いや、コレットは誰もサボらせないように、見といて……」

コレット
「うん、わかった！」

ロイド
「ブレイヴ、お前すげー失礼な事……」

ブレイヴ
「言うな……。みなまで言うな……」

……

ブレイヴ
「ん？
ヴェイグ、飾り付けやってねーな！
おーい、ヴェイグ！
飾り付けサボん……な？」

ヴェイグ
「なんだ……？」

ブレイヴ
「氷の彫刻ッ！？
うまっ！
すごっ！」

ヴェイグ
「飾り付けのような作業は、俺には向いてないようだ……。すまないな……、これだけのことしかできず……」

ブレイヴ
「いやいやいやいや！？
これ、もはや芸術だぜ！？
これあったら普通にありがたいし！
飾り付けなんかしなくてもいいから、趣向を凝らして頑張ってくれっ！
てか、溶けないの？」

ヴェイグ
「俺の力で出した氷だ……。そうそう簡単には溶けん……」

ブレイヴ
「スゲー！」

……

セネル
「よし、半分終わったな」

シャーリィ
「こっちも半分終わったよ、お兄ちゃん」

ブレイヴ
「……ここは、安心して任せられるな……」

シャーリィ
「痛っ！」

セネル
「どうした、シャーリィ！」

シャーリィ
「画鋲が指に刺さっただけだよ。心配しなくても大丈……」

セネル
「血がでてるじゃないか！
は、早く！
早く止血をしないと！」

ブレイヴ

「セ、セネル。まずは落ち着……」

セネル
「シャーリィが！
シャーリィが死んでしまう！」

ブレイヴ
「シャーリィ！
止めろー！」

シャーリィ
「わ、私でも無理ですー！」

……

ブレイヴ
「こっちは順調に進ん……」

ルビア
「カイウス！
また、ハサミ持ちっぱなし！
共同で使ってるんだから、持ちっぱなしはやめてって言ったでしょ！」

カイウス
「なんだよ！
そんなこと初めて聞いたぞ！」

ルビア
「カイウスが聞いてないんでしょ！？

今日三度目です！」

カイウス
「いちいち、細かいんだよお前は！
貸して欲しかったら、ちゃんと貸すよ！」

ブレイヴ
「……じゃ、頑張ってー……」

カイウス
「ブレイヴ！
ルビアになんとか言ってくれよ！」

ルビア
「ブレイヴ！
カイウス、私が言っても聞かないの！
あなたから言ってよ！」

ブレイヴ
「いや俺、痴話喧嘩には仲裁に入らないたちだから……」

カイウス・ルビア
「誰が痴話喧嘩だ（よ）！」

……

ブレイヴ
「ルカ？
どうした、こんな隅っこで？」

ルカ
「ひっ！
ブ、ブレイヴだったの……。よかった……」

ブレイヴ
「よかったって……、何が？」

イリア
「ル～カ～ちゃ～ま～？」

ルカ
「ひぃぃぃっ！？」

イリア
「やっと見つけたわよ？
ほらほら、ジャンケンで負けた方が、飾り付け全部やるルールだったわよね？
一発勝負、まだ済んでないわよ！」

ルカ
「だ、だってイリアのジャンケンのルールは他とは違うし……」

イリア
「勝負と名が付けば、なんでもありなのよ！
さあ……、いくわよー！」

ルカ
「た、助けてー！……」

ブレイヴ

（面白いからもうちょっと見とこう……）

……

ブレイヴ
「ユーリ～。飾り付け進んでるか？」

ユーリ
「ん？
ああ、ボチボチな」

ブレイヴ
「ふんふん……。あー、うん。綺麗にできてんな……」

ユーリ
「ま、俺はそろそろ終わるがな。料理の方に呼ばれてんだ」

ブレイヴ
「そっか。順調だな。……ふぅ」

ユーリ
「どうした、ため息なんか……というか、なんで泣いてんだよ？」

ブレイヴ
「いや……、スゲーまともに話せたから……」

ユーリ
「今まで、どんな話をしてきたんだよ……」

……

マルタ
「エミルぅ！
その飾り、こっちの方がいいよ！」

エミル
「えっ？
こっちかな？」

ブレイヴ
「……あの」

マルタ
「そうそう、そんな感じ！
さすが、エミル！」

エミル
「マルタの言う通りにしてるだけだよ！」

ブレイヴ
「……おい」

マルタ
「次はこれこれ！
そこがいいんじゃない！」

エミル
「えっと……、マルタ、そろそろ……」

ブレイヴ

「離れて作業しろー！
マルタぁー！」

……

シング
「これを付ける場所って……、高いなあ……」

コハク
「脚立持ってきたよシング！」

シング
「ああ、ありがとう、コハク」

ブレイヴ
「気ぃ付けろよー。落ちたら一大事だからな」

シング
「よっと……。あれ？
よっ……、たっ……、それっ！」

ガタンッ！（↑脚立倒れる）

シング
「あ？
へ？
うわぁぁ～！」

ベシャ……

ブレイヴ
「シング！
大丈夫……か……」

シング
「あ……」

コハク
「や、やだ！
シング、どこ触ってるの！」

ガスッ！

シング
「事故……なのに……」

ブレイヴ
「……後は任せる。俺は何も見てない……」

……

ブレイヴ
「順調か、アスベル、ソフィ？」

アスベル
「ああ。騎士団じゃこんな行事はないからな。ワクワクしっぱなしだ！」

ソフィ
「私、クリスマスがどんなのか知ってる……」

ブレイヴ
「へぇ。じゃあどんなのかアスベルに教えてあげて？」

ソフィ
「あのね、赤い服を着たおじさんが、大きな斧を担いで、煙突を切りに来る日なんだよ」

ブレイヴ
「……アスベル」

アスベル
「いや……。さすがに俺でも違うと分かる……。俺の教官に、ソフィが純粋なのをいいことに、たまにホラを吹き込む人がいるんだ……」

ブレイヴ
「なるほど……」

……

船内の見回りが一通り終わると、ブレイヴは一息ついた。

ブレイヴ
「……ジェウス達は、今頃どうしてっかな？」

……その頃のジェウス達……

アレス
「街中がキラキラしてる……」

エステル
「キレイですね……」

アレスとエステルは街の彩りに目を奪われていた。

ゼロス
「街の彩りより、お姫様の方がキレイですよ……なーんてベタすぎるかぁ!?」

エステル
「本で似たような台詞を読んだことあります!
なかなか良い言葉だと思いますよ!」

ゼロス
「エ、エステルちゃーん!」

エステルはゼロスの相手をし、

ルーク
「だーっ!
なんで俺が買い出しなんてしなきゃなんねーんだよ!」

ティア
「ルーク。こうしてみんなで買い物をするのもいい経験よ?
楽しみましょう?」

ルーク
「……チッ。わーったよ……」

ティアにはルークをなだめて貰う。ジェウスの予定通りだ。ユージーン、リカルド、リヒターの三人は、談議を交わしている。

ジェウス
「じゃあルーティ。値切り交渉、ヨロシク！」

ルーティ
「はいはい任せなさい！
最低でも三割は値切るわよ！」

ジェウスはルーティに、値切り交渉を改めてお願いしつつ、雑談を交わしていた。

ジェウス
「スタンと一緒にいたかったんじゃない？」

ルーティ
「はぁ！？
勘弁してよ！
あのスカタンと一緒にいたら、神経使って疲れるわ！」

いたずらっぽい笑みでジェウスが言うと、多少照れ、怒りながらルーティが言う。

ジェウス
「カイルっていうかわいい息子もいるんだしさぁ？」

ルーティ
「それはあんたらのせいでしょうが！
この歳で「母さん」って呼ばれるだなんて……老けてみえるわ……」

落胆とともに、白いため息はいた。しかし、ルーティは「でもね……」と話し始めた。

ルーティ
「カイルはすごくいい子だから、あたしが将来結婚して、子供ができたら、それにあやかって「カイル」って名前を付けようと思ってる……。ま、ずいぶん先の話だけどね！
……照れ臭いから、カイルには内緒よ！
いい！？」

それだけ言うと、ルーティはジェウスからそっぽを向いてしまった。

ジェウス
（はいはい、予想通りですよ……。それに、「神経使って疲れるわ」って、好きでもなく、どうでもいい相手に神経使う必要ってないよな？
そういうことだぞ、ルーティ？）

言ったら叩かれそうなので、心で言っておいた。クスクス笑っていたら、照れ隠しで結局叩かれたが……。

……

街を周り、必要な物は全部買えた。２５万ガルド程かかる予定だったが、ルーティの値切り交渉のおかげで１８万ガルドにおさえれた。

ジェウス
「さーて。ルーティは値切りに、アレスとルークは荷物持ちに、ゼロスさんは女性陣へのプレゼントのアドバイスにお疲れ様。ユージ

ーンさんとリカルドさんとリヒターさんも品定めにありがとうございます！

……ティアとエステルもお疲れ様……（コソッ……）」

ティア

「どういたしまして……（コソッ……）」

エステル

「ねぎらい、ありがとうございます（コソッ……）」

ジェウスは皆にお礼をいい、ティアとエステルには、ルークとゼロスのお守りをそれぞれしてくれたことに、こっそりお礼を言った。

ユージーン

「役に立てたようで何よりだ」

リカルド

「ふん……」

リヒター

「まったく、お前らは品定めがなってないな……」

ゼロス

「俺様が選んだ品は、絶対に喜ばれるぜ～！」

ルーティ

「当初の三割近く特はできたから、まあまあ上出来ね！」

と、それぞれに感想を述べる。

アレス
「は、早く帰ろう……。お、重い……」

ルーク
「なんで……俺……が……！」

アレス
「ルーク……だって……
（回想←

アレス
「お、重くて……動けない……」

ルーク
「おい！
なにやってんだよ！
……チッ、ちょっと持ってやるから、それで動けるだろ！」

……）
みたいな感じで……持って……くれたじゃない……」

ルーク
「うる……せぇ……」

アレスとルークだけは、大量の荷物を持ち、ゼェゼェと息を切らしながら、口喧嘩をしている。

ジェウス
「あー、悪い悪い……。俺も持つから……」

ジェウスが慌てながら、二人の荷物を少しずつ受けとった。

……

ジェウス
「ただいま」

ブレイヴ
「おう、お帰り。……アレスとルークはどした？」

息を切らしているアレスとルークを見て、？マークを浮かべた。

ジェウス
「ああ……。二人はよく頑張ってくれた……。労ってやってくれ……」

ブレイヴ
「……？
アレス、ルーク、頑張ったな？」

いまだ肩で息をする二人に、ブレイヴは何となく声をかけた。

……

アンジュ
「……みんな集まったかしら？
では、長い挨拶も聞きたくないでしょうから、早速乾杯でもしましょうか！
いくわよ？
乾杯！

それから、メリークリスマス！」

一同
「カンパーイ！
メリークリスマース！」

皆で乾杯を済ませ、それから皆は散り散りになった。

ジェウス
「ブレイヴ！
ちょっといいか？」

ブレイヴがグラスのジンジャーエールを飲んでいると、不意にジェウスに呼ばれた。

ブレイヴ
「なに？」

ジェウス
「クリスマスといえばこれだろう？」

と言い、ジェウスはガサッと袋から何かを出した。

ブレイヴ
「……トナカイ？」

それはトナカイの衣装だった。

ジェウス
「お前とアレスがトナカイだ！」

ブレイヴ
「ちょっと待て！
なんでトナカイだよ！」

ジェウス
「あ、すまん。サンタ衣装はなくなった」

ブレイヴ
「ざっけんな！
なんで家畜みたいなマネ、俺が……」

と言い争いをしていると、

カノンノ
「ジェウス？
こんなんでいいの……？」

と、カノンノがやってきた。その衣装は……

ブレイヴ
「……ミニスカサンタ……」

カノンノ
「うぅ……。やっぱり恥ずかしいよ……」

恥ずかしさから、もじもじする態度が、カノンノの可愛さに拍車をかけた。

ブレイヴ

「オーケー、俺はカノンノの家畜になろう」

ジェウス
「ちなみに、俺もサンタだけど……」

ブレイヴ
「クソくらえだ！」

ジェウス
「キャラ崩れてるぞ！？」

ブレイヴ、ジェウス、アレス、カノンノの四人が着替え終わり、買ってきたプレゼントを大きな袋に入れ、準備は完了した。

ジェウス
「さーて行きますか」

操舵室からホールに行くと、やはり四人は大注目された。が、瞬時にシーンとなった……。

ジェウス
（ほら、カノンノ。さっき言った台詞……）

カノンノ
「メ、メリークリスマース……」

やはり、シンとしたままだった……。しかし、数秒後、そこは爆笑と喝采が響いた。

「ジェウス、サンタの格好似合ーう！」

とか、

「ブレイヴ、その格好は普段と違って笑える！」

とか、

「アレス、トナカイの格好かわいいな！」

とか、

「カノンノ、その衣装は反則！」

とか言う声が響き、皆プレゼントそっちのけで、四人に対してはしゃぎまくった。

ブレイヴ

（ま、結果オーライか？）

弄(もてあそ)ばれながら、ブレイヴはそう思った。

……

ブレイヴ

「はぁーあ、疲れた……」

先程の騒ぎから解放され、ブレイヴは一人、甲板で休息をとっていた。

アンジュ

「お疲れ様」

そこにアンジュがやってきた。手には、湯気の立つポットがある

アンジュ
「温かいお茶あるわよ？
飲む？」

アンジュはお茶を注ぐと、ブレイヴに進めた。

ブレイヴ
「うん、貰うよ」

と言い、そのマグカップを受け取り、一口お茶を飲んだ。

ブレイヴ
「いいのか？
みんな騒いでるのに、俺のとこにきても？」

アンジュ
「ええ。みんなに気を配るのが私の役目だもの」

アンジュはサラッとそう言った。

ブレイヴ
「気を配るねぇ……。こういう日くらい、もっと気楽にしてもいいんじゃない？」

アンジュ
「いいのよ……」

目をつむり、フルフルと首を横に振る。

アンジュ
「私の好きなようにしてるんだから、これでいいの」

白い吐息を吐きながら、アンジュは話す。

ブレイヴ
「そう……。でも身体は壊さないようにな。その……みんなが困るからな……」

顔がほてる感じがしたブレイヴは、手を温めるフリをして、顔の半分を手で隠した。

アンジュ
「そうね……。気をつけるわ……」

アンジュもブレイヴと同じく、手を口に当て、息で手を温める。

ブレイヴ
「そうだ。アンジュにクリスマスプレゼント」

アンジュ
「……？
私、もらったわよ？」

ブレイヴ
「個人的なもんだ。なんだかんだで一番世話になってるわけだし……」

本当はただ単純に、アンジュが好きだから渡したい。という気持ちだからだが、理由は濁した。

アンジュ
「あら、そう？
じゃあありがたくいただこうかしら♪」

アンジュが笑っていると、ブレイヴはアンジュの前に歩み寄り、片膝を着いた。

ブレイヴ
「手、出して……」

ブレイヴの言うことに、アンジュはコクりと頷き、そっと手を出した。ブレイヴはアンジュの手首に手を当て、何かをはめた。

アンジュ
「腕輪……？」

ブレイヴ
「いつも身につけれるものがいいかなって……。アンジュは首飾りはしてるし、指輪はあれかなぁ……と思っての腕輪。……気に入らない？」

ブレイヴは首を傾げると、アンジュをじっとみた。

アンジュ
「フッ……フフフッ……！」

急にアンジュが笑い出したので、ブレイヴは更に首を傾げた。

アンジュ
「いえ、プレゼントうれしいわ！
ありがとう！
でも……トナカイの格好でそう真面目に言われると……ウフフッ……アハハッ！」

ブレイヴ
「そ、そんなに笑わなくてもいいだろ！」

ブレイヴは片膝を着いたままの格好で、むくれた。

アンジュ
「フフフッ……。ごめんなさいね……。でも、プレゼントがうれしいのは本当よ。改めてありがとう！」

ブレイヴ
「うん……、よかった……」

そこで会話が途切れ、二人はしばらく無言になり、少しだけ時が流れた。

ブレイヴ
「……アンジュ」

不意にブレイヴがアンジュを呼ぶ。

アンジュ
「……？」

ブレイヴ
「……メリークリスマス」

ブレイヴは柔らかな笑顔でそう言った。……だからアンジュも、柔らかな笑顔で言い返してくれた。

アンジュ
「……メリークリスマス」

……ふわりと舞い散る粉雪。
……雲間から照らす月光。
それらはまるで、二人のＸ－ｍａｓを祝うかの様に、優しく二人を包み込んでいた……。

～X'ｍａｓ記念～　アドリビトムのX'ｍａｓ（後書き）

今年もあと少しですね……。

～お正月記念～　新年（前書き）

皆様、あけおめ～！

新年初投稿でございます。

正月ぼけで、あまり長い文はかいてませんので、そこのところはよろしくです。

～お正月記念～　新年

ブレイヴ
「3……」

ジェウス
「2……」

アレス
「1……」

カノンノ
「0！」

ブレイヴ
「新年、明けましておめでとうございまーす！」

ジェウス・アレス・カノンノ
「あけおめ～」

今日、バンエルティア号の一室で、この四人は新年のお祝いをしていた。

ジェウス
「あー、年が明けたなー……」

ジェウスはそう言って、コテンと横になった。

カノンノ

「今頃ロックス達はお蕎麦作りに勤しんでるだろうね」

アレス
「アドリビトムの人数すごいもんね……」

アレスは机の上のお茶を啜りながら呟く。

ブレイヴ
「とりあえず、新年の抱負を語ろうか！」

ポン、と手を打ち、ブレイヴが提案する。

カノンノ
「そうだなぁ……。みんな仲良く平和で！
……かな？」

アレス
「僕は、ディセンダーとしての〈仕事〉を達成すること！」

ブレイヴ
「俺は、もっと強くなること。それと、まあ元の世界に戻ることだよね……」

ジェウス
「無病災息。あとは、ブレイヴと同じく元の世界に戻ること」

四人が抱負を語り終わり、ふぅ、と同時に息を吐いた。

カノンノ
「じゃあ……」

と不意に立ち上がり、手を組む。

カノンノ
「初詣！
行こっか！」

ブレイヴ・ジェウス
「初詣ねぇ……」

アレス
「初詣？」

カノンノの提案に、ブレイヴとジェウスは腕を組み、アレスは首を捻る。

ブレイヴ
「はーい、博識ジェウス君。アレスに説明！」

ジェウス
「初詣。新年になって初めて社寺に参詣すること。初参りとも言う。気持ちも新たにがんばります。だから、私の願いを叶えて下さい。って、神様に伝えるんだ」

ジェウスの説明に、ふーん、と理解した態度をアレスは見せた。

アレス
「いいね！
行こうよ！」

ブレイヴ
「そうだな……」

ジェウス
「そんじゃ……」

アレス
「もちろん、この船のみんなで！」

ブレイヴ
「そうそう、みんなで……って、え？」

笑顔で話すアレスに、腰を浮かせかけたブレイヴは、一瞬目が点になった。

カノンノ
「あ、そうだ。初詣に行くなら、格好もちゃんとして行かないと！ロックスに頼めば、人数分の着物や袴も用意できるよね！」

ジェウス
「え……ええー……」

キャイキャイ話すカノンノの横で、ジェウスは若干引いた。

……

ブレイヴ
「いやいや……。みんな似合ってるねー」

晴れ着に着替えたアドリビトムの面子を見て、ブレイヴは呟く。

ジェウス
「ロックスも、よくもまあ、この人数の晴れ着を用意したもんだ…
…」

はぁ……、とため息を吐きながら、ジェウスは呆れる。

カノンノ
「あ、二人とも着替えたんだ！
よく似合ってるよ！」

カノンノがこちらにやって来て、二人にそう言う。文句は言いつつ
も、キチンと着替える二人だった。

アレス
「じゃあ、行こっか！」

アレスが率先して、神社の鳥居を目指し歩いて言った。

……

ちらほらと人はいたが、ごった返す程の人はおらず、わりとあっさ
り境内の賽銭箱近くまで来れた。

アンジュ
「はい、じゃあちゃんと並んで。順番にね」

やはり、ギルドを占めるリーダーらしくアンジュが統率を採り、ご
たごたとならずに済んだ。

ジェウス
「じゃあ、俺達で最後か……」

ブレイヴ
「賽銭の１００ガルドを入れてと……」

アレス
「鈴、鳴らすよ！」

カノンノ
「うん、お願いアレス！」

カランカラァン……

ブレイヴ
「……参拝の作法って、どんなんだったっけ……」

ジェウス
「二礼二拍一礼だ。神前で聞くなバカ」

と言って、ジェウスが手本を見せた。

ブレイヴ
「すいませんでした……」

後の三人も、ジェウスを真似て参拝を終えた。

アレス
「うーん……！
なんか、新しい気分だね！」

カノンノ
「いい年になりそうだね！」

楽しそうに話すアレスとカノンノの後ろを歩きながら、ブレイヴとジェウスは話していた。

ブレイヴ
「ところで……、他のみんなは何をお願いしたのかな？」

ジェウス
「……さぁ？
言われてみたら、気になるかも……」

ブレイヴ
「じゃあ聞いてみようか！」

ジェウス
「それが手っ取り早いかー」

思い立ったがすぐ行動。二人はみんなに何を願ったか聞きに回った。

……

ブレイヴ
「……ぐすっ」

ジェウス
「泣くなよ、情けない……」

ブレイヴ
「うっさい……。お前に言われたかないわ……」

ジェウス
「……だって。……うれしいから。……泣くよ」

みんなの願い事を聞いて回った二人は、静かに泣いていた。それはなぜか？
それは、みんな自分の願い事の後に同じ願い事をしてたからだ……。

「ブレイヴとジェウスが、ちゃんと元の世界に帰れるように」

と。

～お正月記念～　新年（後書き）

本年もよろしくお願いします！

ｂｙ刀剣士

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4994s/

流れ落ちた二つの新星

2012年1月4日02時49分発行